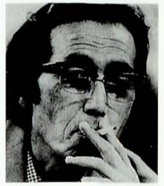


柴田錬三郎

眠狂四郎異端状

nemuri kyoshiro itanjo - shibata renzaburo

集英社文庫



柴田錬三郎

しばた・れんざぶろう

1917～78年。岡山県生まれ。本姓斎藤。慶應義塾大学文学部卒。在学中『三田文学』に処女作「十円紙幣」を発表。戦後、編集者生活を経て、51年『イエスの裔』で第26回直木賞受賞。代表作『眠狂四郎無頼控』『赤い影法師』『曲者時代』ほか。

カバーデザイン／亀谷哲也［PRESTO］
イラストレーション／岡田屋鉄蔵



眠狂四郎異端状

柴田錬三郎

nemuri kyoshiro itanjo - shibata renzaburo

集英社文庫

柴田錬三郎 し 1 67 眠狂四郎異端状 集英社文庫

ISBN978-4-08-745085-9
C0193 ¥950E
9784087450859
1920193009507
定価 本体950円＋税

解説／伊集院 静

ふらり秋田藩佐竹家領内へ入った眠狂四郎。そこでは、飢饉打開に清国の銀貨を私鋳し、密貿易がたくらまれていた。一方、水野越前守忠邦の側用人・武部仙十郎はその動きを利用し、軍資金捻出のための阿片貿易をはかる。秋田藩と仙十郎、両者の思惑をのせた抜荷船で、異人の占星学者にみちびかれ、狂四郎は清国へ。隠密との闘い、嵐、海賊……。南支那海での危機を描くシリーズ最終作にして最高傑作!!

集英社文庫 柴田錬三郎 作品

貧乏同心御用帳
柴錬水滸伝 われら梁山泊の好漢(一)(二)(三)
英雄三国志 1～6
われら九人の戦鬼(上)(下)
新篇 眠狂四郎京洛勝負帖
新編 剣豪小説集 梅 一 枝
徳川三国志
新編 武将小説集 男たちの戦国
柴錬の「大江戸」時代小説短編集 花は桜木
チャンスは三度ある
眠狂四郎異端状

し-1-67

眠狂四郎異端状

柴田錬三郎

集英社文庫

眠狂四郎異端状

柴田錬三郎

集英社文庫

目次

眠狂四郎異端状

院(いん)内(ない)峠

一

羽前(うぜん)・最上郡(もがみ)（新庄領・戸沢大和守(やまとのかみ)・六万八千三百石）から、羽後・秋田領（佐竹右京大夫(だゆう)・二十万五千八百石）に入るには、雄勝山嶺(おかちさんれい)を越えなければならなかった。

越える道は、東西に二つあった。東を役内(やくない)峠といい、西を院内峠といった。

慶長以前は、役内峠の方が官道で、佐竹義宣(よしのぶ)が、関ヶ原合戦に於(お)いて、徳川方へ味方しなかった懲罰を蒙(こうむ)り、常陸(ひたち)から秋田へ移封された時は、そちらの道を越えている。

天保五年のいまは、西の院内峠の方が、駅路(えきろ)となり、領主の参覲(さんきん)交代の道中はじめ、旅客のすべては、こちらを往復している。

院内峠は、一名杉峠とも称されていた。杉の佳木が立ちならび、また峠の頂上に千年を経る矢立(やたて)杉があり、この古木に、いにしえは、征旅の将兵が、行途の無事を祈った、という。

最上郡側は、院内峠を、及位(のぞき)峠と呼びならわした。及位村から一里の険路を登って、

杉峠の頂上に至るからである。最上・仙北の分水界であり、新庄領と秋田領の国境でもあった。

三月下旬。

彫の深い蒼白な異相に、ふところ手の黒の着流し、無想正宗を落し差した孤影が、及位村を過ぎ、鮭川という清冽な渓流を越えて、この密林の駅路を、秋田領へと登って行った。

三月も末、といってもここは出羽であり、山嶽はもとより、渓谷にも、根雪はまだ溶けてはいなかった。

ゆっくりと踏んで行く九十九折の坂路も、ところどころ、白く凍てついていた。片側は、覗けば、目晦むほどの深い谷底であり、巌嘴崖角には、柵を設けて道の崩れを防いであった。樹齢二三百年の杉の古木の下を辿るのであり、朝の陽光は、高処の梢から梢へななめに抜けて、この男の首にも肩にもとどいてはいなかった。

ただでさえ、出会う人に思わず、路傍へ身をよけさせる虚無の翳で、包んだ容姿が、この深山では、さらに一層、幽鬼じみた暗いものになっていた。尤も、一刻あまりの登り路で、行き交うた旅客は、一人もいなかった。

行人に合掌させる千年杉のそびえる峠の頂上に登りついたが、視界はなく、下りの坂

路がうすぐらく行手に溶け込んでいるばかりであった。
世間の習俗に無縁なこの男は、ふところ手のまま、神木を無視してそのわきを、通りすぎようとした。
とたん——。
その非礼を怒ったごとく、幣帛（へいはく）を巻いた幹の蔭（かげ）から、一匹のけものが、鋭い唸（うな）り声とともに、この男めがけて、襲って来た。
もし、音もない襲撃であったならば、あるいは、傷を負わされていたかも知れなかった。
ぱっと片膝（かたひざ）ついたその頭上を、けものは、しなやかな速力で、躍り越えた。
立ち上った眠狂四郎は、まだ、ふところ手のままであった。灌木（かんぼく）を包んだ根雪をはね散らして向きなおったけものが、第二の襲撃をするべく身構えたのを凝視した。褐色の毛を波立てた山犬であった。
幹の蔭から襲って来た瞬間の唸り声とは、また別の、さらに兇暴（きょうぼう）な陰にこもった吠（ほ）えぶりが、狂四郎に、
——こいつ、飢えた野性ではないようだ。
と、看（み）てとらせた。
怪しい人間を威嚇（いかく）するように仕込まれている山犬に相違なかった、それが、証拠に、

こちらの冴えた双眸を受けとめて、獰猛な闘志を、眼光と白い牙にむき出して、第二の襲撃を仕損じまいと計っている。

山中をうろつく飢えた野獣ならば、襲撃は音もなくするであろうし、また、こうした睨みあいの時間など置かぬはずであった。

——やはり、そうか。

狂四郎は、木立の中に、幾人かの人の気配を、察知した。

狂四郎が、やおら、両手をふところから抜き出した——刹那、山犬は、跳躍して来た。

のどにくらいつく正確無比な翔びざまであった。

抜きつけの無想正宗は、宙に在るけものを、真正面から、顔面を真二つに断ち截った。

そして——。

立木の中から、ひそんでいた者たちが、路上へとび出して来た時には、もう白刃を鞘に納めていた。

意外だったのは、敵意をみなぎらせて、行手をはばんだのは、山賊ではなく、いずれも襷がけに腿立ちをとったうら若い武士たちであった。

秋田藩の家中であることは、その陣笠や衣服で明白であった。五人であったが、そのうちの二人は、まだ十六七歳であった。

後日、判ったことであるが、院内峠の東にそびえる烏帽子山から、この面々は、怪し

い男が、院内峠へ登って来るのを、見とどけたのである。烏帽子山は、秋田藩の見当場（けんとうば）であった。他領の遠方までよく望見できる所を見当場、という。

二

狂四郎は、かれらが、叫びたてる余裕もなく抜刀し、しかも、討ち取るためには、それだけの水ももらさぬ陣形を布（し）かねばならぬのに、それも知らず、各個ばらばらに、必死の構えをとるのを、眺めやった。

――道場稽古（げいこ）も、まだ足らぬ連中が、生命をすててかかって来るとは？

「お主らが、わたしを殺そうとする理由をきこうとは思わぬが、ただ、ふたつだけ、ことわっておく。わたしは、足の向くままに、当地へやって来たただの素浪人にすぎぬ。いまひとつ。お主らの腕前では、わたしを斬（き）ることはできぬ」

すると、一番年かさの士が、

「われらが藩内に、素姓の知れぬ者が入ることは、死をもって阻止いたす！　ここよりひきかえすならば、敢（あ）えて追わぬ。戻って行かれい！」

と、叫んだ。

「佐竹家に、他国者の入国を禁じなければならぬ事情が起ったというのか？」

狂四郎の言葉のおわらぬうちに、最年少の若者が、満身からの懸声をほとばしらせて、

斬りつけて来た。

狂四郎は、わずかに、半身にひらいただけで、手刀を若者の右手へ呉れた。

一番手は、呻きとともに、地べたへころがった。

佐竹家の若い家中にとって、狂四郎の目にもとまらぬ迅業は、怯気立たせるより、闘志をふるいたたせる逆効果があった。

このような異常な手練者が、単身で乗り込んで来たことは、自分たちが来るであろうと予測していた人物である証左であり、一身をなげうっても、入国を阻止しなければならぬ。

その必死の決意を、全身にわきたたせて、猛然と突進して来た。

かれらの攻撃に対して、狂四郎の動きは、むしろ、かんまんにさえみえた。

結果は、五人ともに、手刀で、手くびを搏たれ、白刃をはねとばされて、総身がしびれてしまい、地面へ落ちたそれをひろって再び斬りかかることさえも、できなかった。

「お主らにできることは、城下へ帰り、隊を組んで、この素浪人を追い払う新しい戦法を協議することだ。……お主らは、おそらく、上司に命じられて、この峠で、怪しい他国者を、片づけようとしたのではなかろう。血気にはやった浅い思慮で、けんめいになって、わたしのような流浪の素浪人が入ろうとするのを、はばもうとする——その事情を知りたい興味を、わたしに、おぼえさせる結果を招いた」

冷たい語気で、そう云（い）う狂四郎に対して、指揮格らしい士が、いきなり、土下座して、

「あるいは、それがしどもが、人まちがいをしたのかも知れ申さぬ。それならば、深くお詫（わ）びつかまつる。……されど、お手前のような御仁（ごじん）が、入国されるのは、何卒（なにとぞ）ご遠慮頂きとう存ずる。ただの遊行（ゆぎょう）ならば、他領をおえらび下され。お願いつかまつる！」

と、深く頭を下げた。

その悲痛な態度に、秋田藩が当面している何かの重大事が滲（にじ）み出ていた。

歎願（たんがん）に対する狂四郎の応対は、この男独特の冷淡さであった。

「あいにくと、わたしは、この峠の杉の木のように、まっすぐにのびる生れかたも育ちぶりもして居（お）らぬ。幹も枝も曲った生きかたをしている男は、やはり、曲った影法師を踏んで行くことになる。……どうやら、お主がたは、自領が、曲ったおのが影法師を踏む者にふさわしい土地だと教えてくれた。入らせて頂こう」

三

若ざむらいたちが、闘志をうしなったうつろな表情で、はねとばされた差料（さしりょう）をひろって悄然（しょうぜん）とひきあげて行ったのは、かれらの行動が、上司の命令を受けたのではなく、私議で打ち合せた軽挙であったことを示していた。

狂四郎は、五個の影が坂の下へ消えるのを待って、歩き出した。

「旦那──」

背後から、声がかかった。

目撃者が一人、いたのである。自分の後方を、旅人が一人、登って来ていたことは、坂路の途中で、狂四郎は、すでに気がついていた。

急いで、近づいて来たのは、四十年配の旅商人ていの男であった。

「失礼でございますが、さすがは、眠狂四郎の旦那で──。噂にたがわず、水際立った千両舞台を、はじめて、拝見させて頂きました」

「…………」

「てまえは、江戸っ子のはしくれで、旦那には、両国のならび茶屋や深川の岡場所で、二三度、遠くからお目にかからせて頂いて居ります。吉郎次と申します」

「お前とは、一昨日、新庄の旅籠で、隣り合せた」

「お気づきでございましたか。有難う存じます。……偶然でございました。てまえが参ろうとする方角へ、旦那が、先にお歩きなさいますので、いつ、お近づきになろうか、と機会をうかがって居りました次第で、へい。おかげで、千両舞台をただ見させて頂きました」

「…………」

狂四郎は、吉郎次と名のる男にしゃべらせておいて、坂路を降りて行く。

「……さしでがましいと存じますが、てまえのカンでは、いまのは、花道での序幕で、本舞台には、貴方様(あなた)にとっても、お一人では手にあまる厄介な修羅場(しゅらば)が、待っているのじゃございますまいか」

「お前のふところは、かなり重そうだ。木戸銭を、十両もはずむか」

「これァ恐れ入ります」

狂四郎の背中へあてた吉郎次の視線が、一瞬、鋭い光を加えた。ずうっと三歩の距離を置いて、跟(つ)いて来て居り、狂四郎は一度も、吉郎次を振りかえってはいなかったのである。にもかかわらず、こっちが大金を所持しているのを、云いあててみせたのである。

「ご存じかも知れませぬが、秋田領に入るには、この峠の麓(ふもと)の院内を通らねばなりませぬ。院内は、下(しも)院内と上(かみ)院内がございますが、どちらにも番所が設けられ、三年ばかり前から、番士の頭数を増し、無用の他国者が入るのを禁ずる高札(こうさつ)が立てられて居ります。もしかすると、さきほどのさむらい衆の報(しら)せで、番所では、貴方様を入らせまいと、備えをかためるのじゃございますまいか」

「吉郎次、といったな、お前は――」

「へい。申しおくれましたが、横山町で小間物屋をいとなんで居ります」

「お前は、江戸と秋田をしげしげと往復しているらしいが、近頃は、小間物屋が、呉服問屋をさしおいて、菅糸(すがいと)（生糸）や黄八丈を、じかに買いつけるようになったのか！」

「いえ、そうじゃございませんので……。旦那に、きれいな口をたたいても、はじまりません。ありていに申し上げます。実は、このふところの金子は、美しい生娘を仕入れるためなのでございます。角館かいわいは、なにせ、日本一の美しい女子の産地でございますのでね」

「小間物屋の副業が、女衒か」

「女衒と仰言られても、いたしかたがございませんが、べつに、娘たちを吉原などへ女郎に売る次第じゃございません。……てまえは、一流の料理茶屋にたのまれて、女中さがしをやって居ります。山谷の八百善、秋葉の大黒屋、深川の二軒茶屋、真崎の甲子屋、浮世小路の百川など、おあがりになればおわかりでございますが、吉原の大籬にも、辰巳の羽織にも、見当らないような器量佳しが奉公して居ります。その、ほとんどは、てまえが連れて来た娘たちでございます。……てまえは、これでも、人助けをして居るつもりでございますよ。吉原の大籬の花魁に売れば、たしかに大金が親のふところに入りますが、当人自身は、かぞえきれぬ男と枕を交わした挙句、鼻っ欠けになるか、胸をわずらって骨と皮になって、無縁仏になるのが落でございますし、辰巳の羽織にするには、羽後の女子衆は、お国なまりが邪魔をいたします。……で、つまり、給金はすくなくても、一流の料理茶屋へ奉公させれば、お客が通人ぞろいでございますゆえ、しぜんと作法が身につき、玉の輿に乗る機会も多いわけでございます。げんに、蔵前の札差の

後妻におさまった者、本町の薬種問屋の一人息子の嫁に迎えられた者など、てまえが世話した娘の中で、幸せになった者は、五人や六人じゃございません」
「白髪あたまに、根岸あたりで囲われた女もすくなかろう。そんなくらしでも、幸せだというのか」
「旦那は、奥羽のけかち――饑饉が、どんなに悲惨なものか、その目でごらんなすったことがおありでございますか？　一昨年の夏の長雨、昨年の入梅、半夏の日照りで、秋田領だけでも、五万二千余人が餓死したと申します。秋田領六郡の人口は、四十三万人でございますからね。これだけ申し上げれば、百姓衆が、どのようなくらしをしているか、およその見当がおつきになりましょう。けかちが襲って来れば、五軒に一軒は、娘を売ることになります。それも、たちのわるい女衒にだまされて、宿場の飯盛などに売りとばされ、親のふところには、ものの十両も入らない、というのがざらなので……」
「吉郎次――」
狂四郎が、不意に、小間物屋の饒舌をさえぎった。語気が、鋭かった。
「へ、へい？」
「あれが、上院内の番所か？」
「左様でございます」
一町余の下方に、わずかな田畑の盆地を守るように、かなりな構えの木戸があった。

杉柱の白さが、ごく最近に設けられたものであることを、示していた。
足を停めて、じっと視やっていた狂四郎は、自分に呟くように、
「異変があったらしい」
「なんと仰言いました？」
吉郎次も、視線を凝らしてみて、「おっ！」と、叫びをあげた。
木戸口に、人が二人、斃れているのが、はっきりとみとめられた。

四

酸鼻、とはその光景であった。
木戸口に斃れていたのは、突棒持ちの番卒たちであったが、木戸をくぐると、番小屋前の空地に、抜刀した藩士三人の死骸があった。
それだけではなかった。
下院内村へ至るかなりの勾配が上下曲折した道路上を、朱に染めて、あるいは折り重なり、あるいは、くさむらに首を突き入れ、あるいは、杉の幹へすがりつき、あるいは渓流の岩畳へ仰のいて、ことごとく事切れていた。
狂四郎は、それらの他界者たちが、山頂で自分を襲い、そして、悄然とひきあげて行った若い藩士五人であるのを、みとめた。

一瞥（いちべつ）しただけで、よほどの業前（わざまえ）の持主に、一太刀ずつで斬られている、と判った。
斬り手が一人であったか、複数であったか、そこまでは、看分け難かったが、複数としても、三人以上ではないことは、死体の仆（たお）れざまで、推測できた。
おしゃべりの吉郎次も、さすがに、息を呑（の）んで、言葉にならない様子で、狂四郎のうしろを、跟（つ）いて来た。
「吉郎次――」
「へ、へい」
「最上郡から入る道は、もうひとつあったな？」
「ございます。東の役内峠を越えるのが……。むかしの道で、いまは、在所の者だけが通っているそうでございます」
「その道も、あの番所へ至るのだな？」
「役内道と院内道は、三里ばかりむこうの横堀で合って居るのでございますが……、たぶん、他国者の入国禁止の高札を立てた際、横堀へ通じる道の方を、ふさいでしまったのではございますまいか」
――この若者たちが、おれとまちがえた人物は、役内道から、入って来たことになる。
「お前の予想した通り、本舞台は、修羅場になるらしい」
「貴方様と互角の勝負をする曲者（くせもの）が、登場した次第で……」

「見物させるには、木戸銭十両では、安いようだ」

「眠様、てまえが、峠で、千両舞台を拝見させて頂いた、と申しあげたのは、待ち伏せた御仁たちを一人も、お斬りなさらなかったからでございます。芝居で斬られた役者は、幕が降りたら、起ち上ります。貴方様の本舞台では、斬られた者は、二度と生き還りませぬ。……もし、ただの遊行でございますなら、これァ、ひとまず、花道をひきかえされては如何なものでございましょう？」

「わたしは、これまで、他人の忠告に従って、身の安全を計ったことはない。わたしに忠告するよりも、お前は、わたしから離れたらどうだ。まきぞえをくらうと、女中買いができなくなるぞ」

「てまえは、もう四十六歳に相成ります。極道の限りを尽した時期もございますし、女房子供もいない気軽な独身者でございますから、旦那のようなおかたと、冥途の道連れにさせて頂ければ、これァ、惚れた女と心中するよりも、ずっとてめえの分に合ったしめくりのような気がいたします」

「お前は、もしかすれば、夜働きもやった男ではないのか？」

「ご明察――。八丈島へ、五年あまり流されていた犯科者でございますよ。それでも、犯した罪からみれば、軽いお裁きでございました」

「人を殺した前科もある世間の裏表を知りつくした年配者だから、わたしのような無頼

の男にも、忠告するしたり顔もできる、というお節介か」
狂四郎の歩みは、そのまま、つづけられ、吉郎次も、従わざるを得なかった。
下院内に至って、はじめて、視界の果てまで平野が延びていた。
番所は、古い館を改造した構えであり、番所自体も、古びていた。
上院内とは、一里もはなれていないにもかかわらず、番所の木戸口には、番卒が、何事もなく、左右に立っていた。
兇変の報が、まだ、そこに、とどかぬさきに、狂四郎と吉郎次は、到着したのであった。
番卒は、狂四郎へうさんくさい視線を向けると、無言で、高札を、突棒で示した。

告

一、近来物騒相聞え候故、無用の他国者、許可なくして当国に入り込み徘徊すべからず
二、若し右の禁戒を破る者に於ては、吟味に及ばず、廻番御目付にて討ちすて勝手たるべき事

佐竹家・久保田城・城代家老
雄勝郡・郡奉行

わずらい娼妓

一

秋田藩雄勝郡下院内の番所に詰めていた横目・七草喜久左衛門は、番士から、
「胡乱なていの浪人者が、面語の儀を申し入れて居りますが――」
と、取次がれると、気軽に腰を上げた。

横目という職は、目付の添役で、探偵の仕事をつとめる。幕府には、横目はなく、諸藩だけが、隣藩との争いの際などに、隠密として働かせる。身分はごく低いが、いざという時、目付を上に立てて、徒士隊を組織する権力を与えられていた。

但し――。

下院内の番所に詰めている七草喜久左衛門は、およそ横目らしからぬ、年齢も六十の坂を越えかかった、面貌も貧相だし、五尺足らずの痩せこけた小男であった。頸にうすよごれた真綿を巻きつけ、しきりにのど奥を鳴らして、咳を送り出しているところをみると、喘息の持病があるとみえた。

この見ばえのしない小柄な老人が、佐竹家中で比肩を許さぬ抜刀術の名手であるとは、まさしく人は見かけによらぬ。

杉戸を開けて、式台へ出た七草喜久左衛門は、そこに佇立する黒の着流しの浪人者を視て、せわしくまばたきした。

これは、対手を只者でないと看て取った際の、喜久左衛門の癖であった。

「高札が、目に入り申さぬかな」

喜久左衛門は、苦しげな咳込みをやってから、云った。

「秋田蘭画を眺めに参った、ただそれだけの目的しかない浪人者と受けとって頂こう」

眠狂四郎は、告げた。

その言葉は、口実ではあったが、まんざらのいつわりではなかった。秋田蘭画は、江戸・大坂にまでひびいていた。

秋田蘭画の創始者は、角館の士・小田野直武であった。

安永二年の夏、佐竹家の懇請によって、奇才をうたわれた平賀源内が、衰退した阿仁の銀山銅山を、新しい鉱山仕法で、立て直すべく、角館に入った際、その世話方を命じられたのが、小田野直武であった。直武は、すでに、羽前・羽後でひろくはやっていた狩野派を学び、その画才をうたわれていた。

平賀源内は、直武の画才をみとめて、本藩の鉱山方産物取立役に推挙して、それを名

目として、江戸へ同行し、自分が曾て長崎に遊んで学びとったオランダ画法を、伝授したのであった。
秋田藩主・佐竹義敦が、窮迫した財政立てなおしの腐心に疲れて、蘭学や洋画に慰安を求め、また、支藩の角館領主・佐竹義躬が、本藩のあるじとともに、その趣味に理解があったことが、小田野直武にさいわいした。
洋画の技法を完全にわがものにした直武の秋田蘭画は、いまでは、江戸・大坂の大商人たちが千金を投じても欲している垂涎の名品となっている。
「見知らぬ他郷の浪人衆に、蘭画を鑑賞させる余裕など、目下の当藩には、ござらぬの」
七草喜久左衛門は、にべもなくことわって、また、苦しげにのど奥を喘がせた。
その折であった。
けたたましい叫び声が、往還からひびいて来た。
上院内番所で、十人に及ぶ士卒が殺されている惨状を、発見した百姓女が、無我夢中で、注進に奔って来たのであった。
はんこたんなで目ばかりに顔を包み、背中にゴザをまとった百姓女は、木戸内へ駆け込んで来て、そこに佇立している異相の浪人者を視て、ぎょっとおびえたが、あわてて土下座すると、息遣いあらく、目撃したさまを、報告した。恐怖で声音がふるえている

上に、濁音化、鼻音化のひどい、音調基を失った方言を、狂四郎が、理解するのは不可能であった。

　聴取する七草喜久左衛門は、横目だけあって、さして驚愕の色もみせず、番士・番卒のほかに、家中の若ざむらいが五人も斬られたことを、平静にききかえして、たしかめると、狂四郎に向って、

「これは、貴殿とは、かかわりのない兇変でござろうかな？」

と、訊ねた。

「わたしのしわざではないことは、明言できる」

「貴殿が、あの番所を通り過ぎたあとの出来事といわれるか？」

「いや、惨事は、そこへ到着した時、すでに起って居った」

「なぜ、そのことを、告げては下さらなんだ？」

「一人残らず相果てているのを見とどけたゆえ、あわてて、お報せするまでもないことと存じた」

「冷たい性根をお持ちだの、貴殿は——」

　老いた横目は、番士たちをのこらず上院内へ趨らせておいて、あらためて、狂四郎を瞶めた。

「貴殿が、下手人ではない、という証拠がござるかな？」

狂四郎は、懐中から、一通の手紙をとり出して、老人に手渡した。

それは、本丸老中水野越前守忠邦の側用人・武部仙十郎の長屋で、知己となった国学者・平田篤胤の、喜久左衛門宛の添状であった。

平田篤胤は、秋田藩大番組頭・大和田清兵衛の四男で、久保田（現在の秋田市）で生れている。十九歳の時——寛政七年、脱藩して、江戸へ出、学才をのばし、本居宣長の古学を発展させ、平田国学を形成して、いまでは、伴信友とともに、江戸に於ける二大国学者と称されている。

狂四郎が、武部仙十郎家の書院で、平田篤胤に逢ったのは、両三度にすぎない。

対座はいつも二刻以上に及んだが、篤胤が一人論じたてて、狂四郎は終始沈黙していた。

才気縦横、自尊心が強く、熱狂の資質の持主である篤胤は、文化元年、学塾の門をひらいて以来、すでに数千巻に及ぶ著述をものしていた。

古史成文・古史徴・古史伝など、かなり偏狭に堕した古学の著述も、おのが一流の学風にこじつけた篤胤は、狂四郎が剣を使う男と知るや、とうとうと、武学を論じ、鬼神を説いて、これらはすべて、わが大和国から始まると専断してやまなかった。

継母に虐待されて、十九歳で脱藩出府して以来、あるときは大八車の車夫に、あるときは火消人夫になり、また、風呂屋の炊夫までやって苦学力行したこの国学者の、人

を利用し、親友である伴信友が苦心して集めた材料とその創意の説までもぬすんで、おのが功にし、名声と栄誉を得るためには、いかなるあさましい手段も辞さぬ業力(ごうりき)ぶりを、狂四郎は、わずか両三度の対座で、存分に知らされた。

――こういう狂気じみた自我の権化(ごんげ)を生んだ羽後とは、どういう国なのか？

その興味が、まだ東北地方を知らぬ狂四郎に、ふと、そこへ旅してみたい気持を起させたのであった。

「秋田蘭画を眺めたいので、知己に添状をしたためて頂けまいか」

狂四郎のたのみに、篤胤は、即座に、七草喜久左衛門宛に、書いてくれたのである。

喜久左衛門は、篤胤の母方の叔父であった。

二

「貴殿も、あの大ぼら吹きの心酔者の一人でござるかな？」

平田篤胤の添状を一読した老横目が、狂四郎に向って吐いたのは、その言葉であった。

「いや、いささかの心酔もいたしては居らぬが、あれほどの熾(さか)んな業力の持主は、わたしの知る範囲では見当らぬ」

「あやつは、生れ乍(なが)らの盗人ぞ。あやつは、継母に虐待されたために、故郷を出奔した、と世間に云いふらして居るそうなが、大嘘(おおうそ)つきめ、継母に夜這(よば)いをしかけて、親父(おやじ)から

追放されたのが真相でござるわい。あやつの学風が時流に投じて、当国にも、心酔する若い者がすくなないが、……ばかばかしい、あやつの説は、すべて、これ、他人の説の剽窃じゃ。神道も、仏教も、武学も、何もかもじゃわい。……生れ乍らの大盗人めの添状を持参した貴殿を、信用するわけには参らぬ。早々に、道をひきかえして頂こうわい」

「………」

狂四郎は、黙って、甥を罵りすてる老横目を、見まもっていた。

「貴殿は、江戸に帰られたなら、あらためて、伴信友殿に添状を乞われては、如何かな？　同じ国学者でも、信友殿とあやつは、金と銅――いや、それ以上の差がござるて」

「老人――」

狂四郎は、口をひらいた。

「わたしは、お手前のような、きわめて中庸を得た御仁に出会うために、この羽後までやって来たのではなかった」

そう云いすてておいて、かるく一揖すると、踵をまわした。

「眠狂四郎氏」

老横目が、呼んだ。何気ない穏和な呼びかけであった。

狂四郎も、何気なく、ふところ手のままで、頭をまわし、視線をかえした。
刹那——。
老横目の右手が、腰の差料の柄にかかるのを、目にとめさせるよりも早く、一閃の刃光を、狂四郎の胸もとへ、飛ばした。
同時に——。
胸いたを貫かれる代りに、狂四郎は、烈風に吹きとばされたように、一間余を跳び退った。
「おっ！」
抜きつけの一撃を放った喜久左衛門の方が、大きく双眼をみひらいた。
突き出した白刃の切先には、一両小判が、突き刺さっていたのである。
曾て、喜久左衛門の抜刀術の迅業を、かわし得た者は一人もいなかった。その迅業をかわしたばかりか、小判一枚を刺し貫かせておいて、平然と、一間のむこうに立っている浪人者を、老横目は、茫然と眺めやった。
「禁令にさからって、無理に通るには、それなりの礼儀をはらわねばなるまい。こういう場合は、賄賂が常識らしい。入国代と受けとって頂いてよい。……もとより、入国したからには、いつどこで、討ち果されることになろうとも、悔いはない。——御免」
唖然として言葉もない老横目をそこにのこして、狂四郎は、番所を出た。

「旦那!」
じりじりし乍ら外で待っていた吉郎次が、
「あの横目の年寄りは、出来た人物でございますよ。それが、旦那を片づけようとしたのは、てまえが訪れた二年前よりも、もっとせっぱつまった状況に、藩が追い込まれて居るに相違ございますまい。やっぱり、ひきかえしなすった方が……」
と、真剣な面持ですすめた。
「死地に置かれた時のみ、おのれが生きている証をみる——困った男なのだ、おれは」
狂四郎は、平然として、秋田平野へ向って、足を踏み出していた。

三

三日後、狂四郎は、本藩のあるじの居城のある久保田(秋田)城下に入っていた。
ふしぎなことに、雄勝郡、平鹿郡、仙北郡、河辺郡と、長い街道を通過したが、ただの一度も、その行手を阻止する藩士は出現しなかった。
あるいは、下院内番所から、老横目・七草喜久左衛門が、考えを変えて、各郡の奉行へ、使いを趨らせて、その浪人者は怪しい者ではない、と通報したのかも知れなかった。
異常の手練者であるから、並の士を十人や十五人、むかわせたところで、いたずらに死傷者を出すばかりゆえ、しばらく、勝手に行動させて、様子をみたい、と上告したとも

考えられた。

それにしても――。

久保田城下へ入る道みち、狂四郎の目にうつったのは、しごく平和な山野の景色であった。

一昨年、昨年の飢饉(けかち)で、秋田領の総人口の八分の一が餓死した、という悲惨な状況は、雪溶けのおそい春を迎えた山野からは、想像できなかった。

茅葺(かやぶき)屋根に石をのせた百姓家のたたずまいは、いかにも貧しかったが、檐下(のきした)には、干柿(ほしがき)のように、干餅(ほしもち)がいちめんにぶらさげてあった。（大寒につくった餅を水につけ、これを寒風にさらして乾燥させ、田植時や子供の間食にするのである）

干餅の下で遊ぶ子供らの顔は、表情は乏しかったが、決して暗くはなかった。

横手や刈和野などの宿駅には、ずらりと朝市が出ていた。

「見た限りでは、飢餓に瀕(ひん)しているとは思えぬが……」

狂四郎が、云うと、吉郎次は、かぶりを振り、

「景色の美しいことと、貧乏は、別でございますよ。檐下にさげてある干餅は、あの子供らの口に入るわけじゃございません。全部、土崎湊(つちざきみなと)へ入って来る廻米船で、京・大坂へはこばれ、秋田名物として、一流の料理茶屋の膳部(ぜんぶ)にのせられるのでございますよ。子供たちが与えられるのは、わらびの地下茎でつくった根花餅(ねばなもち)や赤松の中皮を稗粟(ひえあわ)とま

ぜてついた松花餅で、とても、てまえどものどを通るしろものじゃございません。あとは、椎の実とか、めのことという海草の粉などで、人間の食う品ではないのでございます。……旦那は、米の値段など、ご存じじゃございますまいが、三年前、当地で、一升八十文だったのが、今年は三百文を越えたと申しますから、一揆が起らぬ方がおかしいわけで……、あのように、ひっそりとしている貧家各戸から、突然、悪鬼の形相になった百姓衆が得物をつかんで、とび出して来て徒党を組み、むしろ旗を立てる光景を、一度、ごらんに入れたいと存じますよ」

——この窮乏と、他国者の入国を禁ずることと、何かのつながりがあるらしい。

胸のうちで独語した——とたん、狂四郎の脳裡には、ひとつの直感が、ひらめいた。

上院内の番所で、十人の士卒を、一太刀ずつで斬ったのは、あるいは、公儀から遣わされた隠密ではなかったか？

佐竹家では、窮状をきり抜けるために、何か、幕府の法度を犯す非常の手段をやっているのではあるまいか？

四

久保田城下に入って、狂四郎がえらんだ宿は、旅籠ではなく、廓であった。

のみならず、武家町と旭川をへだてた外町（町人町）の富有な商人たちや、土崎湊へ

入って来た廻送問屋の船から降りた大坂あたりの番頭たちの遊ぶ、寺院が南北につらなる寺町にとなりあわせた下米町二丁目の、弦歌さんざめく揚屋(あげや)ではなかった。
十年あまり前に設けられた、新柳町という城下はずれの、ひっそりとさびれた青楼であった。
狂四郎が、佐竹領内を通ってみて、知ったのは、各郷どこの郡奉行町、宿駅にも、遊廓(ゆうかく)というものがなかったことである。これは、他領とちがった現象であった。
——女は、米や杉と同様に、他国へ売る品ものなのか。
狂四郎は、そう思ったことだった。
一緒について来た吉郎次は、どうせあがるなら、下米町二丁目の揚屋を、とすすめたが、狂四郎は、肯(き)き入れなかった。
「飢えた百姓たちの惨(みじ)めなくらしを、しり目にして、物価騰貴(とうき)でふところをこやした連中が、わがもの顔でのさばっている世界に置かれては、この素浪人の居心地がよかろうはずがあるまい」
「ご尤(もっと)もで——」
吉郎次は、納得した。
角館かいわいで、器量の佳(よ)い娘をさがす目的でやって来た吉郎次は、そちらへ行くには、仙北郡の大曲(おおまがり)で、狂四郎と、右と左に別れなければならぬはずであったが、狂四

郎が久保田城下への街道をえらぶと、なんのためらいもなく、ついて来たのであった。

「お前は、女中買いに行くのではないのか？」

冷やかな問いに対して、吉郎次は、にやりとして、

「旦那が、本舞台で、どんな鮮やかな手の内を見せて下さるか、これァ、商売などやっているひまはございますまい」

「わたしは、他人に骨をひろってもらう生きかたをしては居らぬ」

「てまえが、勝手について参るのでございます。無下(むげ)に追いはらわないで下さいまし」

狂四郎が登楼したのは、吉郎次がえらんだ『男鹿(おじか)や』という店であった。

「明日にも血を喀(は)いて死にそうな、影のうすい女郎を、さがしてもらおうか」

狂四郎にそうたのまれて、廓口の居酒屋に待っていてもらった吉郎次が、一軒一軒あたってみて、その『男鹿や』に、一人見つけたのである。

狂四郎は、土間に入って、吉郎次がえらんでくれた敵娼(あいかた)を、ちらりと視(み)やってから、黙って、上った。

「旦那、この女(こ)で本当によろしいので——？」

吉郎次は、上り框(かまち)から細い腕をのばして、狂四郎がぬいだ草履をそろえなおす娼妓(しょうぎ)を、指さして、念を押した。

「わたしにおあつらえ向きだ」

眸子（ひとみ）も鼻梁（びりょう）もあごも頸（くび）も腰も手の指も、すべてがほっそりとして居（お）り、血の気のない沈んだ肌色も、ほつれ毛の散った襟足（えりあし）の稚（おさな）げな容（かたち）も、すべてが、この遊女のいのちのはかなさをただよわせているようであった。

腺病（せんびょう）の体質が、夜毎（よごと）男に身をまかせなければならぬつらさで、心も細っているのであったろう。

身を屈（かが）めなければならぬほど天井のひくい部屋に入った狂四郎は、着換えの浴衣（ゆかた）を、そっとさし出す娼妓に、

「そなた、百姓の家の生れではないようだな」

と、云（い）った。こちらの草履のそろえかたが、武家の家の者の作法ぶりだったのである。

「…………」

娼妓は、顔を伏せて、こたえなかった。

「郷士のむすめか？」

「…………」

「父親の名前まで、尋（き）こうとは云わぬ」

そう云いすてて、浴衣に着換えもせず、牀（とこ）に横臥（おうが）した客の背中を、娼妓は、じっと見やった。

「貴方（あなた）様は、どこかお加減がわるいのではございませぬか？」

いささかの訛はあるが、躾を受けたしとやかな言葉遣いであった。
「野垂れ死するために、諸方をうろついている、と思ってもらってもよい」
「なぜでござりますか？」
「明日のためにに今日を生きて居らぬ、と云っても、こたえにはならぬか」
「わたくしは……」
二十一二歳の娼妓は、ひとつ、肩で息をして、
「胸をわずらって、朝、目覚めた時など、起き上る力も、失せて居りますけど、……まだ、死にたくは、ござりませぬ。生きていとう存じます。……生きていれば、……生きてさえいれば――」
そこまで云って、絶句した。
狂四郎は、やおら頭をまわした。
娼妓の頰は、濡れていた。
狂四郎は、彼女がかたわらに添い伏しても、抱こうとはしなかった。
――生きていれば……。
娼妓の独語を、こちらのものにして、あとの言葉を、胸の裡で、継いでいた。
――おれが、生きている限り、無想正宗が、人の血を吸いつづけるばかりだろう。

身請膳（みうけぜん）

一

――どういう人なのであろう、この客は？

久保田（秋田）城下・新柳町の青楼『男鹿や』の抱え――実名の巴（ともえ）を、そのまま源氏名にしている娼妓は、ひとつ牀（とこ）の中で、自分に背中を向けて横臥し、身じろぎもせぬ客に対して、薄気味わるい畏怖（いふ）をおぼえていた。

水夫（かこ）や漁師や商家の手代や職人や人足、上客といってもせいぜい徒士（かち）ぐらいの、女郎などを人間扱いにはせぬ連中を、臥牀（ふしど）に迎えて、もうそろそろ一年になるが、巴が、部屋に入って、客に挨拶（あいさつ）したとたん、思わず微（かす）かな戦慄（せんりつ）を、総身におぼえたのは、今宵がはじめてであった。

彫の深い蒼白（そうはく）な異相もさること乍（なが）ら、姿ぜんたいにただよわせている、いまわしい伝説を包んだ沼気（しょうき）のような、冷たく妖（あや）しい気色が、座敷の空気まで変えているように、巴には、感じられたのであった。

はたして——。

客は、浴衣に着換えもせずに、牀に入り、巴が添い伏しても、抱こうとはしなかった。背中を向けて、微動だにせず、寝息ももらさぬのであった。

客から一指もふれられぬ、ということは、娼妓にとって、この一夜を、ぐっすり睡れ（ねむ）と約束してもらったようなものであった。他の女郎ならば、変った浪人者だ、ぐらいに思っただけで、のびのびと四肢をのばして、睡魔にひき込まれたに相違ない。

巴は、それができない女であった。

三日に一日は発熱になやまされ、疲労が澱（おり）のようにすこしずつ体内にたまって、ひと動作にさえけだるさをともなっているこの病んだ娼妓は、それだけに、こうした場合、神経が冴（さ）えるのかも知れなかった。

ふと——。

松蠟燭（まつろうそく）のあかりが、せわしくまたたくのに、巴は気づいた。尽きかけているのであった。この地方の夜の明りは、町家・農家、そしてこんな二流の廓では、油と燈心（とうしん）の行燈（あんどん）など用いず、松脂（まつやに）を細長くかためて、笹（ささ）の葉で包んだ松蠟燭を使ったのである。廓のしきたりで、部屋は、終夜（よもすがら）、松蠟燭の灯を消してはならなかった。

巴は、新しい松蠟燭を立てるべく、身を起そうとしかけた。

とたん、

「動いてはならぬ。そのまま、じっとしていてもらおう」
ひくおさえた声音で、客が命じた。
「は、はい！」
わけがわからぬまま、巴は、身をかたくした。
それから、ほんの数分が経った頃合、巴は、客がなぜ動くな、と命じたのか、その理由を知らされた。
突如、鋭い弓弦打ちのひびきとともに、出窓の障子戸の紙を貫いて、矢が臥牀を襲って来た。
同時に、畳一枚が、生きもののごとく、ぱっと立って、その矢を受けた。
それなり……畳は立ったままで、部屋には、依然として静寂がつづいた。
巴は、眸子を大きくみひらいて、畳を突き刺した矢を、瞶めていた。矢は、二本同時に、射込まれたのであった。
客は、しかし、何事もなかったように、やおら、巴の方を向きなおった。
「そなたを、まきぞえにしたな」
「……松蠟燭を、足しても、よろしゅうございますか？」
「うむ」
巴が、そうしておいて、牀に戻って来ると、ようやく、客は、彼女に手をのばした。

巴は、吸い込まれるように、客の胸の内に、わが身を容れた。
われ乍らふしぎな身と心の微妙な変化であった。かぞえきれぬ多勢の男に、夜毎、肌を売り乍ら、われからすすんで、からだの奥にかくれていた官能の火を、燠のように、あかくおこしたのは、はじめてであった。
「曲者は、まだ、外に……？」
抱かれて、下肢をひらきつつ、巴は、ささやいた。
「必殺の手段を思案して、実行し、それを仕損じたならば、日をあらためて、別の方法で襲って来る――そういうたぐいの敵と看た」
客は、巴の顔の上で、うすく笑った。
安堵して、身をまかせられる、ほのかなよろこびを、巴はおぼえた。生娘のまま、この廓に身を沈めて以来、まだ、ただの一度も、心をひかれた客はなかったし、そのからだは女のよろこびなど知ってはいなかった。
今夜が、自分が一人の女になれる最初で最後の機会であるように、巴は、直感したのであった。

二

眠狂四郎が、目を覚ましたのは、辰刻（午前八時）であった。

「五つでござい」
廊下を、柝を打ち鳴らし乍ら、告げる声で、はっきりと目覚めた。
牀の中には、狂四郎だけ寝ていた。一刻半ばかり前——まだ明けやらぬうちに、かたわらから、そっと、敵娼が抜け出て行ったのは、気がついていた。
——流連るか？　それとも、吉郎次の連れになって、角館へ移るか？
昨夜の襲撃者たちに、第二の攻撃が為しやすいように、こちらで考えてやる。これは、この男独特のカンであったが、生命を狙ったのは、佐竹家の家中ではなく、上院内の番所で、十人の士卒を斬った侵入者のような気がしていた。
かれらが、公儀から遣わされた隠密だとすれば、かれらは、この眠狂四郎が、佐竹領に入ったのは、自分たちと同じ目的を持っている、と早合点したことになる。こちらを、本丸老中水野忠邦の側用人・武部仙十郎の飼い犬、と看たからであろう。
水野忠邦は、今春、西丸老中から本丸老中となり、いよいよ、主導の権を手中にすべく画策していた。当然、幕閣内には、忠邦を上座に就かせまい、とする動きがあわただしかった。
その抗争が、べつに忠邦の間者としてやとわれてもいないこの一介の素浪人にまで及んで、身に危機を招いているのであった。
ふりかかる火の粉は、払わねばならなかった。そのためには、対手がたが襲撃しやす

いように、わざと、その場所へわが身を運んでやるのが、この男のやりかたであった。避けたり逃げたりするのは、性分に合わなかったし、敢えて死地に入ることによって、逆に生きのびて来た。これまでがそうであったし、これからも、その生きかたを変えるつもりはなかった。

階段を、かるやかな足どりで登って来る音が、きこえた。

入って来た巴は、朝餉の膳を持っていた。

「あ——お目覚めでござりましたな。間に合って、よかった」

昨夜とうってかわって、顔を上気させて、眸子に生気を満たしていた。

膳には、刺身、焼魚が、柔らかな木の芽、麴の漬物を添えて、盛られてあった。

「そなた、自身で朝市に買い出しに行って来たのか？」

「はい。川尻村の川口まで、行って参じました。あそこには、鉄砲の鋳造所がござりますので、そこの工人衆のために、ご城下内よりも一刻早う、朝市が立ちまする。同じ焼魚でも、生きているのを焼いて売って居りますから、おいしゅうござります」

「……………」

狂四郎の視線を受けて、巴は微笑してみせた。目もとと口もとに、はじらいをふくんだ優しさが刷かれていた。

「酒をもらおうか」

「はい、すぐ——」

巴は、いそいそと立って出て行った。

狂四郎は、この土地で、自分からすすんでやることがひとつできた、と胸の裡で呟いた。

銚子を三本、盆にのせて戻って来た巴は、

「お連れさまは、朝早くお出かけなさったそうでござります」

と、告げた。吉郎次のことであった。

狂四郎が、黙って、盃を口へはこぶのを、巴は、しばらく見まもっていたが、

「お客様、昨日、わたくしに、郷士の娘か、とおききなさりました。あの時は、家の恥ゆえ、おこたえいたしませなんだが、ご推察の通り、わたくしの父は、北秋田郡・米内沢の郷士にて、奈良岡修次郎と申しました。先祖は、米内沢城主・嘉成常陸介資清様の家臣奈良岡監物であったとき及びます。……慶長七年に、秋田からお国替えになりました際、佐竹義宣様がお国入りなされるのに反抗して、阿仁比内の嘉成家の旧家臣たちは一揆を起そうといたしましたが、奈良岡監物が、なだめて、いくつかの城を焼きはらい、一同を帰農させたと申します。佐竹様は、監物の功にむくいて、高五十石を下され、そのお高は、父の代にも、ひき継がれて居りました。……父は、阿仁銀山が近くにあったためか、子供の頃から、鉱山のことを熱心に研究いたして居りました。幼いわたくし

にも、金や銀や銅や鉄や錫や朱砂の出る山の相法を、語ってくれましたが、大層むつかしくて、よくわかりませんでした。……それに、わたくしが十一歳の春に、母が弟を産み、産後すぐに亡くなりましたために、わたくしが、乳のみ児を育て乍ら、貧しい家の内を切り盛りしなければならなかったこともございまして、父が山相法などの研究に夢中になっているのが、時には、うらめしゅう思われました……。父が、ご城内に召されて、郷士のままにて、山奉行様直属の鉱山仕法方を命じられましたのは、わたくしが十三歳の時でございました。……父は、それはもう、寝食も忘れて、働きました」

ところが――。

四年前。道路の雪割りがはじめられた春、久保田城へおもむいた奈良岡修次郎は、五日後、ただならぬ沈痛な様子で帰宅して、何事かを苦悩しつづけていたが、突然、夜半に切腹して相果てたのであった。遺書も残していなかった。

二十歳の巴は、九歳の弟をかかえて、茫然となった。

藩庁からは、無断の自決は不届きであるという咎めがあり、俸禄・士格もとりあげられたばかりか、所払いという苛酷な処置を受けた。巴は、江戸に在る遠い縁戚の商家へ、弟をあずけて、いずれ青年となったあかつきには、由緒ある奈良岡家を再興してもらう念願をたてると、自らのぞんで、この新柳町の廓へ身を沈め、その金子を持たせて、弟を江戸へ送ったのであった。

巴は、その頃すでに、胸をわずらっていて、二度ばかり、血も喀いていたので、さまで長くは生きられぬわが身を、犠牲にして、弟の将来を計ってやったのである。

美談——といえた。

きき了えた狂四郎は、しかし、べつに、感動の言葉も吐かず、表情も動かさなかった。

三

「拙者は、佐竹家目付・万座庫之助。見知りおかれい」

不意に部屋へ入って来た五十年配の、いかにもその職掌を面相骨格で誇っているような立派な恰幅の武士であった。

巴は、目付から退れと目くばせされて、膳部を下げて行った。

「御辺は——」

と、万座庫之助は、ふるめかしい呼びかたをして、

「下院内の番所で、横目の七草喜久左衛門の抜き打ちの一太刀を、はずしたばかりか、おのれの身代りとして、その切先に、小判を刺させた手練者の由。七草喜久左衛門の居合の攻撃をかわし得る者は、当家中に一人も居り申さぬ」

と、云った。

狂四郎は、対手の視線を受けとめて、黙然と、腕を組んでいる。

「上院内の番所で、御辺は、当家中の若ざむらい五人と番士三人、番卒二人が斬殺されて居るのを見とどけたとか。七草喜久左衛門の報告では、平田篤胤の添状を持参した御辺の仕業ではあるまじ、ということであったが、しかし、目付としては、一応、御辺に嫌疑をかけて、ひそかに尾行監視させて居り申した」

「………」

「御辺に対する嫌疑は、昨夜、はれ申した」

「………」

「昨日の暮れがた、大曲にて、田淵兵七と申す下目付が、斬られたのでござる。田淵兵七は、年歯はまだ二十代なかばであったが、江戸に於て、一刀流を学び、免許の腕前を具備いたして居りし者。……その時刻、御辺は、この部屋に居られたことは、監視の者が証言いたして居り申す」

「………」

「下手人が他に居ることは、これで明白と相成り申したが、さて、瞬時にして十人を斬り、また田淵兵七ほどの使い手を斬った曲者でござれば、なかなか以て、討ち取るのはおぼつかぬ儀に存ずる。そこで、この曲者の討手方として、御辺に、是非お引きうけ頂きとう存ずる」

そうたのんで、秋田藩目付・万座庫之助は、軽く頭を下げた。

「下手人は、何者か、見当がついておいでであろう？」
狂四郎は、云った。
「いや、まだ——。しかし、一両日中にも、家中総力を挙げて、発見つかまつれば、何卒」
「なに？」
「せっかくのおたのみだが、おことわりしよう」
もう一度、万座庫之助は、軽く頭を下げた。
「下手人が、公儀隠密であることが、はっきりして居り乍ら、それさえも、かくそうとされる。そういう家中に、やとわれるのは、ごめんを蒙る」
「いや、礼金として、百両進呈つかまつる」
「二年間に五万人もの餓死者を出したほど、台所が逼迫しているご家中としては、百両はずむのは、さぞ痛かろう。無理をせずに、節約なさることだ」
「御城代が立てられた高札を無視して、領内へ践み込んで参った御辺を、客としてもてなそうと申して居るのでござるぞ」
「客？」
「左様——」
「この眠狂四郎を、客として遇す、といわれるのであれば、百両は安すぎる、と申さね

ばならぬ。千両、とふっかけてもいいところだが、禁令を冒した身であれば、礼金など頂けまい。といって、お手前の人柄は、わたしのいちばんきらいな部類に属している。そちらから客として遇する、と申し出られても、こちらがご遠慮申し上げたい。……番所の高札は、公儀隠密を潜入させぬためのものであろうし、潜入して来たことにあわてふためくのは、佐竹家に、幕府に知られてはならぬ何か重大な秘密があると推測できる。その秘密を打明けもせずに、他国者のわたしを使おうとするのは、いささか虫がよすぎる、と申すもの。その秘密を、打明けて、助力を乞(こ)うような度量など、お手前は、お持ち合せではなかろう」

「むっ！」

万座庫之助は、無礼な浪人者を睨(にら)みつけた。

「ついでにおきかせすれば、わたしが、平田篤胤という国学者と知り合ったのは、本丸老中水野越前守(えちぜんのかみ)邸にて、側用人からひきあわされた。と申せば、わたし自身、いつ、公儀隠密に豹変(ひょうへん)するやも知れぬ男だ、と考えて頂いてよい」

「なにを申すか！　たわけたことを！」

目付・万座庫之助は、憤然として、座を立った。

すると、狂四郎が、

「そうだ。せっかく、ご足労ねがったのだから、ごらんに入れておこう」

と、云って、三尺ばかり、すっと座を移した。
万座庫之助の目に、畳にななめに突き刺さった二本の矢が、うつった。
「これは、どうやら、お手前が、討ってくれとたのむ公儀隠密が、わたしが邪魔なので、射込んで来た。……お手前に百両でやとわれるのは、おことわりするが、対手がこちらの生命を狙っている以上、わたしも、闘うことになる、と知っておいて下さるとよい」

四

目付がひきあげるのと入れちがいに帰ってきた吉郎次を迎えて、狂四郎は、
「お前に借金をしたいが――」
と、云った。
「ここの支払いなど、はじめからてまえ持ちときめて居りますよ」
「そうではない。そのふところの女中買いの金子の中から、借りたいのだ」
「と仰言（おっしゃ）いますと？」
「この女を、身請したい」
狂四郎は、巴をあごで示した。
「へえ？」
吉郎次は、眉宇（びう）をひそめて、しげしげと、巴を視（み）なおした。

「この女郎を、どうして？……旦那、ちと酔狂が過ぎやしませんか」
「本気だ。この女を、廓の中で死なせたくないのだ。今朝がた、身請を思いついた時は、たしかに、気まぐれであったが、いまは、身請する理由もできている。きかせようか」
「いや、うかがいますまい。これも、本舞台での、旦那のしゃれた見せ場、となりゃ、お引き受けしなければなりませぬ。……ちょっと、お待ちを――」
吉郎次は、階下へ降りて行った。
巴は、あまりに思いがけない話なので、よろこぶよりは、一種の当惑を、おもてにあらわして、
「わたくしのような病人を、身請なさいましても、足手まといになるばかりでござります る」
と、云った。
「弟に逢いたくはないのか？」
「それは、もう、逢えるものなら……」
「そのからだでは、江戸までの道中、保つかどうか、あやぶまれるが、弟に逢って、弟に看とられ乍ら、目を落すのであれば、この廓でみじめにたった一人で果てるのとは、比べもなるまい」
「はい」

巴は、両手をつかえた。泪があふれて、頬をつたい、畳にしたたった。
「う、うれしゅう、ござりまする、貴方様のようなおひとにめぐり会えるなんて、……生きていて、よかった！」
吉郎次が、戻って来た。その手には、巴の証文があった。
「三十両、とは安売りしたものですぜ、お前さんも――」
証文を、巴に渡してやり乍ら、かぶりを振った。

午まえに、新柳町の廓を出た狂四郎は、やとった駕籠に、巴をのせて、歩き出したが、
「吉郎次――」
「へい」
「角館へ行って、お前が、女中にする娘を二三人、買うのを、待つことにしよう。この女は、江戸までの道中、倒れるかも知れぬ。看護するのは、やはり女がよかろう」
「江戸へお連れになって、どうなさろうと仰言るので？」
吉郎次は、小声で訊ねた。
「どうもせぬ。……わたしの看たところ、生きて、せいぜい、あと一年であろう。いや、もしかすれば、半年以内かも知れぬ」
狂四郎は、自分のつきはなした言葉が、巴の耳にとどくのを、はばからなかった。

「どうして、そんな慈悲心を起しなすったのでございます？」
「川尻村の川口の朝市で、わたしに、うまい魚を買って来てくれた」
「たったそれだけのことで……？」
「わたしのような無頼の徒でも、男という奴は、女のほんの些細な心づくしに、弱いものだ、と判った」
病みやつれて、起き上ることさえけだるい娼妓の身で、一夜の客によろこんでもらうために、夜明け前に、一里のむこうの朝市まで、買いに行ってくれたのである。
巴は、孤独な虚無の男の泣きどころを、知らずして衝いた、といえる。

狂乱暴徒

一

羽後・仙北郡本堂庄は、久保田城下（秋田）から十四里、大曲の東北三里、ひろびろとした田野の中に在った。

本堂は、地下人から、城廻と呼ばれていた。仙北郡随一の旧家本堂氏の古邑だったからである。慶長六年、当主本堂源七郎は、佐竹義宣と入れかわって、常陸国に移封され、四百余人を率いて、故郷をあとにした。その子孫は、いま江戸に在って旗本になり、八千石の交替寄合衆筆頭を世襲している。

本堂家の知行地のすべては、常陸国にあったが、古邑であるこの仙北郡本堂に、なぜか五十石ぶんの土地がのこされていた。

なにかの仔細があって、徳川家から致仕した場合、故郷へ還れるように、五十石ぶんの土地を、残させて頂きたい、と本堂源七郎が、家康に乞い、許されたものとおぼしい。

いわば、本堂庄は、佐竹領内で、いい意味でも、わるい意味でも、郡奉行の支配を受

けぬ唯一（ゆいいつ）の孤立した村であった。
本堂家館址（やかたあと）には、かなりの構えの屋敷があり、本堂氏の旧家臣である郷士・小山田六郎左衛門が住んでいた。これも、慶長年間からの慣習であろう、北秋田郡の阿仁（あに）銀山・同銅山の囲い米の半分を受け持って、母屋（おもや）裏手に、八棟の米蔵をつらねていた。
佐竹家では、べつに、本堂氏の旧家臣を取次ぎ方にせずに、直接、囲い米を、阿仁の銀山銅山へ運んでも、一向にさしつかえはなかったはずである。
なんとなく、慶長年間からの慣習で、そうしていただけのことであったろう。
この治外法権的な慣習は、二百年を経た天保に至って、ものをいった。
この年二月、前々年からひきつづく飢饉（ききん）で、狂乱ともいうべき米価の騰貴（とうき）をまねき、五万二千余人の餓死者を出した挙句、仙北郡前北浦・奥北浦八十六カ村の農民五千余人が、一揆（いっき）を起したのである。
秋田藩で、佐竹氏入部以来、一揆が起ったのは、これがはじめてであった。勿論（もちろん）、秋田藩だけがそれまで飢饉をまぬがれていたわけではなかった。
寛延元年（一七四八年）から、飢饉は、幾年か毎（ごと）に確実に起っていた。
寛延二年には、久保田城下内にも乞食（こじき）があふれ、施行（せぎょう）小屋にも入りきれずに、路辺で飢え死した。その数のあまりの多さに、一人一人を埋葬しているいとまがなく、矢橋獄門場に、一丈五尺四方を、木材で組んだ巨大な穴を、三つも掘って、それに数十体ずつ

抛り込んだところ、たちまち一杯になった、と記録されている。

天明三年（一七八三年）に日本全土を襲った大飢饉は、奥羽が最も甚だしかった。当然、佐竹領内も、その悲惨をまぬがれることはできなかった。

弘前藩でも南部藩でも、五万人以上が餓死した挙句、一揆が起り、逃散が続出した。秋田藩も、六万七千余人を飢え死させたが、しかし、一揆は起らなかった。羽後の百姓たちは、じっと、飢餓に堪えたのである。

ところが——。

この年——天保五年（一八三四年）の一月になって、文字通り前代未聞の大騒動——一揆が起ったのである。

蓆旗と竹槍をかざした前北浦・奥北浦八十六カ村の農民五千余人は、西明寺村にある阿仁銀山銅山へ運ぶ囲い米の蔵を襲撃して、ことごとく奪い取った。

その要求項目は、かくし米の強制召し上げの停止と、材木や養蚕や漆や蠟にかけられる統制と重税の廃止であったが、つまりは、領内はじまって以来の物価の高騰と米不足が原因であった。

一揆勢は、そのまま、怒濤のごとく、角館を奔り抜けた。久保田城下へ押し入って、お屋形様（藩主佐竹義厚）に直訴しようと、仙北平野に鯨波を噴かせ、突進するにつれて、その頭数を増した。

この時、阿仁銀山銅山運びの囲い米の半分は、本堂庄の小山田六郎左衛門の八棟の蔵にも、備蓄してあった。

一揆勢は、しかし、その囲い米を奪おうとはしなかった。本堂だけを、避けて、暴風雨のように、各村の豪農肝煎の家を打ちこわしつつ、神宮寺まで迫った。

角館城代・佐竹河内が、給人四十人を率いて、馬をとばして、一揆勢に追いつき、

「身共の屍を踏み越えて、直訴に及ぶがよい」

と、一命をなげうってみせ、正式の訴願の筋を通させる、と約束して、解散させたのであった。

江戸横山町の小間物問屋吉郎次が、眠狂四郎と身請した娼妓巴に、数日の逗留の宿として、えらんでくれたのは、本堂村のその小山田家の離れであった。

二

……ふっ、と。

狂四郎は、目覚めた。闇に双眸をひらくと同時に、神経が冴えた。

大地を踏んで近づく音が、遠くからひびいて来ていた。それも、百人や二百人ではなかった。

——五六百人？　あるいは、千人以上かも知れぬ。

まだ、夜は、明けてはいなかった。

隣りの牀(とこ)では、巴が、深い睡(ねむ)りの中にいる。母屋でも、誰も、この音を耳にして、起き出た気配はなく、ひっそりとしていた。

狂四郎は、すっと牀を抜け出した。

二月の一揆騒動があってから、小山田屋敷では、万が一に備えて、この離れの横手に、高い望楼を組んでいた。

星がひとつまたひとつと、消えかかっている暁闇(ぎょうあん)のこの時刻、三月下旬とはいえ、冷気が肌を刺した。

狂四郎は、望楼上に登って、西の方角へ眼眸(まなざし)をこらした。

闇に目の利(き)く男であった。仄(ほの)かな星あかりの中を、黙々として、こちらへ向って来る長い行列を視(み)わけた。

一揆に相違ない、と合点(がてん)できた。

ちらちらと白く浮くのは、鉢巻であろうし、それぞれが鎌(かま)とか鍬(くわ)とか斧(おの)など、得物(えもの)を携えているのが、明白であった。

ただ、蓆旗だけは、立てていなかった。

——阿仁運びの囲い米を奪いに来たものであろうが……？

二月の一揆勢は、ここだけは襲わなかった、という話は、あるじの小山田六郎左衛門から、きかされていた。

——二月に一揆を起したのは、この仙北郡の農民たちであったというから、あるいは、この連中は、平鹿(ひらか)郡の山獄(さんがく)方面の飢えた農民かも知れぬ。

いずれにしても、他国者の浪人者には、かかわりのない出来事であった。

狂四郎は、それなり、望楼上を動かずに、行列が近づくのを待った。

しらじらと明けそめた頃合、葬列めいた無気味な沈黙をまもった長蛇の一揆勢は、小山田屋敷に、一町余の距離まで迫って、動かなくなっていた。

いずれも、鉢巻を締め、ののと称する麻織の布子(ぬのこ)、紺股引(こんももひき)の上に蓑(みの)をまとい、得物として農具のほか、鳶口(とびぐち)や槌(つち)や十手棒などをつかみしめていた。総勢およそ千四五百、とかぞえられた。はんこたんなで目ばかりに顔を包み、たちき（もんぺ）をはいた女子の姿も、かなりの数にのぼっていた。

先頭に立った、どうやら発頭人(ほっとうにん)らしい男だけが、白装束に身がためして、『諸行無常』と記した小旗を左手にし、右手には、法螺貝(ほらがい)を携えていた。

もとより、この時には、もうすでに、小山田屋敷内は、主人の六郎左衛門以下使傭人(しようにん)三十余人が、女子供たちを屋敷外へ移して、それぞれの守備位置に就いていたが、鉄砲

や槍や刀を持っているものの、この寡勢では、とうてい防ぎきれるものではない、という絶望感にとらわれていた。

小山田六郎左衛門は、すでに六十を幾つか越えているばかりか、数年前に中風にかかって、右半身が不自由な身であったので、玄関の式台に、槍を杖にして、辛うじて佇立していた。

今になって、何故、農民たちが一揆を起して、この本堂家留守屋敷を襲って来たのか？　疑惑に心を包まれつつ、六郎左衛門は、今朝をおのが生涯の終り秋と覚悟していた。

白装束の発頭人が、おもむろに、法螺貝を口にあてた。

その音とともに、それまで唖のごとく深い沈黙を守っていた一揆勢が、一斉に吶喊を揚げた。

冠木門をくぐって、屋敷内になだれ込んで来た一揆勢に向って、玄関の六郎左衛門は、全身をわななかせつつ、

「狼藉すな！　窮状つまびらかなれば、米は呉れる！」

と、もつれ声をふりしぼって叫んだが、凄まじい鯨波にうち消されてしまった。

白装束の発頭人が、面前へ突き進んで来て、

「ご公儀は、われら領民がかほどに飢え苦しんで居るのを知り乍ら、阿仁の囲い米を、

召し上げるとは、ご政道の曲事（まがごと）も、きわまったと申すべきぞ！　ご公儀なら、われらも鬼畜と化し申す！」

と、六郎左衛門を、睨（にら）みつけた。

「なんのことじゃ、それは？　ご公儀が囲い米を召し上げられるなどとは――？」

六郎左衛門は、愕然（がくぜん）となって、聴きかえした。

「しらばくれまいぞ！　ご公儀の隠密（おんみつ）が、その下命（かめい）を帯びて、当家へ参って居ろうが――」

発頭人は、せせらわらった。

六郎左衛門は、「ちがう！」と叫びかえした。お主がたは、なにかの誤解をしているのだ、物狂いをおさめて、談合すれば、誤解はとける、と必死にもつれる舌を動かしたが、それに対して一揆勢は、凶暴な実力行為で応（こた）えた。

十手棒をつかんだ二十歳あまりの若い百姓が、いきなり、突進しざま、六郎左衛門の脚を、払った。

それをきっかけにして、一揆勢は、わあっと喚声を噴かせるや、母屋へ、別棟へ、なだれ込んだ。

三

飢餓に瀕(ひん)した窮民群の悽惨(せいさん)な荒れ狂いぶりが、そこに現出した。
米を貯(たくわ)えた者に対する憎悪(ぞうお)が爆発した、といえる。
柱は、斧を打ち込まれ、壁は、槌で打ち砕かれた。
家具調度品は、片っぱしから、ひっくりかえされ、鎌や鍬や鋤(すき)を加えられた。衣類はひき出されて、庭へほうりすてられたばかりか、雪隠(せっちん)から汲(く)み出した下糞(しもごえ)を、ぶちかけられた。
鉄砲・槍・刀を持っていた使傭人たちは、一揆勢のあまりの凶暴さに、一人として、その武器を使って、抵抗する者はなく、逃げ散ってしまった。
瀬戸物も小間物も、あたるをさいわい、みじんになれとたたきこわされた。掛物、巻物のたぐいは、ひき裂かれた。座敷にも、畳へ襖(ふすま)へ糞尿(ふんにょう)が、撒(ま)き散らされた。
土蔵も文庫蔵も破られ、ひきずり出された具足は傷つけられ、書類には火がつけられた。酒樽(さかだる)も味噌樽(みそだる)も、運び出されて、溝(みぞ)へぶちまかれた。糀(こうじ)も醤油(しょうゆ)も同様であった。
奥座敷の金箪笥(かねだんす)は、奪われた槍の鐺(こじり)で砕かれ、おびただしい金子(きんす)は、われ勝ちに奪われた。台所の饂飩(うどん)・素麺(そうめん)・砂糖・片栗粉(かたくりこ)・塩のたぐいは、使傭人用の雪隠へ、投げ込まれた。
そして――。
一揆勢は、母屋と別棟で荒れ狂うだけ荒れ狂った挙句、どっと、八棟の米蔵へ押し寄

せた。

しかし、米蔵は、扉は厚い鋼鉄でつくられて居り、壁もまた厚く、鳶口のたぐいで襲いかかっても、容易に破れるものではなかった。

六郎左衛門が、数人の手で、そこへ、ひきずられてきた。

「鍵を渡せ！」

「鍵はどこだっ？」

小突きまわされた六郎左衛門は、泥まみれの顔をあげて、人間の表情を喪った形相の農民たちを、睨みまわして、

「こ、殺せい！　拙者を、殺した上で、米を、奪れ！」

と、叫んだ。

その時、

「いたぞ！　公儀の隠密が！」

絶叫が、あがった。

わあぁっ！

一揆勢は、ぼろきれのような六郎左衛門を、そこにすてて、東の一隅へ向って、奔った。

そこに、望楼が建っていた。

眠狂四郎は、その上に、暁闇からいままで、ずうっと、動かずにいたのである。
狂四郎は、一揆発頭人と小山田六郎左衛門の問答をききとって、すでに察知していた。
農民たちが大集団を組んで、押し寄せて来たのは、この屋敷の阿仁運びの囲い米を、幕府が江戸表へ廻そうとしている、と何者かにだまされそそのかされたことを。
その何者かは、はっきりと見当がついていた。
この眠狂四郎を、公儀隠密にしたてたのは、とりもなおさず、公儀隠密にほかならぬのであった。
しかし、農民たちに、この旨（むね）を弁明しても、とうてい、だまされていたとさとる余裕など、狂気そのものの暴動ぶりを眺めれば、かれらにあるべくもなかった。
久保田城下の青楼で、二本の矢を射込んで、失敗するや、
――第二撃を、おのれらの手で行わず、暴徒を使うとは！
敵乍ら、みごとな手段（てだて）だ、とほめてやれる。
狂四郎は、小山田六郎左衛門がなぶり殺しにされようとする直前が、自分の出番だ、と計っていた。
千数百の暴徒をむこうにまわして、単身で闘うのであった。
――この無想正宗が、どれだけの生命を、あの世に送れるか？
冷たく自分に呟（つぶや）き乍ら、凄まじい打ちこわしぶりを眺めおろしていたのである。

犬死をするつもりはなかったが、血路をひらくのは、おそらく不可能と思われる。
――百姓の鍬や斧や鋤や鎌で、殺されるのも、おれの無頼の生涯を閉じるのにふさわしいのかも知れぬ。
その自嘲も、脳裡の片隅にあった。
一揆勢は、呶号を渦巻かせて、「降りて来い！」とせきたてた。はやった二三人は、斧をふるって、望楼の柱へ打ち込みはじめた。
狂四郎は、やおら、梯子段へ、足をかけた。

四

奇妙なことに――。
望楼を包囲蝟集していた農民団は、狂四郎の姿が、その高処から、ゆっくりと地上へ向って、降りて来るにつれて、喚きたてていた罵詈雑言を、しだいにひくいものにした。
狂四郎が、地面に立った時、かれらの口は完全に緘じられて、そこに静寂が占めていた。
幽鬼とか死霊とか、魑魅魍魎のたぐいが、うたがいのない存在であった時代である。
あきらかに、自分たちとはちがった容姿を持つこの浪人者のただよわせる妖気は、次元のちがった無明の世界から現われた、人間とは異なった生きもののように、かれらに、

悪寒をおぼえさせ、戦慄させたのである。

一揆勢は、沈黙するとともに、包囲の輪をひろげて、狂四郎のまわりに十数歩四方の空間をつくった。

……不意に、一挺の鎌が、正面から、狂四郎の顔面めがけて、

「犬めっ！」

と、投げつけられた。

次の瞬間、千数百の口から、驚愕と感嘆のどよめきがもれた。

狂四郎の左手が、造作もなく鎌の柄をつかんでいたのである。

「くそっ！」

背後から、斧が背中を狙ってとばされた。

狂四郎は、ぱっと身を沈めた。腰から、白い閃光がひらめいた、と視た刹那、その頭上で、斧は、刃と柄とはなればなれになって、左右へはね飛んでいた。

狂四郎が、立った時には、もう白刃は、鞘の内におさまっていた。

この迅業は、しかし、かれらをひきあげさせる示威の効果などすこしもないことを、狂四郎自身、知っていた。

この群集は、いまは、田畑にへばりついているただの百姓ではなかった。破壊と掠奪の快味に酔い狂っている暴徒であった。

こちらが只者ではなく、異常な手練者であることを示したのは、たとえ一瞬の衝撃を与えても、その慴怖は、突如として、凶暴な憎悪にすりかえられるのだ。憎悪は、死をおそれぬ闘志をあふる。

幾秒間かの沈黙は、文字通り、嵐の前の静けさなのである。

投げつけられる鎌や斧を二本や三本、両断することはできても、八方から数百本を投げつけられては、躱すことは叶わぬ。

もし、死地をくぐりぬけ、血路をひらけるとしたら、それは奇蹟としかいい様はない。

狂四郎は、死の瞬間を、待った。

誰かが、吶号し、それに、一同が合わせて、喚声をあげた——その瞬間から、死闘は開始されるであろう。

さいわいに、幾十人かの屍が横たわって、血の海をつくる修羅場の展開は、危機一髪のところで、回避された。殺気をはらんだ静寂を破って、母屋の庭の方から、

「待ていっ！　百姓衆、待てっ！」

その叫びが、馬の蹄音とともに、ひびいて来たのであった。

そこへ馬を駆け入らせて来たのは、横目・七草喜久左衛門であった。

「おう、七草のご老人——」

白装束の発頭人が、呼んだ。
馬から降りた老横目は、相変らず苦しげに、のど奥をぜいぜい鳴らしてから、
「この年寄りを、これ以上、喘息の発作で苦しめないでもらおうぞ、雲海坊。お主ともあろう鳥海山で二十年の修行を成した修験道が、あやしげな廻状で、いきり立って、百姓衆を狂わせるとは、思慮が浅すぎるわい」
と、云った。
「ご公儀が、この屋敷の囲い米を召し上げる、というのは、いつわりだというのか？」
「廻状は、でたらめじゃ」
「しかし、げんにこうして、ご公儀の隠密が、この屋敷に参って居るではないか」
「ちがう。この御仁は、隠密などではない。ただの遊行の浪人衆にすぎぬ」
かぶりを振ってから、老横目は、農民たちを見まわした。顔見知り、懇意にしている者の顔も、すくなくなかった。
この老横目は、常日頃、百姓の味方をして、米・雑穀や絹織物や漆などをかくしている者を、見のがしてやり、きびしい目付の目から、かばってやっていたので、心服を得ていたのである。
「公儀隠密は、たしかに、わが領内に潜入して居る。それが、証拠として、廻状を、お主らにまわしたのが、その公儀隠密と、わしは看た」

「なんのために？」

「公儀隠密は、この浪人衆が当藩に逗留しているのが、どうやら邪魔らしいわい。そこで、お主らをそそのかして、殺そうとした。いわば、奸策じゃな」

七草喜久左衛門の説得によって、一揆勢は、ひきあげて行った。

狂四郎は、打ちこわされていない離れへ、喜久左衛門をさそったが、

「わしは、貴殿に、べつだん、好意を抱いて、馳せつけて来たのではござらぬよ。これ以上の騒動を起されては、やりきれぬゆえ、明日にも、領内からさっさと立去って頂きたい、とすすめに参ったのだ」

と、云いのこした。

狂四郎は、しかし、そのすすめに、うなずきはせず、しきりに咳込み乍ら立去る姿を見送りつつ、胸の裡で呟いていた。

——乗りかかった舟には、乗らねばならぬ。

薄倖形見

一

「これァ、びっくりだ！　別の女子衆じゃないか、と思いましたよ」

庭さきに立った吉郎次が、首を突き出して、しげしげと見なおした。

案内を乞うと、巴が屋内から縁側へ出て来た——その姿を一瞥して、吉郎次は、思わず目を疑ったのである。

角館より北方四里に、高低重畳した山嶽に四面をとりかこまれて、ねむっているようにひっそりとひろがった湖水・田沢潟があった。その南の畔の、ひとにぎりほど平地がひらけた村落のはずれにある古寺の庫裡に、巴は、逗留していた。

平鹿郡の一揆勢に、滅茶滅茶に破壊された本堂庄の小山田屋敷に、これ以上の迷惑をおよぼさないために、そこを辞去した時、眠狂四郎は、理由は告げずに、久保田城下へひきかえす、と告げて、吉郎次に、巴の身柄を預けたのである。

吉郎次が、えらんだところが、この田沢潟の沿岸であった。

南部領の十和田湖とならんで、水の清らかな美しい湖水であった。

あれから、五日が過ぎていた。

吉郎次は、江戸の一流料亭で働かせる器量佳しの女中さがしに、彼処此処を歩きまわり、ようやく、目をつけた娘たちの親と村の肝煎に、話をつけておいて、巴を預けたこの古寺へ、やって来たのである。

吉郎次の面前に現われた巴は、いつの間にか、眉を落し、鉄漿で歯を黒く染めていた。着物も、地味な千草の古袷をまとい、あたまも、それにふさわしい髷に結いかえていた。

これが、娼妓であった、と云っても、はじめて接する者は、信じないであろう。

「その姿は、どう眺めても、ご公儀のご家人衆の御新造といったところですよ。しかも、よく似合いなさる」

「勝手なまねをしていけなかったでしょうか？」

「女心のわからない旦那じゃござんすまい。……あんたは、百姓出じゃない。れっきとした家柄の郷士の娘御ですからね、一度は、さむらいの女房姿になってみたい、という気持が、おありなすった。そのいじらしい女心が汲み取れぬほど、眠狂四郎の旦那は、野暮じゃございませんよ。……その姿におなりなさると、気のせいか、からだの加減も良くなったように、見受けられますよ」

「はい。ここへ寄せて頂いてからは、熱も出ませず、けだるさもとれました」
「惚(ほ)れなすったね、旦那に――」
吉郎次は、笑った。
「生れてはじめて、女の幸せを知りました」
「身請された甲斐(かい)がありましたね」
「わたくしは、……江戸表に到着するまで、この姿のままでお供できれば、もうそれだけでよい。そのさきを生きつづけとうはない、という気持になって居(お)ります。せめて、江戸表までのみじかい間だけ、仮の妻にさせて頂けるよう、お前様からも、願って下さりませ」
「よござんす。てまえからも、おたのみいたしましょう」
承知した吉郎次は、その時、山門をくぐって来た人の気配を、すばやく察知して、鋭い視線をまわした。
境内を大股(おおまた)に横切って来たのは、編笠(あみがさ)をかぶった旅装の武士であった。
――あいつ、まさか旦那の生命を狙う公儀隠密(おんみつ)じゃねえだろうな？
吉郎次は、警戒し、緊張した。
武士は、庫裡に近づいて来ると、
「眠狂四郎殿は、当寺に逗留か？」

と、訊ねた。
「そちら様は――？」
「江戸から参った。火急の用向きで、眠殿に会いたい」
「あいにくと、旦那は、ご領内のどこかには、たしかにおいでではございますが……」
「ここへ、必ずやって来るのであろう。佐竹領内に入って、さがすのに、ひどく苦労した。眠殿が、久保田城下の廓から身請した女子が、この田沢湖畔の寺に、預けられていることを、つきとめるまでに、三日を費やした。……お前が、吉郎次という女衒であることも知って居る。……眠殿は、必ず、ここへ、姿を現わすのであろう？」
「さあ、それはどういうものでございますかね。気まぐれなあの旦那のことでございますから――」
「かくさんでもよい。それがしは、使者だ。ご老中水野越前守様の側用人武部仙十郎殿の依頼を受けた水野家の在府家中だ。眠殿とは、面識もある」
武士は、編笠をはずした。
三十前後の、眉目の秀れた、いかにも上司に信頼されそうな、武士らしい武士の風格をそなえていた。
「眠殿が現われるまで、待たせてもらおう。よいな」
そう云われても、吉郎次は、なお半信半疑であった。しかし、待つ、と云われては、

敢(あ)えて拒絶はできなかった。

二

武部仙十郎の使者がやって来たことに、まるで予感が働いたように、眠狂四郎が、飄然(ひょうぜん)と山門をくぐって姿をみせたのは、それから半刻(はんとき)ばかり後であった。

座敷に端座していた武士は、「おお、やはり！」と、喜色をおもてにあらわした。

狂四郎と対座すると、

「水野家中小姓・渋川辰馬(たつま)と申す。上屋敷にて、二度ばかりお目にかかって居り申す」

と、挨拶(あいさつ)した。

「…………」

狂四郎は、無言で、巴がはこんで来た茶を、口にはこんだ。

「お手前が、この秋田藩に入られたことは、平田篤胤(あつたね)殿から添状をもらい受けて、江戸を出られたことで、推測がつき申した。側用人殿は、お手前が、秋田藩におもむかれたことを、この上の好都合はない、と申されて、それがしを使者として、あとを追うように命じられたのでござる」

「…………」

「側用人殿の密書を持参つかまつった。ご披見下され」

狂四郎は、見馴れた達筆の文面へ、視線を走らせた。

『とり急ぎ、申し述べる。奥羽各藩——弘前も南部も秋田も庄内も——元禄以来、数度に及ぶ大凶饉で、財政全く底をついた状態である。この一両年の大饑饉では、米沢藩のみが、辛うじて、備籾があったおかげで、一人の餓死者も出さずにすんだだけである。各藩は、不作と諸物価高騰に、打つ手ひとつとてなく、まことに気の毒のきわみと存じて居ったところ、偶然のことから、秋田藩で、困窮打開の方法として、公儀法度を犯している事実が耳に入った。すなわち、貨幣の私鋳を為している儀、疑うべき余地はない、と知った。秋田藩には、衰退したとはいえ、院内・阿仁はじめ、多くの金・銀・銅の鉱山があり、曾て、元文頃は、公儀の許可を得て、銭座を開き、大いに台所がうるおった事実がある。延享二年、幕府の諸国鋳銭座停止令により、秋田銭座も閉じられたが、九十年を経た今日、ついに、背に腹は代えられず、秘密の銭座を設けたものである。佐竹家重臣たちは、このにせ金を使って、異邦との密交易を企てている模様である。

さり乍ら、われらがあるじは、本丸老中として、佐竹家の罪を公に問うて処断するよりは、この私鋳を逆に利用するお考えをなされた。われらがあるじが、天下改革の大志を、いよいよ実践に移されようとしていることは、お主もすでに知るところで

ある。経綸を行わんとするには、大勇猛心とともに、莫大な金子を必要とすることは、申すまでもない。佐竹家私鋳金を、利用せんとするのも、弊政革新の一手段と心得てもらいたい。

ついては、お主が、佐竹領内に入ったのを、勿怪の幸いとして、その私鋳の事実をたしかめ、にせ金を入手してもらいたい。この儀、しかとたのみ入る。

なお、われらがあるじを、本丸老中の座より追い落さんと躍起になっている若年寄・林肥後守、御側衆・水野美濃守、小納戸頭取・美濃部筑前守ら、三手が組んでやしなう優秀なる隠密が、すでに、幾人か秋田藩にさし向けられたとおぼしい。

この隠密どもを討ち果して、にせ金を入手できるのは、一人お主のみである。何卒、この老骨の苦心に、一臂を仮されたい』

終始かわらぬ無表情で読了した狂四郎は、密使の渋川辰馬を、視かえした。

「幕閣内での、権力の座を争って散らしている火の粉は、もうすでに、わたしの頭上にも、降りかかっている」

「で、側用人殿へのご返答は？」

「迷惑な話だ、と老人におつたえ頂こう」

「迷惑？」

「左様――」

狂四郎は、冷然とうなずいてみせた。

「迷惑な話――だけでは、返答になり申さぬ。えらばれて使者となったからには、側用人殿のご満足を頂ける貴公のご返答を頂いて、帰らねば相成りません。それとも、それがしに手伝える仕事があれば、命じて下されば、一命を惜しむものではござらぬ」

「わたしは、時折は、あの老人に遊興費や放浪の路銀をせびっているが、こちらの気持の動かぬ事柄にまで、いつでも、唯々諾々と走狗になる約束をしたおぼえはない。そのことは、老人の方が、先刻承知している。……場合によっては、老人の敵にもなる。これまで、そうして生きて来たし、これからも、気ままな主義を変える存念は、いささかもない」

「しかし、貴公は、すでに、若年寄側の放った隠密たちによって、身を危険にさらしているではありませんか？」

「だから、迷惑な話だ、とこたえた。といって、老人のたのみを承諾することとは、話が別になる」

「気持が動かぬから、ことわる、と申されるのか！」

渋川辰馬は、敵意をあらわにした表情になった。

「いま、秋田藩という窮鼠は、幕府という猫に嚙みつくかかわりに、必死になって、自力

で遁れる穴を、壁に噛みあけようとしている。この窮鼠を捕えて、天下を左右する絶対権力の閣老首座、という巨大な魚を釣りあげる餌にしようとするのは、いかにも越州殿のあこぎな志向を示している。……傍観させてもらうぶんには、面白い光景だが、釣針に餌をつける役目は、ごめんを蒙りたい」

「よろしい！　それでは、側用人殿が貴公にされた依頼を、それがしが、代って、やりとげてみせ申す！」

「………」

狂四郎は、とどめれば、思いかえす気象の男ではない、と看て、無言で、腕を組んでいた。

憤然として席を立つ渋川辰馬に、次の間から、固唾をのんで見まもっていた吉郎次が、

「てまえは、これから角館に用事がございますから、途中までお供させて頂きとう存じます」

と、申し入れた。

吉郎次は、吉郎次なりに、思案するところがあったに相違ない。

三

狂四郎は、囲炉裏端に、肱枕をして、横になると、遠い眼眸を、田畑をへだててひ

ろがった湖水へ、送った。

薄ら陽の落ちた湖面は、太古からの静けさを保って、鱒釣りの小舟二三艘の影を配している。

一時に花の咲く出羽の春は、一月もさきであろう。湖水の彼方に起伏する山なみは、白い装いをまだ脱いではいなかった。

畳に投げ出した素足に、冷気がしみた。それを気づかったように、巴が、そっと、掻巻をかけてくれた。

「そなたの父のことだが……」

湖水を眺めやり乍ら、狂四郎が、口をひらいた。

「阿仁の鉱山方をつとめて、幾年かの間、寝食を忘れて働いた挙句、久保田城へ呼ばれて、なにやら苛酷で重大な命令を受け、そのことを苦悩して、自決した、と云ったな？」

「はい」

「遺書も残さなかったそうだが……」

「その時は、あまりに身勝手な親だと、恨みました。せめて、弟には、どのようにして、身過ぎをせよ、という書置ぐらいは残して欲しかった、と……、途方にくれて、泪も出ませず、みじめな野辺送りをいたしました」

「遺書の代りに、形見として何かのこした品はなかったか？」

「いえ、なにも——」

巴は、かぶりを振った。

しばらく、重い沈黙があった。

「あ——」

ふと、思い出して、巴が云った。

「形見と申せば、父が自害した夜、いつの間にか、わたくしの枕もとに、香筥（こうばこ）が置いてありました。でもこれは、母が嫁いで参った折、持参した品でございました。父が、ねむっているわたくしの枕もとに、そっと置いてくれたに相違ございませぬが、母の形見を渡してくれただけのことと存じ、遺書ものこしてくれず、こんなものを渡してくれたのかと、かえってうらめしゅう思われました」

「その香筥を、いまも持っているか？」

「はい」

「見せてもらおう」

「はい」

巴は、自分の居間としてあてがわれた中ノ間へ入り、乏しい荷物の入った行李（こうり）の中から、それをとり出して、表ノ間へもどって来た。

起き上った狂四郎は、年代ものらしい香筥を受け取り、蓋をあけてみた。
「……………？」
狂四郎が、つまみ出したのは、一枚の銀貨であった。しかし、それは、江戸銀座でつった一分金二分銀ではなかった。さりとて、佐竹花降銀でもなければ、角館切銀でもなかった。
巴は、けげんな面持で、
「それは、どこのお金でござりますか？」
と、訊ねた。
「隣邦清国の一両銀だ。長崎で、見たことがある。清では、この一両は、銭千文にあたる、ときいたことがある。……清国の貧しい者の一食分の食費は、十数文というから、この一両銀は、相当なねうちがある」
——秋田藩では、そのむかしの通宝銀をまねた私鋳をせず、清国のにせ貨幣を、つくっているのか。
意外な発見であった。
巴の父奈良岡修次郎は、おそらく、清国から密入国して来た銭師とともに、この一両銀を私鋳せよ、と命じられて、公儀法度を犯すことを苦悩した果てに、自決したのであったろう。

——久保田城下はずれの川尻（かわじり）村の川口に、鉄砲の鋳造所がある。あそこが、秘密の銭座にされているのだ。

胸中で、その確信を持った時、血相変えた吉郎次が、まっしぐらに山門を駆け込んで来た。

四

「旦那（だんな）っ！」

吉郎次が、土間へとび込んで来た時には、もう、狂四郎は、すばやく無想正宗を腰に落し差して、上り框（かまち）へ降りていた。

「渋川辰馬を襲って来たのは、一人か二人か？」

常人が走るほどの速度で、山門を出乍ら、狂四郎は、訊ねた。

「二人でございます。……旦那は、それを、ちゃんと、予想していなすったので——？」

「尾行され乍ら、わたしは、ここへ来た。水野家側用人の密使がわたしをたずねて来たことも、対手（あいて）がたは、知っていたに相違ない。……当然、わたしが、その密使に、秋田藩の法度破りの秘密をつきとめた調書か、または証拠の品を手渡した、と対手がたは、誤解した。……襲って来たのは、ここから、どのくらいの距離だ？」

「塞の神峠を越えた檜木内川のすこし手前の、一里半ばかりの山中でございます」

――あの男なら、こちらが助勢に到着するまで、充分、持ちこたえるだろう。

狂四郎は、渋川辰馬と対座しているあいだに、――これは、出来る、とその業前をはかったのである。おそらく、水野家家中で、屈指の使い手であろう。公儀隠密たちに、むざと斬られはすまい。

狂四郎は、いわば、渋川辰馬を囮に使って、自分の生命を尾け狙っている公儀隠密たちを、片づける策をえらんだのである。

しかし――。

狂四郎と吉郎次が、その修羅場に到着した時、二人の敵と死闘した渋川辰馬は、総身血にまみれて、松の幹によりかかり、もはや反撃の力を喪い、とどめの一撃をあびるのを待つばかりの悲惨を呈していた。

狂四郎は、風のごとき迅さで、動いた。

一人の敵に対しては、ただ一太刀の袈裟がけをあびせ、もう一人に対しては、無想正宗を地摺りに下げて、円月殺法を起した。

この敵が、多くの人命を断つことによって、剣をきたえあげた刺客であることは、双眼の冷たい光を視ただけで、判った。

無想正宗が、十五夜そのままの真円の軌道に乗ってゆっくりと、切先で天を差した

――刹那、敵は、幾度かおのれより秀れた強敵を仆した豊富な経験から編んだであろう戦法を、放って来た。

地を蹴って、右足の履物（それは、裏に鉄鋲を打った革草履であった）を、狂四郎の顔面へとばしざま、身を沈めつつ、胴薙ぎの迅業を揮った。

もし、狂四郎が、思わず飛んで来た履物を避けていたならば、存分に胴を断たれていたに相違ない。

狂四郎は、そうはしなかった。したたかに、履物で顔面を搏たれるにまかせつつ、真っ向から斬り下ろした。

敵は、脳天から両断されて、血飛沫の下に斃れ伏した。

無想正宗を鞘におさめた狂四郎は、草履裏の鉄鋲で傷を受けた額から流れる血汐をぬぐうと、松の幹によりかかった渋川辰馬に、近づいた。

すでに、事切れていた。

――あたら、有為の士を、贄にした。

微かな悔いが、狂四郎の眉宇をひそめさせた。

「旦那！」

極度の興奮で、いくども生唾をのみ下して、自身をおちつかせた吉郎次が、

「やはり、本舞台では、貴方様ならではの、水際立った立役ぶりを、てまえに見せて下

さいましたな」
と、云った。
その言葉をきいたとたん、狂四郎は、この男特有の冴えたカンが働いた。それは、きわめて、不吉なものであった。
――もしかすれば！
狂四郎は、足早にひきかえし乍ら、おのれに呟いた。
――計ったつもりが、計られたのかも知れぬ。
不幸にして、その不吉な予感は、的中した。
湖畔の古寺の庫裡に戻ってみると、座敷では、薄倖な女が、その短い生涯を終えていた。
一太刀で、斬り殺されていた。
香筥は、奪い去られていた。
佐竹領内に潜入した公儀隠密は、二人ではなく、三人だったのである。
「この額の傷を手当てしてくれる女を、失ったな」
狂四郎は、呟きすてたことだった。

いけにえ娘

一

日本海は、空の色も海の色も、冷気が霽れて、春を迎えていた。

目路のつづく限りの砂浜に打ち寄せては引く白い浪こそ、音が高かったが、廻米船を拒否して秋田藩内だけで五万二千人を飢え死させた厳冬の荒れ狂った暗い波濤は、うそのように、消えていた。

久保田城下より西北二里、雄物川の河口右岸にある土崎湊には、飢えを満たす食品を積んだ船が、幾艘か到着していた。

この年二月、北浦八十六カ村の農民一揆が起った頃より、ようやく、荒浪を乗りきった廻米船が、越後・加賀・富山、さらに遠く筑前・肥後などの米を、小麦や大豆、薩摩芋などと一緒に積んで、ぞくぞく、この土崎湊へ入って来て、ようやく、それ以上餓死者を出すのを食いとめたのであった。佐竹家が、四十余万両のあらたな借財を、大坂商人から負うたからである。

土崎湊は、秋田藩唯一の廻米船の入る交易港であった。

出羽は、海岸の地勢がひくく、すべて砂浜で、千石船を碇泊させる錨地はなかった。

土崎湊だけが、寛文年間に、勝平山の北麓を切り抜いて、新しい水戸を開き、雄物川の河口に、七八百石以下の船が入れるようにひらかれたのである。

思えば――。

秋田藩は、廻米に関する限り、輸出するにも輸入するにも、本邦で最も不便な国であった。

東廻りといって、蝦夷松前の海峡をまわるか、もしくは遠く北陸、山陰を過ぎて、長門に至り、瀬戸内海を越えて大坂に至らなければならなかった。

ひとたび、飢饉に襲われると、厳冬の風雪波濤をおかして、土崎湊へ、米を運んでくれる船は、一艘すらなかった。

ようやく――。

二月末から三月にかけて、米をはじめ幾種類かの食品が、到着し、それらが領内に分配され、救済にあてられて、秋田藩が、ほっとひと息ついた状態が、いま、土崎湊のたたずまいに感じられた。

空船になった船には、西の国へ帰るさまざまな職業の人々を便乗させるので、出航待ちのための旅籠や茶店が、河口にはならんでいた。

災厄ばらいの山伏とか、杉の佳木を買いつけた材木問屋の手代とか、秋田黄八丈の製造ぶりを調べに来た大坂職人とか、丁稚奉公に行く竪縞布子に浅黄股引姿の少年とか、それよりもさらに貧しい身装の娘を四五人連れた女衒とか……。

大きな薬箱を背負うた諸国巡りの薬売りが、茶店に入って来て、富山行きの空船が、いつ出るか、尋ねたが、これも、毎年春秋に必ず見受けられるなじみの姿であった。

薬売りは、もう六十の坂を越えた白髪の老爺で、杖にすがって、いかにもしょぼくれた風体であった。

あと半刻あまりで出航する、ときいて、老爺は、落間の片隅に、うずくまった。

「爺さん――」

薬売りに、声がかかった。

背後に小座敷があり、破れ衝立で仕切られていた。その衝立で姿をかくしていた者が、薬売りを呼んだのである。

「へい」

「薬をもらいたいが――」

「へい。風邪薬でございますか？　それとも、腹痛の……？」

「いや、お主の懐中にある薬だ。本丸老中水野越州に敵対する若年寄・林肥後守あたりがよろこぶ特効薬だ」

「………」

薬売りの面貌が、たちまち、精悍な若々しいものに一変した。

小座敷で、まずい濁酒を飲んでいた眠狂四郎は、やおら、無想正宗を把って、腰を上げた。

土間へ降りて、富山の薬売りに化けた公儀隠密へ、冷たい双眸を当てると、

「お主が脱出するのは、海路に相違あるまい、とこちらに読まれた以上、生命をすてるか、特効薬を渡すか、それとも、この眠狂四郎を斬るか——三つのうちのひとつをえらぶよりほかはあるまい」

と、云った。

「見事な推測をなされた」

公儀隠密は、もはや、わるびれずに、こたえた。

田沢湖畔の古寺で、薄倖な娼妓巴を斬って、香筥を奪ったこの公儀隠密は、佐竹領内から脱出するのに、そこから江戸に最も遠い、日本海岸をえらんだのであった。しかも、警戒厳重な久保田城下を通り抜けて——。

田沢湖畔から、他領へ抜け出るには、二つの路があった。そこからわずか一里余を趨ると、生保内に至り、仙岩峠を越えれば、陸中岩手郡（南部藩領）であった。すなわち、いちばんの捷径であった。

かれは、そうしなかった。眠狂四郎が、当然、その捷径を逃げた、と思って追跡して来るであろう、と考えたからである。

羽前・最上郡（新庄領）へ至る院内道を、避けたのは、侵入の際、番所で十人の藩士・番卒を殺して居り、出国者に対する監視体制はさらに強化されていることは、云わずとも知れていた。のみならず、院内番所には、七草喜久左衛門という横目が、詰めているに相違なかった。公儀隠密としては、こちらの正体を看破する最も鋭い目を有った人物としておそれなければならなかった。

そこで――。

秋田藩家中が厳重な探索の網を張った久保田城下を通り抜ける危険を冒して、海路をえらんだのであったが……。

眠狂四郎の裏をかいたつもりが、逆目に出たのである。

二

薬売りの老爺に化けた密偵は、自分に背中をみせて、三歩あまり先を、ふところ手で、渚沿いに八郎潟の方角へ向って歩いて行く狂四郎の後姿を、公儀隠密にあるまじき一種の畏敬の念をこめた視線で、瞶め乍ら、

「身共の正体を、どうして看破された？」

と、訊ねた。

「仕込杖を持った富山の薬売りなど、一人も居らぬ」

返辞は、それだった。

常人の目には、絶対に白刃を仕込んでいるとは判らぬように作ってあり、しかも、この杖を持つために、老爺に変装していたのであるが、眠狂四郎という、その痩身に暗い孤独な翳を宿した浪人者の目だけは、ごまかせなかった。

およそ、七八町も歩いたろうか。

狂四郎が、足を停めた。公儀隠密も、立ちどまった。

前後に人影はなく、無限に延びた砂浜に、かなりの沖から起ったうねりが、白い浪がしらを立てて、どうっと打ち寄せ、ざざっと引いて行く単調なくりかえしをしているばかりであった。

対峙してから、ややしばらく、沈黙があった。

狂四郎は、なお、ふところ手のままであった。

「お主……、手むかいもせぬ女子を、いきなり斬殺するほどの酷薄をそなえ乍ら、何故、ここまで歩いて来るあいだに、背後から斬りつけようとしなかった？」

「おのれにも、判り申さぬ。……ただ、申せることは、お手前の後姿を観ているうちに、おのれ自身も、人間であることを、意識いたした」

「………」
「敢えて、口に出せば、きざになり申すが、おのれ自身が、隠密であることの虚しさ——それを、お手前の孤影が、教えて下されたようだ」
「香筥を、こちらへ渡して、まことの薬売りになろう、と思い立つほどの虚しさではあるまい」
「もとより——」
顔面をびくびくっと痙攣させるや、仕込んだ無反りの白刃を抜きはなち、
「参る!」
と、青眼につけた。
狂四郎は、袖から双手を出すと、それなり、だらりと下げて、待った。
「抜かれい! 勝つにせよ、敗れるにせよ、お手前の円月殺法をみたいのだ!」
公儀隠密は、叫んだ。
「隠密も人であったことの虚しさをおぼえた者に対して、意識を空白にする円月殺法を用いる必要はあるまい」
この返辞は、決闘者に対する最大の侮辱であった。
浪音に合わせた満身からの懸声をほとばしらせるとともに、海鳥が掠めるに似た速影となって、公儀隠密は、砂上を翔んだ。

狂四郎は、その場を動かなかった。

公儀隠密は、狂四郎の後方七八歩の処まで奔馳して、ぴたりと停止した。

抜いたとも見せず、斬ったとも見せなかった無想正宗を、狂四郎が鞘の中へ落した時、公儀隠密は、かんまんな動作で横へ倒れた。打ち寄せた浪が、その死体にかぶさり、水泡を赤く染めて、引き去って行く。

狂四郎は、ゆっくりと、近づくと、物体となりはてたものの懐中へ、片手を入れて、娼妓巴から奪った品をさぐった。

三

「やあ、やはり、貴殿は、この院内峠を越えて、去なれると存じて居り申したぞ」

木戸口で、番卒二人の突棒で、行手をさえぎられた狂四郎の前へ、のこのこと出て来た老横目・七草喜久左衛門は、相変らず頸にうすよごれた真綿を巻きつけた、みすぼらしい風体であった。

狂四郎が、土崎湊からひきかえして、三日が過ぎていた。

「貴殿には、案の定、お世話をおかけ申した。お礼を申し上げなければなり申さぬ。われらが上司のお目付万座庫之助殿の依頼通りに、当藩に潜入したご公儀の隠密衆を、三人とも、討ち果して下された。万座殿からも、くれぐれも、深謝の意を表すよう

に、呟いつけられてござる」

そこで、のど奥を鳴らして、かすれた咳を送り出した喜久左衛門は、

「お目付は、礼金として百両を進呈いたす、と申し出られたそうなが、貴殿のお働きに、百両の謝礼など、すくなすぎ申すわい。そこでな、やつがれが思案したわけじゃが、百両の代りとして、差し上げたいものを、思いつき申した」

「…………」

「それが何か、想像はつかれまいな？」

老横目は、にやにやした。

「…………」

狂四郎は、あくまで、無表情であった。

喜久左衛門は、古い館を振りかえると、

「これ、志津乃、出て参れ」

と、呼んだ。

現われたのは、旅装の武家娘であった。雪国がつくった透るような白い肌と、瞳の色の薄い、一種哀しげな切長の双眸と、気品のあるかたちの鼻梁と唇を持っていた。襟元や肩の優しい線に、匂うようなういういしさが湛えられていた。

「これは、やつがれの娘でござる。……貴殿に進呈つかまつる。お受けとり下され」

そう云われて、狂四郎は、あらためて、別の目で、娘を看た。
伏せたおもてには、ただ、つつましい、しとやかな気色があるばかりであった。
老横目は、言葉を継いだ。
「進呈いたす、と申しても、但し、江戸までてござる。江戸へ連れて行かれたならば、棄て置かれるよう、お願いつかまつる。当藩の江戸屋敷で、女中奉公でもせよ、と申しつけてござる。……おことわりするまでもござらぬが、志津乃は、男に手を握られたおぼえもない無垢でござる。道中のなぐさめには、これ以上の贈りものはない、と存ずるが、如何かな！」
「老人――」
狂四郎は、はじめて、口をひらいた。
「この娘に、わたしの生命を狙わせるのは、下策ではないか」
そう云って、冷たく薄ら笑った。
目付・万座庫之助は、依頼通りの結果になったのを、単純によろこんだかも知れぬが、この老横目は、それほど甘くはできていなかった。
――眠狂四郎は、佐竹家が公儀法度を冒している秘密の証拠をつかんで、立去ろうとしているに相違ない！
そう推測したのだ。

しかし、血気の家中を十人や十五人襲わせたところで、とうてい討ちとるのはおぼつかぬ、と勘定した七草喜久左衛門は、意外の手段を用いることにしたのであった。おのが娘を生贄にする――親として鬼になるむざんな決意をしたのである。それを下策ではないか、と狂四郎に云い当てられた老横目は、しかし、そう云い当てられるのを予想していた平然たる態度で、

「貴殿を討ち果すのに、ほかに上策がござるかな？」

と、云いかえした。

「家中の若ざむらいを多数死に追いやるよりは、自分の娘を犠牲にした方がいい、というわけか。古びてかびのはえた滅私奉公の士道といえる」

「眠氏――、貴殿は、決して、ご老中水野越州様の走狗にはならぬ御仁、とわしは、看たのでござる。さらにまた、この娘を進呈いたせば、江戸に到着するまでの間に、必ずや、三分の情愛をかけて下さるに相違ない、とはかり申した。……たしかに、わしは、この娘に、隙あらば、眠氏の生命を狙え、と呟いつけ申した。仕損じても、眠氏ならば、斬りはすまい。肌身を許せば、あるいは、三分の情愛をかけて下さり、何かつかんだ証拠を、ご老中へ渡すのを、中止して下さるかも知れぬ。と、打明けて、操をすてる覚悟をさせたのでござるわい」

この無頼の浪人者が、見た目の冷たさに反して、心の底には、弱い者に対するあたた

かさをたくわえている、と七草喜久左衛門は、観察したのである。そのあたたかさを利用する以外に、とるべきすべはない、とおのれに云いきかせた……。

「老人――」

狂四郎は、喜久左衛門を正視して、云った。

「わたしが、はたして、お主の娘に、三分のなさけをかけるかどうか――この賭（かけ）に、自信があるのか？」

「自信はござらぬ。自信はござらぬが、貴殿が当藩を立去るのを、横目として、拱手（きょうしゅ）して見送るわけには参りますまい。何卒（なにとぞ）、娘をお連れ下され。万が一にも、貴殿の寝首をかくことができれば、育てた甲斐（かい）があったわが子、とほめてやれると申すもの」

その言葉が、狂四郎に、ふっと、気持を変えさせた。

――この老人には、本堂の小山田屋敷で、借りができている。

「この賭、受けよう」

「受けてくださるか。かたじけない」

喜久左衛門は、鄭重（ていちょう）に頭を下げた。

四

数歩の間隔を置いて、奇妙な宿縁を作られ、結びつけられた男と女は、下院内から上

院内を通り過ぎて、黙々と、峠を登って行く。
七草喜久左衛門の娘志津乃は、自分のつまさきへ視線を落して、一度も、狂四郎の後姿を眺めようとしなかった。
やがて――。
行人に合掌させる千年杉の神木の立つ頂上が、そこに近づいた時、はじめて、狂四郎は、志津乃に、口をきいた。
「そなた、好きな男が、家中にいたのではないのか？」
「いいえ」
志津乃は、はっきりと否定した。
狂四郎の眼眸（まなざし）は、まっすぐに、前方へそそがれていた。
神木わきに、武士の影がひとつ、佇立（ちょりつ）していたのである。
――先日、ここを越えた折、おれを出迎えてくれたのは、山犬であったが、こんどは、若いさむらいが、見送ってくれる。
狂四郎は、同じ歩幅速度で、登って行った。
対手（あいて）の顔が、はっきりとみとめられる距離まで近づいた時、ようやく、志津乃も、待ち伏せた者に、気づいて、
「あ！　順之助様！」

と、小さな叫びをあげた。
順之助と呼ばれた若ざむらいは、狂四郎が数歩の地点に立つと、
「貴公に、志津乃どのは、渡さぬぞ！」
と、睨みつけた。
声音はふるえていたし、全身を石のように固くしていた。
狂四郎は、若ざむらいにこたえる代りに、志津乃に、
「やはり、そなたには、相思の男はいたようだな」
と、云った。
志津乃が、こたえるよりさきに、若ざむらいは、
「拙者と志津乃どのとは、許嫁の仲だ！」
と、叫んだ。
「かえすか、かえさぬかは、この娘の心ひとつだ」
狂四郎は、こたえた。
とたんに、志津乃の口から送り出されたのは、意外に冷やかな語気の言葉であった。
「等々呂木順之助様とわたくしは、一昨日までは、許嫁でございました。一昨日、双方の親が談合して、この約束はとり消されました」
「志津乃どのっ！」

若ざむらいは、かっと眦（まなじり）をひきつらせて、顔面をまっ赤にした。

「貴女（あなた）は、こんなえたいの知れぬ浪人者に、操を呉（く）れてもよい、というのか！」

「はい」

「ば、ばかなっ！……拙者が、そうはさせぬ！　拙者が、貴女に代って、この男を斬る。江戸までの道中、必ず、斬ってみせる！」

「いいえ、これは、わたくし一人に命じられたお役目でございます」

志津乃が、冷たくこたえた――瞬間、若ざむらいは、懸声をほとばしらせるや、狂四郎に斬りつけた。

躱（かわ）したとも見せずに、狂四郎は、手刀を、若ざむらいの頸根（くびね）へ撃ち込んだ。

意識を喪（うしな）った若ざむらいは、神木の幹へ、がつんと額をぶちつけ、そのまま、ずるずると、根かたへ崩れ落ちた。

狂四郎は、志津乃を視（み）やり、

「思いかえすならば、いまだな。この機会をのがせば、そなたの肌は、よごされる」

と、忠告した。

志津乃は、みじんの怖気（おじけ）もためらいもみせなかった。

「わたくしのお役目は、お手前様に、江戸表まで供をすることでございます」

「そなたは、この青年を、愛してはいないのか？」

「親が勝手にとりきめていた間柄にすぎませぬ」

――優しいういういしさしか湛えて居らぬこの容子の中に、奥羽女のしたたかなしぶとい性根が、かくされていた。

狂四郎は、あらためて、女というものの勁さを、感じた。

「…………」

志津乃がじっと瞶めかえす熱い視線から、おのれの視線をはずして、踵をまわして歩き出し乍ら、

――三千界の有る所、男子諸煩悩、合集して、一人の女の業障を為す、女人は地獄の使い、か。

華厳経の文句を、胸の裡で呟いていた。

車善七

一

院内峠（最上《もがみ》郡側からは及位《のぞき》峠と称《よ》ぶ）を越えて、羽前に入ると、羽州街道はすべて、渓谷をわけ入り、険しい峠を越え、山また山を、上下している。

四里を歩いて、金山宿に至り、はじめて山ふところを抜け出て盆地がひらけた。新庄城下まで四里の地点にある。

金山宿に入った時、すでに昇った半月が光を増して半刻《はんとき》あまりになっていて、志津乃という娘をともなった眠狂四郎は、粗末な構えの旅籠《はたご》に入った。

戸沢大和守《やまとのかみ》を藩主とする最上領内は、その大半が山嶽《さんがく》であり、豊沃《ほうよく》な庄内平野を有する酒井左衛門尉《じょう》の庄内藩などとは比べもならぬ貧しさで、その城下たる新庄さえも、寛政年間に著わされた『東遊記』によれば、

『人物、言葉、山形辺（秋元但馬守《たじまのかみ》所領）よりもさらに劣れり。最上川に船の往来ありて、酒田への通行よく、上方への便りも自由なれども、市中みなみな草葺《くさぶ》きの家

居にて、甚だ見苦しき町なり』

とある。

まして、遠いむかしに在った金坑が廃されて以来、何ひとつ産物のない金山宿は、宿駅としてのたたずまいを保っているのが、ふしぎなくらい、さびれはてていた。

狂四郎が、えらんだ旅籠も、泊り客は他に一人もいないようであった。

一汁一菜の乏しい夕餉のあと、狂四郎は、下婢に、牀を二つとらせて、すぐに横になった。

志津乃は、四里の山中を、一度も憩わずに歩かされて、疲れはてていたが、牀に就くと、神経がにわかにたかぶって、漆を塗ったような闇の中で、いつまでも、双眸をひらいていた。

隣りの牀では、睡ったのか、まだ目覚めているのか、狂四郎は、身じろぎさえもしなかった。

許婚であった等々呂木順之助に、手ひとつ握られたことのない志津乃にとって、妖気ともいえる暗い翳を、異相にも痩身にも刷いている浪人者と、はじめて、旅の宿のひとつ部屋で、寝ることに、いかに覚悟ができているとはいえ、やはり、名状しがたいおそれがあった。

男の猿臂がのばされて来たならば、防衛の本能が、必死の抵抗をさせるかも知れなか

った。

志津乃は、男に肌身を許す、という行為に就いて、まだ知識がなかった。漠然たる想像は働くが、実際に、どのようにして、犯され、それをこの身が容れるのか、判らなかった。

その不安は、こうして、闇の中の牀に就くと、急につのって来て、からだのすべての細胞を凝縮させていた。

いつ、不意に、男が、求めて来るか知れぬのであった。

その時、思わず死にもの狂いにこばんだ挙句、舌を嚙み切るかも知れない。そんな思いも、脳裡にわいていた。

こちらから、男の寝息を窺って、懐剣を突きかける、という闘志はなかった。首尾の確率は皆無であると、志津乃は、峠越えをしているうちに、自分をあきらめさせていた。並の武家娘ではなく、しんが毅く、小太刀の業もなみなみではない志津乃ではあったが……。

「眠狂四郎と申す浪人者、外見は氷のごとく冷たいが、からだの中には、意外にあたたかな血が流れているかも知れぬ」

父の喜久左衛門は、そう云ってくれたが、ここまで四里の山中を道中して来たあいだに、志津乃は、その姿からは、ただの一瞬も、優しさをかくしている男とは、感じられ

なかったのである。全く口をきいてくれず、自分を無視した歩きかたで、険路を少時の休息さえも与えてはくれなかった。

不気味な、おそろしい、みじんの隙（すき）もみせぬ浪人者でしかなかったのである。

……あまりの緊張で、志津乃は、ふっと、かわいた口から微（かす）かな吐息をもらした。

と――。

隣りの牀から、

「睡ることだ。江戸までの道中は長い。こちらは、据膳（すえぜん）をくらうことを、急いでは居らぬ」

その言葉が、送られて来た。

志津乃は、あっ、と息をのんだ。

畳二畳をへだてているのに、どうして、こちらの状態が、察知できたのであろう？

こちらが、どんなに不安な気持で、神経を冴（さ）えさせ、解こうにも解けぬ緊張裡に、もう一刻以上、じっと身をかたくしているかを、むこうは、終始、この暗闇の底で、感じつづけていたのであろうか？

志津乃は、こたえる言葉もなく、唇を噛みしめた。

二

同じ日の夜、更けて——江戸に於ては。
外桜田の本丸老中・水野忠邦邸の書院では、側用人武部仙十郎が、秋田藩佐竹家の江戸家老・佐竹勘解由を、人知れず呼び寄せて、対座していた。
夜中ひそかに招いた非礼を、詫びてから、仙十郎は、近来の癖で、身を二つ折りにして、頬を皺掌ではさみ乍ら、
「この老齢になり申すと、まわりくどい談合は、時間の無駄と存ずるゆえ、お呼びたてした用向を、単刀直入に申し上げますがな……、佐竹家では、ここ数年で、どれくらいの私鋳金をつくられましたかな？」
と、問うた。
佐竹勘解由は、とっさに返辞をしかねて、狡智に長けた噂の高い老人を、瞶めかえした。
「いやいや、江戸家老の要職にあるお手前が、鋳銭座停止令を破って、にせ金をつくっていることを、率直にこの場でみとめることは、でき申すまい。白状して頂きたい、と強請している次第ではござらぬ。延享の鋳銭座停止令によって、秋田銭座もつぶれ、秋田藩もそれによって財政難を救うのぞみが断たれて、以後は、銀札を発行したり、それに失敗して、窮乏が慢性化したことは、まことにご同情に堪え申さぬ。……この天保に入ってての飢饉の凄まじさに堪えきれず、ついに、法度を犯してにせ金をつくることに

ふみきられたのも、やむなき仕儀でござろう」

「…………」

「さて、ここに問題とすべきは、ご当家が、にせ金をつくられている事実が、若年寄・林肥後守殿や小納戸頭取の美濃部筑前守殿らのかぎつけるところとなったことでござる。……われらがあるじは、たとい、この事実が明白になっても、これを公に糺明することはせぬ、とこの爺いめに申されて居ることを、お心に止めておいて下され。恥を申せば、当水野家も、台所は火の車でござる。で——つまり、ご当家が、ひそかににせ金をつくられて居るのであれば、ひとつ、わがあるじとしては、この法度犯しに、協力して、ともに窮状をきり抜けたい、と仰せ出されて居るのでござる」

「…………」

「申さば、これは、江戸商人と大坂商人との虚々実々の商取引に似た相談でござる。……ご当家領内の阿仁の金銀銅山、また院内銀山では、公儀に内密にして、必死の多量産出に努めておいでのことは、とっくに承知つかまつる。たとえば、五年あまり前までは、院内銀山の産銀高は、一年に一千貫前後であったのが、ここ両三年、灰吹銀は二千貫を越えたとか——。つまり、御当家は、ひそかにオランダから、ブランドなんとかと申す揚水機を密輸入されたのでござるな」

「…………」

金山銀山の灰吹金銀は、すべて判金・丁銀と引替上納の法規で、これは、江戸銀座に正確に記帳されなければならなかった。

「しかし、本丸老中としては、ご当家の苦肉の策を、やむなき仕儀として……、つまり味方となって、秋田私鋳金を、利用させて頂きたく存ずる次第でしてな――」

「…………」

「ありていに申せば、わがあるじが、老中首座に就くには、軍資金を必要といたす。いつの世も、軍資金づくりは、世間に知れてはならぬ苦労をいたさねばならぬことは、ご貴殿も充分おわかり下さるに相違ない。……さて、ここまで正直に打明け申したからには、ご貴殿が、今夜、生きて当屋敷を立去ることができるか、それとも急病にて頓死されてかつぎ出されるか――いずれか、ということになり申すな」

武部仙十郎は、平然として、云ってのけた。相変らず、畳へ顔がくっつくほど身を二つに折って、佐竹勘解由の表情など、一度も、視あげようとはせぬのであった。

佐竹勘解由は、主君の信頼を一身に背負うた、肝だまの太い、決断と実行に間髪を置かぬ人物であったが、流石に、武部仙十郎という稀代の古狸とのかけひきには、とまどわざるを得なかった。

仙十郎は、云いたいことだけ述べたてると、むすっと口を緘じてしまい、勘解由の返辞を待っている。

ややあって、勘解由は、口をひらいた。

「ひとつ、おうかがいつかまつる」

「なんでござろうかな？」

「わが秋田藩が、私鋳をいたしている、という証拠がござろうか。もし、証拠となる一分金なり二分銀なりを入手なされているのであれば、お見せ頂きとう存じます」

「ざんねん乍ら、まだ、ご当家のにせ金など、手に入れては居りませぬの。……但し——」

ようやく、老人は、上半身を立てた。

「妙な男が、妙な場所に、秋田の名産物を、たくわえて居るのを、見つけ申した。木場の材木商ならよだれの出そうな杉の名木とか、黄八丈とか、漆器とか。……たしか、秋田黄八丈は、文政のはじめ、佐竹家では、城下の御用達の那波三郎右衛門という商人に、製造と販売権を独占させた、とときき及んで居りましたがな。されば、江戸や上方の市場に出まわる経路はあきらかであるはず。妙な男が、妙な場所に、かくすのは、ちと面妖しゅうござるの」

「妙な男とは、何者でござろうか？」

「しらばくれておいでじゃな。この爺いの口から、その名を云わせようとなさる。申しましょう。車善七でござる」

三

車善七。

この人物は、かんたんにいえば、江戸浅草にあるいわゆる〝乞人溜〟の乞食の長であった。〝乞人溜〟というのは、例えば、職人と女郎、番頭と後家といった男女が、恋におちた挙句、相対死（心中）をはかって、死にそこねた場合、日本橋の橋袂に三日間さらされたのち、入れられる場所であった。尤も、娼妓の場合は、もとの廓へもどされるのが、慣例であったが……。

心中未遂などという行為は、面目なくて、再び世間へ顔を出せない封建社会の掟にそむいた最も破廉恥な罪科であるから、世界から隔離した乞食の世界へ入れてしまうのが、お上のお慈悲というわけであった。

乞食は、勝手に四方へ徘徊したり、どこにでも、寝泊りしたりすることは許されていなかった。

昼日なかは、物乞いに歩いたり、死刑囚や溺死体の埋葬などをつとめるが、夜は、必ず〝乞人溜〟に帰らなければならぬ掟であった。

それを取締る者が、車善七であった。

車善七は、世襲で、その先祖は、れっきとした侍大将であった。しかも、佐竹右京大

夫義宣の重臣であった。

佐竹義宣は、常陸国八十万石の大守であった。

豊臣秀吉が、小田原の北条氏を攻め滅ぼした頃、常陸国には、佐竹義宣に従わない三十三館の豪族がいた。

義宣は、かねて、これらの豪族をことごとく滅亡せしめて、内顧の愁いをなからしめんと思っていたので、小田原城陥落の後、秀吉の寵臣石田三成に、

「常陸国の諸豪族が、この義宣の下知に従うように、関白様の御教書を頂けますまいか？」

と、願った。

三成から、このことをきいた秀吉は、即座に、佐竹にそむく奴ばらは、いちいち、わしの許しを請うに及ばぬ、自らの裁断にまかせる、思うままに沙汰せよ、とみとめた。

義宣は、急いで水戸に帰ると、三十三館の豪族を、饗応と詐って、招き寄せ、一人のこらず、斬ってすてた。その時から、佐竹義宣は、徳川・毛利・上杉・前田・島津とともに、天下の六大名として、時めいたのであった。

このよしみがあって、佐竹義宣は、慶長五年の東西手切れ、天下を分ける戦いに、石田三成に荷担しようとしたのであった。家康が、上杉景勝を討つべく、軍を進めるや、義宣は、三成と呼応して、四万余の軍勢を率いて、石那坂を過ぎ、多珂郡に布陣して、

徳川勢の背後を急襲せんと計った。その手筈(てはず)は、家康が上杉景勝と戦わず、突如として、兵をかえして、上方へ進んだので、水泡に帰した。

　佐竹家の一族左近大夫政義が、義宣を説いて、徳川家に敵対するのは自滅を招く、と主張し、ほんの申しわけばかりの小隊を、東軍に従わせた。そのおかげで、佐竹家は、改易(かいえき)をまぬがれたが、しかし、常陸国八十万石の所領安堵(あんど)は、許されなかった。

　慶長七年夏、佐竹義宣は、家康に駿府(すんぷ)へ呼ばれ、常陸国八十万石を召し上げ、あらためて、出羽国秋田二十万五千石を与える、と沙汰されたのであった。

　この悲報が、水戸にもたらされるや、重臣の一人車丹波守(くるまたんばのかみ)は、激怒して、

「わが常陸には、軍兵十五万があり、兵糧(ひょうろう)も十年のたくわえがある。何条もって、御家相伝の国をおめおめと立ち退くことができ申そうや。徳川家をむこうにまわして、華々しき決戦をこそ！」

　と、云いたてた。

　帰国した義宣は、六十余州を敵として、いたずらに、忠義の士卒を喪(うしな)うのは、自分のえらぶところではない、とかぶりを振り、本国をすてて、はるか遠い出羽へ向って、移って行った。

　しかし、車丹波守は、その行列を、途中から無断で離脱した。

白練(しろねり)に火の車を描いた指物を背負うて、愛馬にうちまたがり、家人の車野組(くるまのぐみ)わずか六

騎を引具したただけで、まっしぐらに、水戸城めざしてひきかえした。
丹波守が、水戸城下に馳せ入った時には、城内には、すでに、本多正信と藤田重信が、受領の正副使として在り、一万余の軍勢が、内外に充ちていた。
それをものともせずに、車丹波守は、
「新羅三郎義光朝臣より伝えられたるわが佐竹家の本城を、三河者などに奪われてなろうか。城を枕に死に申すぞ！」
と、叫びたてて、大門前から、駆け入った。
受領方には、狂気したとしか、受けとれなかった。
丹波守は、士三人、雑士七八人を、槍で突き伏せ、馬で踏み倒した挙句、生捕られた。
即日、城下はずれの処刑場で、丹波守は、十字に組んだ木の上に架けられて、左右から、胸いたを刺し貫かれたが、瞑目したなり、一語も発しなかった、という。

四

車丹波守には、一子があった。善七郎、といった。
善七郎は、丹波守が凄絶な死にざまをした時、まだわずか七歳であった。
十五歳で元服するや、善七郎は、秋田から脱走して、駿府に潜入した。父の怨みを雪ぐ決意をしたのである。

機会をうかがううちに、庭師の徒弟となって、城内に入るを得た。

秋の宵、家康は、厠から出て、湯桶の湯で手をあらっている時、いつもなら虫の音が高いのに、今宵は、ぴたりとやんでいるのに気がつき、急に、小姓がたに「庭をさがせ！」と、命じた。

立石の蔭にかくれていた善七郎は、懐中から短剣を抜きはなって、疾駆し、広縁にとび上った。

不運にして、一瞬の差で、小姓の一人に、肩を割りつけられて、家康を刺すことが叶わなかった。

高手小手に縛りあげられて、庭さきへひき据えられた善七郎は、自分は十年前、水戸城外で無念の最期を遂げた車丹波守の一子善七郎と申し、予譲とはいささか事情がちがい申すが、駿府様を不倶戴天の敵として、お生命を狙っていた者でござるが、天運われになく、このように縄目の恥辱を蒙った上からは、早々に首を刎ねて頂きたい、と云った。

家康は、くやし泪を頬につたわせる、まだ二十歳にも満たぬ若者を、眺め下ろして、

「趙襄子のごとき奸雄さえも、予譲を許している。解き放ってつかわすゆえ、秋田へ還り、もとの通り、佐竹に仕えるがよい」

と、呟いきかせた。

家康は、仇討というものが、好きな武将であった。かねてから、若い小姓たちには、もし父が殺されたならば、たとい五年が十年かかっても、さがしあてて仇を討つのが、士道の吟味だ、と教えていた。

善七郎は、しかし、讐を復てなかった上からは、生き恥をさらしたくないゆえ、首を刎ねられるが慈悲と申すものでござる、と叫びたてた。

「善七郎！　天下に、この家康の言葉を肯き入れぬ者は一人も居らぬぞ。もし、命を聞かざる上は、その方の九族もことごとく斬るぞ！」

家康から叱咤されて、ようやく、善七郎は、うなだれた。

しばらく、思慮していた善七郎は、やがて、頭を上げて、

「天下人たる貴方様を討ち果せなかったそれがしは、三世に身を置く処がなくなりました。一命だけは救うてとらせるとの寛仁のお心なれども、おめおめと武士として人にまじわるのは、良心に照らして本意ではありませぬゆえ、今日より、自身を人間の外の者と心得て、乞食の群れに、身を投じまする」

と、こたえた。

そこで、家康は、善七郎を、江戸の乞食の長にしてやったのである。

爾来、天保の今日まで、車善七は、代々世襲して、〝乞人溜〟を取締り、いまだ一度も、かれらに暴動を起させてはいなかった。

「如何でござるかな、佐竹勘解由殿。車善七は、いまだ、佐竹家を、旧主と仰ぎ、旧主のためならば、どのような奉公をも辞さぬ忠誠心を、代々受け継いでいるように、見受け申すが、よもや、否定はなさるまい」
武部仙十郎は、再び、身を二つ折りにして、皺掌で頬をはさみ乍ら、云った。
「車善七が、秋田の産物を所有していることが、どうして、当藩が私鋳金をつくっている証拠になりましょうや？」
江戸家老は、訊ねた。
「さあ、その儀でござるがな、このふたつ、いかにも別の事と思われ申すな。たしかに、むすびつけがたい。余人ならば、証拠とはならぬ、と考えるのじゃが、この武部仙十郎は、証拠になる、と判定いたしましたな。……その理由は――」
上目越しに、じろりと勘解由を視あげて、
「ふふふ……、そこまで、この爺いの口から、云わせられるな」
「…………」
「くどく、くりかえし申すが、本丸老中水野越前守は、佐竹家と手を組もうと申し出て居るのでござる。それを、ご承諾下さればよいのじゃ。もとより、江戸家老の一存にて、承諾することはできかねると存ずる。帰邸の上、ご主君と、とくと、ご相談下され。……では、今夜は、これにて、おひきとり下さるよう――」

「…………」

佐竹勘解由としては、どう考えても、対手が役者が一枚上で、太刀打ちできぬ、と敗北をみとめざるを得なかった。

主家の浮沈にかかわる一大事を、巨石を背負わされたように、重く感じ乍ら、勘解由は、座を立った。

嫉妬（しっと）武士

一

佐竹家江戸家老・佐竹勘解由（かげゆ）は、水野越前守（えちぜんのかみ）邸の裏門を、そっと、くぐり抜けて、春の夜風の吹き抜ける大名小路の往還を、帰途についた。

ただ一人の供ざむらいに、提灯（ちょうちん）で足もとを照らされ乍ら、もの静かな足どりで、黙然として歩きつづけ、溜池（ためいけ）通りに出た時、

「困ったことだ」

と、もらした。

犬の遠吠（とおぼ）えのほかは、夜風の音だけの、しんと寝しずまった往還上で、この一語は、重い悲痛なひびきがあった。

供ざむらいは、提灯のあかりを逆に受けた上司の面貌（めんぼう）を、じっと見まもった。

「今夜の談合が決裂すれば、わしが腹を切るか、あの側用人（そばようにん）の老人に死んでもらうことになろう」

「………」

「参平、お前を修行させたのが、役に立つ秋が来たかも知れぬぞ」

「はい」

供ざむらいは、こたえた。

郡参平という、二十五歳になるこの定府家士は、おもてむきは、ただの江戸留守居の添役であったが、実は、佐竹勘解由が、十三歳の時、剣の天稟をみとめて、江戸へ送り、平山行茂の道場へかよわせ、五年あまり実戦太刀を学ばせたのち、甲斐国の笛吹川の上流の山中におもむかせ、そこで、七年余、忍びの術を修行させた青年であった。

勘解由は、その山中に棲む武田信玄がやしなった忍者の末裔である小幡幻夢斎という、仙人に等しい隠遁者と知己になり、人間とは思われぬその忍びの術を、この目で見とどけていた。その弟子にさせた郡参平が、幻夢斎によって、どれだけの秘業を学び得たか、七年余経て帰府しても、まだ一度もたしかめてはいなかった。

役立てる機会もなかったし、また、参平が身に備えた忍びの術を、家中の誰にも絶対に知られたくはなかったのである。

見た目には、至極平凡な風貌と体軀を持って居り、あるいは、このまま、留守居添役として平穏な生涯を送るかも知れない青年であった。

勘解由は、主家の上屋敷の門前に戻り着くと、

「明日の宵、車善七に逢（あ）う。そう伝えて参れ」
と、命じた。
これまで、勘解由は、数度、車善七と、秘密の会合を持っていた。その使者には、この郡参平を使っていた。
場所は、定（き）めてあった。
参平は、勘解由に提灯を手渡すと、風に乗って翔（と）ぶごとく、闇（やみ）の中へ消えた。
その夜、勘解由は、一睡もしなかった。
しかし、次の日の朝は、家中の誰人にも、気づかれぬ、いつもとすこしも変らぬ平常通りの江戸家老であった。
また、昨夜の本丸老中水野忠邦の側用人との談合に就いては、主君義厚に、一言も報告しなかった。
宵闇が落ちて、勘解由は、上屋敷を出た。供は、やはり、郡参平ただ一人であった。
一町余、歩いて、
「尾（つ）けている者は居らぬか？」
と、訊ねた。
「居りませぬ」
参平は、こたえた。

勘解由がおもむいたのは、意外な場所であった。吉原の廓であった。馴染の引手茶屋『夕月楼』にあがり、ひいきの花魁をはべらせて、悠々と腰を据えた遊びぶりをしたのち、何気なく、厠にでも立つふりをして、座敷を出た時は、もう子刻（午前零時）をまわっていた。

勘解由は、月に一二度、この引手茶屋に泊ることがあったが、寝るのは、裏庭をへだてた離れにきめていた。

その離れに入った時、すでに、先客が一人、端座していた。

どう眺めても、その風体は、律義な商人そのものでしかなかった。年歯は三十なかばで、穏和な目もと口もとには、いかにも、少年の頃から、かたい商いにわき目も振らず精を出して来た、といった気色を示していた。

十一代車善七であった。

車善七は、〝乞人溜〟に小さな住居を持って居り、初代善七郎がつくった家訓により、世間に顔を出すことを絶対にしていなかったので、こういう商人ていになって、溜を出ると、それと気づかれるおそれは全くなかった。

勘解由は、座に就くと、すぐ、

「昨夕、本丸老中水野越州殿の側用人に呼ばれた。お前に、当藩の産物をあずかってもらっていることが、露顕した」

と、云った。

善七は、双眼をきらりと光らせて、勘解由を視かえした。

「溜に、間者が入り込んで参ったとは思えませぬが……」

「どこかに、油断があったに相違ない。……発覚した以上、ととのえていた手筈を破棄して、別の方法を思案せねばなるまい。たのむ！」

「かしこまりました」

「おそらく、国許へも、隠密を潜入させたに相違ない。いや、水野越州殿手飼いばかりではなく、若年寄の林肥後守一派も、当藩の貨幣私鋳の秘密をかぎつけた模様であるからには、同じく隠密を送り込んだに相違あるまい。……薄氷を踏み、虎の尾をまたぐ仕儀と相成ったぞ、善七――」

「乗るかそるかのこの大仕事、中止なさいますか？」

「いや、止めぬ！　わしはやる！」

佐竹勘解由は、決然として、云ったことだった。

二

羽前に在る眠狂四郎が志津乃をともなって、第二夜の宿をえらんだのは、最上郡の治所・新庄であった。

第一夜をすごした金山宿から、まっすぐに山越えして南下すれば、新庄まで四里の道程であったが、旅籠(はたご)の番頭から、今年の大雪で崖崩(がけくず)れしていて、歩行が難渋する、と忠告されて、平野を西に横切り、真室宿(まむろのしゅく)へ出、鮭川(さけ)（真室川）に沿うて、大きく迂回(うかい)したので、新庄城下に入った時には、黄昏(たそがれ)の色が濃く、空におぼろ月が、かかっていた。

やはり、二人は、数歩はなれた沈黙の道中をして来ていた。しかし、前日と変っていたのは、志津乃が時折狂四郎の背中にあてる眼眸(まなざし)の色であった。

無気味でおそろしいものに感じている色は、ほとんど消えていた。もとより、親しみをおぼえるには程遠かったが、昨夜、暗闇の臥牀(ふしど)から、
「睡(ねむ)ることだ。江戸までの道中は長い。こちらは、据膳(すえぜん)をくらうことを、急いでは居らぬ」

と、云われて——その瞬間から、志津乃の気持に、微妙な変化が起っていたのである。

——この浪人者に対する父の観察は、正しかったのかも知れない。

微妙な気持の変化を、志津乃は、その独語にしてみてもいた。

狂四郎は、駅市のにぎわいをみせている小田島町にならんだ旅籠の一軒をえらんで、二階へあがった。

残照が去って昏(く)れなずんだ西の空を、くろぐろと截(き)りぬいて、新庄城二の丸の建物が、望まれた。往古、最上山形氏(うじ)の一族・日野将監(しょうげん)が住んでいた古館(ふるだて)を、改築したもので、

城と名づけているが、天守閣などはそびえていなかった。
貧しい大名なのであった。
最上川中流の平原は、三つにわかれている。山形平野と尾花沢平野と、そして新庄盆地と。
山形平野は、久保田（秋田）・鶴岡の二城下を含む庄内平野にも比べられる広さで、肥沃であり、それと野続きになる尾花沢平野も、地味ゆたかであった。新庄盆地だけが、土地は痩せて、戸沢家・六万八千三百石といっても、実高はその半分もなかったのである。
「この戸沢領内も、若い女子は、つぎつぎと売られて居るようだ」
狂四郎は、城を眺め乍ら、呟くように云った。
階下の、囲炉裏を切った広い板敷で、江戸から来たらしい、歯切れのいい巻舌の女衒が、貧しい身装の百姓父娘を幾組か前にして、声高に、娘たちの器量の品さだめをして値をつけている光景を、狂四郎と志津乃は、見かけたのである。
夕餉の膳部が下げられた時刻であった。
突然――。
隣室と仕切る唐紙が、さっとひき開けられた。
顔面の筋肉をひきつらせ、頬から口辺にかけてひくひくっと痙攣させている等々呂木

順之助の姿が、そこにあった。

「志津乃どの！　貴女（あなた）が、その浪人者に、もてあそばれるのは、断じて、阻止いたすぞ！　こ、この一命に代えても！」

順之助は、わめいた。

志津乃は、顔をそ向けたなり、返辞をしなかった。

順之助は、狂四郎を睨（にら）みつけて、

「拙者には、貴公を斬（き）る腕前はない。そ、そのことは、正直に、みとめる。しかし、志津乃どのの操（みさお）を奪うことは、絶対に、許さぬ。……たとい、この場で、貴公に斬られても、怨霊（おんりょう）となって、つきまとってやる！　江戸まで、夜な夜な、枕辺（まくらべ）に現われて、とり憑（つ）いてやる！」

「お主――」

狂四郎は、ふっと薄ら笑った。

「昨夜、金山宿の旅籠には、現われなかったな。わたしの手刀を受けた頸（くび）の痛みで、どうやら、一日おくれたようだ。……わたしが、昨夜、すでに、この娘を抱いてしまっていた、としたら、どうする？」

「な、なにっ?!」

等々呂木順之助の面相が、泣き出しそうに惨（みじ）めなゆがみかたをした。

三

——たとい敵わずとも！

死んで怨霊になってやる、と逆上した順之助のわななく左手が、差料をつかんだ

——その折、廊下から女中が入って来て、

「時刻だば、床を延べさせてもらいとうがんす」

と、告げた。

順之助は、やむなく、斬りかかる構えをすてたが、唐紙はそのまま開いておいて、狂四郎を睨みつづけた。

志津乃は、女中が、押入から夜具をとり出して、二つ敷きかけると、急になにを思ったか、

「牀は、ひとつだけでよいのです」

と、云った。

「志津乃どのっ！」

順之助が、はらわたをしぼり出すように、絶叫した。

女中は、ぎょっとなって、隣室の若ざむらいをふりかえると、身をすくめた。

志津乃は、女中に、「わたくしが、延べますゆえ……」退ってよい、と命じた。

志津乃が、牀をひとつだけ敷くのを、順之助は、憤然と嫉妬と屈辱をないまぜた激昂の形相で、見まもったが、その意外な志津乃の態度と振舞いに、気勢を殺がれて、無謀に斬りかかる機を失ってしまっていた。

狂四郎は、依然として、視線を窓外へ送っていたが、

——どんな女にも、魔性がひそむ、と仏典が教えているが……。

と、一種名状しがたい暗い虚しさを、おぼえていた。

昨日までの許婚者に対する志津乃の冷酷な仕打ちは、その魔性がさせるのであろうか。

「おやすみなさいませ」

志津乃にうながされて、狂四郎は、着換えもせずに、牀へ横臥した。

志津乃は、しずかに、唐紙へ寄ると、順之助へは一瞥も与えず、その唐紙をすっと閉めた。

「志津乃どのっ！」

順之助は、悲鳴に近い叫びをあげて、閉められた唐紙を、またひき開けた。

志津乃は、はじめて、順之助を正視した。

「順之助様、わたくしは、貴方様を決して嫌うては居りませんでした。……どうか、せめて、わたくしに、さげすまれないようにお振舞い下さいませ」

「志津乃どの！　貴女は、もう、そ、その男に、操を与えてしまったのか？」

「…………」

志津乃は、こたえず、立って、牀のそばへもどると、帯を解き、着物を脱いだ。

緋(ひ)の長襦袢(ながじゅばん)いちまいになった姿を眺めて、順之助は、喘(あえ)いだ。総身の血汐(ちしお)が逆流した。

——志津乃を殺して、おれも死ぬ！

一瞬、脳裡(のうり)にひらめいた決意を、行動に移そうとした——刹那(せつな)、

「うろたえるな！」

ひくいが、肺腑(はいふ)にじいんとひびく叱咤(しった)が、むこう向きの狂四郎の口から、順之助の四肢を金縛りにした。

身を起した狂四郎は、志津乃に、小声で、

「そちらの部屋へ行くがよい」

と、命じた。

「いえ！　わたくしは……」

つよくかぶりを振る志津乃に、狂四郎は、

「惚(ほ)れている男に、そなたを、返してやるのではない。邪魔だからだ」

「え？」

けげんの眸子(ひとみ)をかえした志津乃を、狂四郎が、思いきり突きとばすのと、そこへ、宙を截(き)って、手裏剣が飛来するのが同時であった。

手裏剣は、廊下の障子を貫いて、襲って来たのであった。
つづけさまに……第二、第三、第四の手裏剣が、撃ち込まれて来た。
狂四郎は、それらを、ことごとく、無想正宗の鞘（さや）で、はじきとばした。その迅業（はやわざ）をみせつつ、狂四郎には、刺客（しかく）が、廊下をへだてた部屋から、二枚の障子を貫いて、手裏剣を放って来ている、とさとる余裕があった。
こちらの姿が見えぬ遠い位置から、正確に、この身を狙（ねら）い撃ちして来るのは、ただの刺客ではない証左であった。
……襲撃は、それだけで終った。
狂四郎は、むかいの部屋から、すばやく、刺客が気配を消して、逃げ去るのを、冴（さ）えた神経で察知してから、順之助に視線を移した。
「佐竹家に、これだけの手裏剣の達者がいるとは思えぬが――」
「せ、せ、拙者が、かたらって、襲わせたのではない。拙者は、このような卑劣なまねはせぬ」
固唾（かたず）をのんでいた順之助は、憎悪（ぞうお）とは別の喘ぎで、声音（こわね）をふるわせつつ、弁解した。
「公儀隠密の予備軍が、待ち伏せていたことだ」
狂四郎は、云いすてて、ふたたび横になった。
順之助は、思いがけぬ曲者（くせもの）の襲撃と、狂四郎の鮮やかな迅業を、目撃させられて、脳

裡が、なかば空白、なかば混乱して、その場へ、茫然たる様子で坐りつくしていた。
「ことわっておく」
狂四郎が、云った。
「わたしは、昨夜、この娘に、一指もふれては居らぬ」
「………………」
「但し、今宵は、お主の目の前で、この娘を抱いてみせる残忍性を、この眠狂四郎は、持ち合せている、と思ってもらってよい。……それを目撃させられたお主に、屈辱に堪えられず、腹を切る勇気が、あるかどうかだ」
「………………」
順之助は、とっさにこたえる言葉がなかった。
志津乃が、黙って、唐紙を閉めた。もはや、順之助には、三度、ひき開ける気力はなかった。

四

志津乃は、順之助が、隣室に居すわっていることに堪え難くなって、悄然として、出て行く物音をきいてから、そっと、狂四郎のわきに、緋の長襦袢いちまいの身を、入れた。

異常な出来事は、志津乃にとって、自分自身抑えようのない強烈な刺戟となって、からだを火照らせていた。

——自分は、この浪人者のものになるように、前世からきめられていたのかも知れない。

そんな意識が、ちらと、脳裡をかすめていた。

狂四郎が、寝返って、こちらを向いてくれぬのが、ふっと、物足りなくさえ感じられた。

その心理のひそやかな推移を、読みとったように、狂四郎が、動かずに云った。

「……これまで、わたしに、かかわりを持った女は、ほとんどのこらず、あわれな最期を、とげた。そなたも、その一人に、加わるかも知れぬ」

——かまいませぬ！

志津乃は、胸の裡でこたえた。

「この無頼の男が、ひとつ牀に寝て、いつまで、欲情を抑えられるか——これを、試してみるのも、そなたのためかも知れぬ」

「わたくしは……」

志津乃は、異様な早鳴りの動悸を、けんめいに、怺えて云った。

「父から申しつけられた使命を、決して……、忘れはいたしませぬ！」

その言葉に対する狂四郎の返辞はなかった。

狂四郎と志津乃が、新庄城下を立ち去った日の朝——。

江戸横山町の小間物屋・吉郎次は、眉目の整った娘三人をつれて、下院内の番所に至っていた。

横目・七草喜久左衛門は、吉郎次のさし出す手形をあらためてから、娘たちを見まわし、

「このうち、誰が、幸せを得るかのう」

と、云った。

「この吉郎次に、おまかせ下さいまし。三人とも、玉の輿とはいかないまでも、つつましい平凡な世帯を持たせるよう、努めてやりましょう」

「たのむぞ」

喜久左衛門は、かるく頭を下げておいて、

「さて、お前が供連れになって、当領内に入った眠狂四郎という浪人者じゃが——」

「三四日前に、立退かれたと、きき及びましたが、黙って、お看のがしになったのでございますか？」

「わしの娘を、押しつけた。隙あらば、寝首をかくように、命じての」

「それァ、万が一の望みもない相談でございますな」
「なるかならぬか、ほかに手段はなかったのでの。……お前に、たのみがある」
「なんでございましょう？　てまえに、できますことなら——」
「江戸まで連れて行かれて、道中の途次、無垢の身ではなくなったが、さりとて、わしが申しつけた任務ははたせず、眠狂四郎にすてられる公算も大きい。その時、娘の気象では、江戸屋敷へは参ることはすまい。そこで、たのみじゃが、お前の力で、一流の料亭の女中にでも、使ってやってもらえまいかの？」
「承知つかまつりました。ご安心下さいまし」
吉郎次は、約束した。
娘三人をともなって、上院内へ向って坂道を登って行き乍ら、吉郎次は、しきりにかぶりを振っていた。
「それにしても、あの横目の老人は、勝目のない博奕を打ったものよ。あのおそろしい旦那に対して、娘に、刺客の役目をつとめさせるなんて、きちがい沙汰だぜ」

しびれ川

一

「可哀そうに、あの娘たちは、江戸へ売られて行くのでございますね」
　羽州街道を南下し、天童、山形を過ぎて、上の山城下から左折し、金山峠を越えて、伊達家仙台領分に入り、桑折宿へ出て、福島城下を通り、陸奥国からいよいよ下野国へ――奥州街道を辿っている眠狂四郎と志津乃の二人連れは、すでに、五十余里、七夜を、寝牀を同じくしていた。
　しかし、その七夜を、狂四郎は、志津乃に背中を向けて睡り、いまだ一指もふれてはいなかった。
　新庄城下の旅籠で、狂四郎は、自分にかかわりを持った女は、ほとんどのこらず、あわれな最期をとげた旨を告げ、
「この無頼の男が、ひとつ牀に寝て、いつまで、欲情を抑えられるか――これを、試してみるのも、そなたのためかも知れぬ」

と、賭をしてみせ、異常な意志の強靭さを示しつづけていたのである。

奥州街道は、磐城国と下野国の境の白坂宿を過ぎて七里余の鍋掛宿手前の地点にさしかかっていた。

江戸までは、まだ、三十数里あった。

狂四郎より常に三四歩おくれて歩いている志津乃は、ここまでの長い道中、自分から話しかけたことはなかった。

狂四郎の後姿には、依然として、志津乃が親しくより添うのを、拒否する冷たさがたたえられていたのである。

いま、志津乃が、つい、思わず狂四郎に話しかけたのは、十数歩さきを道中している女衒にひき連れられた四人の娘たちと、四日前から——仙台道に入った頃から、先になったり、後になったりしていたからである。

売られて行く娘たちは、いずれも十六七で、見目かたちが佳かったし、肌も手も荒れていなかった。極貧の百姓の家の出ではなく、郷士か、または破産した商家の娘ではないか、と想像された。あるいは、ちゃんとした藩士の娘なのかも知れなかった。

「……奥羽の娘は、羽前も羽後も、陸中も陸前も岩代も磐城も——どこの国の娘も、貧しい家からはみんな一人のこらず売られてしまうような気がいたします」

志津乃は、自分でも思わず、高い声になって、その憤りを口にした。

自分の故郷からも、多くの娘が売られて行くのを目撃している志津乃であった。秋田藩でこそ、飢えた者が地獄の餓鬼道に堕(お)ちたという噂(うわさ)はきかなかったが、隣国の南部藩や弘前(ひろさき)藩では、餓死した肉親を喰(た)べたとか、犬などは人肉を食い馴(な)れ、昼日中でも、人に襲いかかっているのが実状である、ということであった。

飢饉(ききん)のおそろしさは、筆舌につくせぬことを、奥羽の人々は、骨の髄まで知らされていた。

志津乃が、奥羽の娘が一人のこらず売られてしまう、と口にしても、あながち誇張のひびきを持たぬのであった。

狂四郎は、志津乃の憤りの言葉に対して、一語も応(こた)えず、歩いて行く。

と――。

越堀宿の立場(たてば)を過ぎて、那珂(なか)川上流の渓谷に架けられた石橋にさしかかったとたん、四人の娘のうち、一人が、流れへ身をおどらせた。

「何をしやがるっ！」

女衒があわてて、岸辺へ駆け降りる場所を物色しようとすると、残りの三人の娘が、一斉に、こちらへ向って、逃げ出して来た。

「てめえら、くそっ！　逃げられると思ってやがるのか！」

凄(すご)い形相になった女衒は、懐中から匕首(あいくち)をひき抜いて、三人を追いかけて来た。

「おたすけをっ！」
娘の一人が、狂四郎の前に土下座して合掌し、あとの二人は、志津乃のうしろへさっとかくれた。
女衒は、奔（はし）り寄ったが、そこは、こういう稼業（かぎょう）をしている男だけあって、これは只（ただ）の浪人者ではないとすばやく看（み）てとり、
「おさむらいさん、身を売った娘が、逃げ出したら、どこの藩のお目付におねげえしても、ちゃんと捕えて下さることになっていて、もし、かばいだてする者がいたら、その者もお縄にして下さることになっているのは、貴方（あなた）さんも先刻ご承知のはずでござんすぜ」
と、腰をひくめ乍（なが）ら、にやにやしてみせた。
「知らんな、そういう下等な馴れ合いは――」
狂四郎は、無表情で、こたえた。
「それじゃ、渡さねえと仰言（おっしゃ）るんで？」
「こういう場面では、男という奴（やつ）は、女にもてる伊達（だて）を気取りたくなる」
「ようござんす。そっちが、そういう料簡（りょうけん）なら、ひとっ走り、芦野（あしの）町へ飛んで行って、ご直参大身（じきさんたいしん）の芦野健蔵様の御番所へ、訴え出やすぜ。あとで、ほぞを噛（か）んでも手おくれになりやすが、かまわねえんですね」
「…………」

狂四郎は、ふところ手のまま、無言であった。
女衒は、狂四郎のわきをすり抜けた。
とみせて、突如、背後から、匕首を突きかけた。
次の瞬間——。
匕首をつかんだその右手の手くびは、狂四郎につかまれていた。のみならず、ぐいと逆にねじりあげられ、骨の折れる音とともに、悲鳴を宙に撒いて、女衒は、悶絶した。

二

越堀宿の立場の休み茶屋に入った狂四郎は、一人床几に腰を下ろし、惘然と焦点のさだまらぬ視線を、往還へ送っていた。
志津乃は、三人の娘とともに、渓流へ身を投じた娘を、救いに行っていた。
やがて——。
志津乃は、娘たちをともなって、茶店の落間に入って来ると、
「あまりの急流で……、あわれなことをいたしました」
と、告げた。
「溺れ死んだ者より、生き残った者たちの身の振りかたが、問題であろう」
狂四郎が、云った。

すると、娘の一人が、
「わたしの母の兄が、宇都宮で、古着商をいとなんで居ります。ひとまず、そこをたよって参ります」
と、こたえた。
たよるあて先があったので、娘たちは、女衒から逃げ出そうとしたのであったろう。
娘たちは、幾重にも礼を述べて、店を出て行った。
「よかった！　せめて、あの三人でも、ささやかな幸せがおとずれてくれれば……」
志津乃が、呟いた時、いちばん年少の娘が、駆けもどって来た。
その胸に、小さな瓢簞を抱きかかえていた。
「おさむらいさま。わたしは、つぶれた酒屋の娘でございます。このひさごのお酒は、父が、さいごにのこしておいたお米でつくりました。……父は、このお酒を造ってから、首をくって、相果てました。……この父の形見のお酒を、召し上って下さりませ」
「………」
狂四郎は、おずおずとさし出された瓢簞を、視たが、黙って、渋茶を足もとへすてて、その湯呑み茶碗をさし出した。
娘は、狂四郎がなみなみとつがれた清酒を、ひと息に飲み干すのを、見とどけてから、
「ありがとう存じました」

と、ふかく頭を下げておいて、去った。

「ほんとに、いじらしい！　幸せになって、くれればよいが……」

志津乃は、おもてへ出て、三人の姿が遠く小さくなるまで、見送っておいて、落間へひきかえして来た。

狂四郎は、板壁に身をよりかけて、目蓋を閉じていた。

「……？」

志津乃は、なんとなくその様子が、ひどく疲れているように見受けられて、眉宇をひそめた。

狂四郎は、かんまんな動作で、右手を懐中に入れた。

「……？」

志津乃は、狂四郎がとり出した一個の香筥へ、不審の眼眸を落した。

「これを、そなたに、渡す。……そなたの父七草喜久左衛門殿が、そなたに、操とひきかえてでも、奪え、と命じた品が、この中にある。……わたしが、久保田城下の新柳町の廓から身請した女郎が、母の形見として所持していた。……その父は、阿仁銀山の鉱山仕法方をつとめた郷士で、自決して相果てたそうな……。自決した謎は、この香筥の中の品が、解いてくれるはず――」

「ど、どうなさいました？」

志津乃は、香筥に目を惹かれるよりも、狂四郎の顔面を瞶めた。ただでさえ蒼白な顔面であったが、それが、さらに、死相でも呈したように、みるみる変色したのである。

「一杯くわされた、ということだ。売られる娘、と思い込まされたのが、こちらの不覚であった」

「えっ?! では、あのひさごの酒は――」

「心地よう、からだをしびれさせて来た」

「なんという、卑怯な!」

「公儀隠密が用いる手段に、卑怯という批判は的はずれだ。……それよりも、この香筥は――、わたしは、本丸老中水野越州の側用人に、渡すつもりであったが、……考えてみれば、わたしにとって、どうでもよいことだ。……そなたは、この香筥を持って、帰国するなり、……出府して、佐竹家の江戸藩邸の家老にさし出すなり……、自分の思い通りに、するが、よい」

「眠さまっ！」

志津乃は、香筥を手渡され乍ら、このような状態になった狂四郎から目的の品をもらったことに、すこしも、よろこびはわかなかった。

それよりも、狂四郎がこのまま、死に至るのか、と思うと、どうしていいかわからぬ悲しみと恐れで、心が疼き、身がふるえた。

「わたしから、早く、はなれることだ」

狂四郎は、目蓋（まぶた）を閉じ乍ら、云った。

「で、でも……」

「隠密どもは、わたしのからだをさぐって、求める品物がないと知ると、一緒に道中して来たそなたが取って、逃げた、と考えるに相違ない。……隠密どもに、発見されると、生命はない。……早く、往（い）け！　途中で、乞食（こじき）女にでも、身装（みなり）を変えるがいい。……さ、早く――」

「でも、貴方様を、このまま見すてておくことは、できませぬ！」

「女に看取（みと）られてこの世を去るような生き方は、して居らぬ。……行けっ！」

さいごの一語は、きびしく、鋭いものだった。

三

孤独にとりのこされた狂四郎は、さらに激しくしびれて来た五体に、鍛えた心気で必死にあらがい乍ら、無想正宗を杖（つえ）にして、よろめき立った。

敵がたは、新庄城下での夜襲を仕損じて以来、ここまでの七日間、一度も、生命を狙（ねら）って来ていなかった。こちらに油断がなかったこともあろうが、対手（あいて）としては、意表を衝（つ）く策略を思案するのに手間どった、といえよう。

身売り娘を使ったとは、こちらの不覚を慙(は)じるより、敵がたの妙策と、ほめてやってよかった。

往還へ出た狂四郎は、視界がぐるぐる廻り、立った大地が大きくゆれるのをおぼえた。

一歩一歩、踏みしめようとするが、宙に浮いているように、泥酔者(でいすいしゃ)の足どりに似た。

それでいて、後方から、しずかに迫って来る者が、公儀隠密だと察知していた。

石橋のなかばまでようやく渡って、欄干に凭(よ)りかかった。

もはや、これ以上、歩くことは不可能であった。かろうじて、佇立(ちょりつ)しているだけであった。

迫り寄った公儀隠密は、三名であった。

狂四郎が動けなくなったと知りつつ、なお要心して、三手にわかれると、じりじりと肉薄して来た。

「さすがの眠狂四郎も、もはや、これまで——進退谷(きわ)まったな！」

正面の敵が、抜き打ちの構えをとって、云った。

「さあ、どうかな」

おのれに呟くように、狂四郎は、ひくくこたえた。

「一命を惜しむお主ではあるまいゆえ、いさぎよく、この場で、相果ててもらうぞ」

「…………」

狂四郎は、薄目をあけて、正面の敵を、視た。
その姿が、二重にも三重にもだぶったばかりか、遠のいたり近づいたりした。
しかし――。
視力が狂っていることなど、いまの狂四郎には、焦躁にならなかった。
狂四郎にとって、唯一の救いは、毒薬は五体をしびれさせ、四肢を動けなくし、視力を狂わせているが、聴覚だけが正常であることとであった。
その耳には、橋の下の那珂川の急流の水音がひびいて来ていた。
その水音をきき乍ら、狂四郎は、再び目蓋を閉じた。
正面の敵は、四肢が動けなくなり、盲目となった木像宛然の者を斬るのに、まるで囚人を試し斬るような、居合の迅業を放つ必要はあるまい、眠狂四郎ともあろう稀有の使い手ならば、あるいは、一度ぐらいは受太刀をするかも知れぬ、と考えて、ゆっくりと抜刀した。公儀隠密といえども、武士であった。この一瞬、この男は、士道の吟味を行う武士に還った。それが、結果として、大きな誤算となった。
「えいっ！」
大上段にふりかぶって、真二つに斬り下げようとした――刹那、狂四郎の痩身は、欄干にのけぞり、重力から解きはなたれたごとく、かるがると宙を一廻転した。
「しまった！」

左右の隠密たちが口走った時、落下した狂四郎のからだは、折から、急流に乗って下って来た小舟に、偶然にも、横たわっていた。

偶然——ではなかった。

狂四郎にのこされていた唯一の正常な聴覚が、那珂川渓谷の急流を矢のごとく下って来ている小舟の存在を、さとっていたのである。

急流の左右は、ずうっとはるか下流まで、断崖(きりぎし)になって居り、疾駆して、小舟を追跡したところで、徒労におわることは、明白であった。

四

——これは、悪夢か？　それとも現実(うつつ)か？

なかばよみがえった意識が、狂四郎をして、おのれに問わせた。

幾度か、生死の世界をさまよって来た男の、特異な目覚めかたであった。

仰臥(ぎょうが)しているおのれの寝顔に、何者かの視線がそそがれ、その眼光によって、意識をよみがえらせられたのである。さらに云えば、その眼光が、尋常一様ではなかったからである。

悪夢がつづいているようでもあり、現実に何者かに凝視されているようでもある幾秒間かがあって、狂四郎は、双眸(そうぼう)をひらいた。

双眸をひらいても、なお、悪夢と現実が明白に判別できなかったのは、この男としては、はじめての経験であった。

毒薬が、まだ感覚知覚をもしばんでいた次第ではなかった。

まぎれもなく、枕もとに坐っている者がいたが、その面貌があまりにも異常に過ぎていたからである。

おのれ自身、異相を有つ狂四郎が、微かな慴怖をおぼえる特異の顔が、そこに在った。

ただならぬ彫りの深さ、双眼の褐色の瞳、巨大な鼻梁、そして、その皮膚は、ただの日焼けた黒さではなかった。

狂四郎は、曾て長崎におもむいて、幾人かのオランダ人に接していたが、ここに坐っている人物は、それらのオランダ人とも全く別種の滄った相貌をそなえていた。

「………？」

じっと狂四郎が瞶めかえすと、対手は、ふっと、微笑してみせた。その微笑に、優しさがあった。

「異端者が、異端者を、助けました」

「…………」

「わたくし、アクエ・アリアスと申します。日本の言葉で云えば、宝瓶宮。三年前、清国広州の夷館——イギリスの貿易商館のことです——の船で、インドへ帰ろうとし

て、暴風雨に遭い、この日本の九十九里浜へ、流れつきました。生きのこったのは、わたくし一人だけでした。……わたくしの父はイギリス人、母親インド人です。……この土地の人たち、わたくしを黒人（くろひと）と呼んでくれています。みんな親切です」

黒い異邦人は、日本語を流暢（りゅうちょう）に使いこなしてみせた。

「………」

「貴方（あなた）も、父上か母上、日本人ではありませんね」

「………」

「わたくし、判（わか）ります。……貴方のような人と親しい友人になるために、那珂川を、奥へ、奥へさかのぼって行ってから、下って来ると、貴方、天から落ちて来ました」

「………」

狂四郎は、対手を仰いでいるうちに、自分以上の異相の表情に、豊かな知性がたくわえられているのを、感じた。また、褐色の双眸には、おそれを知らぬ光があったが、受けとめているうちに、魅力に富んだ美しさをたたえているのを、みとめた。

狂四郎は、身を起した。

「わたしと親しい知己になるために、那珂川をのぼった。と云われたが、お手前は、わたしが、あの橋から落ちるのを予知していた、といわれるのか？」

「わたくしは、宝瓶宮と名のっている男。占星学者です」

「…………」

「貴方は、まちがいなく、スコオピオウ——天蝎宮を上昇宮に持った人です。その瘦せた鋭い、蒼白い、陰翳の深い顔。瞳も暗い。すらりとした長身。……貴方は、不可思議な人格を持っています。無口です。秘密を守って、本心をかくして、決して、人に語らない。敵は、絶対に許さない。……当りましたね？」

「わたしは、お手前が、どうして、わたしと知己になると、予知したか——それが知りたい」

狂四郎は、おのれの性情を的確に云いあてられても、それにはいささかも感動せず、無表情で、その疑念を、問うた。

宝瓶宮黒人と名のる異邦人は、大きくうなずいて、次の間へ立って行った。

元は漁師の小屋であったろう、粗末な二間きりのぼろ家であった。潮騒の音が、すぐ近くからつたわって来ていた。

宝瓶宮が、次の間から持参したのは、手摺れた革張りの一冊の洋書であった。

「これ、エフェメリス——天文暦、というイギリスの本です。これを読むと、わたしの占星の術、ぜんぶ当ります」

「…………」

「わたくし、七日前に、調べました。ユアラナス——天王星と、ドラゴンズ・ヘッド

――竜（りゅう）の頭が、トラインするのを……」

黒い異邦人は、畳へ、人差指で、三角形（トライン）を描いてみせてから、

「天王星（ユアラナス）は、思いがけないことが起る星、竜の頭（ドラゴンズ・ヘッド）は、霊的なむすびつきの星。この二つの星が、トラインすると、突然、ちがった場所で、大変な状態の変化が起って、見知らぬ同士が、親しい友人になります。……わたくしは、それを、こころみに、ためしてみました。当りました」

「…………」

八卦（はっけ）、兆占、易などを、全く信じない狂四郎が、この黒い異邦人の説明を納得するはずはなかった。さらにまた、天文学などに興味を持っていない男である狂四郎が、星占いごときものに真剣に耳を傾ける道理がなかった。

ただ――。

ころび伴天連（バテレン）の子であるおのれが、イギリス人の父親とインド人の母親を持つこの漂流者に、救われたことに、ある種の宿命的結びつきをおぼえるのを、払いのけるわけにはいかなかった。

まだ上半身を起（た）てていると眩暈（めまい）が間歇（かんけつ）的に襲って来たが、それを怺（こら）えつつ、狂四郎は、救われた身の礼儀として、この異邦人が熱心に説く占星学を、きいているふりをしているだけのことだった。

天宮図《ホロスコープ》

一

一昼夜が、過ぎた。

眠狂四郎は、無双窓からそそぎ込む朝陽を、顔に受けて、辰刻《たつのこく》（午前八時）すぎと知り乍《なが》ら、まだ、牀《とこ》に仰臥《ぎょうが》して、高い潮騒の音をきいていた。

囲炉裏をへだてた隣りの牀には、この家のあるじの姿はなかった。

狂四郎は、粗朶《そだ》火の煙ですすけた天井を仰ぎ乍ら、宝瓶宮《アクエ・アリアス》と名のる黒い異邦人が、昨夜、就寝してから、しばらくして、闇《やみ》の中で、こちらへ云《い》いかけた言葉を、思い出した。

「貴方《あなた》は、そう——、いってみれば……、わたくしたちが、まだ天体の中に、発見していない星の下に生れた人のようです。……貴方は、これまで、たくさんの人を殺したでしょう。つまり、あの世——冥府《めいふ》からやって来た人。……かりに、冥府星と名づけましょうか。そんな星の下に生れているようです」

——冥府星か。

狂四郎は、ふっと、微笑した。

——おれに、ふさわしい名の星だな。

狂四郎は、宝瓶宮黒人（ほうへいきゅうくろひと）から、この二日間、占星学というものの講義を、きかされたのであった。

天体には、日下、人間が見つけた惑星（プラネット）が、八つある。ザ・サン（太陽）、ザ・ムーン（月）、マーキュリイ（水星）、ヴィーナス（金星）、マース（火星）、ジュピター（木星）、サターン（土星）、そして五十年ばかり前にあらたに発見されたユアラナス（天王星）と。

これらの惑星の運行と人間の運命は、切っても切れぬ相関関係を持っている。これが、占星の原理である。

「天に記された文字を読みとり、神の意志を人間に伝えるこの学問は、二千五百年前に、つくられました」

宝瓶宮は、語った。

人間が、この世に生れた瞬間、天体がどんな位置にあるか——出生年月日時刻と出生地の緯度と経度に基づいて算出すれば、その人間の一生の運命は、明白となる。

「わたくし、貴方の顔を眺めただけで、だいたいの性格をあてました。貴方の生れた年月日時刻と場所が判れば、貴方が、これまでしたこと、これからすること、みんな当て

られます」
宝瓶宮は、求めた。
狂四郎は、冷やかに、
「わたしは、占いのたぐいは信じて居(お)らぬ。おのが運命については、漠然と予感があり、いずれは、人手にかかって相果てるか、または、野垂れ死するであろう、と思っているが、それだけの予感で、充分なのだ」
と、こたえた。
曾(かつ)て、狂四郎は、司馬遷(しばせん)の『史記』の中に記された天官書という、占星の術を、読んだ記憶があった。本邦に於(おい)ては、陰陽道の大家・安倍晴明が、この天官書を学んで、人事百般は天文に因(よ)らざるは無しと主張したのであった。
きわめて神秘性のつよいその原理について、狂四郎は、いささかの興味も抱かなかったのである。
狂四郎が、そのことを口にすると、宝瓶宮は、うなずいて、
「わたくしも、『史記』の天官書、読みました。いま、ヨーロッパで、占星学の聖書(バイブル)とされているテトラビブロス――なんと訳しますか、『地の書』とでも訳しますか――という二千年前の本と、天官書とは、よく似ています。そう……ふたつとも神秘性、つよすぎます。しかし、わたくしの占星学は、ちがいます。人間の学問です。人間の運命の

成立を判断する学問なのです」
「天文学との相違は？」
狂四郎は、高森観好という天文学者が文化年間に描いた、北極を中心とした〃方円星座之図〃を、観(み)たことがあった。また、長崎通詞(つうじ)志筑忠雄が訳述したケイル原著『暦象新書』にも、目を通したことがあるので、天文物理に関して、おぼろ乍ら、知識を持っていた。
「天文学は、天体の現象の中に方則を見つける学問です。占星学は、天上の異常現象をあつかうのです。……貴方も、たぶん、知っているでしょう。狂人が、いちばん、はげしく狂うのが、満月の夜であることを。ふつうの人でも、満月によって、影響を受けることは、もうヨーロッパの精神病の医師は、みとめています。しかし、医学の理論では、この現象は、説明できない」
「…………」
「そうです。占星学は、信じない人にとっては、ばかばかしい学問です。……そう、二百年前、ケプラーという世界一の天文学者、いました。ケプラーは、数十年間の研究の結果、云いました。占星術は、おろかな娘だが、その娘の娼婦(しょうふ)稼業(かぎょう)で、親の天文学は、やしなわれているのだ、と――」
異常なまでに熱情をこめて、講義した宝瓶宮を、思い泛(うか)べた狂四郎は、

——平田篤胤の国学に比べれば、この異邦人の占星学の方が、はるかに人間の生存意義を考えているのかも知れぬ。
と、胸の裡で独語し乍ら、ようやく、牀からはなれた。

二

おもてへ出て、砂地を踏んで立つと、一片の雲影もなく晴れわたった青空の下に、美しい水平線を引いた大海原は、うららかな春の色をたたえていた。遠浅の浜辺へ打ち寄せて来る白い浪がしらも、なんとなくまどかなうねりの中から生れたやわらかさが、感じられた。
鹿島灘の浜の砂は、砂鉄のように灰色がかっていたが、つい先頃、狂四郎が公儀隠密と決闘した秋田の浜のそれとはちがって、あたたかな触感を、足のうらにつたえた。
見わたす限り、舟影も人影もなかった。ただ、数歩さきにうずくまった異邦人を除いては——。
狂四郎は、そばへ近寄ってみた。
宝瓶宮黒人は、一本の釘で、砂地に、奇妙な図形を描いていた。
真四角の中に、さらに小さな真四角を描き、それを、直線で結んで、幾つかのこまかな三角形をつくり、たくさんの横文字と特殊な記号を書き入れていた。

「………」
　黙って見おろす狂四郎へ、顔をあげた宝瓶宮は、
「これは、ホロスコープというものです。天宮図です。……わたくし、今日の自分の運勢を占ってみました」
「………」
「今日、友人の室に暴行の大凶星の火星が入りました。これはわたくしが親しくなった友人の身に危険がふりかかる星相。これは貴方のことです」
「わたしの一命は、今日に限らず、常に危機の中にある。……死ぬのは、明日ではなく、今日であっても、一向にさしつかえはない」
　宝瓶宮は、その虚無の言葉をきくと、腰を上げて、腰に携げていた革袋の口をあけた。
　とり出したのは、一枚の貨幣であった。
「貴方、これを、ふところに入れて下さい」
　手渡された狂四郎は、眉宇をひそめた。
　偶然にも――。
　それは、隣邦清国の一両銀であった。
　田沢湖畔の古寺の庫裡で、娼妓巴からあずかった佐竹家私鋳のにせ金は、これとそっくりであった。

――この一両銀が、守札の代りをするというのか？

狂四郎には、知己となった異邦人の好意を拒絶する理由はなかった。

「お手前は、あの海の彼方(かなた)の母国へ、帰りたい様子を、すこしもみせぬが、どうしたわけであろうか？」

狂四郎は、水平線へ、視線を送り乍ら、訊(たず)ねた。

「これが、わたくしの運命だから――」

宝瓶宮は、こたえた。

「お手前が、自身の星を占ったら、この日本へ漂着する、と出ていたのか？」

「そうです。わたくしの支配星(ルーラー)は、ユアラナス（天王星）です。わたくしが生れた時刻に地平線に上昇しつつある宮が宝瓶宮で、その支配星が天王星。……大凶星といっても、これは、その人の考えかたで、凶は吉になります。天王星は、博愛、友情、親切、独立、自由、率直、因習にとらわれない、という吉を、たくさん持っています。しかし、独立とか自由とかの吉は、わたくしを、見知らないこの国へ漂着させ、孤立、異常、奇矯、という凶に変えました。……だから、わたくしは、吉も凶も同じだと考えています。わたくしの運命は、わたくしの力では、変えられないのです」

「…………」

「わたくしは、子供の時から、いつも一人でした。物心ついた頃、父も母も亡(な)くなって

いました。インド人の黒い皮膚を受け継いだわたくしは、イギリスの都ロンドンでは、大変軽蔑（けいべつ）されました。お金もありませんでした。わたくしは、七歳の時から、一人で働いて、生きて来ました。しかし、わたくしは、不幸ではありませんでした。人を憎む性格を持っていなかったからです。……わたくしは、機会をつかんで、インドへやって来ました。インドでなら、わたくし、軽蔑されませんから――。わたくしは、イギリス語とインド語と、それから、中国語をしゃべれるように勉強していましたから、すぐに、東インド会社の社員にしてもらい、二千トンの商船アマースト号に乗って、インドのカルカッタへ来ました。それから、清国へ――広州の夷館（えびすやかた）へ来ました。わたくし、広州へ来ると、港脚夫（コンキヤオ）と呼ばれて、インド人としてあつかわれました。……わたくしは、清国を、自分の目で見たかったのです。……そうです、中国（チャイナ）には、三千年のむかしから、立派な易経があったからです。わたくしは、自分が勉強し、研究した占星学と、易経を比べてみたかった。……清国へやって来たおかげで、わたくし、この日本へ流されました。いつも、孤立して、自由に生きなければならない運命だからです。……わたくしは、孤独ですが、こんなに、自由に生きています。すこしも不幸ではありません。イギリスへ帰った方が、むしろ、わたくしは、不自由で、人に軽蔑され、不幸です」

「…………」

狂四郎の脳裡（のうり）には、悟りについて述べた子輿（しよ）の言葉が、思い泛んでいた。

『得者時也、失者順也、安レ時而処レ順、哀楽不レ能レ入也』（生きるべきときに生れ、死すべき道に順うて死す、時と道とは、天の為すところなれば、これに安んじ、これに処すゆえに、哀楽はなし）

この黒い異邦人は、まさしく、子輿と同じ『悟り』を得ているようである。

狂四郎は、黙って、踵をまわして、漁師小屋へもどろうとした。

瞬間――。

狂四郎の全神経が、

――来た！

と、敵の存在を察知するのと、物蔭から、銃声がとどろくのが、同時であった。

「……む！」

臓腑にこたえる激しい衝撃で、狂四郎は、砂地へ、片膝をついた。

三

次の刹那――。

狂四郎は、ぱっとはね起きるや、風の迅さで、敵がひそむ物蔭めがけて、奔った。

対手にとって、弾丸を見事に命中させ、

――仕止めた！

と、狂喜したにもかかわらず、狂四郎が、突如、疾風を起して、向って来たのに、唖(あ)然(ぜん)となった——それが、生命(いのち)取りとなった。

刀を抜き合せるいとまも与えられず、目にもとまらぬ閃光(せんこう)と化した無想正宗を、脳天にあび、肋(あばら)まで、ずうん、と斬(き)り下げられて、朝の陽光に紅(くれない)の虹(にじ)を描いた。

「やはり、貴方、身に危険がありました」

駆け寄った宝瓶宮黒人が、云(い)った。

狂四郎は、片手で、ふところをさぐったが、

「どうやら、わたしは、お手前の占星学による予知能力に、頭を下げなければならぬようだ」

と、その手につまんだ品を、とり出してみせた。

宝瓶宮が、手渡してくれた清国一両銀に、公儀隠密が狙撃(そげき)した弾丸が、食い込んでいたのである。

宝瓶宮は、にこにこして、

「貴方(あなた)は、わたくしが、想像した通り、まだ発見されていない星——冥府星とでも名づけなければならない惑星の下に生れた人です。その星には、きっと、こんな吉があるのでしょう。勇敢、新しい生命の創造、冷静な判断力、強い意志、人間とは思われぬすばらしい第六感の働き、闘争への活力(エネルギー)、そうして不死鳥……」

と、語った。（作者註。この黒い異邦人の予言は、正しかった。この時から約百年後——一九三〇年、米国で、ローウェル博士が海王星の軌道の誤差からこの惑星の存在を予知し、弟子のトンボーが師の推測した正位置にそれを発見して、その星を、冥王星（プルートー）と名づけた。すなわち、支配宮がさそり座である星である）

「わたしは、このような実証をみせられても、なお、まだ、お手前の占星術を、すべて信じようとは思わぬ。はんぶんは、偶然であった、と考えたい」

狂四郎は、云った。

「それで、いいのです。かまいません。貴方は、どんな人にも心を許さないし、自分だけしか信じません。いいのですよ。貴方は、そういう人なのです」

黒い異邦人は、いくどもいくども、大きく深く合点（がてん）してみせた。

「これで、辞去させて頂こう」

狂四郎は、告げた。

「わたしの生命を狙（ねら）っているのは、一人ではない。越堀宿で、襲って来たのは、三人であったし、敵の頭数は、さらに増す、と思われる。これ以上、お手前に、迷惑はかけられぬ」

「わたくし、すこしも迷惑とは思っていません。……でも、わたくし、貴方をひきとめはしません。貴方とわたくしは、親しい友人になったのです。かならず、また、お逢（あ）い

します。その時も、わたくしは、貴方のお役に立つでしょう」
「では……」
一礼して、歩き出した狂四郎は、五六歩はなれて、足を停めると、振りかえった。
「お手前に、金銭の礼は、不要らしい。お礼代りに、わたしの生れた年月日時刻、場所を、お教えしておこう」

四

申刻（午后四時）――。
千代田城から下って、外桜田の上屋敷へ帰って来た本丸老中・水野越前守忠邦は、児小姓に、裃と袴をとらせておいて、座に就くと、
「爺い――、政道に対する庶民の不信と怨嗟は、日本全土に満ちているようだな」
と、云った。
手飼いの目付たちの調査を、聴取して来たのである。
下座に、ちょこんと坐った武部仙十郎は、ひとり言をもらすように云った。
「殿が、天下を改革なさるには、まず御勝手掛におなりなさらねばなりませぬの」
御勝手掛――すなわち、現代の大蔵大臣である。
忠邦が、西丸老中から本丸老中に、昇進したのは、先月であった。

それより一月前に、幕閣内で、威権をほしいままにしていた本丸老中・水野出羽守忠成が、逝っていた。

まず、忠邦の当面の強敵は、千代田城内から姿を消したのである。

忠邦は、出羽守忠成の突然の訃報をきいた瞬間、

――爺いのしわざだな。

と、直感したものだった。

自分が少年の時から側用人として仕えてくれている武部仙十郎が、あるじを本丸老中の座に就けるべく、間者を放って、出羽守忠成を毒殺した。

おそらく、九分九厘まで、そうにちがいない、と忠邦は、思ったが、真相を仙十郎に糺そうとはしなかった。また、仙十郎の方から、真実を打明けるはずもなかった。

出羽守忠成はこの世を去ったが、まだなお、本丸老中には、賢相と名のある大久保忠真がいて、御勝手掛をつとめていた。

大久保忠真の手から、御勝手掛を奪うには、先輩である松平和泉守乗寛、同僚である太田備後守資始、脇坂中務大輔安董、土井大炊頭利位、堀田備中守正篤、真田信濃守幸貫らを、味方にひき入れなければならなかった。

それには、莫大な金が必要であった。もとより隠密裡にばらまく賄賂のためであった。

水野忠邦には、幕閣内に、腹蔵なく語り合える親友がいなかった。そしてまた、下僚

には、先任者出羽守忠成の股肱が、なお、若年寄、側衆、小納戸頭取などの地位を占めていた
しかも——。
十一代将軍家斉は、六十歳を越え乍ら、依然として、忠邦が五年間、親しく補佐した西丸の家慶に、将軍職をゆずる気配をみせてはいなかった。
四十一歳という働き盛りの越前守忠邦は、覇気ありあまっているだけに、あせっていた。
「爺い、金をつくる手段は、まだ、実行に移せぬか？」
「もうしばらく、お待ち下され。殿を必ず、四五年うちに、御勝手掛におつけ申しましょうぞ」
「四五年は、待てぬ！」
忠邦は、苛立たしく云った。
「爺い、お前も、もはや七十の坂を越えて居るのだぞ。あと幾年、生きられると思って居る？」
「左様、今年うちにも、ころりと参るかも知れませぬな」
「ならば、急ごうではないか」
「御意——」

仙十郎は、あるじの精悍（せいかん）な顔を仰ぎ視（み）て、
「場合によっては、非常の方策を用いることも、考えられまするな」
「非常の方策とは？」
「申すもはばかること乍ら、上様が、どうしても、大御所におなりあそばさぬ上は
……」
そこまで云って、仙十郎は、口を閉ざした。
あとは云わなくても、主人に、読めているはずであった。
――十一代将軍をも、毒殺する！
仙十郎のくぼんだまなこは、その冷酷な決意の色を示していた。
忠邦は、口を真一文字にひきむすんだ。
「それは、ならぬ！」
と、拒否しようとはしなかった。
一刻（とき）あまりして、長屋へ下って来た武部仙十郎は、玄関に入ると、取次ぎの者から、
「眠狂四郎殿の代理と申して、若い娘が参って居ります。一応、書院にあげて居ります
が、ご引見なさいますか？」
と、告げられた。

「狂四郎は、女子などを代理として寄越すような男ではないが？」
老人は、ちょっと、不審げに、首をかしげたが、ともかく会ってみることにした。
書院に端座していたのは、美しい顔立ちをしているが、きわめて粗末な身装をした娘であった。
挨拶のしかたで、武家娘と知れた。
「わたくしは、秋田藩佐竹家横目・七草喜久左衛門と申す者のむすめにて、志津乃と申しまする」
「眠狂四郎の代理として、参った由じゃが……？」
「はい。仔細は、くだくだしく申し上げませぬ。わたくしは、父に命じられて、眠狂四郎殿のおいのちを頂戴すべく、国許より同行いたして参りましたなれど、道中いたすうちに、心変りつかまつりました」
「惚れたかの、あの男に――」
「…………」
志津乃は、こたえる代りに、懐中から、一個の香筥をとり出して、
「これを、眠狂四郎殿よりおあずかりいたしました。お受けとり下さりませ」
と、仙十郎の膝の前に、置いた。

両断雪見燈籠（どうろう）

一

旦那（だんな）、お迎えに
猪牙（ちょき）で、セッセ
金八、木更津（きさらづ）
やれこりゃ、どっこい
さっても、
あれわいさのさ、とご到着だあ

昏（く）れがたに、音もなく降って来て、また音もなくあがった雨が、残した深い靄（もや）の中を、金八は、木更津の舟着場へ、一艘（そう）の小舟をすべり込ませた。

空には、半月が、ぼうっとおぼろに霑（うる）んでいた。灌仏会（かんぶつえ）もおわった、更衣（ころもがえ）のこの季節が、いちばん、人の心をゆるませる。

雛市（ひないち）にはじまり、柳桜をこきまぜた花見にうかれた先月は、むしろあわただしく過ぎ

てしまい、迎梅雨のこの十日あまりが、肌にしっとりとまつわりつく心地よいあたたかさに、ぼうっとした気分になるのであった。

金八自身、なんとなく物倦く、浅草の蛇骨長屋でごろごろしているところへ、昨日、早飛脚便がもたらされたのである。

舟で、木更津まで、迎えに来るように、との眠狂四郎の手紙であった。こんなことは、はじめてであったので、いっぺんに惰気をふっとばした金八は、日本橋から、まっすぐに漕いで来たのであった。指定された日時は、明日の明け六つであったが、金八は、この木更津で、夜をあかすことにしたのである。

靄の中を、人影が、駒下駄の音をひびかせて、近づいて来た。

「ちょいと、遊んで行かっし、金八にいさんえ――」

どうやら、金八の歌声をきいていたらしい。

「へっ、夜鷹なんぞに、なれなれしく、名前を呼んでもらうめえぜ」

「あたしの初恋の男が、金八といったんだよ」

「そんな手垢のついた誘い文句は、この木更津では通用するかも知れねえが、どっこい、こちとらのような江戸っ子からは、枕代をせしめることはできねえやな。お門ちげえだぜ。魚くせえ漁師あいての夜鷹が、ちゃきちゃきの江戸の巾――八あにいに声をかけるなんざ――」

「お前さん、九郎判官義経様が、静御前を見そめられたのは、この木更津だったということを知らないのかえ」
「わらわせるな。てめえ、恐れ多くも、静御前のつもりかよう」
「ほども義経、静のかたに、わたしゃ九郎がしてみたい、って……」
「うるせえ！　今夜のおれは、待ち人がちがうんだあ。……さっさと、どっかへ、消えちまやがれ、へちゃむくれめ！」
金八は、夜鷹を追いはらうと、
「さて——と。浮いた浮いたの小舟の中で、ついまろび寝の夢うつつ、なんざあ、乙なものよ」
と、ごろりと寝そべって、手枕した。
どこでも、気軽に、寝ころんで、すぐ睡れるように訓練ができている巾着切であった。
「金八——」
きき馴れた声音で呼ばれて、目が覚めた時には、まだほんの半刻あまりしか睡っていないような気がした。
はね起きてみると、もう、夜はしらじらと明けそめていた。
「旦那っ！」

金八は、常夜燈のわきに、まだ薄闇をのこした冷気の中に、うっそりと立つ黒い姿に、はずんだ声をあげた。

狂四郎は、ゆっくりと、近づき、小舟の艫へ、片足をのせたが、急に、静止して、頭をまわした。

「嗅ぎつける鼻を、よほど修練しているようだ」

「どいつかに尾行されていなさるんで――？」

「江戸へ入る時が、危険ゆえ、お前にここまで迎えに来てもらって、川崎あたりから、東海道をひろえば、敵の裏をかくことになると、思っていたが……、ここで無縁仏にしなければならぬ面々が、いた」

「まさか、あっしが、ドジを踏んで、気づかずに連れて来たんじゃねえでしょうね」

「わたしの親しい者たちを、見張っていたとも考えられる。そういうたぐいの連中なのだ、対手がたは――」

「………」

金八は、ごくりと生唾をのみ込んだ。

狂四郎は、河岸道へもどって、向きなおった。

十数歩のむこうに、四個の影が、横列に佇立していた。

二

二町余はなれた広い草地を、決闘場にえらんで、四名の公儀隠密(おんみつ)と狂四郎が対峙(たいじ)した時、空は明けはなたれる代りに、また夜へ還(かえ)るように暗くなっていた。厚い迎梅雨の雲に覆(おお)われたのである。その雲の中に、雷鳴があった。

公儀隠密たちは、一斉に抜き連れると、下段の構えをとった。

柳生流の極意『月陰(つきかげ)』から採った公儀隠密独特の戦法であった。

『月陰』とは、日月陰陽のうち、月と陰をえらんだ極意の秘技を謂(い)う。

月は、かたちがあって、闇の夜を照らし、陰はかたちなくして暗黒である。そして、月の光があってこそ、陰を見得る。

ちょうど、いまの状態は、月光が地上を照らしている——その暗さとほぼ同じであった。

この暗さでは、敵の形はおぼろに見わけられるものの、その姿はまさに影でしかなかった。すなわち、間合(まあい)を見切るのは、不可能であった。

たよるべき唯一(ゆいいつ)のものは、おのれの揮(ふる)う刀尖(とうせん)である。しんの暗闇ではないゆえに、剣を揮えば、その放つ光をみとめられる。

敵もおのれも、昏(くら)いところをさぐるように、剣を振ってみれば、その光を、敵もおの

れも目当てとして、闘うことができる道理であった。
構えは、当然、下段となり、敵がこちらの向脛を見込んで、斬り込んで来るや、その閃光に合わせて、わが剣の光を映しかえす間髪の迅業を、つづけさまに使う。これを、『月陰』と謂い、一瞬裡に『山陰』という極意の秘技に転化する。
さらに『山陰』は、烈風が海原を吹きまくって、浪をさかまき立てるにたとえた『浦波』の秘術に移るのであった。
この秘剣に対して、狂四郎の円月殺法は一刀流より生れている。
一刀流は、おのれの五体をすすんで、敵陣の刃圏内に容れ、その死地のまっただ中で、表（電光・明車・内流れ・浮身・払捨）と裏（妙剣・絶妙剣・真剣・金翅鳥王剣・独妙剣）の十本の法形を、瞬時に自在無碍に揮う。
秘技から秘術へと移転させつつ攻撃する柳生流とは、全く異なる捨身の業であった。
……狂四郎は、待った。
四名の敵は、五歩の近くに迫るや、さっと四方へ散って、狂四郎を包囲した。
それなりに双方動かず、いくばくかの時間が流れた。
雷鳴が、近づき、凄まじくなった。
狂四郎の円月殺法が、一刀流より生れて、一刀流とちがうところは、自らが先に絶対に仕掛けぬことであった。

そしてまた、この暗さでは、宙に円月を描くのは、無駄であった。

狂四郎は、絵に入ったごとく、地摺り下段の無想正宗をそのまま、微動だにさせなかった。

さらに凄まじい雷鳴が轟き、次の瞬間、稲妻が、その草地を、ぱあっと白昼の明るさにかえした。

四方から隠密が躍りかかり、狂四郎の痩身が翻転した。

そのあとに、立ち残ったのは、狂四郎の幽鬼に似た黒い姿だけであった。

「旦那、こんどは、どこをさまよっていなすったので——？」

凪いで平らかだが、妙に重い水を切って江戸湾内を、漕ぎかえり乍ら、金八は、訊ねた。

狂四郎は、舳先に仰臥していた。その蒼白な顔に、迎梅雨の雲の割れ目から、薄陽が落ちていた。雷鳴は、はるかに、遠のいていた。

「奥羽で、百姓一揆を見て来た」

狂四郎は、目蓋を閉じたまま、ぼそりとこたえた。

「へえ、百姓一揆をねえ。……ご府内でも、旦那が出て行きなすった頃から、飢えた百姓たちが、ぞろぞろ入り込んで来たので、あちらこちらに、お救い小屋が設けられやし

たが……、奥羽の飢饉は、そんなにひどうござんすかい？」
「家も妻子も持たぬわたしのような男に、百姓たちの本当の苦しみは、判らぬが……、なにやら、封建のしくみが、ようやく末期に近づいたことだけは、感じられた」
身に寸鉄も帯びることを許されなかった農民が、一揆を起し、強訴を企てれば、わが身の破滅をまねくことは判りきっていた。にもかかわらず、死にもの狂いで、領主に向って刃向っているのである。
領主がぜいたくをし、奸吏が私腹をこやしているために、その怨みが募って、暴動を起している次第ではなかった。領主も藩庁も、窮乏に困惑し、為すすべもなく立往生していることは、農民たちも、百も承知の上であった。
そこに悲惨があった。
人間は、腹が痛んで、はじめて体内に胃腸があるのを知り、樹木の枝葉が動くのを見て、はじめて空に気流が動くのを知る。
徳川幕府の始祖家康によって『生かさず殺さず』の状態に置かれた農民が、身を以って、支配者に反抗したのは、封建のしくみの腹痛に堪えられなくなったからであり、この社会の空気が激しく変ろうとするのを示しているようであった。
――江戸市民だけは、すくなくとも、表面を眺めた限りでは、腹痛にのたうつ者も居らず、巨樹の枝葉の異常なざわめきにも気がつかず、天下泰平は永遠につづくと思って

いるらしいが……。

「旦那、六郷川へ入りやすか？」

金八が、訊ねた。

「いや、今戸橋から山谷堀へ入ってもらおう。今日は、吉原(なか)ですごす」

「合点！　江戸で、いちばん身の安全な場所は、廓(くるわ)の中だあ。……行くと云われて、その行く猪牙の、足の軽さようれしさよ、と来た」

金八は、艪(ろ)を漕ぐ両手に、力をこめた。

三

同じ日の朝――。

秋田藩佐竹家の上屋敷内にある家老屋敷では、江戸家老・佐竹勘解由(かげゆ)が、留守居役・安岡増造を呼んで、対座していた。

「其許(そこもと)、眠狂四郎という奇妙な仮名を使う浪人者のことを、耳にしたことはあるまいか？」

「いえ、一向に――」

安岡増造は、怪訝(けげん)な面持で、かぶりを振った。

勘解由は、無能な留守居役を、冷たく正視して、

「其許は、お留守居をつとめて何年に相成る？」
「は――、恰度二十年に相成りますが……」
「二十年間、主家の大切な金を、むだ費いしたものだの」
勘解由は、歯に衣をきせずに、云いすてた。勘解由が、江戸家老になったのは、一昨年からであった。
大名の留守居役は、外交官であった。幕府との交渉にあたり、また諸大名相互の打合せもした。
幕府に於て、例えば日光東照宮などの修築、河川工事などの計画がなされた時、留守居役は、いちはやく、探知して、自家がお手伝いを命じられるのをまぬがれるよう、閣老に対して賄賂をつかうとか、他の大名に押しつけるように工作駆引するとか、留守居役にはその才覚が必要であった。
親藩、譜代、外様、それぞれ親睦の組が分れていて、留守居役は、毎日のごとく、寄合をしていた。
その寄合のために、天明年間には、江戸中に、四十数軒の豪奢な御留守居茶屋ができたくらいであった。（尤も、これら御留守居茶屋は、寛政の改革によって、松平定信の手で、とりつぶされたが――）
文化・文政を経て、天保に入った今日、なお、留守居役が、料亭茶屋で費消する遊興

費は、相当なものであった。
　無能な安岡増造が、二十年も、佐竹家の留守居役がつとめられたのは、さいわい、幕府が、奥羽諸藩が、天明の大飢饉以来、台所窮迫しているので、莫大な金のかかる工事普請の手伝いから、除いてくれたおかげであった。
　江戸家老・佐竹勘解由は、この三年間眺めて来た下僚の無能に対する不満の堰を切ったように、
「其許には、昨年はじめから、西国の大名衆の密貿易の実状を、くわしく調査するよう、命じてあったが、本日まで、この勘解由を納得させる報告を、一度もいたして居らぬ」
「申しわけございませぬ。なにぶんにも、密貿易に関しては、各家とも、絶対の秘密を厳守して居りますれば……」
「弁解にはならぬ。……それにつけても、毎日のように遊里に出入して居り乍ら、眠狂四郎という男について、噂も耳にして居らぬとは、よほどのうつけよ」
「その者、いかなる素姓の浪人者でありましょうか？」
「水野越州様の側用人・武部仙十郎という狸爺さんの走狗だ。……わが領内に入り込み、なにやら、当家の秘密の企図の一端を、かぎつけた模様だ」
　勘解由は、数日前、横目・七草喜久左衛門の至急の密書を、国許から受けとっていた。
急遽、勘解由は、奥州街道はじめ、各街道の朱引外（郊外）の付近に、家中の機敏な

士たちを、張り込ませたのであった。

しかし、いまだ、それらしい浪人者は、姿を現わしていなかったのである。

七草喜久左衛門の密書によれば、自分の娘・志津乃を同行させた、とあったが、その娘も、江戸藩邸に、なんの連絡もして来ていなかった。

「この一両日中に、眠狂四郎がどういう男か、至急に調べあげてもらおう。遊里にあっては、その名を知らぬ者はないそうだぞ」

勘解由は、無能な留守居役の顔を眺めているだけで、むなくそがわるくなり、去れ、と手を振った。

安岡増造が、出て行くと、勘解由は、立って、障子戸を開けて、縁側へ出た。

手飼いの間者・郡(こおり)参平が、つくばい脇(わき)に、影のようにうずくまっていた。

「参平――、眠狂四郎と申す男、江戸へ帰って参ったならば、即刻、討たねばならぬ」

「はい」

「但(ただ)し、その方の忍びの術を以ってしても、はたして討ちとれるかどうかだな」

そう云(い)われて、参平の冷たくかわいた顔面に、表情が動いた。

自分に無敵の自信を持たせてくれた上司が、はじめて、わが業(わざ)を侮辱したのである。

勘解由は、元の座に戻ると、

「眠狂四郎と申す男、稀有(けう)の使い手であることを、わが領内で、実証してみせて居る。

……横目の七草喜久左衛門の居合の迅業に就いては、お前もすでに承知いたして居ろう。眠狂四郎は、喜久左衛門の抜きつけの一撃を躱したばかりか、その切先に、一両小判を刺しておいて、入国料だ、とうそぶいた由。また、わが領内に潜入した公儀隠密三人を、いずれも一太刀ずつで、斬り伏せたそうな。……それにひきかえ、わしは、まだ、お前が修行した剣の業も忍びの術も、この目で、見とどけて居らぬ」

四

郡参平は、江戸家老の言葉に対して、ややしばらく、視線を地面に落していたが、顔を伏せたままで、

「この場にて、ご披露つかまつります」

と、告げた。

「うむ」

勘解由は、もとより、それを所望して、この目で見とどけて居らぬ、と云ったのであった。

参平は、顔をあげて、じっと、勘解由を仰ぎ視た。

勘解由が坐っている書院上座と、参平がうずくまるつくばい傍は、縁側をへだてて、およそ四間（約七米）の距離があった。

「…………」
「…………」
おもむろに、参平は、双腕を、平行に、さしのべ、ふたつの掌を、勘解由に向って、立てた。
ものの三秒も経たぬうちに、ふたつの掌が、徐々に色を変じ、燐火のように燃えはじめた。
「……？」
眉宇をひそめて、凝視する勘解由は、突如、その燐火が、真夏の太陽のような炎煬の光を煌めかせるのをあびて、くらくらっと目晦んだ。
一瞬、視界が晦冥となった狼狽で、勘解由は、せわしく、まばたきした。
視力がもどった時、つくばい傍には、もう参平の姿はなかった。
「……む！」
ひくうめいた勘解由の背後――床の間から、
「ご家老様――」
参平の声が、呼んだ。
はっ、となって振りかえった刹那、
「ごめん！」

参平は、床の間から、勘解由の側を、風のごとく駆け抜けて、翼でもあるように、庭へ翔んだ。

のみならず――。

地面へ足をつけぬうちに、名状しがたい奇声をほとばしらせざま、左手につかんでいた脇差を、抜きつけに、雪見燈籠へ、斬りおろした。

勘解由は、雪見燈籠の笠石が、真二つに割れて、左右へ落ちるのを、みとめた。

勘解由を唖然とさせたのは、そればかりではなかった。

参平が、しずかな足どりで、縁側へ上って来て、

「無断にて、お借りいたしました非礼の段、お許しのほどを――」

と、脇差をさし出したのに、勘解由は、はっとなって、おのが腰へ目を移した。

帯していたはずの脇差は、なかった。

いつの間に、参平に、抜き取られたのか、全くおぼえがなかった。

勘解由は、脇差を把りあげて、抜いてみた。笠石を両断しているにもかかわらず、刃こぼれひとつしていなかった。

「ふむ！」

この若者を、十三歳の時、その天稟を看てとり、軽格の家から採って、剣の業と忍びの術を修行させた勘解由であったが、これほどまでに、人間ばなれした手練者に成って

いようとは、想像以上であった。

「鬼神の伎倆を、身につけたの、参平」

「ご過褒、ありがたくうけたまわります」

「その方なら、眠狂四郎に、万が一にも、おくれは取るまい」

「闘ってみなければ、わかりませぬが……」

「参平――」

「はい」

「眠狂四郎を、お前よりさきに、公儀隠密の手に、かからせてはならぬ。あくまで、その方が、自ら、狂四郎を討ち果せ、よいな？」

「かしこまりました」

参平は、平伏した。

「……とはいえ、眠狂四郎の行方をさがしあてるのが、ひと苦労だの」

「ご家老様、その者の捜索の儀は、車善七殿に依頼して、乞人衆の力をかりては如何でございましょうか？」

「それは、妙案だ。……行け」

勘解由は、参平を、浅草はずれの〝乞人溜〟へ趨らせた。

書屋に入った勘解由は、しかし、几に向って坐した時、もうひとつの不安をおぼえて、

宙に双眸（そうぼう）を据えた。

――七草喜久左衛門が、眠狂四郎に同道させた志津乃という娘の身の安否を、まず、気づかわねばならぬのではあるまいか？

当惑刺客

一

眠狂四郎の、吉原に於（お）ける流連（いつづけ）は、もう五日もつづいていた。

酒にも女にもあきた物倦（ものう）い身を、床柱（とこばしら）に凭（もた）せかけながら、狂四郎は、なお、立ち上って廓（くるわ）を出て行く様子をみせていなかった。

金八の方も、流連にはあきたらしく、三日前から、どこかへ出かけて行き、顔をみせていなかった。

狂四郎は、なかば放心した眼眸（まなざし）を、肱掛（ひじか）けの小窓口へならべられた土鉢植えの金盞花（きんせんか）や延命菊へ、投げていた。

これは、敵娼（あいかた）をしりぞけた狂四郎に、店の方で、花魁（おいらん）の代りに、世話がたとしてつけてくれた胡蝶（こちょう）という吉原芸妓（げいぎ）が、はこんで来た花々であった。

廊下に衣（きぬ）ずれの音がして、障子戸が開けられた。胡蝶の両手には、またあらたな土鉢がかかえられていた。

四分咲きのきり、し、ま、躑躅であった。さっき、往還から声のきこえていた荷ない売りの植木屋から、買いもとめたものであった。

「主さんは、花など、すこしも、興味がないようでござんすね？」

胡蝶が、はなやいだ笑顔をつくって、云った。

「わたしは、多くの若い女に、花の盛りの短さを見すぎたようだ」

「ほんに、女の盛りは、短うて……。あだ花にかかる恥なし種ふくべ。蕪村の句にもございます」

そう云われて、狂四郎は、ふと、胡蝶のおっとりとした風情の容姿を視なおした。

当時、江戸の芸妓は、吉原を随一とし、柳橋が、それに次いでいた。

胡蝶の美しさは、いかにも、吉原を代表するものであった。

「お前は、どこから連れて来られた女だ？」

「丹後の宮津でござんす。そこで七歳まで育ちました」

「百姓か？」

「あい。父は、波路村の名主でござんしたが、宮津のご城主松平伯耆守様のあまりの苛酷なご納米のお取り立てに、一揆が起り、各村の大庄屋を、二千人の百姓衆が、襲うて、さんざん打ちこわしたことがござんしたが、父は、その主謀者に押し立てられて、捕えられ、は、り、つ、け、になりました」

狂四郎は、それ以上、悲惨な身の上話を、きく耳を持たなかった。

「旦那、いけねえや！」

金八が、血相変えて、とび込んで来たのは、それから一刻あまり後の、午餉を摂り了えた頃合であった。

片手には、朱色の封書を持っていた。

朱状——という。いつの頃からのならわしか、父兄の敵討とか、武士の意気地、公憤私怨によるもの、または上意討ち、といった果し合いではなく、互いに見知らぬ同士が、その業前の優劣を競うために、決闘を申し込む際、朱で染めた書状を送りつけるようになっていた。

その朱状を、手渡した金八は、舌打ちして、

「ちっとばかり流連が長すぎましたぜ。とうとう、かぎつけやがった。どこかの餓鬼めが、知らねえさむれえにたのまれた、って、大門をくぐろうとするあっしに渡しやがったんでさあ」

狂四郎は、無表情で、一読すると、ふっと薄ら笑い、

「江戸市中で討ち取ろうとすると、公儀隠密も、不意の襲撃策をすてて、堂々と、正面から果し状をつきつけて来る」

と、云った。

「わかりゃしねえや。そいつが、奴らの手かも知れやせんぜ。旦那と対決する野郎を、捨て石にして、物蔭から飛道具をぶっぱなして来るおそれがありまさあ」
「わたしより、お前の方が、よほどうたぐり深いな」
「こう長え交際になりゃ、ひきとめはしませんや。追剝ぎ原へ蛍狩り——それが、旦那の性分なんだから、しようがねえやな」
狂四郎が、やおら、起つと、金八は、
「あっしには、役目はありやせんか？」
と、見上げて、
「たとえば、武部仙十郎の爺様に、何か注進に及ぶとか……？」
「べつに、ない」
狂四郎は、冷たく云いすてた。
出て行きがけに、ふと、気がついたように、身をすくめている胡蝶を、振りかえり、
「お前は、父御が磔刑に遭った最期のさまを、目撃したのか？」
「はい」
「その時の父御の態度は——？」
「わが父乍ら、立派でございました」
うなずいた狂四郎は、

「金八――、生木の燃え立ったのと、百姓の怒り狂ったのほど、手のつけられぬものはない、というが、公儀隠密とわたしの斬り合いなど、この女の父親が自ら求めた修羅とは、雲泥の差がある。この女の父親の死は、後世までの語り草になろうが、闇老の走狗の死など、明日は忘れすてられる」

二

吉原の廓の外は、四方すべて見はるかす田畑であった。

大門を出て、衣紋坂をのぼれば、日本堤が東西へのびて居り、これが唯一の遊客の通い路であった。

西へ往けば、下谷の町へ至り、左折すれば、寛永寺のある上野まで、広い往還は一直線であった。

東へ辿れば、谷中天王寺門前に至り、そこを右折すれば浅草寺であり、まっすぐ進めば、山谷堀を過ぎて、大川（隅田川）に出る。

狂四郎は、西へも東へも――日本堤をひろわず、衣紋坂から、堤を越えて、俗に田中という、稲を植える直前の、左右目路のつづく限りひろがった田の中の細道を、北へひろった。

やがて、田の中にひとかたまりになった元吉町に入った。突き当れば、山谷であった。

ゆっくりと、歩き乍ら、時鳥（ほととぎす）の初声を、空にきいた。

元吉町が切れると、再び田畑になったが、そこに、土塀（どべい）をめぐらした大きな寺院があった。

寛永年間に建立された禅刹（ぜんさつ）で、自覚寺といったが、去年、本堂も方丈も焼けて、山門と鐘楼だけがのこっていた。

その山門をくぐった狂四郎は、朱状を送りつけた敵がたを、境内の中央に見出（みいだ）した。

三名であった。

しずかな足どりで近づいてみると、五日前に木更津の草地で、あの世へ送った四名と全く同じ、目立たぬ風貌（ふうぼう）と衣服の姿を、ならべていた。

「お主たち、わたしが、大門を出るのを待てなかったらしいが、公儀の庭番衆らしからぬ、朱状を送りつけて来たのは、どういうことだ？」

公儀隠密たちは、いずれも、かたく口を真一文字にひきむすんで、こたえなかった。

また、木更津の面々とちがい、包囲の陣形を布（し）こうともしなかった。

「お主がたに、聞いたが野暮か」

その言葉を待っていたように、三名の敵は、その位置を動かず、さっと、抜刀した。

但（ただ）し、いずれも、左手でであり、寸分の上下の差もなく、中段の位（くらい）に、白刃をそろえた。

そして――。

さらに同時に、右手を、肱(ひじ)をやや曲げて、頭上にかざした。

余人は知らず、狂四郎は、そのふしぎな構えを視(み)てとるや、即座に合点(がてん)した。

——そうか！

三名の右手には、手裏剣ならぬ長い針が、かくされているのであった。

無雲流針術(しんじゅつ)、と謂(い)う。

明和初年——七十年ばかり前に、上遠野(かとおの)伊豆という人物が創意工夫した秘術であった。

上遠野伊豆は、仙台伊達(だて)家第六代宗村に仕えた重臣であった。

その祖父掃部(かもん)常秀は、元禄(げんろく)年間、伊達騒動の後を継いだ四代伊達綱村に仕える大番頭であったが、武芸に天賦(てんぷ)の才を有し、幼少期から、当時天下にその剣名を鳴りひびかせていた伊達家兵法師範・松林蝙也斎(へんやさい)永吉について、願立流の剣法、手裏剣術、ならびに抜刀術を学んだが、その奥旨(おうし)を伝授されないうちに、師が歿(ぼっ)したので、自ら手裏剣術を工夫するところがあった。

修行なかばにして、病痾(びょうあ)にかかったので、掃部常秀は、その嫡男(ちゃくなん)の下野(しもつけ)秀実に、おのが遺志を継ぐように命じた。しかし、秀実も、長生できず、後嗣(あとつぎ)の広秀に、自分に代って、一流の手裏剣術を完成するように命じた。

広秀が、すなわち、上遠野伊豆であった。

伊豆は、祖父そして父の念願を為(な)しとげた。尤(もっと)も、手裏剣もさること乍(なが)ら、針術とい

う意外の秘技を編み出したのであった。
鉛玉を根につけた二寸あまりの長さの針を、一本、人差指と中指にはさんで、飛ばすのであった。狙うところは、敵の瞳であった。伊豆は、常に、両の鬢に、四本ずつ、八本をさしていた、という。
伊豆は、主君の下命により、青葉城表御殿の大玄関にある杉戸に描かれた桜の下でいななきつつ棹立った駒の四つ足の爪を撃ったが、二十歩の距離から、長針をつづけさまに飛ばして、すこしも、あやまたなかった。
この上遠野伊豆の針術は、一代きりで、習う者はなく、絶えた、といわれていたが、実は、公儀隠密のあいだに、受け継がれていたのである。
上遠野伊豆が、柳生道場におもむき、ひそかに、伝授したのであった。（柳生道場が、公儀隠密の養成所であったことは、作者は、これまでの『眠狂四郎シリーズ』で幾度も指摘している）
上遠野伊豆は、明和三年には、江戸留守居役を命じられ、父祖から継いだ禄高八百石を、一躍三千石に加増されている。武芸にもすぐれていたが、人格識見も抜きん出た人物であったに相違ない。
そこで、時の老中・田沼主殿頭意次に見込まれて、八代将軍吉宗が享保年間に創始した公儀お庭番と称する隠密に、その針術を授けるように命じられ、かれらに修練させ

たのであった。

狂四郎は、幾年か前、公儀隠密が、上遠野伊豆が創意工夫した針を使う秘術を身につけている、と耳にしたことがあったのである。

三

狂四郎には、かれらが堂々と朱状を突きつけて来た理由が、判った。

上遠野伊豆は、敵を盲目にするために針術を創意工夫し、完成させたが、公儀隠密たちは、さらに、その秘技を応用して、目のみならず、咽喉、心の臓をも刺す修練を積んでいるに相違なかった。

一人は目を、一人は咽喉を、そして、一人は心の臓を狙って、一斉に長針を飛ばして来るであろう。

その三本とも、一瞬裡に、無想正宗で撃ち払うことは、不可能事であった。

どの一本かに、刺されれば、こちらの使う迅業は、半減する。

次の刹那、敵がたは、柳生流極意の必殺剣を、思う存分に揮う――という戦法なのである。

――追剥ぎ原に蛍狩り、か。

狂四郎は、金八の云った里諺を、胸中で呟いて、自嘲した。

おもむろに、両の手を、ふところから出した狂四郎は、しかし、敵がたの構えに対して、無想正宗を抜かなかった。

みじんの狂いもなく、同時に飛来するであろう三本の凶針に対しては、居合の迅業を使うのが、実戦者としての闘いかたであった。

狂四郎は、すくなくとも、二本は、確実に、撃ち落さなければ、この果し合いに敗北することになる。

しかも、その二本は、咽喉と心臓を襲って来たものでなければならなかった。隻眼（せきがん）になるのは、やむを得なかった。隻眼ならば、そのあとの攻撃に対して、五分の勝負ができる、と考えられた。

しかし――。

みじんの相違もなく全く同じ構えをとった三名のうち、どの一人が、目を狙って放って来るか――それは、いかにカンの冴（さ）えた狂四郎にも、予測ができなかった。

これは、一秒の何分の一かで決する決闘であった。

三歩の間隔で横列を布（し）いた敵がたが、放つ凶針の飛来の角度がちがう以上、どの一人が目を狙うか、予測しなければ、無想正宗が二本を撃ち落す確率は、きわめてひくいものになるのであった。

咽喉か、あるいは心臓を刺されれば、この廃寺の境内が、眠狂四郎の生涯を閉じる場

所になろう。

このおそるべき危機の時を迎えて、狂四郎が、この男らしい風格を示したのは、双手を空けてダラリと下げたなり、平然たる無表情を保っていることであった。

迎梅雨の、数日前から降りみ降らずみの灰色の空から、今日はまだ一滴も落してはいなかったが、陽光をさえぎった厚い雨雲は、時刻の推移を消して居り、狂四郎は、敵がたの汐合がきわまるのを察知しがたかった。

おのれからは絶対に斬り込まぬ狂四郎としては、敵がたが凶針を放って来る一刹那を、明確に、察知し、それによって反射神経を働かせて、撃ち落さねばならぬのであったが……。

いわば、こちらにとって、最も不利な条件が、そろっていた。

あるいは、おのれの一人相撲におわるかも知れぬが、狂四郎は、こちらで、勝手に、汐合がきわまるのを、測るよりほかはなかった。

四

——来るぞ！

狂四郎の全神経が、それに備えた——その瞬間であった。

鐘楼の蔭から、異様な唸りをたてて、黒い球状の物体が、対峙する決闘者たちの頭上

を、飛燕が掠めるに似た速度で、飛んだ。飛びつつ、それは、地上めがけて白煙を噴いた。

あっという間に、狂四郎と三名の公儀隠密の姿は、煙幕に包まれた。

その白い闇の中で、隠密たちが凶針を放ち、それに応じて狂四郎が無想正宗をどう使ったか？

白煙がうすれた時、三個の屍骸が、地面に横たわっていた。

「うむ！」

鐘楼の蔭にひそんでいた者が、ひくくうめいた。

それは、佐竹家江戸家老の股肱である郡参平であった。

参平は、佐竹勘解由に命じられた通り、まず、眠狂四郎をして、公儀隠密の手にかかるのをまぬがれさせたのであった。

すすっ、と鐘楼の蔭からすべり出た参平は、狂四郎へ五歩の距離に近づいた。

参平は、三本の凶針が、いずれも、狂四郎の身に突き刺さっているのをみとめた。

耳朶へ一本、襟に一本、そして、袖に一本――。

意外な助勢者の出現に、黙って眉宇をひそめて、視線を据える狂四郎へ、参平は、一礼すると、

「佐竹家家中、郡参平と申す」

と、名のり、
「貴殿が、廓に逗留（とうりゅう）されて居ることは、車善七殿が統（す）べる〝乞人溜（きつじんだめ）〟の乞食（こじき）たちの探索によって、知り、大門外へ出て参られるのを、お待ち申して居りました」
と、云った。
狂四郎の頭脳の廻転は、早かった。
「わたしの懐中にある品を、公儀隠密がたに渡さぬための助勢であったのか？」
「左様でござる。……拙者との一騎討ち、お受け下され」
「あいにくだが、お主の助勢は、わたしの一命を救っただけにとどまった。お主に功をたてさせることにはならなかった」
「と申されると？」
「わたしの懐中には、佐竹領内で取得した品物はない」
「いつわりを申されるな！」
「わたしに助勢したお主は、すでに、この眠狂四郎が、どういう男か、調べがついて居ろう。こういう場合――一命を救ってくれた御仁に対して、わたしは、嘘（うそ）などつかぬ」
「では、その品は、何処（いずこ）かにかくした、と申されるのか？」
「いや」
狂四郎は、かぶりを振り、

「奥州街道の越堀宿で、ここに仆れている者たちの同類に襲われた際、院内から同行した七草喜久左衛門という横目のむすめ志津乃に、手渡した」
「……！?」
「手渡す際、帰国するなり、出府して江戸藩邸の家老にさし出すなり、自分の思い通りにするがよい、と呟いおいたが……、お主が、あの品を所望するところをみると、志津乃は、そのどちらをも、えらばなかったようだ」
「………」
「はっきりしていることは、もうひとつ。志津乃が、若年寄・林肥後守一派が放った公儀隠密たちに、あの品を奪われなかったことだ。わたしがまだ所持していると考えているがゆえに、こうして、襲撃して来て、無縁仏になった面々が、そのことを、証明してくれている」
「………」
「お主がしなければならぬのは、わたしと一騎討ちすることではなく、志津乃の行方をさがしあてることだ」
狂四郎は、ふところ手になると、歩き出そうとした。
「待たれい！」
郡参平は、呼びとめると、

「その品を、志津乃殿に渡されたのは、まことでござるな？　いつわりではござるまいな？」

「疑念ならば、ここで、一騎討ちしても、こちらは、一向にかまわぬが……」

「い、いや。貴殿の申されることを、信じ申す」

参平は、思わず、そうこたえたが、完全に信じたわけではなかった。ただ、この眠狂四郎という浪人者に対して、参平は、生れてはじめて、惹きつけられるふしぎな魅力をおぼえて、つい、そうこたえたのであった。

あとで、佐竹勘解由に報告すれば、激怒の叱咤を蒙ることは、火を見るよりあきらかであった。

しかし、勘解由の前で、面目を失うよりも、この浪人者に魅せられた方を、参平は、えらんでしまったのである。

狂四郎が山門を出て行くのを、見送ったあとで、参平は、にわかに、うろたえた。

「どうしたのだ、わしは？」

自分で自分が、わからなかった。

しばらく、茫然と、その場に立ちつくしていたが、

「わしは、もう、藩邸へもどれぬ」

小声で、呟いていた。

忍び黒人(くろひと)

一

「ふん！　くそ面白うもない！　二十年も、なんの落度もなく留守居役をつとめあげたこのわしを、たかが三年あまり前から、江戸家老になった人物に、外様(とざま)大名が公儀に対して、どのような裏工作をやり、いかなる駆引をやったか——その苦労の十分の一も判(わか)る道理がないものを……、まるで能なし猿呼ばわりするとは、笑止千万も、沙汰(さた)の限りよ」

佐竹家留守居役・安岡増造は、憤懣(ふんまん)やるかたない口調で、吐き出していた。

吐き出し乍(なが)らも、その猿臂(えんび)は、のばされて、かたわらに仰臥(ぎょうが)する緋(ひ)の長襦袢姿(ながじゅばんすがた)の女の、下半身を掩(おお)うた前を、するするとめくっていた。

女は、深川の岡場所にだけしかいない伏玉(ふせだま)であった。辰巳芸妓(たつみげいぎ)とは区別される私娼(ししょう)で、近年にいたって、各藩の江戸留守居役が、大いに利用していた。

伏玉は、歌舞音曲など習得していない、客と枕(まくら)を交わす専門の女であった。日本全土

の飢饉のおかげで、女衒が、各地からえらんで来るだけあって、器量だけは、辰巳芸妓に劣らなかった。

安岡増造は、九十九里浜の漁師の家から売られて来た、すまというこの女を、水揚げして以来、ずうっと、自分専用の持ちものにしていた。

顔立ちは、とびきり佳いというわけではなかったが、浅黒く、弾力のある肌と、のびのびと育った肢体が、大いに気に入っていた。

長襦袢も水色の湯文字も、下肢からすべり落させて、くろぐろと密生した恥毛に、指をからめて、もてあそび乍ら、

「わしが、眠狂四郎などという奇妙な仮名を使う素浪人の噂を耳にしていなかったといって、いったい、それがどうだというのだ。……遊里に出入りする無頼の徒を、いちいち知っていなければ、留守居の役目がつとまらぬ、などとは、きいたこともない」

いまいましく、ののしりつつ、その指頭は、伏玉すまの恥毛の蔭の柔襞をさぐった。

すまは、顔をそ向けて、されるがままになっている。この留守居役の愛撫に応えて、濡れるには程遠い様子であった。

「わしは、こころみに、先程、二軒茶屋で、寄合った鍋島家や黒田家や細川家の留守居がたに、眠狂四郎という素浪人の噂を、耳にしたことがあるか、と訊ねたが、一人として知らなかったではないか」

云いすてておいて、その人差指を、ぐいと、すまの柔襞奥へ、さし入れた。
すまは、嫌悪と痛みで、眉宇をひそめた。
安岡増造が、せっかちに、すまの上へ乗って、膝で下肢をひろげさせた折――。
廊下から、廓で謂う遣手の仲居が、すまを呼んだ。
「おまいさんに、是非、逢いたいという人が、みえているんだけどね」
障子戸越しに、告げた。
「待たせておけ」
安岡増造が、とげのある口調で云った。
「誰ですか、小母さん？」
「おまいさんの故郷の漁師らしいけど、なんだか、雲突くような大男で、笠をかぶっているから、顔はよく判らないけど、なんでも、おまいさんを、子供の時からよく知っているらしい口ぶりだよ。……黒人と云ったけど、たしかに、まっ黒けなおそろしくごつい顔つきをしているよ」
「あ！　あのおひとか……。でも、どうして、この江戸へ出て来たんだろう？……すみません。あたしの部屋で、待たせておいて下さいな」
「あいよ」
仲居が、気軽に承知したのは、人が好いのではなく、訪問者になにかよろこぶ品物を

贈られたからであろう。
すまは、佐竹家の留守居役が、早くことをすませてくれるのを、待った。
安岡増造の背中と腰へ、すまの四肢がからみついたが、早くことをすませる目的でしかなかった。
すまは、安岡増造が、自分の上から降りるのを待って、そそくさと身じまいすると、
「すみません。故郷(くに)で、恩を受けたおひとなものでございますから……」
と、ことわり、部屋を出、急いで階段を降りて行った。
安岡増造は、あくびをしてから、袴(はかま)をつけた。浴衣(ゆかた)に着かえる間も惜しむあわただしい、昼半刻(ひるはんとき)の情事であった。供の者は、料亭「二軒茶屋」の方に待たせてあった。
寛政の改革で、留守居寄合停止令が出され、留守居茶屋のほとんどはつぶれてしまったとはいえ、なお、各藩留守居役の遊興によって、御留守居茶屋の系統を引く、後年のいわゆる会席料理を出す料亭は、大いに繁盛(はんじょう)していた。しかし、天保年度に入ってからは、同じ留守居役といっても、主家の台所の貧富にしたがって、遊興ぶりが、目に見えて差がついていた。
たとえば、薩摩(さつま)藩島津家の留守居役などは、御用人・調所(ずしょ)笑左衛門広郷(ひろさと)という稀代(きたい)の才腕の持主によって、財政をたてなおされたおかげで、以前よりも一層派手な遊興をやっていた。調所笑左衛門は、五百万両に及ぶ借金を、年に二万両ずつ、二百五十年賦(ねんぷ)で

返済するという、破天荒な荒療治をやってのけて、大坂・江戸の大町人を、驚愕狼狽（きょうがくろうばい）させたが、この実行にあたって、大坂屋敷・江戸藩邸の留守居役は、大町人たちを料亭に連日招待して大いに活躍したのである。

それにひきかえ、三年つづきの大飢饉（ききん）に襲われて、領内におびただしい餓死者を出している奥羽各藩の留守居役が、自分だけ、内証豊かな西国大名の留守居役と肩をならべて遊興にふけっているわけにはいかなかった。

佐竹家留守居・安岡増造も、数年前までは、三日に一度は、寄合の盛宴に加わっていたものであったが、いまでは、せいぜい十日に一度、それも、江戸家老・佐竹勘解由の目をぬすんで、こそこそと出かけるあんばいであった。

流連（いつづけ）する、などということは、むかしの夢となり、昼日中、せいぜい、こうして深川岡場所の伏玉を抱く程度にとどめなければならなかったのである。

二

すまは、自分の部屋に入ると、あまりに意外な人物の訪れに、息をはずませて、べったりと坐（すわ）った。

黒い異邦人の巨軀（きょく）は、三畳の小部屋をいっぱいに占拠していた。

宝瓶宮黒人（ほうへいきゅうくろひと）が、すまの故郷である九十九里浜へ、流れ着いた時、これを、介抱し、

かくまったのは、すまの父親嘉六であった。嘉六は、九十九里浜の漁師たちを支配する網元の一人であった。すまは、その時、十七歳であった。

宝瓶宮黒人は、すまの家で、たちまち日本語を修得し、二年後、その家を去って、遠くはなれた鹿島灘のぼろ小屋に移り、孤独なくらしをするようになった。嘉六が、卒中で斃れ、あとには莫大な借金がのこされて、その漁業権は別の網元に奪われたからである。

「すまさん、元気ですか？」

黒人は、にこにこして、訊ねた。

「無茶ですよ、黒人の小父さん！　江戸へ出て来るなんて……」

「江戸に用事ができたのです。すまさんにも逢いたかった」

「捕まっちまいますよ。捕まったら、小石川の切支丹屋敷の牢屋に入れられるんですよ。二度と出て来られやしない」

「大丈夫、大丈夫！　牢屋は、大時化に遭った船の中より、恐ろしくありません。それより、わたくし、江戸で逢う人がいます。……眠狂四郎、という名前の浪人者、すまさん、知りませんか？」

「え?!」

すまは、ついさきほど、佐竹家留守居役の口から、その名前をきかされたばかりであ

った。

「その人、江戸に住んでいるが、家はない、と云っていましたので、どこで尋ねれば、居処が判りますか、とわたくしが訊ねると、吉原の廓か、深川の岡場所あたりを、さがしてくれれば、と云っていました。すまさん、その人を見かけたことがありますか？」

「いいえ――。でも、噂はきいています」

「わたくしは、眠さんに、ぜひ逢って、話さなければなりません。さがす方法ありませんか？」

「……………」

漂着して以来、九十九里浜と鹿島灘から他国へ一歩も出たことのないこの異邦人が、わざわざ江戸へやって来たのは、よほど重大な用件ができたに相違なかった。

「ちょっと、待って下さいな」

すまは、かなという朋輩の部屋を、のぞいた。

酒好きのかなは、一人で、冷酒をちびちび飲み乍ら、所在なげに、役者絵を眺めていた。

「姐さん、あんたのお客に、小気味のいい巾着切がいたでしょう？」

「ああ、金八つぁんかえ」

「いつぞや、一緒にお酒を飲んだ時、金八つぁんが、云ってましたね。女には惚れたこ

とのないおいらが、金八、死ね、と云われたら、いつでも、よろこんで生命を投げ出す先生がいるんだ、って――」

「口ぐせさ。眠狂四郎の旦那(だんな)だろ。去年の春、金八つぁんに連れられて、向島へ花見に行った時、ひきあわされたよ。なんだかうすっ気味わるくて、そばへ近寄れなかった」

「金八つぁんに、眠狂四郎の旦那の居処を、教えてもらえないかしらね？」

「ここ三月ばかり、鼬(いたち)の道切りだからねえ。あの極楽とんびをつかまえるのはひと苦労だよ」

「おねがい！　後生――」

すまは、手を合わせた。

「あたしは、どうしても、眠狂四郎の旦那の居処を知りたいんです。姐さん、力になっておくんなさいな」

「すまちゃんに、そんなに真剣な顔つきで、ものをたのまれたのは、はじめてだよ」

かなは、笑って、茶碗(ちゃわん)を、長火鉢の猫板へ置くと、立ち上った。

「合点、承知之助！　江戸一番の巾着切の頸(くび)に縄をひっかけて、しょっぴいて来てやるから、待っておいでな」

かなは、年期があけてもう一年も経(た)っている身であった。いやな客には首を横に振れたし、外へ出歩くことも自由であった。

かなのつけた見当は、はずれていなかった。

両国のならび茶屋のひとつで、茶汲(ちゃく)み女をからかっている金八の姿を、かなが見つけたのは、それから小半刻(こはんとき)も経っていなかった。

うむを云わさず、袖(そで)をひっぱられて、深川櫓下(やぐらした)へ連れて来られた金八は、とある部屋へ、

「すまちゃん、首尾は上々、ぬすっとを召捕(めしと)って来たよ。煮るなり焼くなり、どうなと勝手に料理をおしな」

と、突き入れられた。

三

「………?!」

何気なく、その部屋へ入ったとたん、金八は、思わず、息を詰め、まばたきを忘れた。

宝瓶宮黒人が、すでに、すまから、この男が、眠狂四郎の唯一(ゆいいつ)の乾分(こぶん)と思いきめている掏摸(すり)であるときかされていて、にこにこして迎えた。

「さあ、坐って下さい。わたくしは、眠狂四郎さんと親しい友人になった者です。……眠さんとわたくしは、身の上、似ています。眠さんは、父上がオランダ人、母上が日本

人。わたくし、父親がイギリス人、母親がインド人。……眠さんもわたくしも、いつも、孤独です」

そう告げられて、金八は、生唾をのみ込んで、ようやく、膝を折った。

「びっくりさせるぜ。いくら、江戸がひろいったって、おめえさんのようなおっそろしい面がまえ躰つきの南蛮人が、こんなところに、平気であがり込んでいるとは、正気(鍾馗)の沙汰とは思えねえや」

「わたくし、ぜひ、眠さんに逢わなければならない用事があります。逢わせて下さい」

「逢わせろ、ったって、旦那は、なにしろ、生命を狙う敵が多すぎるんでね、おめえさんが、敵のまわし者じゃねえ証拠がねえ限り、安受けあいはできねえやな」

「わたくし、敵のまわし者ではない証拠、何も持っていません。ただ、信じてもらうよりほか、ありません」

「どだい、宗旨もねえあっしに、口さきで、信じろ、ったって、へい、さいですかい、とはいかねえや。……いいかね、南蛮さんよ、おめえさんのわきに坐っているその伏玉だって、虫も殺せねえおとなしそうな顔をしてやがるが、一度は気休め、二度は嘘、三度目にだまされる——手練手管を、ちゃんと身につけているんだぜ」

「金八さん、貴方、泥棒でしょう？」

「人ぎきがわりいや。泥棒は盗賊じゃねえか。巾着切は、職人だぜ」

「それを、日本のことわざで、盗人も三分の理、というのですね。一度は気まま、二度はよし、三度目は三分の理で、貴方、他人のふところから金を盗んでいます。人間が生きるための業です。善悪の判断とは別です。だから、貴方、罪の意識がなく、底ぬけにあかるい顔をしています」
「おだてられているんだか、たぶらかそうとされているんだか——伏玉屋で南蛮人から、お説教を、うかがいたてまつろうとは、夢にも思っちゃいなかったぜ」
「盗人のはじまりは虚言から、虚言のはじまりは身持ちから、ということわざもありますね。貴方は、そういう人だから、反対に、他人の嘘も、よく看破れるはずです。……わたくしが、貴方をだまそうとしていないことは、話していれば、判るでしょう」
「判らねえね、皆目、さっぱり、金輪際——」
かぶりを振り乍らも、金八は、この異邦人が、そこいらの間抜けな職人土方よりも、はるかに、自分たち下層庶民の人情の機微にくわしいのに舌を巻くとともに、
——なんだか、この夷人は、眠の旦那とウマが合いそうだぜ。
と、胸の裡で、カンを働かせていた。

四

同じ日、佐竹家上屋敷の家老屋敷では——。

佐竹勘解由が、几（つくえ）に向って、ひと綴（つづ）りの帖（ちょう）をひらいて、記載事項に、筆を加えたり、消したり、朱註を入れたりしていた。

これは、主君にもまだ提出していない極秘の財政収支改革の企画書類のひとつであった。

いま、勘解由が、目を通している数字は、阿仁（あに）金山及び院内銀山の、ここ十年あまりの毎年の産金銀高の比較表であった。

たしかに——。

先般、武部仙十郎が指摘した通り、三年前から、院内銀山だけでも、灰吹銀は二千貫を越えていた。しかし、江戸銀座へ納めたのは、その半分に足りなかった。秋田藩では、金も銀も、幕府にその産出高をかくしたのであった。

そして、その秘密の金銀で、私鋳（しちゅう）貨幣をつくっていたのである。これしか、窮乏の極に達した佐竹家の台所を救うてだてはなかった。

こまかな数字を追って疲れた目をあげて、ひと息ついた勘解由は、

——薩摩でも、調所笑左衛門が、極秘裡（ごくひり）に、御金方を設置して、一分金・二分銀をつくっているのを、わしは、知って居（お）る。私鋳をやっているからこそ、島津の財政は、たてなおされたのだ。

——水野家の狸老爺（たぬきじじい）に、漁夫の利をせしめられてなろうか！

たてきった障子戸の一点を、見据えた。
その時、気配もなく、呼びかけの声もなく、次の間との仕切り襖が、すうっと開かれた。
勘解由が、視線をまわすと、そこに、黒の着流しの浪人者が、彫の深い異相を頭巾で
かくそうともせず、うっそりと立っていた。
「市井無頼の素浪人ゆえ、無断の参上、お許しねがいたい」
「眠狂四郎だな、その方！」
「名のるよりさきに、みとめて下さったおかげで、話がしやすくなった、と申し上げる。
ご家老は、わたしに対して、刺客を一人、さし向けられた。わたしは、その刺客に対し
て、こちらがご領内で入手した品物は、すでに、横目・七草喜久左衛門のむすめ志津乃
に渡した、と伝えておいたが、郡参平なる刺客は、帰って来て、その旨、ご家老に報
告したかどうか、念のために、うかがいたく参上いたした」
「郡参平は、まだ、帰邸いたして居らぬ」
「それならば、こちらが一足さきに参上した甲斐があった、と申すもの。……あるいは、
もう、帰って来て、ご家老の叱責を蒙り、切腹して相果ててでもいたならば、気の毒と
存じ、こちらが、正直に云ったことを、ご家老のお耳に入れておくことにいたした。
……入手した品物は、水野越州の側用人に、どうしても渡さなければならぬ義務を、わ
たしは課せられていたわけではない」

「志津乃に手をつけて、情を催した、と申すのか？」
「いや、まだ抱いて居らぬ、と明言させて頂く。あの娘に手渡したのは、公儀の庭番衆に横奪り(よこど)されたくなかった――ただそれだけのこと」
「郡参平は、お主に、業(わざ)が敗れたのか？」
「いや、わたしの告げたのを信じて、一騎討ちをしなかった」
「なんというおろかなうつけ者が！」
「ご家老が、それ、そのように激怒されるに相違ない、と存じ、郡参平のために、一言釈明に参ったのです。……密偵・刺客の徒は、あくまで非情であるべきだが、あの郡参平という若者は、その非情に欠けていた、と申し上げておく。一騎討ちすれば、あるいは、わたしが敗れていたかも知れぬ。天稟(てんぴん)をそなえ、充分の修行を積んでいる、と看たが、刺客としては不適格な性格を持って生れいることを、ご家老が看て取れなかったのは、お手前もめくらであった、ということに相成る。あながち、郡参平だけを責められぬ、と存ずる」
「…………」
「もし、郡参平が帰って来ても、切腹などを申しつけられぬよう、そのことだけを、忠告申し上げておく」
――参平め、この浪人者の風格に圧倒されたに相違ない。

勘解由自身、虚無の翳の深いその面貌と痩身がただよわせる妖しい雰囲気に、ふっと、誘い込まれそうになっていた。

「では、これにて――」

狂四郎は、勘解由があわてて呼びとめるいとまを与えず、襖を閉めた。

それきり、幽霊のごとく、気配も消し去った。

どれほどの時刻が過ぎたろう。

縁側さきの沓石が、とんとん、と二つ叩かれる合図で、勘解由は、われにかえった。

障子を開けると、郡参平が、そこに、うずくまっていた。覚悟をきめた、蒼褪めた面持で――。

「いま、眠狂四郎が、ここへ参った」

勘解由は、云った。

「えっ？」

参平は、愕然となって、顔をあげた。

「お前に、切腹させぬように、と忠告しにだ」

「ご家老様！」

「討たせにやった敵が、わざわざ、それだけを云いに、忍び込んで参ったのだ。お前を自害させるわけにはいかぬことに相成ったな」

女心抄

一

「……はてさて、さてはて、あの人影は、三日月様かや、むら雲に、かくれてちらりと見えた宵、人目を忍ぶ色頭巾（ずきん）、ひと腰振っていそいそと、来たかくるわの衣紋（えもん）坂、ならぶ柳も五十間、小野の道風（とうふう）じゃあるまいし、かわずに柳を見てかえる、てなわけには参らぬあれが大門（おおもん）で、かむろが迎い待ちかねて、君（きみ）立ちならぶ中ノ町、絵にも及ばぬ全盛は、東（あずま）の色の大港、客待ち舟の呼び仕度、さあさあ、お店へ出て来なんし、身ごしらえすんだなら、はよう早うの鴇母（やりて）の声に、ばらばら降りる梯子段（はしごだん）、その中ほどに足とめて、片手を胸に、片手を櫛（くし）に、乱れそめにし鬢（びん）の髪、どうした縁で、あのひとに、逢（お）うた初手から可愛（かわい）さが、身にしみじみと惚（ほ）れぬいて、こらえがたないなつかしさ、どうぞ今夜も来てたもれ、人目の関の夜衣（よぎ）の中、しっぽり濡（ぬ）れて、泣くわいな」

浅草伝法院の境内を、表門から裏門へ抜けて、広小路へ出ようとしている講釈師・立川談亭の肩を、うしろから、ぽん、と叩いて、

「年甲斐もねえ、奇妙奇天烈な声をはりあげて……、人が見て笑っているぜ、小格子女郎に、師匠ともあろう者が、鼻毛を抜かれて、朝帰りに浮かれている図なんざ、だらしがなさすぎらあ」

金八が、早口にあびせかけて来た。

「それがな、着っ切見い、まあききな。昨夜の敵娼は、初見世でのう、姉女郎に叱られて、泣きじゃくっているところへ行きあわせたと思え」

「それが、つい近頃、吉原でつくられた新手よ。初見世で、姉女郎に泣かされているいじらしさ、とみせかけているのに、おれも、二度ばかり、一杯食わされてら」

「金八！　せっかくの老いらくの夢に、冷水をぶちかけ居って――」

「この世の中に、女の泪ほど、信用おけねえしろものがあるかよう」

「わしを送り出す時も、涙ぐんでいたがのう。わちきを、座頭の妻のようにしないでおくんなまし、とな」

「なんでえ、座頭の妻って？」

「見えぬ姿に、座頭の妻も、斯くや泣く夜の閨の月」

「ちょっ！　耄碌するのも、いい加減にしやがれ。このぶんじゃ、旦那の行方も、知っちゃいめえな」

「なんだ、眠狂四郎をさがしているのか、金八？」

「おっ、旦那のこととなりゃ、まんざら、耄碌してもいねえようだな。……知っているかい、いまの仮寝の宿をよう？」
「これやこの、知るも知らぬも逢(お)う──ていないねえ、近頃とんと」
「置きやがれ」
「なにかい、先生の身のまわりが、また、ざわざわっと──？」
「そうよ、物騒剣呑(けんのん)になって来やがったのは、いつものことだが、妙な野郎が、どうしても逢いてえって、きかねえんだ。まんざら、敵のまわし者じゃなさそうなんだが……、なにしろ、白昼表通りを大手を振って歩ける奴(やつ)じゃねえから、困っちまわあ」
「巾着切(きんちゃくきり)などは、白昼表通りを、大手こそ振らねえが、指とのどを鳴らし乍(なが)ら、平気で歩いて居るがのう」
「まぜっかえすねえ。師匠、いいか、その野郎、只者(ただもの)じゃねえんだぜ」
金八は、声をひそめて、
「親爺(おやじ)がエゲリス人で、お袋が天竺女(てんじくおんな)、という鍾馗(しょうき)のような大入道と来てやがる」
「奥山の見世物小屋で、女相撲と組合せたら、大入りまちがいなしだのう」
「冗談事じゃねえんだ。そいつ、鹿島灘(なだ)の浜辺で、眠狂四郎と親しくなったって、あとを追って江戸へ出て来やがった。星で占ったら、眠狂四郎は、来月あたり、どこか途方もねえ遠方へ出て行くらしいが、大凶も大凶、しかも骨折り損のくたびれ儲(もう)けだから、

ぜひ、逢って忠告してえ——と、こうぬかしやがるんで、しかたがねえから、おいらの蛇骨長屋へ、連れて来ちまったんだ」

「あな面白や！」

談亭が扇子で、自分の額をぴしゃりと叩いた。

「なにを？」

「和漢蘭ことひとつもなかったこの立川談亭も、千里眼、天眼通というしろものだけは、さっぱり見当がつかなかったんだ」

「どうせ、八卦よいよい、犬が西向きゃ尾は東、ってえ大道易者のでたらめと、五十歩百歩と思ったんだが、なにしろ、面つきと図体を見ているうちに、おいら、つい、眠の旦那の身の上を案じたまでのことよ」

「いいや、占星の術というのは、ばかにならんぞ。泗水の亭長から身を起し、三尺の剣を以て天下を取った漢の高祖は、星を占ったおかげで、たった八年間で四百年の王朝のいしずえを築いた、と『史記』に記されているからのう。わが日本にだって、王朝時代には、宿曜道と称される占星術があったて。『源氏物語』にもちゃんと書いてある」

「師匠が会ってみて、まやかし野郎なら、面の皮をひんむいてもらおうじゃねえか」

「面目、憎むべきは、語言もまた味なし——貧乏神なら、ふた言、三言交わせば、看破できるて。一眼二早足、目から入って鼻へ抜ける諸葛亮孔明が再来であるこの脳みそ

の智能(ちのう)ぶりを発揮して、まやかし野郎と談亭が断定したら、この張扇(はりせん)で、読台代りに、そいつの横っ面を張りとばしてくれようわい！」

二

蛇骨長屋の金八のねぐらにいた宝瓶宮黒人(ほうへいきゅうくろひと)の魁偉(かいい)な面貌と体軀(たいく)は、たしかに、談亭をして、きもをつぶさせ、目をそばだたせた。

しかし、対座して四半刻(はんとき)も経たないうちに、談亭は、この夷人(いじん)が、語言もまた味なしの貧乏神どころではなく、また、目食耳視の巧言の徒ではないことを、正直にみとめないわけにはいかなかった。

　黒人は、語った。

「……わたくしは、さむらいを好きではありません。貴方(あなた)がたは、町人ですから、心置きなく、話せます。……わたくしは、三年前——天保二年の夏に、船が難破して、九十九里浜へ流れつきました。けれど、漁師たちは、みんな親切でした。わたくしを、憎んだり、おそれたりした漁師は、一人もいません。人間同士です、心がかよい合わないはずはありません。……貴方がたも、噂(うわさ)をきいているかも知れませんが、わたくしが漂着するずっと以前、文政のはじめの頃から、常陸(ひたち)国の沖あいには、しばしば、イギリス船が現われるようになりました。大洗山の下の海上や、水戸海岸沖

の横磯（よこいそ）や、大津浜や……。水戸浜の漁師たちは、このイギリスの鯨取りの船へ、舟を漕（こ）ぎ寄せて、こちらの品物とあちらの品物を交換して、親しくなりました。そのうちに、水戸の城下や那珂（なか）港の商人たちも、漁師にたのんで、半紙や美濃（みの）紙や木綿や絹反物などを、イギリスの品物と交易するようになりました。これは、人間同士の、自然な取引です。……ところが、水戸藩では、交易した漁師を召捕（めしと）って、牢屋（ろうや）へ入れました。夷狄（いてき）に、神州の土地を、けがさせてはならぬ、と大げさな高札（こうさつ）を立てたりして、打ち払おうと、大さわぎしました。まちがった考えです。漁師たちの方が、ずっと人間らしく、自然な生きかたをしています。……だから、わたくしは、貴方がたが、さむらいではないのが、安心です」

談亭は、先手を打たれたかたちで、

「ですが、さがしておいでの眠狂四郎は、刀を腰にして居りますよ」

「あの人は、さむらいの姿していますが、心は、自由で孤独で、何者にもしばられてはいません。……日本のさむらいのほとんどは、徳川将軍家や大名や、武士道や儒教や武家制度にしばられてしまっています。気の毒です」

金八が、いらいらして、

「じれってえな。おめえさんが、どんな天眼通で、眠狂四郎が大凶の渦の中にまき込まれちまったか、手っとり早く、このおやじにきかせてくんねえな」

と、せかした。

談亭が、あわてて、

「ともかく、その前に、あんたの占星の術を、ひと講義して頂きましょうかね」

と、もとめた。

「占星というのは、二千五百年の歴史を持つ偉大な学問です。ですから、半刻や一刻では、説明できませんが……」

「そこを、ひとつ、てまえら無学者に、ひらったく、教えちゃもらえませんかね」

「そうですね。……星占いというのは、古代バビロニア国で発達しましたが、その術があみ出されたのは、つまり、婦人の、日本で謂(い)う月経が、その名称のように、月の巡る期間と同じであることから、天体の運行と人間の運命とは、ふしぎな因果関係がある、と考えて、研究した結果です。古代バビロニア国を建てたカルデア人は、キリストの生れる七百四十年前から、三百六十年間、一日も休まず天体を観測し続けました」

黒い異邦人は、矢立(やたて)と懐紙をとり出して、黄道（太陽の通路）を、円に描いてみせた。

太陽は、一年で黄道三六〇度をひと巡りする。この円を三〇度ずつ十二に分割し、それぞれの区画の性格を象徴する動物名をその区画（宮(サイン)）の名称として付した。これを黄道獣帯十二宮(ゾーディアック)という。黒人は、その十二宮をさらさらとしたためてみせた。

白羊(おひつじ)宮、金牛(おうし)宮、双児(ふたご)宮、巨蟹(かに)宮、獅子(しし)宮、処女(おとめ)宮、天秤(てんびん)宮、天蠍(さそり)宮、人馬(いて)宮、磨羯(やぎ)

宮、宝瓶宮、双魚宮。

そして、この十二宮を、現在のところ、八つの惑星が支配していると、

『太陽、月、水星、金星、火星、木星、土星、そして、天王星』

と、記入した。（太陽は獅子宮の中に、月は巨蟹宮の中に、水星は双児宮と処女宮の中に、金星は金牛宮と天秤宮の中に、火星は白羊宮と天蝎宮の中に、木星は人馬宮と双魚宮の中に、土星は磨羯宮の中に、天王星は宝瓶宮の中に、おさめた）

人の運命は、誕生した時、八つの惑星が、黄道十二宮のどの宮の何度の位置におさまり、それぞれの惑星同士がどんな角度でお互いに相対しているか、そして誕生時刻に東の地平線に位置する宮の度数を基点として土圭の針とは逆回りに十二の室を作り、その時惑星がどの室に入っていたかによって、正確に判断される。

黒人は、懐中から、天文暦をとり出し、

「わたくしは、これを見て、たとえば、貴方の生れた年月日時刻、そして場所をきけば、貴方のホロスコープ――天宮図をつくります。そうすれば、貴方の一生の運命――過去・現在・未来、明確にあてられます」

と、断言してみせた。

「ふうん！　お前さんは、日本に生れていれば、さしずめ安倍晴明の再来ってえところかねえ」

談亭は、腕を組んだ。
黒人は、つづけた。
「わたくし、日本の歴史のことは、何も知りません。だから、オダ・ノブナガやトヨトミ・ヒデヨシの天宮図(ホロスコープ)を、つくることは、できません」
二人には、興味はないかも知れないが、ヨーロッパの英雄の運命については、いくらでも例がひける、とことわって、次のような逸話をきかせた。
日本の年号でいえば文化十二年——すなわち西暦一八一五年のことである。ヨーロッパを席捲(せっけん)したフランスの独裁者ナポレオン・ボナパルトは、前年、同盟軍に敗れてエルバ島に流されたが、翌年——この年三月、エルバ島を脱出して、フランスの首都パリに入った。
六月、大ナポレオンは、ロシヤ、イギリス、ドイツ、オーストリアの同盟軍を率いるイギリスの名将ウエリントンと、ワーテルローで、興亡の決戦を展開しようとした。
その時、ラクレールという大ナポレオンのお抱え占星学者である老僧正は、皇帝の天宮図を作ってみたところ、
『完敗』
と出たので、大急ぎで、決戦におもむいた大ナポレオンに中止を勧告すべく、そのあとを追った。その夜はひどい暴風雨の夜であった。一方、大ナポレオンもまた、一言老

僧正に星占いの結果を聞こうと、心まちにしていたが、出発の時刻がきたため、一抹の不安を感じ乍ら戦場に赴いたのであった。

しかし、運命を変えることはできなかった。翌朝、昨夜来の暴風雨の中で、最後の生命の力をつかい尽した老いた占星学者の遺骸が、戦場へ通じる泥濘の中に発見された。その手には、大ナポレオンの悲惨な未来を羊皮紙に克明に記した天宮図をしっかりとにぎりしめていた、という。

大ナポレオンは、天宮図通り完敗して、セント・ヘレナへ流されてしまった。

その天宮図は、イギリスへ持ち帰られ、いまでも、首都ロンドンの皇帝の宮殿に保存されてある、という。

三

「わたくしは、眠さんが、公儀の隠密衆に毒を盛られて、あやうく、死にかかったところを助けてあげました」

黒人は、つづけた。

「眠さんは、そのお礼の代りに、自分の生れた年月日時刻と場所を、教えて、去りました。……わたくしは、眠さんの天宮図をつくりました。これです」

一枚の図面を、畳にひろげてみせた。

談亭にも金八にも、ちんぷんかんぷんであった。

「眠さんの姿を眺めて、天蝎宮を上昇宮(アセンダント)に持った人だと、看(み)ました。それから、この人は、いまだ天体に発見されていない星——かりに冥府星(めいふ)とでも名づけましょうか——そんなおそろしい星の下に生れたにちがいないと、考えました」

「…………」

「…………」

談亭と金八は、黙って、耳を傾けている。

「眠さんの星——冥府星は、天蝎宮の支配星(ルーラー)であって、勇敢、新しい生命の創造、冷静な判断、強い意志、人間とは思われないすばらしい第六感の働き、闘争への活力、不死鳥などの吉を持っているのではないかと思われます。けれども、同時に、死、破壊、暴力、非情、残忍、反抗、好色、蔭(かげ)の活躍、冒険する欲望、人を信じない冷酷、犯罪、といった凶もあります。……わたくしは、眠さんの天宮図をつくってみて、吉凶が、みんな的中しているのを確信しました」

「…………」

「眠さんは、不幸な事情で、生れました。少年の頃——そう、十歳の頃、母上を、亡(な)くしてしまい、その時から、全く孤独になりました。しかし、剣を使うのに、人間とは思えない才能が、与えられました。……眠さんは、女性を愛することができません。眠さ

んを愛した女性、みんな不運で、死んでいます。……どうですか？　当っていますか？」

　そう云われて、談亭も金八も、唸（うな）った。

「眠狂四郎のような人、百万人に一人もいません。かぞえきれないほど、人を殺していますね。殺したくないのに、刀で斬（き）っています。そういう運命です」

「で、どうだというんでえ。旦那（だんな）のこれからの成行きは？」

　金八は、首を突き出した。

「これからも、たくさん、人を殺すでしょう。そして、あの人の心の虚（むな）しさ、いよいよ、深くなります」

「おめえさん、眠狂四郎は、途方もねえ遠方へ行くと、予言したぜ。そいつは、どうなんだ？」

「行くでしょう。しかし、行くこと無駄です」

「まさか、その旅路の果てで、先生は、あの世へ行っちまうのじゃござんすまいね？」

　談亭は、訊（たず）ねた。

「あの人は、不死身です。といっても、老人になるまで、生きられる人ではありません」

「まわりくどい云（い）いかたは、止（よ）してもらおうぜ。ともかく、途方もねえ遠方へ行くのを、

止めさせりゃ、いいんだろう。……こん畜生！　旦那は、いま頃、どこで、のうのうと寝そべっていやがるんだろうな」

金八は、居ても立ってもいられぬ気色を示して、爪を噛んだ。

四

その頃、眠狂四郎は、飄然として、水野越前守邸の長屋——武部仙十郎家の書院に、姿を現わしていた。

待たせるまでもなく、老人は、のこのこと入って来て、まず、狂四郎の膝の前に、切餅ふたつ五十両を置いた。

「くされ縁も、こう長くつづくと、お主も知らず知らずに、この老いぼれに対して義務感みたいなものができるものよのう」

「どういうことか、うかがおうか」

「お主が、秋田から同道した娘が、お主に渡された品物を、主家へ持参せずに、当家へとどけ居った」

「あの志津乃という娘が、ご老人——貴方をたずねて来たのか？」

さすがに、狂四郎は、あっけにとられた。

「娘という者は、一度肌身を許すと、平気で主家を裏切る。女心の微妙さを実証いたし

たな」

「わたしは、あの娘を、秋田から連れて来る道中の途次、一度も、抱いては居らぬ」

「ほう……、お主が、生娘の据膳を食わなかったとは、前代未聞の珍事だの。……いや、それだからこそ、あの生娘の心は、お主に傾いたかも知れぬ、とも考えられる。……いずれにしても、わしが、お主にたのんだ役目は、見事にはたしてくれた。礼を申さねば相成らぬ。……礼金五十両では不服かな？」

「………」

狂四郎は、いまさら、娘心の微妙な変化に、不可解さをおぼえた。

こちらは、生命が助からぬ危機に当面して、やむなく、その品物を、志津乃に渡しただけのことであった。当然、志津乃は、国許へ帰るか、江戸へ出て藩邸へさし出すものと考えていたのである。

武部仙十郎を裏切った後ろめたさをおぼえていた矢先であった。

あの娘は、主家と実父にそむいたのである。寝首をかく代りに、逆に味方になってしまったのである。

「それにしても、秋田藩の私鋳金が、一分金や二分銀ではなく、清国の一両銀のにせ金であったとは、この爺いも、夢にも思い及ばなかったわい。これで、佐竹家の江戸家老の首根を押えられる。……お主への礼金は、五十両では安い」

「ご老人、志津乃という娘、去らせたか？」

「なんの、ちゃんと、奥の間に、かくまってある。……ふふふ、お主が、生きのびて、姿を現わすのを、一日千秋の想い（おも）で、待っている模様だのう」

「…………」

「主家と実父にそむいた上からは、たよるべきは、お主ただ一人。……お主、情けをかけてやらねばならぬであろう。……七十余年、女子というものに一度も接したことのないこの爺さんにも、おぼろげ乍（なが）ら、あの娘の心は、推測がつくわさ。わしからも、頭を下げようかの。お主に、情けをかけてやってくれまいか、となし

「…………」

「どうじゃな。お主のことだから、これまで、さんざ、据膳をくらったであろうが、こんどの据膳は、これまでの据膳とは、比べもなるまい。なにせ、主家と父親の命令にそむいて、ひたすら、お主を待ちこがれていたのじゃからのう」

「…………」

狂四郎は、無想正宗を携（さ）げて、すっと起（た）った。

――おれが、あの娘を抱くことは、明日の幸せを約束することにはならぬものを、彼女が知らぬはずはない。だが……。

狂四郎は、奥の一室に入った。

「あ！」

志津乃は、とび立つような喜悦を、からだぜんたいにあふらせた。

「貴方（あなた）様が、きっとおいで下さることを、信じて居りました」

いそいそと、座をすすめた。

「そなたが、わたしのすすめを裏切って、敵であるこの水野家に、あの品をとどけたことを、咎（とが）めはせぬ。……しかし、その礼として、わたしが、そなたをわがものとすることとは、別だと思ってもらおう」

「…………」

志津乃が、みるみる顔色を蒼（あお）ざめさせるのを冷然と眺めて、狂四郎は、言葉を継いだ。

「わたしは、これまで、かぞえきれぬほど、据膳をくらったが、このような奇妙な据膳は、はじめて据えられた」

志津乃は、顔を伏せたが、急に顔をあげて、きっぱりと、

「わたくしは、この肌身を捧（ささ）げるのは、貴方様よりほかはない、と心に誓いました。……たとえ、貴方様に拒否されましょうとも、わたくしは、いつまでも、お待ち申し上げます。貴方様が、そのお気持がいまはなくても、わたくしは、三年でも、五年でも、お待ち申し上げまする」

云いきった。

乞食陣

一

——どういうのだ？

傾いた陽ざしに、横顔を照らされて、往還へ長い影法師を匐わせ乍ら、ゆっくりと歩いて行く眠狂四郎は、いぶかった。

後方を、五十歩ばかり距離を置いて、ぞろぞろと跟いて来る乞食の群れのことであった。

外桜田の大名小路を出た時は、こんなうすぎたない尾行者は、一人もいなかったのである。

ところが、濠に沿うて往くうちに、いつの間にか、二人、三人、五人、七人……と、どこからともなく現われて、乞食たちが、あとを慕って、跟いて来はじめたのである。

そして、その頭数は、次第に増したのであった。

いま——。

筋違御門のむかいの神田花房町を通って、下谷御成道にさしかかっていたが、跟いて来る乞食は、百人近くにふくれあがっていた。

目下の狂四郎の仮の宿は、不忍池に面した池之端仲町にあった。

そこに戻り着くには、広い下谷広小路を過ぎなければならなかった。

――ねぐらに帰るまでには、数倍にも増えそうだな。

狂四郎は、苦笑した。

乞食の群れに、意趣を抱かれるおぼえはなかった。

神田の町家通りに入ると、人の往来は繁くなる。その通行人や、店の者たちは、一様に、狂四郎と乞食の群れを、けげんそうに視くらべている。

跟いて来るにまかせて、ふところ手の黒の着流し姿は、上野の山に入る黒門を彼方にする三つ橋に突き当った。狂四郎と乞食の群れとの距離は、十数歩に縮まっていた。

左折すれば、狂四郎の仮の宿は、つい二町あまりさきにあった。

狂四郎は、わざと三つ橋のひとつを渡った。しかし、黒門はくぐらず、そのてまえを、池畔沿いに道をひろって、茶店のならぶ仁王門前町を通り過ぎ、池にうかんだ不忍弁才天へ通じる地点で、足を停めて、向きなおってみた。

乞食の頭数は、ゆうに二百人を越えていた。かれらの放つ臭気が、むうっと、狂四郎の鼻孔を衝いた。

「お前たち、わたしに、なんの用だ？」
ふところ手のまま、無表情で訊ねた。
すると、群れをかきわけて、一人の男が、姿を現わした。この男だけは、ちゃんとした身装をしていた。年歯は三十なかばであろう、いかにも律義な商人ていで、眉目整った容貌は、穏和そのものであった。
「てまえは、〝乞人溜〟のかしら車善七でございます」
いんぎんな物腰で、名のった。
狂四郎は、先日、焼失した元吉町の禅刹・自覚寺の境内で、佐竹家の刺客郡参平が口にした言葉を、思い出した。
「貴殿が、廓に逗留されて居ることは、車善七殿が統べる乞食たちの探索によって、知り、大門外へ出て参られるのを、お待ち申して居りました」
郡参平は、そう云ったのである。
「お主は、郡参平に代って、この眠狂四郎を、捕えるか、それとも討とうという心算か？」
「なんの――、わしの手下が、百人や二百人、たばになってかかったところで、貴方様に、敵うはずがありませぬ。ごらんの通り、一人として得物など所持しては居りませぬ。……よしや、かかっても、お手前様は、わしら風情の者どもを斬る無想正宗をお持ち合

せではありますまい」
「では、なにが目的で、あとを跟いて来た？」
「娘を一人、お返し頂きたいためでございます」
「………」
「お手前様が、秋田からお連れなさった志津乃という娘でございます。……よもや、行方を知らぬ、とおとぼけにはなりますまい」
「お主とあの娘と、どういうかかわりあいがある、というのだ？」
狂四郎は、訊ねた。
車善七は、こたえる代りに、ひきつれた乞食団を振りかえり、
「出て来なされ」
と、促した。
狂四郎は、その声に応えて、群れの中から進み出た男が、頬かむりした灰色の布を取って、顔をみせるや、
「……？」
いささかあきれて、眉宇をひそめた。
男は、志津乃の許嫁だった等々呂木順之助であった。

二

順之助は、狂四郎を睨みつけて、
「貴様が、志津乃どのを、拙者に返さぬ限り、貴様の往くところ、住むところに、こうして、乞食が、四六時中むらがりたかって、はなれぬぞ！……志津乃どのを、かえせ！」
と、叫んだ。
狂四郎は、順之助と車善七と、並んだ顔を、黙って視くらべた。
車善七は、あくまで、鄭重な態度とおだやかな声音で、
「てまえの先祖車善七郎が、佐竹家の家臣であったことは、お手前様も、おきき及びかと存じます。さらにまた、これも因縁にて、これなる等々呂木順之助の先祖である等々呂木左馬之進は、車善七郎の父丹波守とは、兄弟でありました。と申し上げれば、わしが、この若者に荷担することも、納得頂けましょう」
と、云った。
「成程、お主は、まだ、佐竹家に対して、旧家臣としての奉公をつとめる家訓を、先祖代々受け継いでいるわけか」
「いけませぬかな」

車善七は、微笑してみせた。その目だけは、冷たく光っていた。
狂四郎は、およそ二百数十人の乞食の集団へ、視線を移した。
七十を越えた老人もいたし、十五六の少年もいた。女も、十数人まじっていた。
どの顔へ、目をあてても、こちらを恐怖している色はみじんもなかった。老若男女、いずれも、一様に無表情であった。

かれらは、相対死（心中）をはじめ、痴呆不具の伜を殺したとか、鬼畜のような養父を傷つけたとか、その他の犯科により、一度は、死の決意をし、それを実行して失敗した連中であった。のみならず、人間として、そのどん底から二度と再び、まともな社会へ還れない烙印を捺されているのであった。

いわば、この世に怕いもののない世界に生きているわけであった。これほど強い者たちはいない。

二百年の天下泰平に馴れて、合戦というものを忘れた武士のうち、おそらく、主君のために一命をなげうつ勇気など所有している者は一割も居るまい時世だが、狂四郎の面前にむらがった集団は、かしら車善七の下知があれば、平然として、この眠狂四郎に向って、素手で立ちむかって来るであろう。

その薄気味わるさを、狂四郎は、感じた。
こちらは、斬らねば斬られるゆえ、斬る男なのだ。

ところが、この二百数十人は、一人として、撃ちかかって来る得物を手にしていないのであった。

まさしく——。

腰に落し差した無想正宗は兇刃とはいえ、得物を持たぬかれらを斬る武器ではなかった。

さらにまた、しまつのわるいことは、志津乃は、双方の親同士によって、許嫁の間柄を解消し、志津乃自身、等々呂木順之助をきらっている、と説明しても、それは、こちらの虚言としか受け取られないに相違なかった。

七草喜久左衛門でも、ここへともなわない限り、車善七を納得させることは不可能であろう。

二百数十人の大半は、

——この浪人者によって、等々呂木順之助という若ざむらいは、愛し合っている許嫁の娘との仲を、ひきはなされたのだ！

と、思い込んでいるに相違なかった。

相対死に失敗した者たちにとっては特に、眠狂四郎こそ、この世で最も憎むべき人間であろう。

狂四郎は、等々呂木順之助を正視し、

「志津乃は、目下、老中水野越州の上屋敷内の側用人宅にいる」
と、告げた。
「なにっ⁉　そ、そんな。ばかな！」
順之助は、眦をひきつらせた。
「そ、そのような、苦しまぎれのいつわりを、誰が、信じてたまるものかっ！」
「お主をだましてもはじまらぬ」
「嘘だ！　大嘘だっ！」
順之助は、わめいた。
車善七は、依然として冷静であった。
「お手前様の中されること、まこととすれば、わしらの手のとどかぬところへ、とじ込められたものよ」
「とじこめたのではない。志津乃自身が、すすんで、水野邸へ行ったのだ」
「ようも、ぬけぬけとほざいたなっ！　志津乃どのは、主家や父を裏切る行為をする娘ではないっ！」
順之助は、憤怒のために、全身をふるわせた。
「お主が考えているほど、志津乃は、自分の意志を持たぬ娘ではないようだ」
「な、なにっ！」

順之助は、思わず知らず、懐中にしのばせた脇差を、抜きはなった。
「順之助さん、逆上しては、かえって、こちらが不利になりますよ」
車善七は、問答しているあいだに、眠狂四郎がどんな人物か、看て取ったようであった。
「この御仁の申されていることは、たぶん本当でしょう。……とすれば、これは、順之助さん、貴方一人が躍起になる問題ではない。急いで、ご家老に、お報せしなければなりますまい」
善七が順之助に呍いきかせているのを、きき流して、狂四郎は、しずかな足どりで、その脇を過ぎ、異様な臭気を放つ集団へ向って、まっすぐに進んだ。
乞食たちは、なんとなく、狂四郎の行手を空けた。
二百数十人に視線を集中されつつ、その中を通り抜けて行きかけた狂四郎は、ふと、足を停めると、順之助をかえり視た。
「云い忘れるところであったが、……今日までのところ、志津乃のからだは、まだ、けがされては居らぬ」

三

佐竹勘解由と車善七が、密談場所である吉原の引手茶屋『夕月楼』の離れで、対座し

たのは、その日のうちであった。

善七が、郡参平を通じて、至急にお伝えしなければならぬ大事が起った旨を、願って来たのである。勘解由の方から善七を呼ぶことはあっても、善七の方から願って来ることは、それまでに一度もなかった。

勘解由が、吉原の大門をくぐったのは、暮六つであった。登楼しても、ひいきの花魁を呼ぶゆとりはなかった。

その足で、まっすぐに、裏庭をへだてた離れに入った。

待っていたのは、車善七だけではなかった。

勘解由は、片隅にひかえている若ざむらいを、一瞥して、直感した。国で次席家老をしていた頃、小納戸に等々呂木治兵衛という実直者がいたが、その貌に生きうつしなので、倅だと判り、

――いつぞや、治兵衛が、倅を七草喜久左衛門の娘と許嫁にしているが、倅に武芸の才能がないゆえ、喜久左衛門から、自分の抜刀術をゆずれぬ、と云われて、当惑している、と話して居ったが……、この若者か。

と、内心思い出し乍ら、蒼ざめこわばらせた表情を看なおした。

――小心者らしい。

勘解由は、この若者が上司の許可も得ずに、志津乃のあとを追って、国許から出奔し

て来たに相違ない、と推断した。
「善七、大事出来、とは何かな？」
勘解由は、訊ねた。
「てまえ、これに居りますご当家小納戸、等々呂木治兵衛の嫡男順之助に嘆願されまして、例の眠狂四郎なる浪人者をさがし出し、江戸へ同道した七草喜久左衛門殿の娘を返してもらいたい、と迫りましたところ、狂四郎が申すには、志津乃は、自らすすんで、ご老中水野越前守様のお屋敷に入ったと返辞をいたしました」
「…………」
勘解由の驚愕は、わずかに、こめかみの痙攣に示された。
瞶める順之助には、江戸家老が表情も変えず、平然としているのが、なんとも不審であった。衝撃の大きさゆえに、逆におもてへ現わさない、という勘解由の肚の据え様は、順之助などの理解の外にあった。
——ご家老も、この自分と同じく、眠狂四郎は嘘をついた、とお考えなのだ。
順之助は、あさはかにそう解釈して、
「ご家老様、志津乃が、水野邸に入ったとは、とうてい信じられませぬ！」
と、口をはさんだ。
勘解由は、順之助へは目もくれず、

「善七、眠狂四郎と申す男をどう看た？」
と、意見をもとめた。
先夜、藩邸内の家老屋敷へ、音もなく忍び込んで来て、刺客として失敗した郡参平を切腹させせないように、と忠告しておいて、また音もなく立去った狂四郎の異相とその態度を、勘解由は、まざまざと、思い出していた。
「水のように、かたちを持たぬ人物と看ました」
善七は、こたえた。
勘解由は、善七の観察が、自分と全く一致している、とうなずいた。
「あの男、わしの許へ、潜入して来居（きお）ったが、その時、志津乃の行方に就いては、一言も口にしなかった。当人自身、まだ、志津乃が、水野邸へ入ったことを知らなかったのであろう。もし、知っていれば、自分に対して郡参平を刺客にすることは、もはや無駄だ、と申したであろう。……あの男が、ご老中の側用人の走狗（そうく）ではないことは、まことらしい」
「てまえも、あのような、おそれを知らぬ不敵な人物には、はじめて出会いました」
「どうだな、善七。あの男と、一緒に三日もすごせば、女は、知らず知らずのうちに、惹（ひ）き寄せられてしまうのではあるまいか。生娘であろうと、莫連（ばくれん）であろうと――」
「あるいは、そうかとも考えられます」

勘解由と善七の問答をきいているうちに、順之助の顔面は、屈辱でまっ赤になった。

「七草喜久左衛門が、わが娘を狂四郎に同道させたのは、たしかに、奇手であったが、娘心の機微にまで思い及ばなかったのは、うかつであった。……志津乃は、おのが身を生贄にする代りに、男を恋い慕うことを知った」

「ご家老様っ！」

順之助が、われを忘れて、絶叫した。

とたん、

「たわけ！」

勘解由の一喝が、順之助の面てへあびせられた。

「その方は、おそらく、眠狂四郎が志津乃をともなった道中の途次、逆上して行手をさえぎり、ぶざまな姿をさらしたのであろう。そのことも、志津乃をして、狂四郎へ心を傾けさせる一因となったであろう。おのれの軽率な振舞いが、もしかすればお家を苦境に追い込むかも知れぬ、といささかでも思慮をめぐらしたか？……この吉原の女郎にでも、女心というものを、きくがよい」

勘解由は、差料を把って立ち上り乍ら、そう云いすてた。

四

三更（午前零時）すぎ——。
佐竹勘解由は、外桜田の本丸老中邸長屋の側用人役宅の書院に、坐（すわ）っていた。
武部仙十郎は、挨拶（あいさつ）がすむと、例によって身を二つ折りにして、頬を皺掌（しわて）ではさみ乍ら、
「今夜あたり、参られるのではあるまいかと存じて居り申した」
と、云った。
「わが藩の横目の娘が、お世話になっていると、きき及びましたゆえ——」
「左様、左様、ふらふらと、迷い込んで参り申したわ。秋田美人と申すが、成程、上々の器量でござるの」
「何を所持いたして居ったか、お見せ頂けましょうか？」
「ごらん頂こうかな」
仙十郎は、懐中から、無造作にとり出した一枚の貨幣を、畳の上に置いた。
「…………」
勘解由の双眼が、光った。
「これは、清（しん）国の一両銀でござるな。佐竹家では、つくるにことかいて、江戸銀座の一分金や二分銀のにせものではなく、清国の一両銀を私鋳（しちゅう）されて居る」
「…………」

「これで、どうやら、佐竹家が窮乏の財政を、どのような手段で、きり抜けようとされているか、はっきりと見当が、つき申した。……これは、ご貴殿が千思万慮された挙句の企図でござろうかな？」

「………」

「ご公儀は、ここ十数年間、未曾有（みぞう）の貨幣濫鋳（らんちゅう）をされて居るが、これは、鉱山の金銀を多量に産出させての改鋳ではなく、もっぱら、古金銀の引替にたよってのこと。文字通り、悪貨は良貨を駆逐し、金（かね）というものに対して、いたずらに、世間の不信感をまねく結果となって居り申す。……歴代のご老中のうち、国内産出の金銀だけでは、とうてい大いなる経済政策をとれぬ、と考えて、金銀を諸外国より輸入されたのは、一人、田沼意次（おきつぐ）殿のみでござったが、田沼殿が失脚されてからは、たちまち、悪貨の発行により、物価は異常騰貴（とうき）をまねき申したな」

「………」

「文政小判や一分判、一朱判、文政銀、文政南鐐（なんりょう）など、長崎貿易をしようにも、あまりの粗悪ゆえに、諸外国では、洟（はな）もひっかけてはくれ申さぬ。……それにひきかえ、このにせの清国一両銀は、まことに良質でござるの。阿仁（あに）と院内の両山を持っていなければできぬしわざでござる」

仙十郎は、それを掌（てのひら）にのせて、もてあそび乍ら、言葉を継いだ。

「ご貴殿は、おそらくは、このにせ一両銀で、清国から、毎年、米を密輸入しようと企てて居られる。……もとより、ただでさえ、不足している銀をわが国から持ち出すのでござるゆえ、みかえりとして密航の船には、秋田の名産物をびっしり積み込んで、清国へおもむき、これを売って、むこうのほんものの金銀の貨幣を入手される、という二兎（にと）を追って、二兎を獲（え）ようとされて居る」

「………」

当時、鎖国日本が、オランダ以外で、幕府公許のもとに交易していたのは、清国であった。しかし、その窓口は、長崎会所だけであり、渡航して来た清国商人は、唐人屋敷に入れられ、自由な外出は禁じられていた。各藩が、清国と貿易しようとすれば、長崎会所を通さなければならなかったのである。

「大むかし、わが国と明国（みん）の交易は、こちらは金と銀が最大の輸出品であったそうなが、まるで夢のような話でござるて。……さて、話を元にもどしてのご相談じゃが、如何（いかが）でござろうな、ご当家の密貿易を、わがあるじ水野越前守は、見て見ぬふりをつかまつる。されば、その利益は、折半といたしたい。曲げて、ご承諾下され」

仙十郎は、首をあげて、くぼんだ眼窩（がんか）の底から、佐竹勘解由を、じいっと、視（み）まもった。

現代の表現をかりれば、勘解由は、武部仙十郎に、エースのカードを三枚も取られた

のである。

——利益折半とは、なんという虫のいい要求か！

勘解由は、はらわたが煮える思いであった。

無能用心棒

一

けたたましい犬のじゃれ合う吠え声で、眠狂四郎のねむりは破られた。
不忍池に面した池之端仲町の、狂四郎がえらんだ二十軒店の端の家は、いま狂四郎が寝ている二階が四畳半一間、階下が六畳と三畳の二間、それに文字通り猫の額の小庭がついていたが、犬が六匹、猫が七匹、そして、四十雀が十数羽、飼われていた。
あるじの仙太は、左官のいい腕を持っているが、飲む、博つ、買うの三拍子がそろっていて、よくいえば名人気質、わるくいえば偏屈であった。そのために、つぎつぎと贔屓を失ったばかりか、女房にまで逃げられていた。
家には三日に一度ぐらいしか、帰らなかった。どこかで飲んだくれてぶっ倒れているか、貧乏旗本の屋敷内の賭場にとぐろをまいているか、それとも、馴染の夜鷹のねぐらで流連しているか——いずれにしても、居候するにはおあつらえ向きの家であった。
まだ、隣近所の人情が厚い時世であったので、仙太が戻ってこないあいだは、二十軒

店のどの家かの嬶連中(かかあ)が、犬猫と四十雀の面倒をみてくれていた。

それにしても、狭い家に、飼っている生きものが多すぎた。

さいわいに、犬も猫も、本能でかぎわけて、狂四郎には、近づこうとはしなかったが……。

狂四郎が、階下へ降りると、朝餉(あさげ)の膳部(ぜんぶ)に、白い布巾(ふきん)がかぶせてあった。隣家の婆(ばあ)さんが、仙太にたのまれて、仕度をしておいてくれたのである。仙太のしつけがいいのか、狂四郎をおそれてか、猫に荒されたことは、一度もなかった。

尤(もっと)も——。

狂四郎は、朝から飯というしろものは、一粒も口にしない男であった。

長火鉢で燗(かん)をつけた銚子(ちょうし)を一本、空にした折であった。

あわただしく、格子戸(こうしど)がひき開けられ、そこへ花をまいたように、一人の女がとび込んで来た。

「………?」

それは、先日まで狂四郎が吉原で流連(いつづけ)た時に、花魁(おいらん)の代りに身の世話かたをつとめてくれた胡蝶(こちょう)という吉原芸妓(げいぎ)であった。

胡蝶は、客を対手(あいて)にしている時の派手なお座敷着姿で、金盞花(きんせんか)の土鉢だけを、胸にかかえていた。

胡蝶は、三畳間へ上ると、土鉢をわきに置いて、平伏した。
「主さん、許してくださいまし！……あたしは、吉原から逃げ出して参じました」
「……………」
狂四郎は、自覚寺の廃墟で、公儀隠密三名を斬り、助勢してくれた郡参平と別れたあと、再び、吉原へひきかえし、一夜をすごしていた。
その夜、はじめて、狂四郎は、胡蝶を抱いていた。
胡蝶と別れぎわに、住居をきかれて、何気なく、この家を教えておいたのであった。
但し、吉原から逃げ出させるつもりなど、全くなく、また、次に吉原へ行っても、べつだん、この芸妓に世話をしてもらう気もなかった。
胡蝶が、芸妓にしては珍しく、つつみかくさずに過去（父親がはりつけにされたこと）を打明けたので、こちらも、正直に、居候するあて先を教えたまでであった。
「お願い申します。どうぞ、かくまってくださいまし！」
胡蝶は、両手を合わせた。
女郎と同様、多額の借金で身をしばられた芸妓が、吉原から脱走するのは、生命がけの冒険であった。駕籠舁きを、所持していた有金で、買収したに相違なかった。
「お前は、吉原の芸妓にされて来て、どれくらいになる？」
「十七の秋から、二年になります」

「それでは、お前を乗せて、ここまで送りとどけた駕籠舁きどもが、煮ても焼いても食えぬ小悪党であることまでは、通じて居るまい」
「え？」
「雲助どもは、お前をここへ運んでおいて、早速、吉原の地廻りに、報せたろう」
「ええっ？　そ、そんな――」
胡蝶の顔が、みじめに歪んだ。
「そういう例を、わたしは、いくども見ている」
「主さん！」
胡蝶は、がっくりとなって、泪を畳へしたたらせた。

二

狂四郎の推測は、的中した。
ものの一刻も過ぎないうちに、格子戸が、がらりと開けられた。
「へい、ごめんなすって――」
狂四郎とは顔見知りの、弥次郎という地廻りのやくざが、姿をみせた。
「旦那！　眠狂四郎ともあろう旦那が、野暮なまねをなせえやすね。こちらに、花扇屋の胡蝶という芸妓が、うかがって居りやすね？」

胡蝶は、小庭へとび降りると、じゃれつく六匹の犬のなかに、しゃがんで、息をひそめている。
「来て居る」
狂四郎は、かくさなかった。
「来て居るって、人を食った言い草をなせえやすね。吉原へ連れて来て芸事を仕込んでまだ三年にならねえ芸妓を、逃げ出させせちゃ、旦那、こん後、大門をくぐって頂くわけには参（めえ）りませんぜ」
「そうであろうな」
「他人事（ひとごと）みてえに、云（い）わねえでもらいてえや。……あっしは、逃げ出した女郎や芸妓を、是が非でも、つれもどさなけりゃならねえ。それが、あっしの商売（つとめ）でござんすからね。ところが、あっしのような三下奴（さんしたやっこ）が、眠狂四郎の旦那に、とうてい歯の立つわけがねえ。しかたがねえから、一人、どうやら、旦那と四つに組むことができそうな用心棒をたのみやしたぜ」
弥次郎は、おもてに立っている者を、呼んだ。
額と頬に凄（すさ）まじい刀痕（かたなきず）をとどめているばかりか、左の肩から袖（そで）がダラリと垂れている隻腕（せきわん）の浪人者が、のそりと入って来た。女子供は、一瞥（いちべつ）しただけで、気遠（けどお）くなりそうな、たったいま墓の下から現われた、といっても誇張ではない、亡霊宛然（さながら）の、これ以上

の醜貌はないといっていい人物であった。
「時雨左馬之助と仰言る御仁なんで、へい」
どうせ、眠狂四郎と同様、仮名に相違ない。
狂四郎は、無表情で、時雨左馬之助を、眺めた。
不意に――。
時雨左馬之助の隻腕が、袖をひらめかして、躍った。
一本の手裏剣が、三畳と六畳の空間を飛んで、縁側にならべてある四十雀の鳥籠のひとつへ、吸い込まれた。
一羽が、とまり木からころりと落ちた。四十雀は、じっとしていたわけではなかった。籠の中をせっせと、せわしく移っていて、ひょいと、とまり木にとまった瞬間を、狙われたのであった。
弥次郎が、にやにやし乍ら、云った。
「ごらんの通りの腕前でさ。時雨左馬之助さんは、お気の毒に、唖でござんすがね、手裏剣撃ちにかけちゃ、日本一と云ってもはばからねえ腕前を持っていなさるんでさあ」
「そうだな。わたしの剣も、この御仁の前では、敵ではないようだ」
狂四郎は、微笑して、こたえた。
「そいじゃ、胡蝶を、おとなしく、返して頂けるんで――？」

「さて、どうするかな。窮鳥が、ふところへ入って来た。みすみす、焼いて食おうとする別の猟師に渡すわけにも参らぬようだ」
「なんだと？」
「見た通り、この家には、犬やら猫やら小鳥やらが、うんざりするほど、飼ってある。近所隣に、一年中厄介ばかりかけているわけにも参るまい。……この女は、金盞花ひとつをかかえて、逃げ出して来たほどだから、心根は優しかろう。犬や猫や小鳥の世話には、うってつけのようだ。……ひとつ、借金を払ってやるか」
「冗談じゃねえ。身請をするには、百五十両も要りやすぜ。そんな大金を、旦那は、お持ちでござんすかい？」
「いまは、ない」
「ふざけちゃいけねえや。百五十両の大金が、旦那に調達できるわけがねえ」
「ないこともない」
「本当ですかい？」
弥次郎は、猜疑の目つきになった。
「今宵まで待ってもらおう」
そんな言葉を、弥次郎が、信用する道理がなかった。
弥次郎が、何か云おうとした――その時であった。

急に、時雨左馬之助が、異様な呻きをもらして、片手で咽喉をかきむしるようにして、上り框へ倒れかかり、全身を激しく痙攣させた。
狂四郎は、左馬之助の双眸が、みるみる虚ろに散瞳するのをみとめた。
――この男、阿片中毒にかかって居る。
狂四郎は、曾て、長崎に在った頃、これと同じ禁断症状を呈した男を眺めたことがあった。
「弥次郎――」
狂四郎は、狼狽する地廻りへ、云った。
「手裏剣の達人も、このぶんでは、二三日は、用人棒としての役には立たぬだろう」
「ちぇっ！　とんだところで、ひっくりけえりやがった！」
「胡蝶をとりかえすのは、今宵まで、待たねばならなくなったな、弥次郎」
「旦那、本当に今夜中に、百五十両調達できるんですかい？」
「かるがるしく、確信がある、とは云わぬ。お前の方は、わたしを負けさせる切札を失ったのだから、胡蝶をとりかえせるかどうか――この勝負、五分と五分だな」
「そう云われりゃ、その通りなんだが……」
弥次郎は、小庭で六匹の犬にまとわりつかれている胡蝶を、のびあがって、視やった。
狂四郎は、無想正宗を、把って、立ち上った。

「旦那、あっしに、今夜中、ここで待っていろ、と仰言（おっしゃ）るんですかい？」
「お前は、用心棒をたのんだ責任上、この禁断症状を呈している手裏剣の達人を、住処（すみか）までかついで行って、阿片煙管（ぎせる）をくわえさせてやらねばなるまい」
「だって、そのあいだに、あの女が、どこかへ逃げちまったら……？」
「吉原芸妓とひと目で判（わか）るあの身装（みなり）で、何処（どこ）へ逃げられる。それに、雲助どもを買収するために有金をはたいて居ろう。一文なしの上に、江戸の西東も判らぬくるわ芸妓に、かくれ場所が、ほかにあるか」
「ご尤（もっと）もで――」
弥次郎は、つい、ぺこりと頭を下げてしまった。
この地廻りのやくざも、狂四郎を他の食いつめた浪人者と同一視はしていなかった。
狂四郎は、三和土（たたき）へ降りると、黙って、片手をふところから出した。
弥次郎の膝（ひざ）の前へ、切餅（きりもち）二個（五十両）が、抛（ほう）られた。
佐竹領内での働きに対して、武部仙十郎から謝礼として渡された金子（きんす）であった。

三

「なんじゃと?!」
水野忠邦の老いたる側用人（そばようにん）は、珍しく、二つに折り曲げた上半身を起して、おどろき

の色を、その皺面(しわづら)へ刷(は)いた。

「五十両では、礼金として不足だ、というのか？　お主としたことが、物欲を出したとはの」

書院に現われた狂四郎が、挨拶(あいさつ)の間(ま)さえ置かず、

「ご老人、百両所望したい」

と、申し入れたのである。

この老獪(ろうかい)な老人に、数知れず死地へおもむかされた狂四郎であったが、未(いま)だ曾て、ただの一度も、その危険を冒すのに、報酬を要求したことはなかったのである。

武部仙十郎は、じっと狂四郎を見据えた。

狂四郎もまた、その百両がいかなる事情で必要か、一言も口にせず、無言で、老人を瞶(みつ)めかえしている。

「…………」

「…………」

仙十郎は、ようやく、視線をはずして、重い腰を上げると、奥へ入った。

戻って来た時、切餅四個を持っていて、狂四郎の膝の前へ、置いた。

狂四郎は、べつに礼も云わなかった。

「さて、と——」

仙十郎は、元通りに、上半身を伏せて、皺掌で頬をはさむと、

「お主に、いまひとつ、働いてもらいたいことがある」

と、云った。

「百両を、ただでは呉れぬ、と云われるのか？」

「そう受けとってもらってもよい。尤も、お主が、気が乗らねば、拒絶してくれても、百両返せとは云わぬ」

「うかがおうか」

「お主が、あの志津乃と申す娘に渡した香筥の中には、佐竹家がつくった清国一両銀のにせ金が入って居った。それは、お主も、たしかめて居ろう」

「…………」

「秋田藩では、あのにせ金で、清国から米を仕入れようと企てて居る。苦肉の策じゃな。ご公儀の法度を犯すことになるが、考えてみれば、わるいことではない。そこで、わがあるじも、この密貿易に、一役買おう、という次第じゃ」

「本丸老中自らが、幕府のつくった法度を破るのか？　老中首座に坐るには、よほど、莫大な賄賂金が必要らしい」

「まさに、その通り――。覇権をつかむには、その前にまず金をつかまねばならぬのは、古今東西、例外はない。東照神君（家康）も、関ヶ原で石田三成と天下を分ける戦いを

なさる前には、豊臣家恩顧の外様大名衆に、思いきり、賄賂をなされた事実がある。……佐竹家江戸家老・佐竹勘解由は、当方の申し入れを、しぶしぶ承諾し居ったわ。儲け折半をな」
「…………」
「但し、佐竹家だけに、にせ金を使わせて米を輸入させ、秋田名産物を輸出させておいて、こちらは、濡れ手に粟のつかみ取りするのは、少々虫がよすぎる。第一、そんな交易の利益など、たかが知れて居るて。その抜荷の千石船に、こちらの用意した産物も積ませることにした」
「……………？」
仙十郎は、上目越しに、狂四郎を見やった。
「阿片じゃよ、阿片」
「阿片?!」
「わしは、こういう機会もあろうかと考えて、五島列島の福江島、樺島、久賀島、奈留島などで、罌粟の花を栽培させ、阿片を精製させていたのじゃて。……お主、知って居るか知らぬか、どうか——五島列島には、いまだ、隠れ切支丹信徒が、多勢居る。このことを、公にすれば、城主の五島家は、改易になるは必定。……隠れ切支丹の存在を黙認する代りに、阿片をつくらせた」

「……………」

水野越前守忠邦は、文化九年から同十四年まで、唐津六万石の城主であった。武部仙十郎は、もうその頃から、側用人であった。

唐津城主は、長崎御固十八家の一であり、隠れ切支丹取締りの任務にも就いていたので、武部仙十郎が、五島の各島に、いまなお、先祖が迫害を遁れて、本土から移住して来て、『外道』といやしめられ乍らも、頑固に、子孫相受け継いで、宗門に帰依しつづけている信徒が、三千人もいて、『古帳』と称ばれていることを、調べあげていた、としてもふしぎではなかった。

隠れ切支丹門徒の存在を黙認する代りに、阿片をつくらせ、それをいつか、密貿易品に使おうと考えていたとは、いかにも、この老人の老獪狡智を示していた。

「お主に、ひとつ、その抜荷の千石船に乗り組んで、清国へ行ってもらいたい。どうじやな？」

仙十郎は、そう云って、にやりとした。

四

しばらく、重い沈黙が、書院を占めていた。

やがて――。

狂四郎は、組んでいた腕を解いて、
「ことわらせて頂こう」
と、返辞をした。
拒絶し乍らも、膝の前の百両は、把りあげて、懐中へ容れた。
「どうしても、いやかの？」
「気がすすまぬ」
「お主のような無頼の徒は、いちど、海のむこうに渡ってみるのも、面白かろうに
……」
「ご老人、わたしは、ころび伴天連を父親に持った男だ。神というものを、信じるどころか、憎んでいる。そんな異端者が、天主とやらを信ずることを許している寛大な異邦の土地へ渡ったところで、なにが面白かろう」
「理窟だの」
「理窟ではない。切支丹を禁じているこの日本にいて、神の恩寵とやらに背を向けて生きている方が、気楽だ、というだけのことだ、と思って頂こう」
「そういうものかの」
仙十郎は、敢えてくどこうとはしなかった。
狂四郎が出て行こうとすると、

「志津乃という娘のことじゃが、お主、どうして、抱いてやらぬ？」
と、訊ねた。
「抱く機を失った、と思って頂いてよい」
「わしが、女中として使うには、美人すぎるぞ」
「その美しい肌を眺めているのも、一種の回春の効果があるかも知れぬ」
狂四郎は、云いすてた。
外桜田の大名小路を東へ抜けて、日比谷御門を出ると、不意に、大手をひろげて、行手をさえぎった者があった。
「大あたりっ！」
立川談亭をまねて、額をぴしゃりと叩き、
「師匠の奴、富くじは、からっきし当りやがらねえくせに、旦那の行先は、ちゃんと当りをつけやがる。あのおやじ、前世は、旦那と主従の間柄で、三世をちぎりやがったかな」
と、云った。
狂四郎と肩をならべた金八は、
「旦那、……ええと、宝なんとか宮黒人、ってえ夷人をご存じですかい？　茨城の那珂川の出口のはずれに住んでいる、まっ黒けな、大入道でさ」
と、訊ねた。

「知って居る」
「むこうは、旦那と親しい友人になった、って云ってやすがね」
「知己といってもよかろう。わたしがあやうく生命（いのち）を落すところを、救ってくれた」
「そいじゃ、あいつの云うことは、まちがっちゃいねえや。……旦那にどうしてももう一度逢（あ）って、伝えてえことがあるって、わざわざ、この江戸まで出て来て居りやすぜ」
「あの人物が、逮捕される危険を冒してか？」
「さいでさあ」
「どこにいる？」
「あっしの蛇骨長屋に、連れて来ていまさあ。南蛮の星占いについちゃ、こちとら、ちんぷんかんぷんだが、旦那の気象やら過去やらは、ぴたりぴたりと当てやがって、そこいらの八卦見（はっけみ）とは、どうもたちがちがっている夷人とみやしたぜ。……お逢いになりやすかい？」
「…………」
狂四郎は、ちょっと考えていたが、懐中から、切餅四個をとり出すと、
「池之端仲町の二十軒店（だな）の端にある、左官の仙太の家に、吉原の地廻りで、弥次郎というやくざが、今宵うちにも、たずねて来るだろう。この金を渡してやれ」
と、命じた。

柳生武芸党

一

四月から五月にかけて、江戸の風物に欠かせないものは、さまざまな荷ない売りであった。

その代表は、魚屋で、初鰹(はつがつお)を季の売物にした。新鮮な鰹を厚切のさしみにつくり、本場の山葵(わさび)に本場の醬油(しょうゆ)を添えて、べらんめえ口調の負引(まけひき)なしの振り売りをした。

花売りは、金盞花(きんせんか)その他の土鉢仕立ての草花をはじめとして、花菖蒲(はなしょうぶ)、杜若(かきつばた)、つつじなどを、のんびりした声音(こわね)で呼び売りした。

夏の来るのを告げる苗売りも、この季節には、庶民にとって待ちかねる存在であった。蜜柑箱(みかんばこ)のような箱を、糸経筵(いとだてむしろ)で四方を包み、小中大と三つ重ねにしたのを、天秤(てんびん)で前後にかついでいた。

朝顔、夕顔、玉蜀黍(とうもろこし)、へちま、茄子(なす)、唐辛、黄瓜(きゅうり)、瓢簞(ひょうたん)などの苗を、田舎訛(いなかなまり)の大声をあげて、大路小路を巡った。畑のない市中では、貴賤(きせん)を問わず、これらの苗を買って、

植木鉢でそだてたのである。

いま——。

眠狂四郎が辿っている往還上にも、前後に、荷ない売りがいた。

この往還の左右は、すべて寺院で、下谷から浅草にかけて、よくもまあ、これほど無数に、各宗が山門をならべ、構えの大きさを競うているものだ、とあきれるばかりであった。

狂四郎がひろって行く往還の彼方には、東本願寺の大伽藍の屋根が、いちだんと高く、薄曇りの空を截りぬいていた。

寺院最大の行事である灌仏会をこの月八日にすませたこの頃は、寺町通りは、ほとんど通行人の姿はない。

荷ない売りだけが、それぞれ独特の呼び声をあげている。

狂四郎の前方には魚屋、後方には苗売りが、歩いていた。

魚屋の方は、初鰹の鮮度を落さぬ威勢のいい声を張りあげて、歩調も早い。反対に、苗売りの方は、声音ものびやかに、足の運びもゆっくりしていた。

魚屋は、みるみる、狂四郎をひきはなして、報恩寺と妙音寺とのあいだの道へ曲って行った。

その辻へ、七八歩の距離に、狂四郎が近づいた時——突如、報恩寺の土塀の蔭から、

魚屋の盤台が、投げつけられた。

盤台からぶちまけられたのは、魚ではなく、油であった。

いささかの油断があったならば、狂四郎は、もろに、その油をひっかぶっていたに相違ない。

狂四郎は、一間余を、跳び退いた。

そして、次の瞬間、左手で無想正宗を、鞘ごと抜いていた。

後方から、苗売りが、三つ重ねの苗箱を、思いきり抛りつけ、これもまた苗ならぬ油を路面へまき散らした時には、狂四郎は、無想正宗を、空へ飛ばしていた。

魚屋と苗売りに化けた討手が、油へ向って、火薬をたたきつけ、往還を火の海にした刹那には、狂四郎の五体は、すでに、宙のものとなっていた。

報恩寺の土塀からさし出た老松の太枝の股へ、無想正宗をひっかけて、その下緒を左手でつかんでいたのである。もう一秒おそければ、狂四郎は火だるまになっていたであろう。

のみならず――。

宙に吊り下り乍ら、次の攻撃をすでに察知していたごとく、抜く手も見せず、無想正宗を、五体もろとも、旋回させた。

報恩寺山門の屋根と、往還をへだてた商家の屋敷から、姿なき敵が、射放って来た二

本の矢は、一閃裡(せんり)に、真二つに切られて、地上の火焰(かえん)の中へ落ちた。

狂四郎が、報恩寺の土塀の上に、身を移すや、山門の屋根にひそんだ敵が、

「眠狂四郎、見事に、われわれの奇襲を躱(かわ)したな」

「お主ら、佐竹領内から、襲いつづけて来た公儀庭番の同類だろうが、わたしが持ちかえった品は、すでに水野越州の側用人(そばようにん)の手に渡されていることを、かぎつけて居(お)ろう。それにもかかわらず、討とうとするのは、何故(なにゆえ)だ。隠密(おんみつ)というものは、仲間を斬(き)られても、意趣は抱かぬ掟(おきて)があるはずだ」

「ちがう！　われわれは、同じ公儀隠密でも、桜田の御用屋敷の庭番ではない。大和国小柳生(こやぎゅう)庄征木坂(まさきざか)の、柳生十兵衛様を始祖として二百年の伝統を有する道場よりえらばれて、党を組んでいる。公儀の禄(ろく)を食(は)まず、ただ、幕閣の要人の依頼によって、われわれの秘術を售(う)っている柳生武芸党と知れ。……柳生武芸党は、血盟の党則により、党員を殺されると、その者を、不倶戴天(ふぐたいてん)の仇(かたき)として、断乎(だんこ)として追い討つのだ。……眠狂四郎、おのれは、われら柳生武芸党を生涯の敵にまわした、と覚悟せよ！」

「わたしに、怨恨(えんこん)を抱いている者は、かぞえきれぬ。生命を狙(ねら)われるのは、日常のことなっている」

狂四郎は、やおら、老松の太枝から、鞘を取って、腰へ落し差し、無想正宗をそれに納め乍ら、こたえた。

「お主がたが、無数の怨敵(おんてき)の中に加わったとしても、こちらは、快く受けて立つまでだ」

二

　伝法院裏手の蛇骨長屋の、寺の裏塀にへばりついた端の家の破れ戸を開けて、狂四郎が、土間に立つと、奥の六畳間に、阿弥陀仏(あみだぶつ)のようにどっかと坐(すわ)っていた宝瓶宮黒人(アクエ・アリアスくろひと)が、なつかしさを笑顔にこめて、云った。

「やあ、眠さん、ご無事でしたか」

　うしろの荒壁には、この黒い異邦人の作成した大きな円形の図に、横文字と符号を一杯に書き込んだ紙が、貼(は)ってあった。

　調度品など何ひとつない巾着切(きんちゃくきり)のわび住居(ずまい)であった。

　狂四郎が、前に坐ると、黒人は、訊(たず)ねた。

「貴方(あなた)、ここへ来るあいだに、何か身に危険、起りませんでしたか？」

「これまでに、幾度も遭った程度のことだが……」

「天文暦(エフエメリス)で、貴方の今日の運勢、占ってみました。……貴方の星相は、江戸へ帰って来てから、ずうっと、竜の頭(ドラゴンズ・ヘッド)が天王星とスクエア――日本語で、矩(く)とでもいいましょうか――しています。大凶がつづいています。危険で予期せぬ事件が、突発し、それがつ

づいています。今日の貴方の角相（アスペクト）、いちばん大凶です。……よかったです。貴方の運は、すばらしく強い」

「運ではなく、業（ごう）といって頂こうか」

「眠さん、貴方は、アストロノミー（天文学）はみとめても、まだ、アストロロジー（占星学）の方は、信じていませんね。この前、お別れする時は、わたくしは、それでいいです、と云いました。いまは、占星学を信じて下さいとお願いします」

黒人は、うしろの荒壁に貼った円形の図を指さすと、

「眠さん、わたくしは、教えてもらった貴方の生年月日時刻と場所によって、この天宮図（ホロスコープ）つくってみました。……これまでのヨーロッパの天宮図は四角の中に十二の三角を描（か）きました。わたくしは、円にしてみました。わたくしの発明です。……ごらん下さい。この円を、十二の部屋に分けてあります。一が性格・運命、二が財運、三が旅、四が家庭、五が恋、六が病気、七が結婚、八が死と情欲、九が学問と異国、十が職業の種類、十一が交友、十二が神秘（オカルト）です。……この十二室に、太陽の通路である黄道十二宮を配します。黄道十二宮の中には、貴方が生れた時の惑星が入っているのです。いま、全世界で発見されている惑星は八つですが、この前、わたくしは、貴方が、まだ発見されていない星――かりに冥府（めいふ）星と名づける――の下に生れた、と考えて、この天宮図をつくってみました」

黒人は、細長い棒で、天宮図を示し、
「貴方は、わたくしが予想した通り、天蝎宮(スコオピオウ)——さそりを上昇宮(アセンダント)にもつ人です。強烈な個性、ゆたかな情感、鋭い識別力、秘密主義、人を信じない、きわめて頑固、官能がからだ中にゆきわたっているが、女性を決して愛さない。他人にとって、これほど、あつかいにくい人、いません。このさそりは闘争の星火星(マース)が支配するものとされていましたが、貴方の人柄や運命から推測して、たんなる闘争だけではなく、死とか秘密とか情欲とかの要素をふくんだ未知の星が支配しているにちがいないという確信をもちました。わたくしはそれを冥府星と呼び、さそりの支配星(ルーラー)としましたが、その判断まちがっていませんでした」
「…………」
「わたくしは、これまで、いろいろなたくさんの人の天宮図、つくりました。けれども、こんなおそろしい天宮図、はじめてつくりました。第八室の死と情欲の部屋に、貴方の星が、ほとんどぜんぶ、集まっています。そうして、第十二室の神秘の部屋にある星が、第八室の死の部屋の星たちをすべて、見事にコントロール——調節しています。そればかりでなく、死と蘇生(よみがえり)の冥府星がきっと第四室にあって、第八室の星全部を援助しているにちがいありません。だから貴方は、殺人鬼であり乍ら、神秘な再生力を与えられているために、生きのびているのです。……いかがですか？　貴方の天宮図には、家

庭・恋・財運・交友・結婚・職業の種類の部屋に、星はひとつもない。神秘な力と旅(放浪)と死があるばかりです」

「………」

「眠さん、どうか、占星学を信じて下さい。……世界で一番立派な天文台は、イギリスのグリニッジ天文台ですが、一六七五年に、初代王立天文台長フラムステードは、この天文台を建てることを命じられると、建てる場所と時を、占星術で占ったのです。……いいですか、わたくしの星占いを信じて下さい。貴方は、近いうちに、ずうっとずうっと、遠いところ――そうです、日本を出て、海を渡るようです。その海の上や、外国には、いまより、もっともっと、おそろしい危険が、待ちかまえています。……わたくしは、まだ未発見の冥府星によって占ったのですから、もしかすれば、そこで、貴方は、生命をすてるかも知れません。そのおそろしい危険をくぐり抜けることができても、貴方の働きは、自分にとって、なんの利益にもなりません。無駄なことをするだけの結果になります。……わたくしは、貴方が好きです。どうか、死ぬことだけは、まぬがれるように祈ります」

黒人の言葉をきいているうちに、狂四郎の心に、ひとつの予感がわいた。

「黒人さんに、うかがおう」

「なんですか?」

「お手前の天宮図には、わたしと同様、海原を渡る、という運勢はあらわれていないか、どうかだ」
「おお！」
黒人は、肩をすくめた。
「仰言る通り、親しい友人になった貴方と一緒に、わたくしは、日本を去る運勢を、自分の天宮図の第九室の異国への旅の中に見つけました」
「念を押すが、お手前の星占いとやらは、人の生涯は、生れた時から死ぬ時までさだまって居り、その運命を変更はできぬのであろう？」
「そうです。それは、そうですが……」
「それならば、お手前とわたくしは、いずれ、近く、海の彼方へ、冒険におもむくことになる」
「けれど、貴方の惑星は、わたくしが、かりに発見したとしたら、という仮定でみた冥府星なのですから……」
黒い異邦人は、かなり当惑の面持で、云った。狂四郎は、珍しく明るい微笑をしてみせた。
「わたしの星が、未発見のもので結構だ。……わたしが、どのような死にざまを、海のむこうでさらすか、ひとつ、お手前に、見とどけて頂こう」

三

同じ時刻、金八の方は、池之端仲町の二十軒店の左官・仙太の家で、吉原芸妓・胡蝶を前にして、しきりに思案投げ首のていであった。

「どう考えても、わからねえや。眠狂四郎ともあろう者がよう――金輪際、女に惚れねえ旦那が、おめえのような吉原の芸妓の借金を、払ってやったたあ、どういう気まぐれで、瓢箪から駒を出しちまったんだか、酔興にも程があらあ」

四半刻あまり前に、地廻りの弥次郎が現われて、狂四郎に渡された百両を受け取って行ったのである。

胡蝶の借金受領の証文は、金八の膝の前に置いてあった。

「かんにんしてくださいまし。あたしは、ただ、無我夢中で、逃げ出して、有金を駕籠屋に渡して……」

「もう、そのいいわけは、さっき、きいて、耳にたこができてらァな。逃げ込むあてがねえんで、眠の旦那にきいていた此処を、云っちまった、というんだろう。旦那は、つい、居候さきを、おめえに教えたばっかりに、百五十両の大損だあ。冗談じゃねえや、全く！」

「………」

胡蝶は、長襦袢の袖で、目がしらをおさえた。

なまめかしいその姿態も、いまの金八には、いまいましいばかりであった。

「おめえが、眠狂四郎に惚れた、とぬかしたって、おれは、信じねえぜ。たった一度の浮気で、くるわ芸妓がかんたんに客に惚れるわけがねえや。……芸妓になる前に惚れていた男に巡り逢った、というのなら、辻褄が合うかも知れねえがよう」

「そうだ、その通りだあ」

いきなり、土間から、相槌を打った者があった。

この家のあるじの仙太であった。いつの間にか、帰って来て、立ちぎきしていたのである。

かなり酒が入っている目つきで、

「つらい苦界の深みに沈む、ってえのは、恋（鯉）の重荷があるゆえに、といわあ。そうだろ、着っ切見い」

仙太と金八は、顔見知りであった。

仙太は、四つン匍いで上って来て、

「で――どうしたってんだ、これァ？」

「どうもこうもねえや。このくるわ芸妓の借金を、眠狂四郎が、払っちまったんだ」

「ふうん！」

仙太は、首を突き出して、胡蝶の顔を、しげしげと眺めたが、

「女狐(めぎつね)だあ、これァ——。いいや、狐が化けても、こんなに別品になるには、骨を折るぜ。死霊をごまんと背負ってる狂四郎旦那と、ちょうど釣合がとれてらあ」

「べらぼうめ、面(つら)の良し悪(あ)しを云ってるんじゃねえや」

「じゃ、閨(ねや)の良し悪しか？」

「ふざけるねえ！」

「てまえ、つらつら面をおもん観(み)るに、朶(たぶ)のねえこういう耳を、小股が切れあがっている、といって、穴は小さくて締め加減がいいし、上唇がちょいとめくれて下唇が厚いのは、これぞ、まさしく、たこきんちゃく——」

「うるせえっ！　締めあげてえのは、こっちだあ、この女狐をよ、こん畜生！　……百五十両だぞ、百五十両！　おめえが、これから三十年、鏝塗(こてぬ)りしても、二十両ものこせるか」

「そうだのう、同じ手を使うのでも、おめえなら、他人のふところが目当てだから、百五十両つくるのは、造作はねえや。尤(もっと)も、おいらの鏝とちがって、おめえの方は、そのうち、高手小手にふん縛られるおそれがあらあ」

「掛合万歳をやっている場合じゃねえや。おれは、腹を立てているんだぞ！」

金八が、思わず叫んだ——とたん、

「ゆるしてくださいまし！　あたしは、廓へもどって、百五十両を、お返しいたします」

胡蝶が、覚悟を決めた面持で、きっぱりと云った。

四

金八と仙太は、顔を見合せた。

金八はもとより、仙太も、たとえ気まぐれにもせよ、いったん身請した女を、元の泥沼へかえすような眠狂四郎ではないことを、知っていた。

「おめえを、吉原へ逆戻りさせるぐれえなら、こちとら、こうも思案にあまって迷っちゃいねえや」

「そうとも！　どうする、こうする、ああなりゃこうなる、ってかんたんに二一天作の五と、算盤で割り出せる問題じゃねえやな、これァ……。それとも、着っ切兄い、狂四郎旦那は、当分のあいだ、この女を情婦にするつもりじゃねえのか？」

「置きやがれ！　眠狂四郎が、そんな鼻下長なら、おれは、とっくのむかしに見下げはてていらあ」

「そいじゃ、狂四郎旦那が、帰って来るまで、待つよりほかはねえや。巾着切と左官が、らっきょうみてえな脳味噌をしぼったって、いい智慧が出るわけがあるめえ。……姐さ

ん、すまねえが、ワン公とニャン公に、なにか食わせてやってくれろ」
「あい」
胡蝶が立ち上った時であった。
「おっ！」
金八が、驚愕の声をあげた。
仙太が、その視線を追って、戸口を振りかえって、叫んだ。
「おうおう！　幽霊なら、お門ちげえだぜ。入って来る家をまちがえちゃいねえか。大工と左官の家に幽霊が出やがったら、商売あがったりだあ」
額と頬に凄まじい刀痕があり、皮膚は草色に蒼ざめ、しかも、左腕を肩のつけ根から失っている浪人者が、蹌踉たる足どりで、土間に入って来た。
胡蝶が、おびえつつ、金八と仙太に、これは、弥次郎という地廻りが用心棒として、今朝がた連れて来た男だ、と告げた。
「弥次郎には、百五十両渡して、証文を巻かせたたぜ。おめえさんは、もう役ずみだから、ひきとってもらおうぜ」
時雨左馬之助は、かるく首を横に振った。
「ああ……ああ……ああっ」
「なんでえ、どもりか。いいか、ちゃんと、証文はここにあらあ」

時雨左馬之助は、畳へ、人指指で、『眠狂四郎と試合』と書いてみせた。
金八たちは知らなかったことだが、時雨左馬之助は、阿片を吸って、禁断症状をおさえると、ただちにひきかえして来たのであった。
「試合？　おめえさん、眠狂四郎に勝つ自信がある、というんですかい。失礼でげすが、五体満足な、達人といわれる剣客が、どれだけ、眠狂四郎に斬られているか、ご存じですかい？　どだい、おめえさん、どこか加減がわるい様子じゃねえか」
金八は、せせらわらった。
すると――。
時雨左馬之助は、右手をふところに入れると、手裏剣をとり出した。
「ど、どうしようというんでえ？」
金八は身構えたし、仙太も酔いがさめた顔つきになった。
時雨左馬之助は、手裏剣の切先で、上り框の柱に、『白犬のまえあし』と、刻んでみせた。
「なんだと？」
金八と仙太と胡蝶は、小庭にいる六匹の犬を、見やった。
六匹のうち、白犬は一匹しかいなかった。
「へっ！　そこから、その手裏剣で、しろの前脚を撃つ、ってえのかい。止しやが

れ！」
仙太は、舌打ちした。
六匹の犬は、敏感な防御本能から、激しく吠えたてて、狭い小庭を、目まぐるしく、はね躍り、走りまわった。
瞬間——。
時雨左馬之助の右手が、ふりかざされた、とみるや、その指から手裏剣が、びゅんと放たれた。
ぎゃん！
悲鳴をあげて、地面へころがったのは、まさしく白犬であった。
その右の前脚には、手裏剣が、突き刺さっていた。
金八と仙太は、息をのんで、言葉もなかった。
時雨左馬之助は、もう一度、畳へ、
『眠狂四郎と試合』
と、書いておいて、亡霊さながらに音もなく立去った。

自決使者

一

古稀（こき）の老人の睡眠は、浅い。

武部仙十郎は、取次ぎの者が、玄関へ出て行って、来訪者と対応している遠い声音（こわね）で、もう目をさましていた。

仙十郎は、跫音（あしおと）が寝室の前へ来ると、呼ばれるよりさきに、

「眠狂四郎が、参ったのではないのか？」

と、云（い）いあてた。

「はい。……もうお目ざめでございましたか」

「なん刻（どき）だ？」

「まだ、七つ半（午前五時）でございますが——」

「こんな非礼な訪問をして参るのは、狂四郎以外には考えられぬ。書院へ通しておけ」

「その……お連れがありまするが——」

「連れ？」

「それが、異形の南蛮人でございます」

「ふうん！」

そのような人間を連れているから、夜明け前の時刻をえらんだのである。

「ともあれ、通しておけ」

仙十郎は、起き上ると、行燈にあかりを入れて、着換えた。生涯ついに独身を通した仙十郎は、この老齢になっても、女中を呼んで手伝わせる習慣さえもつくっていなかった。

腰で後手に組んで、猫背をさらに一層まるめて、ひえびえとした廊下を、のそのそと歩き乍ら、二度ばかり、

「ふん！」

と、自分を合点させるように、首をたてに振った。

書院に入った仙十郎は、狂四郎と並んで坐っている人物へ、目をくれた。

「なるほど、異形じゃの」

狂四郎は、老人が座に就くと、黒い異邦人をひき合せて、

「素姓は、自身の口から、述べる由——」

と、告げた。

流暢な日本語が、その口から出はじめたので、さすがの仙十郎も、しばらくの間、からだを二つに折るのを忘れて、対手へ、目をあてていた。
宝瓶宮黒人が、眠狂四郎と知己になったくだりを語る頃合、ようやく、仙十郎は、上半身を伏せて、枯枝のような十指を頬へあてていた。
黒人が話し了えるのを待って、
「先日の返辞をとり消しに来たというわけかな、狂四郎？」
と、訊ねた。
「左様――、わたしは、この異邦人に借りがある。借りは返さねばならぬ。わたしは、佐竹家江戸家老と貴方が共謀して出帆させる抜荷船に便乗して、この御仁を、清国まで送って行きたい。さらにいえば、清国へおもむくに、この御仁以上の水先案内人はないといえよう」
「おのれ自身の名分ができた、という次第じゃな」
「そう受けとってもらってよい。但し、清国との密貿易が、いかに困難か――その実情を、ご老人、貴方は、この異邦人から、聴取しなければならぬようだ」
「参考までに、うかがうことにするかの」
仙十郎は、上目遣いに、ちらりと、宝瓶宮黒人を、視やった。
黒人は、微笑して、うなずき、

「清国が、この日本と同じように鎖国政策をとっていること、もうご存じのはずです」

と、云った。

「存じて居(お)る」

「わたくしの看(み)た清国は、日本よりも、もっともっと、誇りを持っています。世界中で、自分の国が、いちばん立派で、偉い、と確信しているのです。だから、自分の国と外国と、対等に交易し外交することを、きびしくこばんでいるのです。清朝にとって、イギリスもスペインもオランダもアメリカも、みな夷狄(いてき)です。……しかし、外国との交易は、必要です。鎖国の日本が、オランダとだけは、長崎で交易しているように、清国も、夷狄との交易港として、むかしは、厦門(アモイ)だけをひらいていました。いまは、広州港です。あの広い清国が、たったひとつ、広州港にだけ、夷狄の船が入るのを、許しています」

「そのことも、存じて居る」

「広州港が、長崎港とちがうところ、ご存じですか？」

「どうちがうのかな？」

「長崎には、オランダ商館だけしかありません。広州には、たくさんの外国の商館があります。城外西郊に、十三行街という町がつくられ、イギリス館、スペイン館、フランス館、オランダ館、デンマーク館が、ずらりとならんでいます。アメリカも、スエーデン館を乗っ取って、交易しています。しかし、これは、あくまでも、黙認です。清朝政

府が、すすんで、交易しているわけではありません。夷狄どもが、貢物をして来る、と考えているのです。……ただひとつ、例外は、ポルトガルです。ポルトガルは、広州にすぐ近い澳門を借りて、植民地同様にしています」

黒人は、自分の知る限りの知識を、仙十郎に、教えた。

外国船は、五・六月の南西風に乗って、広州港へやって来たが、『夷狄船は、進貢を終えれば、直ちに退去すべし』という清朝の命令があるために、越冬が許されなかった。

そこで、十月頃の北西風に乗って、広州を去っていた。しかし、なにぶんにも、文字通り万里の波濤を越えて帰らねばならぬために、ヨーロッパ各国の商船のうち、幾割かは、広州の南方にある珠江河口のポルトガル租借地澳門の湊に、錨をおろして、年を越しているのが、現状である。

この自分（宝瓶宮黒人）が、澳門に立寄った時には、ヨーロッパ各国人は、男が千二百人、女はその二倍もいた。

女の方が多いのは、各国の商社員が、妻子を、澳門に住まわせているためであった。

二

「さて、阿片に関する事柄ですが……」

黒人は、述べた。

「ずっとむかし、ヨーロッパ人、阿片を薬品として持って来て、中国に売りました。やがて、イギリスの東インド会社が、インドでつくられた良質の阿片を売って、大変もうけました。……阿片を嚥むのではなく、吸う風習をつくったのは、中国人です。はじめ、高砂（台湾）人が、阿片はマラリアに対して効目があるので、莨にまぜて吸いました。それが、福建を経て、中国全土にひろがりました。……阿片を吸えば、なにもかも忘れて、天国か極楽に遊んでいるように陶酔させます。しかし、この猛毒は、人間を完全に廃人にしてしまいます」

そこで、雍正七年（一七二九年）、福建の巡撫（省の長官であり、行政・司法・兵事を司どる）劉世明が、阿片を莨にまぜて吸飲している弊害を憂慮して、阿片販売人に対して、一月間の首枷手枷の処罰をし、否応なく軍役に服させ、また、阿片の吸飲所の経営者に対しては、百叩きのうえ流刑にする法令をつくった。

しかし、清国に於ける阿片烟吸飲の習慣は、それぐらいの処罰では、すこしも断絶しなかった。

麻薬の魅力は、かえって、野火のごとくひろがって、上層階級から下層階級までをとりこにした。

イギリスが、東インド会社にベンガルの阿片専売権を得させて、清国へ輸出する第一の品を阿片にしたのは、乾隆四十五年（一七八〇年）であった。清朝では、厳しい布告

を下して、
「阿片を吸飲する勿(なか)れ」
と、禁じたが、法規は全く守られなかった。
清朝では、嘉慶(かけい)元年（一七九六年）に、阿片の輸入を禁じると同時に、それから四年後には、国内での罌粟(けし)の栽培も禁じた。
「……けれども、イギリスの東インド会社は、それから四十年過ぎたいまも、清国へ、どんどん、阿片を売っています。そうです。わたくしが、四年前、東インド会社の商船で、広州港へ入った時も、一年で二万箱——一箱は百斤です——もの阿片を、売り込んでいました。……わたくしが考えますに、清朝は、きっと、ここ数年うちに、阿片をとりあつかう者は、死罪にする法律をつくるでしょう」
「清国が、阿片の輸入を禁じて居ることは、存じて居ったがの。……当方も、公儀法度(はっと)を破る以上は、清朝の法度も破る肚(はら)をきめなければ、大きな利益を得ることはできぬと申すものじゃて」
仙十郎は、平然として、云(い)ってのけた。それから、
「わしは、清国が、阿片輸入のために、輸出超過国から、輸入超過国に転落して、たくわえた銀子(ぎんす)を、ほとんど、南蛮国へ流出して居る、ということも、たしかめて居る。そこで、わしは、秋田の佐竹家と力を合わせて、清国へ、銀を送り込もうと企てている次

第じゃ。この点、他の南蛮国とは、いささか、考えがちがって居るのじゃが……」

「しかし、阿片は、いけません。阿片は、国を滅ぼします。日本だけは、清国を滅ぼすことに、力をかしてはいけません」

「宝瓶宮—と申されたな。わしは、本丸老中をあるじに頂く家来じゃ。清国の滅亡のことまで、考慮しては居れぬわ。……仄聞するところでは、清朝では、禁止した阿片を、皇帝（道光帝）ご自身が、吸飲されているそうな。本腰を入れて、阿片禁止をするなら、まず、皇帝ご自身が、率先して、その吸飲を止められるべきではあるまいかな。そういう国に、同情を寄せて居っては、こちらの企図は、一歩もおし進められぬて」

仙十郎に、きっぱりと云われて、黒人は、しばらく沈黙した。

やがて、

「どうしても、阿片を清国に密輸する、というのでしたら、わたくしのような者が、反対してもしかたがありません。……けれど、日本の船が、広州港へ入ることは、とてもむつかしいです。イギリスはじめスペインもオランダもフランスも、それからアメリカも、清国との交易に、はげしい競争をしています。だから、日本の密輸船が入るのを、黙って眺めてはいないでしょう。殊に、イギリスの東インド会社は、もし日本の密輸船が、阿片を積んでいる、と知ったら、きっと、武力をつかって、追いはらおうとするにちがいありません」

「これも、覚悟の上じゃ」

「貴方は、日本でつくった阿片を、イギリスよりも、ずっと安く、清国に売ろうとしているのでしょう？」

「左様――」

「ここに、日本でつくった阿片の見本、置いてありますか？」

「ござるよ」

仙十郎は、床の間に置いた鈴を鳴らして、用人を呼び、自分の居間から、手文庫を持って来るように、命じた。

それは、すぐに、はこばれて来た。

手文庫からとり出された銀製の小壺（こつぼ）の中には、拇指大（おやゆびだい）の蠟燭（ろうそく）状の品が入っていた。

宝瓶宮黒人は、それを丹念に調べていたが、

「イギリスが、清国に密輸するインド阿片には、三種類あります。最上等はベンガル産の公班土（コンパントウ）、次がボンベイ産の白皮土（パイピイ）、いちばん質のわるいのがマドラスから積まれる紅皮土（ファンピイ）です。……この日本で精練された阿片は、最上等の公班土（コンパントウ）にすこし劣りますが、白皮土（パイピイ）より良質です。……貴方は、この阿片を、清国に、いくらで売るつもりですか？」

と、訊ねた。

仙十郎が、その金額を告げると、黒い異邦人は、肩をすくめた。

「その値段は、アメリカ商人が、持って来る、紅皮土よりもずっと質のわるいトルコ阿片よりも、安い！」

「やむを得ぬの。わがあるじが軍資金をつくるためには――」

仙十郎は、ことをなげにこたえたことだった。

三

いつの間にか、初夏の陽あしが、縁側を越えて、書院の畳に長くのびていた。

「今日は、暑くなるようじゃな」

仙十郎は、なにげない口調で云った。

狂四郎は、ふと、庭へ視線を移し、縁側近くにうずくまっている意外な男を、見出(みいだ)した。

佐竹領内に入る折に知り合った、江戸一流料亭の女中買いをしている横山町の小間物屋と称していた吉郎次であった。

「やはり、お前は、この老人のまわし者であったか」

「やはり、と仰言(おっしゃ)いますと、てまえが、武部様におたのまれして、秋田藩のにせ金づくりをさぐっていた者であることを、とっくに看破なさって居りましたので――？」

「見も知らぬ男が、なれなれしく、わたしのような男に、近づいて来るのは、何かのこんたんがあってのことだと、これまでの経験が、わたしに教えている」

「恐れ入りました」

吉郎次は、頭を下げた。

仙十郎が、

「この男、五年ばかり前までは、もっぱら夜働きをしていた盗賊でな、当上屋敷にも忍び込んだことがある。二度目に、忍び込んだところを召捕(めしと)って、わしの手飼いにした」

「佐竹家がにせ金をつくっているのをつきとめたのは、この男だ、と云われる？」

「左様、左様——、骨身を惜しまず、よう働いてくれたわい。役に立つ盗賊じゃて。……お主らとともに、抜荷船に乗せてやれば、なにかと便利であろうと、考えて居る」

狂四郎は、吉郎次を冷たく正視して、

「お前は、まさか、佐竹領で買った生娘たちを、清国の役人どもに売りつける役目を引受けているのではあるまいな？」

と、訊ねた。

「滅相(めっそう)もない。夜働きの足を洗って以後、てまえの本業は、けかちに喘(あえ)いでいる奥羽(おうう)の百姓衆の娘たちを、すこしでも幸せにしてやろうとしていることでございますよ。こちらの側用人(そばようにん)様には、奉行所へ突き出されて獄門首になるのをまぬがれさせて頂いたご恩

がございますので、ご命令にしたがって、秋田藩の秘密をさぐったまでのことでございます」

「………」

「ただ、てまえの力では、どうしても、にせ金を手に入れることができなかったので、旦那（だんな）のお力をお借りいたしました。さすがは、眠狂四郎の旦那でございます。てまえが、三年かかっても手に入れられなかったのを、わずか数日で、手に入れて下さいました」

四

同時刻――。

この長屋へ、音もなく潜入して来た者があった。

自らすすんで虜囚となった志津乃が、生家の慣習にしたがって、朝餉（あさげ）の前に、与えられた部屋を掃除すべく、襷（たすき）がけになった時であった。

天井の張りじまいの板が、すっとはずされて、潜入者は、畳へとび降りて来た。重量のないもののような軽やかさで、畳に音をひびかせなかったので、背を向けていた志津乃は、声をかけられるまで、気がつかなかった。

「志津乃殿でござるな」

ひくく呼ばれて、志津乃は、はっとなって振りかえった。

どこといって特長のない風貌の小柄な若ざむらいが、片膝ついて、じっと、こちらを凝視していた。
「…………」
志津乃は、黙って、瞶めかえした。
いずれは、自分を成敗するべく、主家の刺客が面前に現われるであろう、とかねて予期し、覚悟していた志津乃であった。
「拙者は、江戸お留守居添役・郡参平でござる」
「…………」
「昨夕、貴女のお父上が、急遽出府され申した」
「…………」
「お父上は、貴女が、ここに在ることをきかれると、すぐに、この書状をしたためて、拙者に依頼され申した。……お読み下され」
「…………」
志津乃は、襷をはずして、正座すると、手渡された父の手紙を披いた。
当然、父が命ずるであろうと推測していた通りの内容が、簡潔な文章で、したためてあった。
わが七草家は、新羅三郎義光公の玄孫佐竹四郎秀義公が、源頼朝公にしたがって、奥

の泰衡を討った時より、馬の口を取った股肱であることを、そなたが知らぬはずはないにもかかわらず、このたびの裏切り行為は、父の全く理解し難いところである。そなたに逢って、何が故に裏切ったか、仔細を尋ねたところで、もはやとりかえしのつかぬことである。そなたは、この書面を読み了えたならば、直ちに、父が出発に際して与えた懐剣で、自害せよ。郡参平氏が、そなたの最期を見とどけて、遺髪を、父の許へ持参してくれる。そなたの死によって、七草家の血すじが絶えるのを、父は断腸の思いで堪え忍ぶであろう。

「…………」

志津乃は、手紙を巻きもどして、膝に置いた。

表情は、いささかも変ってはいなかった。

郡参平は、待った。

しかし、志津乃が、いつまで経っても、微動もせぬので、参平は、

「如何なされた？　お父上のお申しつけ通りになされい」

と、うながした。

すると、志津乃は、しずかに、胸にさしていた懐剣を、鞘ごと抜きとって、参平にさし出した。

「これを、父にお渡し頂きとう存じます」

「志津乃殿、お父上は、貴女に、自害を命じられたのではありますまいか？」
「わたくしの返辞は、父が与えてくれたこの懐剣を、父にかえすことでございます」
「自害を拒否なさるのか？」
「わたくしが、自害せぬ際は、討ちすててもらってもよい、との父の依頼でありますならば、ご随意になされませ」
「そのような依頼は、受けて居り申さぬ」
受けてはいなかったが、あるいは、七草喜久左衛門は、娘が拒否した場合、郡参平の手にかけてもらうことはやむを得ぬ、と考えているのかも知れなかった。
ただ、たとい娘が斬られても、参平から、
「立派に自害されました」
と、遺髪をさし出してもらいたいのが、父親の情愛というものであろう。
郡参平は、ものしずかに目蓋を閉じた志津乃を見まもって、当惑した。
——おれは、ご家老に、眠狂四郎を討て、と命じられたが、闘おうとさえしなかった。
……眠狂四郎は、ご家老に向って、郡参平には、刺客の非情はない、と云ったそうだ。
郡参平が、隠密としては不適格な性格だということを看破できなかったのは、江戸家老がめくらであった、と狂四郎は、さげすんだという。……ご家老は、おれに、あからさまに申されなかったが、愛想をつかされている。……またもや、この娘を討つのを中止

して、懐剣だけを持ち帰ったならば、おれは、もしかすれば、追放……いや、この娘の代りにおれの方が、切腹せよ、とご家老から無言裡（むごんり）の下命があるかも知れぬ。

なんのために、十三歳の時から、佐竹勘解由（かげゆ）にひろいあげられて、刻苦辛酸の修業をしたのか。

郡参平は、おのれを冷酷非情な人間にするべく、かっと双眼をひきむいた。

とたんに——。

「お主には、志津乃は斬れぬ」

眠狂四郎の声が、たてきった障子戸を通して、庭さきからひびいた。いつの間にか、書院から、そこへ身をはこんでいたのである。

「お主にできるのは、志津乃の懐剣を、持ち帰ることだけだ」

舌打ち金八

一

「おう、いるけえ、鏝塗り」
金八が、格子戸をがらっと開けて、呼ぶと、あるじに代って、猫が二匹、唐紙の破れ穴をくぐって、上り框まで迎えにやって来た。
金八が、上って行くと、左官の仙太は、長火鉢の前で、酔眼を据えていた。
「着っ切兄い、女と炒豆が、前にあるのに、手を出すな、という方が、どだい無理な相談だぞ」
「ちょっ、もう飲んだくれてやがる」
まだ、夕餉までには小半刻ある頃合であった。
夕陽がまぶしくななめに落ちた小庭では、眠狂四郎が身請してやった吉原芸妓・胡蝶が、六匹の犬に、晩ごはんを与えていたが、あわてて立ち上って、
「おいでなさいまし」

と、頭を下げた。あたまこそ洗い髪であったが、町方女房風に、地味な身装になり、白粉気のない素顔であった。

金八は、長火鉢をへだてて坐ると、

「おめえ、胡蝶に、手を出して、振られやがったな」

「見そこなうねえ、江戸っ子だあ。手が出せるくれえなら、こうして、昼間っから、酒をくらっているもんけえ、くそったれ！」

「おめえにとっちゃ、いい薬にならあ。堪忍のなる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍――」

「きいた風な口をきくねえ。……もう五日経っているんだぞ、五日！　ええ、おい、おめえも、おいらと同じぐれえ助平だろう、このつらさが、わからねえとは、云わせねえぞ」

「わかってらあ」

「わかってもよう、六畳と三畳の二間の家で、とびきり上等の若え女と、五日もすごしたこたァねえだろう。……しかも、素人ならいざ知らず、あいてはくるわ芸妓だぞ、こん畜生っ！　寝牀に入ったとたんから、せがれの野郎、むっくりだあ。睡っているあいだも、立ちっぱなしだぞ。昼間は昼間で、裾から、ちらっと湯文字がこぼれるのが、見えただけで、むらむらっと来らあ」

「だから、おめえ、性根を直して、働きゃいいじゃねえか。甲を舎利にして、鏝塗りに精を出しゃ、くたびれて、白河夜船の高いびきが、かけるじゃねえか」
「やいっ！　金八――てめえ、助平だろ？　え、おい、おいらと同じぐれえ助平なんだろう？……たったいま、おいらのつらさがわかると、うなずいたじゃねえか」
「つらさがわかるから、働け、と云ってるんだ」
「おめえに云われるまでもねえや。三日目には、やりたくもねえ木場の成金野郎が、根岸に建てている妾の家の壁を、塗ってやったァな」
「その晩は、ねむれたろう」
「その反対だあ。久し振りに働いたものだから、からだ中、血の巡りがよくなって、朝まで七転八倒だあ！」
「そうか。ふうん！……眠の旦那も、罪なことをするぜ。前借を払ってやり乍ら、この家へ、おっぽらかしちまうものだから……、たしかに、目の毒、気の毒、まらの毒だ」
「そうよ、そうだあ。百五十両の下女をやとって、犬と猫と四十雀の世話をさせて下さる狂四郎旦那の、好意は有難えやな。けどよう、もう、いっぴき、とめてとまらぬ色の道にはげんでいる生きものが、この家にいることを、忘れていられたんじゃ、間尺に合わねえや。……いってえ、どうしてくれるんだ、巾着切！」
「おれに、嚙みついたって、しようがねえやな」

「噛みつく対手が、もうこの家へは戻って来ねえんだから、おめえが、身代りに噛みつかれろ！」

仙太は、なみなみとついだ湯呑み茶碗の冷酒を、ぐうっとひと息に飲み干すと、それを、金八へ突きつけた。

金八は、しかたなく、受けとって、こぼれるほど一杯につがれたのへ、口をはこんだ。

じいっと酔眼を据えて、金八が飲み干すまで、見とどけた仙太は、

「さあ、どうする、巾着切？」

と、迫った。

「弱っちまったなあ」

金八は、腕組みして、首をひねった。

「弱っているのは、こちとらだい。弱っていねえのは、股ぐらの一物だけだから、しまつにおえねえや……どうにかしろい、巾着切！」

二

それから小半刻後、金八は、胡蝶を連れて、昏れなずむ新寺町の往還を、東へ向って、歩いていた。

自分の住んでいる伝法院裏手の蛇骨長屋へ、胡蝶をともなうよりほかに、思いつかな

かった金八である。
よけいなお節介をする、と眠狂四郎から、冷たい視線をあびせられるのは、わかっていたが、
——しょうがねえや、先生が身請しちまったのがいけねえんだ。
と、自分に云いきかせた。
狂四郎は、宝瓶宮黒人(ほうへいきゆうくろひと)を、水野忠邦邸の側用人(そばようにん)宅へあずけておいて、蛇骨長屋へひきかえして来ると、そのまま、金八の家に腰を据えていたのである。
——先生は、おれが、この女を連れてかえると、すうっと出て行っちまうのじゃねえかな。そうなりゃ、仙太の代りに、こんどは、おれが七転八倒の夜をすごすことになるぜ。
そのおそれが、たぶんに、あった。
「待つ夜のつらさは蚊に攻められて、蚊帳(かや)に入れば蚤(のみ)が刺すか。……ちょっ、蚊帳がひとつしかねえや、おれんとこは——」
なかば、やけくそ気味に云いすてる金八に、胡蝶は、細い声音(こわね)で、
「かんにんしてくださいまし。とんだご迷惑をおかけして……」
と、詫(わ)びた。
「いいやな。おれは、別のねぐらをさがさあ。談亭師匠の家へでも、ころがり込むか」

胡蝶は、金八の機嫌がわるいので、つい三四歩、おくれがちになった。
仕事がえりの職人や、用事で出かけたお店者などが、すれちがって行ったが、呉服荷を背負った一人が、ふと、胡蝶へ目をとめて、
「おや！　姐さんじゃないか。おまいさん、花扇屋の胡蝶だろう」
と、そむける顔を、のぞき込んで、
「まちがいない、胡蝶だよ。いつの間に、身請されて、かたぎにおなりだね？」
と、訊ねた。
さっとひきかえして来た金八が、いきなりお店者の横っ面へ、平手打ちをくらわせた。
「な、なにをするんだい！」
「なにもくそもあるけえ、べらぼうめ！　てめえ、おれの嬶を、くるわ芸妓上りと見まちがえやがって、ただじゃ置かねえぞ！」
「だって、あたしゃ、この芸妓とは三年も前から座敷で馴染で……」
「他人のそら似は、佃煮ほど、あらあ。四の五のぬかしやがると、あの菊屋橋から、堀割へ、たたっ込むぞ！」
金八のただならぬ権幕に、お店者は、這う這うのていで、逃げて行った。
しょんぼりとうなだれる胡蝶を、金八は、ちらっと視やって、
「犬が歩けば棒にあたり、くるわ芸妓が歩けば客にぶつからあ」

「………」
「江戸には住めねえや、おめえは――。眠狂四郎の面目にかかわるぜ」
「それでは……、あたしは、いったい、どうすれば、よろしいのでしょうか？」
「身請したご当人の指図を仰がなけりゃ、おれ一存できめられるけえ」
金八は、蛇骨長屋の住民に、胡蝶を知った男がいないように祈り乍ら、木戸を入った。
眠狂四郎は、荒壁に凭りかかって、前にひろげた清国の地図へ、眼眸を落していた。
金八が胡蝶をうながして、上って来ても、狂四郎は、無表情であった。
「旦那――、仙太の野郎が、ひとつ屋根の下で寝るのは、目の毒だって、血走らせてやがるので、しようがねえから、ここへ連れて来やしたぜ」
「………」
「しばらく、下女代りにお使いになりやすか？」
「わたしは、旅に出る」
「え？　また、ですかい」
「こんどは、いささか遠方になる」
「いささか遠方、ったって、出羽国よりも、遠いところってえと……、まさか、蝦夷じゃござんすまいね」
金八は、地図というしろものなど、まだ生れてこのかた見たことがなかったので、そ

れが清国のものとは、知らなかった。
狂四郎は、隣家の大工の内儀（かみ）さんがはこんでくれた夕餉の膳（ぜん）から、箸（はし）を一本把（と）ると、
「ここが、江戸だ」
と、教え、すうっと、地図の上を引き、高砂（台湾）わきを抜け、清国の広州を示した。
「旦那！」
金八が、血相を変えた。
「旦那ともあろうおかたが、あの黒ン坊野郎に、そそのかされなすったんですかい?!　冗談じゃねえや！　あん畜生！　旦那が、どこか途方もねえ遠方へ行く八卦（はっけ）が出ているが、そいつは大凶だから、どうしても逢（あ）って止（や）めさせてえ、とうめえことをほざきやがって、おれに、旦那をさがさせやがったが、くそったれ、一杯食わせやがったな！　あのかたり千里眼め！」
「そそのかされたのではない。わたしが、他人の口車に乗せられる人間かどうか、お前の方が先刻承知のはずだ。……海の彼方（かなた）へ出かけるのは、わたしの意志だ」
「そいじゃ、あっしも、お供をしやすぜ。地獄の底まで、一蓮托生（れんたくしょう）だあ！」
「金八、わたしの乾分（こぶん）気どりならば、この女ばかりではなく、よけいな者まで、ここに案内するのは、止（よ）したがいい」

狂四郎は、冷たく薄ら笑った。
金八は、悖(ぎょ)っとなって、戸口を振りかえった。

三

開閉すれば、がたがたと鳴るはずの破れ戸が、いつの間にか、音もなく開けられていて、おもてに、墓の下から現われたような、唖(おし)で隻腕(せきわん)の手裏剣撃ち、時雨(しぐれ)左馬之助が、この六畳間の行燈(あんどん)の仄明(ほのあか)りを受けて、佇立(ちょりつ)していた。
まさしく、宵闇(よいやみ)の中のその姿は、生ける亡霊であった。
「と、とんだ付馬(つけうま)を、連れて来ちまったあ！……旦那、面目ねえ、かんべんしておくんなさい」
金八は、畳へ両手をついて、平蜘蛛(ひらぐも)になった。
「お前が連れて来ずとも、いずれ、わたしの前に現われて勝負を挑むだろう、と予想はしていた」
狂四郎は、無想正宗を把(と)って、起(た)ち上った。
「やるんですかい、先生？……この化物は、先日、仙太の家へやって来て、戸口から、庭にいる六匹の犬の中で、しろの前脚を撃つ、と予告しやがって、その通りに、手裏剣でしろをびっこにしやがった。風体(ふうてい)そのままの悪鬼羅刹(らせつ)ですぜ」

「人によっては、この人物よりも、わたしの方が、悪鬼羅刹と、目にうつるかも知れぬ。……金八、案内したついでに、勝負に立ち合ってもらおう」
「へ、へい」
金八は、よもや狂四郎が敗北するとは思わなかったが、なにさま、対手の手練ぶりを目撃させられているだけに、早鐘のような動悸を起していた。
狂四郎は、べつだん好んで挑戦を受けるのではないならわしとして、試合場所をこちらできめて、時雨左馬之助をともなった。
えらばれた場所は、蛇骨長屋の隣りの、広い池泉でへだてた伝法院の境内であった。
裏門を入ると、本堂横手の、右方に六つの末寺の土塀がつらなり、左方が池泉の境内は、数千坪のひろがりを、月下に浮かばせていた。
「金八、納所にたのんで、事情を述べ、篝火を二つばかり、焚け」
狂四郎は、命じた。
「へい」
「決して、境内を血でけがさぬ旨も、ことわっておけ」
「………？」
無想正宗と手裏剣との試合を行なって、境内の地面を血汐で染めずにすませられる道理はないであろうに、狂四郎は明言したのである。

……やがて。

左右に、あかあかと篝火が焚かれて、狂四郎は池畔側に、時雨左馬之助は末寺の土塀側に、十数歩をへだてて、対峙した。

狂四郎は、左馬之助に、云った。

「この試合、意趣遺恨によって行うものではない。殺し合う必要はあるまい。いずれの業がまさっているか——それを、あきらかにすればよかろう。……受けて立つこちらに、やりかたをまかせてもらうことにする」

左馬之助は、大きくうなずいた。

「金八、わたしに向い合って、立て」

「へ、へい」

「右手を、まっすぐ水平に、わたしにむかってさし延ばせ。そして、掌を、飛んで来る手裏剣に対して、的にしろ」

「先生っ！　こ、この右手は、あっしの商売道具——いのちの次に大切なしろものですぜ！」

「刺し貫かれたら、商売がえをして、仙太の弟子にでもなって、泥こねでもやることだ」

冷酷な言葉に、金八は、かあっと熱い血が、頭にのぼった。

しかし、命令したのは、ほかならぬ眠狂四郎であった。

——おれの生命は、とっくのむかしに、この旦那に呉れているんだ！

金八は、くそ度胸をきめると、右手をまっすぐ水平にさしのばして、掌を立てた。

狂四郎は、左馬之助に、

「この男は、江戸で屈指の掏摸だ。お主に、掌へ手裏剣を撃ち込まれたならば、稼業を廃さねばならぬ。……お主の業を、わたしが、はばむことができるか否か——これが勝負になる。距離は、そちらにまかせる」

と、云った。

左馬之助は、再び、大きくうなずいた。そして、それなり、一歩も距離を縮めようとはしなかった。

金八は、左馬之助の右手が、懐中から手裏剣を取り出すのを、横目で、ちらと視やって、ぞくっと悪寒をおぼえると、あわてて、視線を、向い立った狂四郎へもどした。

狂四郎は、眼眸を金八の掌へあてて、両手をだらりと下げたなりであった。

金八は、ぎゅっと目蓋を閉じた。

——南無っ！　八幡っ！　先生、おねげえしやす！

……ひとつ、ふたつ、三つ、四つ、五つ、とかぞえることで、金八は、激しい動悸を抑えようとした。

抑えるどころか、かぞえるにつれて、逆に、動悸は、高鳴り、速くなった。

四

……十九！　二十！　二十一！

瞬間――。

鋭い金属音が、寂寞の夜気を破った。

ぱっ、と双眼を一杯にみひらいた金八は、狂四郎が抜いた無想正宗を、ゆっくりと鞘に納めるのを視、それから、足もとに落ちた手裏剣をみとめた。手裏剣は、くの字に曲っていた。峰打ちに撃ち落したのであった。

「やったあっ！」

金八は、叫んで、はねあがった。

時雨左馬之助は、しばらく、その場に佇立していたが、狂四郎に向って、鄭重に頭を下げておいて、踵をめぐらし、篝火のあかりの外へ、姿を消して行った。

「旦那！　先生っ！　あっしゃ、この勝負、こっちの勝ち、とちゃんとわかって居りやしたぜ。へっ！　眠狂四郎が勝つのは、あたりき、しゃりきの千里の一騎だあ」

たすかった悦びで、息をはずませて云いたてる金八だったが、狂四郎はふところ手にもどって、歩き出し乍ら、

「いや、こちらは、負碁の打ちよさにすぎなかった」
と、云った。
負碁の打ちよさ、とは、勝ちを望まなければ気楽に打てる、という意味である。
「今更、へりくだるこたァありやせんや」
「謙遜ではない。心気の冴えでは、あの唖浪人の方が、まさっていた。わたしに、お前の右手を不具にさせぬ自信はなかった」
そう云われて、金八は、自分の右手に、ぐさっと手裏剣が突き刺さったのを想像して、思わず、ぶるっと身ぶるいした。
裏門をくぐって、広小路に出ると、狂四郎は、
「ここで別れる」
と、告げた。
「別れるって、……あっしの家へ、もどらねえと仰言るんですかい？」
「うむ」
「冗談じゃねえ。……するってえと、あの女を、どうしたらいいんで——？」
「お前に、まかせる」
「まかせるったって、身請したのは、旦那ですぜ！」
「身の振りかたまでは、考えてやって居らぬ。だから、お前に、まかせる、というの

だ」

「そんな殺生な！　あの女は、先生に惚れてますぜ。仙太のところから連れて来るあいだに、はっきりとわかったんでさ。……せっかく、身請してやったんだから、二晩か三晩ぐれえ、抱いて寝てやるのが、慈悲というものでさあ」

「わたしに、慈悲をのぞむのか、金八？」

「知っていまさ。女になさけは、かけねえ旦那だということは、百も合点、千も承知の上で、おねげえしているんでさ。……どうせ、今夜あたり、吉原か深川の岡場所で、寝なさるんだろうから――、それぐれえなら、いのちがけで、逃げ出して来たあの女を、抱いてやっても、なにも、罰はあたらねえ、と思いやすがね」

「…………」

狂四郎は、こたえずに、蛇骨長屋とは反対の方角へ、歩いて行く。

金八は、跟いて行き乍ら、

「いけやせんかねえ。せめて、一晩でもいいから……」

と、たのんだ。

こうした場合、ひとたび無言になったら、こちらのたのみなど絶対に肯いてくれぬ石のような狂四郎であることを、金八は、わかりきって居り乍らも、くどいてみないではいられなかった。

花川戸まで来て、金八は、ようやくあきらめて、足を停めた。

「先生っ！　あっしが、代りに抱いて、また、吉原へ売りとばしても、かまわねえんですかい？　え、それでも、よござんすね！」

大声で、叫んだ。

狂四郎の返辞は、ついに、なかった。

「ちぇっ！」

舌打ちした金八は、しかたなく道をひきかえし乍ら、

「あの女の辻占は〝察しておくれ〟ってえやつだぜ。くもるばかりで目は口ほどに物が云えない別れ際――肚でばっかりもの想い、と来やがらあ」

と、吐き出しておいて、大きなくしゃみをした。

奇襲坂

一

端午（五月五日）の祝儀を明日にひかえて、大名各家では、恒例により、将軍家へ粽を献上すべく、台所賄役の指揮のもとに、身をきよめた料理方たちが、精進こめて、それをつくっていた。

留守居役は、寄合の組の中の、初節句を迎える嫡子を持つ大名家へ、進物しなければならなかったので、それらの品を吟味していたし、また、端午の日を境にして、礼服は帷子になるため、屋敷の奥向でも長屋でも、女子たちは、その仕度に忙殺されていた。

そのあわただしい宵――。

佐竹家上屋敷の江戸家老の家では、佐竹勘解由が、几上にひろげた一通の手紙を、睨んで、動かずにいた。

水野忠邦の側用人・武部仙十郎から、とどけられた密書であった。

とどけられて一刻（二時間）が経っていたが、その一刻を、勘解由は、身じろぎもせ

ずにいるのであった。

密書は、箇条書きにされた通達であった。

一、佐竹家にて仕立てた抜荷船は、関船（軍船のこと）として役に立たざるゆえ、当方にて造りたる偽装北国船を、江戸へまわし、佃島の住吉神社傍の風避場に碇泊せしめること。

一、乗り組む船頭ならびに水主どもは、当方にて、一人のこらず選ぶゆえ、これまた、佐竹家では心配無用のこと。

一、車善七が某所に隠匿せる私鋳の清国一両銀および秋田名産物を、佃島へ隠密裡に運ぶのは、江戸家老たる其許の責任に於て為すこと。但し、車善七とその手下どもを、船に乗り組ませるのは不可なること。

一、清国米の輸入、秋田名産物の輸出に関する限りに於ての交易宰領者を、佐竹家が出すのは、異議なきこと。但し、宰領者に随行する家士は、三人以内にとどめること。

この通達は、全く一方的な命令であった。そればかりではなく、水野家の方で、はたしてどれだけの頭数の家中を乗り組ませるのか、何か別の密輸品を積むのかどうか、ま

た、どのような密貿易方法をとるのか、一切知らされないのであった。
勘解由に、はっきりと判(わか)るのは、総指揮権をにぎるのは、水野家から乗り組む家中の一人に相違ない、ということだけであった。
――狸爺(たぬきじじ)いめ！
本丸老中の側用人の『命令』を、拒絶できぬ憎悪と焦躁(しょうそう)が、勘解由の心中で、渦を巻いていた。
「ご家老様――」
不意に、縁側から、呼ばれて、勘解由は、われにかえった。
障子戸は開けはなってあり、そこに両手をつかえているのが、出府(しゅっぷ)した横目・七草喜久左衛門であるのをみとめて、
「入ってよい」
と、許した。
この老横目の娘の裏切り行為によって、こちらは、のっぴきならぬ窮地に追い込まれたのである。それというのも、喜久左衛門が、志津乃を、国許から、眠狂四郎に同道させたのが、まちがいのもとだったのである。
勘解由は、しかし、出府して来た喜久左衛門を、一言も叱責(しっせき)していなかったし、憎んでもいなかった。

老横目は、おのが一人娘を生贄にしてまで、主家の秘密を守ろうとしたのである。
責任を問うとすれば、目付筆頭の万座庫之助であった。その無能ぶりを咎めて、目付筆頭の座からひきずりおろして、面罵してやりたかった。
万座庫之助が、鋭敏な頭脳の持主であったならば、幾十人の犠牲者を出そうとも、眠狂四郎を生かして、領内から去らせはしなかったに相違ないのである。
「お主の娘は、お主が与えた懐剣を、返して寄越したそうだな」
勘解由は、平静な面持と語気で、云った。
「この皺腹をかき切って、お詫びできるものならばと存じまする」
「いま、腹を切れば、犬死に相成るだけだ」
「身共も、左様に心得て、ご家老様のご指示を仰ぎたく、罷り出ました」
勘解由は、庭さきに人の気配を感じて、視線を向けた。
郡参平が、沓石前にうずくまっていた。喜久左衛門が、連れて来た、と察しがついた。
「ご家老様！」
喜久左衛門が、きびしい表情で、云った。
「この郡参平に、ご老中の側用人を暗殺するお役目をお命じ下さいますまいか？」
「もはや、手おくれだな」
「………？」

「あの狸爺さんは、只者(ただもの)ではない。打つ手はすべて打ち、おのれ自身が、いつ暗殺されてもかまわぬようにして居ろう」

そう云ってから、勘解由は、急に思いつき、

「喜久左衛門、切腹する代りに、抜荷船に乗ってもらおうか」

「はあ――？」

勘解由は、武部仙十郎が寄越した密書を、老横目に渡した。

一読して、喜久左衛門は、顔色を一変させた。

「これは、なんということでござろうか！」

「申し入れ条項を拒絶できぬことは、お主にも判ろう。……交易宰領者には、お主を命ずる」

と、云(い)いおいて、勘解由は、参平を眺めやり、

「参平、お前は、喜久左衛門の添役となって、清国へ行け」

と、命じた。

二

同じ日――。

武部仙十郎は、下城して来たあるじ越前守(えちぜんのかみ)忠邦に向って、

「殿――、殿を御勝手掛にお就けするための軍資金づくりの目途が、やっと、つきましてござる」

と、報告した。

「爺い、四年も五年もは、絶対に待てぬぞ」

忠邦は、云った。

先月、この件についての問答の際、仙十郎は、四五年うちに、と云ったのである。

「なんの、来春までには――いや、早ければ、今年うちにも、つくってごらんに入れましょうぞ」

「よもや、千代田城内のご金蔵から、盗み取る、などと申すのではあるまいな？」

「ふふふ……、天下人のお家の備金は、大坂の鴻池屋の蔵に積んだ千両箱よりも、すくのうござるわい」

「手段をきかせい」

「なろうことならば、殿のお耳に入れとうはござらぬ」

「わしを聾にしておくつもりか？」

「賄賂金づくりなど、殿はご存じない方が、よろしゅうござるわい。知らぬが仏で、この爺いめにおまかせ下され」

「その手段、露見いたせば、わしの地位があやうくなる、という危険を冒すのであれば、

許さぬぞ」
「殿のお言葉ともおぼえ申さぬ。この爺いが、何条もって、そのようなあぶない橋を渡り申そうや。……決して、露見などいたしませぬて。よし万が一、露見いたしたとしても、外様大名が一人、改易になるだけの話でござる」
「……………？」
「殿――、ご幼少の頃からお仕えしたこの爺いを、まだ、お信じにはなれませぬかな？」
「いや、信頼して居る。爺いのことだ。熟慮に熟慮を重ねた挙句、非常の手段をとる、と思うて居る」
「ならば、何もおききなさらずに、おまかせ下され。……ただ、ひとつだけ、お願いがござる」
「なんだ？」
「若年寄の中で、小笠原相模守殿だけには、そっと、頭をお下げ下され。おねがいつかまつる」
小笠原相模守長貴は、越前勝山（二万二千石）の城主で、豊前小倉（十五万石）の小笠原家の支藩であった。
仙十郎は、側用人として、あるじが、幕閣内で、同僚――老中たちに、腹蔵なく打明

けて語れる親友を持たず、下僚の大半が前の老中首座・水野出羽守忠成の股肱(ここう)たちであることを知っていた。

寛政の改革をやった松平定信は、田安宗武の子であり、八代将軍吉宗の孫であった。したがって、定信の味方として、尾州・紀州・水戸のご三家がいたし、また、幕閣内に、心を許し、援護してくれる松平伊豆守信明、本多弾正忠籌(ただかず)、戸田采女正(うねめのしょう)氏教(うじのり)がいた。

水野忠邦には、そういう後盾(うしろだて)も同志もいなかったのである。定信とは反対に、老中首座に就いたならば、血祭にあげるべき敵が、一人二人ならず、多勢いたのである。

さいわいに――。

若年寄・小笠原相模守長貴だけは、仙十郎が、あるじが唐津城主から浜松城主に移封された後も、その主藩である小倉の小笠原家に対してさまざまな工作をやって機嫌をとっておいたおかげで、忠邦に味方する態度をみせていたのである。

「相判(あいわか)った。そういたそう」

忠邦は、承知した。

しかし、仙十郎が、何故(なにゆえ)に、若年寄の末席にいる小笠原長貴の機嫌をとれ、とたのむのか、見当もつかなかった。

小笠原長貴は、むしろ、毒にも薬にもならぬ、若年寄としては、父近江守(おうみのかみ)貞温が若年寄であったおかげで、その席に就くことができただけの温厚な人物だったのである。

ただ――。

同じく小倉城主の支藩である小笠原家が、忠邦が唐津をすてて遠江浜松に移った後を襲って、その六万石に移封されている因縁もあった。

――この爺いは、主藩・支藩の各小笠原家に対して、なにやら、恩をきせて、貸をつくって居るらしい。

忠邦に、推測できたのは、それだけであった。

三

長屋へ戻って来た仙十郎に、用人が当惑した様子で、

「唐津唐兵衛と申す男が、阻止するのも肯き入れず、招かれたからやって来た、とうぞぶいて、書院に上り込んで居りますが……」

と、報告した。

「ほう、早速に参ったか」

仙十郎は、にやりとした。

書院のまん中に、大胡座をかき、双肌脱いだばかりか、裾もまくって、おそろしく濃い胸毛・臑毛をむき出し、象牙製らしい大きな扇子をつかっている巨漢がいた。

頭を剃りあげて一髪ものこして居らず、口髭頤髯だけが、もの凄かった。皮膚の色は、

目下この家に逗留(とうりゅう)している宝瓶宮黒人(ほうへいきゅうくろひと)と同じくらい黒かったが、これはあきらかに、潮灼(しおや)けしたものであった。

この巨漢にとって、唯一(ゆいいつ)の愛嬌(あいきょう)は、双眸(そうぼう)が、象の目のように、小さく丸いことであった。

「もうそろそろ、ご用命がある頃だ、と思うとりましたばい」

唐津唐兵衛と名のる男は、仙十郎が座に就くと、そう云った。べつに、正座しようともしなかった。

「お主に、十七年にわたる海賊稼業(かぎょう)の豊富な経験を、役立ててもらう秋(とき)が、いよいよ到来した」

「いい加減、待ちくたびれて居りましたばい」

唐津唐兵衛は、豪快な笑い声をたてた。

十八年前、この男は、肥前唐津で、漁師、農民千数百人をそそのかして、一揆(いっき)を起した主謀者であった。

飢饉(ききん)による米乞(こめご)いの一揆ではなかった。それは、前代未聞(みもん)の奇妙な暴動であった。

城主水野越前守忠邦が、国替を幕府に申請したのに対する反対運動であった。

水野家が、唐津城主になってから、忠邦の代に至るまで、五十余年を経ていた。

唐津は、表高は六万石であったが、実際の収穫は二十数万石といわれ、さらに漁業そ

の他の物成（ものなり）が豊かであった。そのうえ、唐津城主は、長崎御固め十八家の一人であったので、江戸城とか日光東照宮はじめ、寺社の修築、あるいは河川工事のいわゆる『お手伝い』という課役からのぞかれていた。大名にとって、これほど最良の封地はなかった。

ただ——。

徳川幕府の慣例として、長崎御固め衆は、たとい閣老になれる家柄であっても、加判の列に登用されなかった。

越前守忠邦は、幕閣に入って、政権をつかむ野心に燃えていたので、敢（あ）えて、富み栄えた唐津をすてて、別の領地を、公儀に乞（こ）うたのであった。

文化十四年九月十四日に、幕府から、忠邦に対して、遠州浜松六万石に移封の沙汰（さた）があった。

重臣はじめ、下卒に至るまで、この移封には大反対であった。同じ六万石でも、浜松と唐津とでは、雲泥（うんでい）の差があったからである。

五十余年間、水野家の当主たちは、善政を敷いていたので、領民全員も、忠邦の身勝手をうらんだ。

そして——。

移封に反対する一揆が起ったのである。主謀者は、五両三分二人扶持（ぶち）の徒士（かち）・米倉新八郎という、まだ二十三歳の若者であった。

一揆勢は、三日間で鎮圧され、米倉新八郎は捕えられた。
磔刑になるべき大罪であったが、忠邦の側用人・武部仙十郎が、おのが一存で、米倉新八郎を解き放ってやり、
「海賊となれ」
と、命じたのであった。
米倉新八郎の後身が、すなわち、この唐津唐兵衛であった。
「では、いかなる仕事か、うけたまわりましょうばい？」
「抜荷船の船長となって、清国へ行ってもらう」
「ほう！　ご公儀が、自ら方針を変えて国禁を破られるとな？」
「いや、これは、わがあるじの企図ではない。棺桶に両足を突っ込んだこの武部仙十郎の独断による最後のご奉公じゃ」
そう云って、仙十郎は、にやにやしてみせたことだった。

四

一夜が明けると、江戸市中の空には、いたるところに、吹き貫きの鯉や絵幟がひるがえり、矢車の音がせわしく鳴った。
往還には、それぞれの師の許へ祝賀を述べに、新調の晴れ着をまとった男の子たちが

行き交うていた。武家の子弟は、供を連れていたが、町人の倅(せがれ)は、たとい、五歳でも、親に手をひかれたりなどせず、教えられた通りに、しゃんと頭を立て、胸を張っていた。職人たちは、のこらず、節句休みをしているために、この日ばかりは、往還は、八割がた子供たちで占められていた。

どこかへ進物をとどけに行く大人たちも、盛装して居り、正月以来のはれやかな風景であった。

それだけに、黒の着流しに、ふところ手で、道をひろう眠狂四郎の姿は、殊更(ことさら)に異端者として目立ち、すれちがう子供はもちろん大人にも、思わず、不吉なおそろしい人間に出会った怖気(おじけ)をおぼえさせた。

湯島二丁目から聖堂わきを抜けて、その門前を西へ、お茶之水に至るゆるやかな坂道を辿(たど)りはじめた時であった。

行手から、十歳ばかりの少年が、大手を振って、袴(はかま)を鳴らし乍(なが)ら、近づいて来た。大きな商家の息子ででもあろうか、いかにも腕白大将らしい様子であった。

狂四郎をみとめても、べつに怯(おび)えた表情もみせず、まっすぐに近づいて来た。

距離が、数歩にせばまった——瞬間。

少年の口から、朝陽に炳(きら)っと煌(かがや)くものが、噴いて、狂四郎の顔面めがけて、飛んで来た。

とっさに――。
狂四郎は、左手で、双眸をかばったが、袖から抜き出す秒間だけ、おくれた。吹き針数本のうち、一本が、ふさいだ左眼の目蓋に突き刺さった。
その疼痛をおぼえるいとまもなく、背後から放射されて来た殺気に合わせて、無想正宗を、五体を旋回させるよりもさきに、きえーっ、と後方へ振った。
左眼の目蓋から、吹き針を抜きとって、右眼をひらき、背後から襲って来た敵が、地面に斃れているのを、一瞥した刹那、
――これは！
狂四郎の胸に、名状しがたい衝撃が来た。
敵は、吹き針を飛ばして来た少年よりもわずか、二つ三つ年かさの少年だったのである。
右手に小刀をつかんで、突きかかった瞬間のまま、さしのばして、事切れていた。
――子供を、刺客に使うとは！
暗然として佇立する狂四郎に対して、前後から、目撃者たちの驚愕と非難の視線が、集中した。
挟撃して、生き残った少年の方が、斃れた仲間へ、奔り寄って、悲痛な声音で、その名を呼んだ。

黙って、狂四郎は、その場をはなれた。

行手にいた目撃者たち――大半は少年であった――は、恐怖と憎悪(ぞうお)の目で、狂四郎を睨(にら)みつけつつ、道をあけた。

「鬼っ！」

一人の少年の口から、その叫びが投げられるや、堰(せき)を切ったように、罵詈(ばり)が、狂四郎の後姿めがけて、あびせかけられた。

小石も、投げつけられて来た。

幾個かが、からだに当ったが、狂四郎は、その痛みも目蓋の疼(うず)きも、おぼえはせず、ゆっくりと歩きつづけた。

一瞬、狂四郎の足が停められた。

斃れた仲間のそばにうずくまっていた吹き針の少年が、不意に叫ぶのを、ききわけたからである。

「お止(や)め下され、皆の衆！　これは、われら二人の方からの襲撃でござった！　そのご浪人が、わるいのではござらぬ！　われらの襲撃が、失敗したのでござる！」

眠狂四郎が、その足で訪れたのは、先日まで居候(いそうろう)していた池之端(いけのはた)仲町・二十軒店(だな)の左官・仙太の家であった。

節句休みではなくても、働く気のない仙太は、肱枕（ひじまくら）でごろ寝をしていた。犬も猫も、あるじをみならって、彼処此処（かしこここ）で、寝そべっていた。

「誰でえ？」

人の上って来た物音で、ごろっと寝がえった仙太は、とたんに、はね起きた。

「旦那（だんな）っ！　どうなすったので――？　お顔の色が、ただの色じゃありやせんぜ。お加減がわるいのなら、あっしが、ひとっ走り、医者をつれて来やすが……」

狂四郎は、坐（すわ）って、しばらく、鳥籠（とりかご）の中で、同じ動きをくりかえしている四十雀（しじゅうから）へ、虚（むな）しい眼眸（まなざし）を送っていたが、やがて、

「生れてはじめて、十二三歳の少年を、斬（き）り殺して来た」

と、呟（つぶや）くように云（い）った。

「なんですって⁈」

仙太は、あっけにとられて、狂四郎を見まもった。

狂四郎は、それきり、腕を組んで沈黙した。

挟撃して来た二人の少年が、柳生武芸党と称する公儀隠密団（おんみつだん）から放たれて来た者たちであることは、明白であった。

大和国小柳生庄の征木坂（まさきざか）道場では、幼学の少年まで、隠密として使う修業をさせていたのである。

女駕籠（かご）

一

今更（いまさら）、説明するまでもないことであろうが、各大名は、江戸に上屋敷・中屋敷・下屋敷を所有していた。

一万石の大名で、その敷地の広さは、五十間四方であったから、十万石、二十万石の大名ともなると、その構造はきわめて宏大（こうだい）なものであった。

水野越前守（えちぜんのかみ）忠邦は、所領六万石であったが、外桜田の老中邸に住んでいたので、三十万石以上の大名の上屋敷を上回る宏壮さであった。

その宏壮な老中邸内に、家臣の大半が住んでいた。

表長屋には、開き門のある家老屋敷はじめ、側用人（そばようにん）、大目付、留守居役、物頭（ものがしら）などの上級の士が住む一戸建ての、庭も書院もある立派な家がならんでいた。

側用人・武部仙十郎の家は、玄関、書院、八畳の座敷、六畳の居室と寝室、そのほか長四畳の三部屋あまりに加えて、二階に二室があった。

眠狂四郎にともなわれて、かくまわれている宝瓶宮黒人(アクエ・アリアスくろひと)という黒い異邦人は、武部家の二階の二室を与えられていた。破格の厚遇であった。

眠狂四郎が、その二階へ——跫音(あしおと)もなく、のぼって来たのは、湯島聖堂門前で、柳生武芸党の放った十二三歳の少年を斬った端午の佳節の夜半であった。

宝瓶宮黒人(ほうへいきゅうくろひと)は、睡(ねむ)っているどころか、狂四郎が、すうっと部屋へ入って来るのを、待ちかねていて、

「わたくしは、貴方(あなた)が今夜、やって来ること、予知していました」

と、云った。

狂四郎が座に就くと、黒人は、じっと見まもって、

「貴方は、今日、貴方にあるまじきおそろしい行為をしました。……わたくしは、貴方の毎日の運勢を、貴方の天宮図(ホロスコープ)で占っています。当りましたか？」

「わたしは、生れてはじめて、十二三歳の少年を斬った」

「貴方が冷酷で非情であったわけではないでしょう。しかたのなかったことではありませんか」

「しかたがなかったでは、すまされぬことだ」

狂四郎は、おのれ自身に対するきびしい姿勢を、語気にこめて、云った。

「この無想正宗は、まぎれもない凶剣だが、いまだ曾(かつ)て、元服前の少年の血汐(ちしお)を吸わせ

たことはなかった。……襲撃したのはこちらではなく少年の方であった、という弁解で、忘れすてることはできぬ」
「貴方の性格では、そうでしょうが……」
「わたしが、ここ数日うちに、自ら身をはこんで、死地に入る日があるはずだ。その日と、死地がどのあたりか、お手前に予知して頂こう」
狂四郎は、たのんだ。
占星学を修得したこの黒い異邦人は、先月上旬、自分と同じような孤独な異端者と親しい知己になる、と予知して、鹿島灘にそそぐ那珂川を、小舟でさかのぼり、奥州街道の越堀宿の石橋から落下して来た狂四郎を救ったのである。
狂四郎としては、いまだこの異邦人の西洋占星学というものを信じることに抵抗する気持があったが、柳生武芸党の江戸拠点が見当もつかぬいまは、宝瓶宮の予知力にたよるよりほかはなかったのである。
「眠さん、貴方が、生きるか死ぬかの境に踏み込むのは、明後日です」
宝瓶宮は、確信のある即座の返答をしてみせた。
「しかし、敵のいる場所がどこか、わたくしには、判りません。貴方自身が、つきとめなければなりません」
「………」

「貴方は、自分からすすんで、其処(そこ)へ行こうとしています。だから、貴方自身で、つきとめなければならないのです」

「…………」

宝瓶宮は、かるく一揖(いちゆう)しておいて、次の間へ、身を移した。

狂四郎は、双眸(そうぼう)を宙に据えて、身じろぎもしなかった。

およそ四半刻(はんとき)、静寂の時間が流れ過ぎた。

と――。

狂四郎の右手が、傍らに置いた無想正宗を、把(と)った。なかば、無意識の動作であった。

次の瞬間、それは、鞘毎(さやごと)、天井めがけて、投げ上げられた。

無想正宗は、鯉口をきられていないにもかかわらず、さながら生きもののように、天井に一尺あまりの空間で、するりと鞘から抜け出て、落下して来た。

狂四郎は、ちょうど胸前に於(お)いて、その柄(つか)をつかんだ。

無数の人命を奪った白刃(はくじん)は、斜横水平に停止し、切先で壁の一点を差した。

とたん、次の間から、宝瓶宮が云った。

「そうです。敵のいる場所は、その刀が示している方角です。貴方の天宮図にある災厄の星・天王星に、運行中(トランシット)の凶刃(きょうじん)と陰謀の星・火星が重なる位置が、天宮図でいう東北の方角にあたるからです。でも、西洋占星学では、方位はあまり重視しません。でも、

その刀の向きを見て、わたくしが想像していた方角と同じなのでぞうっとしました」

二

今年は、梅雨が早く来て、端午を過ぎても、なかなかあがりそうもなかった。五月晴れは、端午の節句、一日だけであった。

この日も、朝からしとしとと降りつづき、午後おそくなって、一時歇（や）んだが、いつまた降り出すかわからないので、通行の人々の手には、みな、傘があった。

傘を持たず、ふところ手で往（い）くのは、眠狂四郎だけであった。

浅草寺（せんそうじ）裏手から、日本堤へ出る田野の中の道を辿（たど）っていた。吉原の廓（くるわ）へ通う道のひとつであった。

日本堤をすぐむこうにした地点で、左右は田町二丁目の商家通りになり、いわゆる編（あみ）笠（がさ）茶屋がならんでいた。

「もし――、卒爾（そつじ）乍（なが）ら、眠狂四郎様とお見受けつかまつります」

とある編笠茶屋の中から、声がかかった。

視線を向けると、宗匠頭巾（ずきん）をかぶり、蟬（せみ）の羽のような透けた袖無しを羽織った、四十年配の柔和な顔つきの男が、出て来た。

「てまえ、裏千家・千好室でございます。何卒（なにとぞ）、お見知りおきのほどを……」

「………」

「廓でご遊興でございましょうが、おさまたげして申しわけございませぬ。お姿をお見受けして、急に、貴方様に、お願いごとを思いついたものでございますから……、てまえの話だけでも、お耳にお入れ下さいますまいか？」

「………」

狂四郎は、黙って、編笠茶屋に入ると、衝立のむこうの小座敷に上った。

裏千家・千好室と名のる人物は、卓子をへだてて坐ると、

「はばかりある儀ゆえ、西国の、さるお大名、とだけ申し上げておきましょう。禄高は二万石ばかりでございますが、松平とお名のりなさいます、三河譜代の名家でございます。……てまえは、ここ七年あまり、お出入りして、奥方様に、茶道をお教えいたして居ります。奥方様は、今年二十五歳におなりでございますが、お気の毒に、お世嗣ぎがお生れになりませぬ。……ところが、三年前、御国許で、御国御前に、男子がご出生でございました」

御国御前というのは、領地に置いてある正室に准ずる側室であった。

当時の武家の相続法は、正妻が嫡子を産めば、不具者・病弱でない限り、たとい妾腹の子の方が優秀でも、廃嫡にされることは、まずなかった。また、妾腹の子は、あとから正妻が子を産むと、次男に格下げされて、長男としての相続権がなくなったのであ

る。

「ここに、お気の毒なことには、お殿様のご寵愛は、御国御前に移されてしまい、中すもはばかること乍ら、奥方様との夫婦の契りは、以来、全くなくなって居りました。……奥方様は、今春——三月はじめ、お殿様が、参府交代で、御国許へお帰りになるにあたって、特に乞われて、三夜、閨をともになされた由でございます」

「………」

「奥方様は、その三度の夫婦の契りで、懐任したことにしたい、とこのてまえに、ひそかにお打明けなさいました」

「………」

「さりとて、定府のご家中からえらんで、お閨にお呼びなさり、本当にご懐妊なさることは、とうていできぬ相談でございます」

「………」

「そこで、定府のご家中に絶対内密裡に、お家とは全く無縁の一人の男子をえらんで、そっと下屋敷へ招き、奥方様は、男女の営みを為して、なんとしても、懐妊したい、とてまえにご相談なされたのでございます」

「………」

「てまえは、たった今、貴方様をお見かけしたとたんに、——この御仁ならば、かたく

秘密を守って、奥方様と契って下さる、と白羽の矢を立てたのでございます」
いわば、御家騒動の原因をふせぐために、狂四郎に、種馬の勤めをして欲しい、という、途方もない申し入れであった。
「この無頼の浪人をえらんだ理由は――？」
狂四郎は、何気ない口調で、訊ねた。
「御国御前のお子は、大層利発なご気象ときき及びます。……貴方様がつくられるお子は、お国許のお子にまさる秀れた頭脳と体格を持った和子に相違ないと、てまえは確信つかまつります」
狂四郎は、ちょっと沈黙を置いてから、訊ねた。
「その西国大名の下屋敷が、どの方角にあるのか、うかがおうか？」
「どの方角⁈」
裏千家・千好室と名のる人物は、一瞬、怪訝な表情で、狂四郎を視かえした。
たしかに、狂四郎の質問は、唐突で奇妙なものであった。
こういう場合、まず、諾否を思慮すべきにもかかわらず、狂四郎は、突飛ともいえる質問をしたのである。
「何故に、方角をお尋ねなさいます？」
「目的のない時は、足の向くままにまかせるが、押しつけられた仕事をやりに往く際は、

方角によって、成否を占うことにしている」
「これァまた……貴方様のような御仁でも、縁起をかつぐこともおありなさいますか」
「買いかぶってもらうまい。ただの凡夫に過ぎぬ。かぞえきれぬほど、多くの人をあの世へ送っている身は、絶えず怨霊（おんりょう）が背に掩（おお）いかぶさっているのを意識している。縁起をかつぐことにもなる」
「ご尤（もっと）もでございます。……それでは、その下屋敷のある方角だけを、お教えすればよろしいのでございますね。おことわりするまでもなく、そのお大名が何家か、これは、てまえの舌がちぎれても、打明けるわけには参りませぬ。……左様、申さば、このお願い事は、てまえ一存の賭（かけ）でございます。もとより、奥方様には、貴方様が誰人であるか、決して、お教えはいたしませぬ。……貴方様にお願いしても、はたして、ご懐妊になるかどうか、これは神様のみがご存じのさずかりものでございますし、また、首尾よくご懐妊なさいましても、あるいは、お生れになるのは、お姫様（ひいさま）の方かも知れませぬ。……ただ、てまえは、偶然、ここで、貴方様をお見かけしたとたん、ふっと、この眠狂四郎という御仁ならば、と直感を働かせた次第でございます。貴方様ならば、必ずこの秘密はお守り下さいましょう。……まことに、失礼乍（なが）ら、お礼は、千両ということにいたします。おのぞみなら、すぐに、使いを趨（はし）らせて、半金を持参いたさせましょう」
「わたしは、方角はどちらだ、と尋ねているだけだ」

三

それから、いくばくかの後、引戸のある青漆の駕籠が二挺、山谷浅草町の田野の中の道を、乾（北西）の方角へ向って、進んでいた。大奥の身分のある女中または、大名の正室、息女などの用いる女駕籠であった。

うしろの駕籠の中には、狂四郎が、無想正宗を抱いて、目蓋を閉じていた。

狂四郎には、行き着く処は、はっきりと判っていた。

それは、決して、徳川家から松平姓を名のるのを許された某西国大名の下屋敷ではなかった。（註。松平姓を名のるのを許された大名は、譜代・准譜代で、かぞえきれぬほどあった。外様であっても、薩摩の島津家も、広島の浅野家も、加賀の前田家も、松平姓を与えられていた）

昨夜半、狂四郎は、その屋敷をつきとめていたのである。

一昨日、外桜田の水野忠邦邸内の武部仙十郎宅の二階で、無想正宗の切先が差した方角は、艮（北東）であった。江戸の地図をそらんじている狂四郎は、夜道を辿って行き、千住大橋に至ったのであった。

隅田川を渡ると、千住掃部宿に入る。掃部宿に入った地点で、

——そうか！

と、狂四郎は、直感が働いたのである。

大橋をへだてて、千住は、朱引外（江戸府外）になるので、村邑(そんゆう)と田野と林ばかりになり、武家屋敷はひとつも建てられてはいなかった。
ただ、ひとつだけ、例外があった。
掃部宿から左折し、数町を行けば、本木村と西荒井薬師道とに岐(わか)れる辻(つじ)に至るが、そこに、六七年前に、敷地三万坪あまりの宏壮な屋敷が建てられていたのである。
将軍家斉(いえなり)の寵妾(ちょうしょう)お美代の方が、養父である御小納戸(こなんど)中野播磨守(はりまのかみ)清茂にたのんで、花見をする安息所という名目で、建ててもらったのである。そのために、江戸中から名のある植木職人がえらばれて、梅、桃、桜の佳樹を、そこへはこんで植えた。また、晩春は牡丹(ぼたん)、夏は朝顔、秋は花壇菊を造る名人も、専属に召抱えられたし、さらに、播磨守の命令で、紅葉の名所で知られる品川の海晏寺(かいあんじ)から、文人墨客が愛(め)でていた銀杏(いちょう)の幾本かを移し植えた、ということであった。
中野播磨守清茂は、去年逝(い)った閣老主座にあった水野出羽守忠成の黒幕として、威福をほしいままにした隠然たる実力者であった。
しかし——。
水野忠成が、病を得て、急速に、その権勢を衰えさせた二年前に、中野播磨守も、表向きは隠居の身分となって、剃髪(ていはつ)して碩翁(せきおう)と号し、お美代の方の花見屋敷も、空屋敷にした。実は、その花見屋敷は、播磨守が、権門の徒輩を招待し、莫大(ばくだい)な賄賂(わいろ)を受け取る

場所として建てたのであった。お美代の方自身は、江戸城大奥から花見にやって来たのは、たった一度に過ぎなかった、ということであった。

しかし、中野碩翁は、御小納戸役を辞して、本所向島の下屋敷に移り住み、世間ていは隠居とみせかけたとはいえ、いまなお、将軍家斉の相談役として、依然として蔭の権力を保持していた。

老中上座を狙う水野忠邦としては、出羽守忠成の股肱である若年寄・林肥後守や側衆・水野美濃守や小納戸頭取・美濃部筑前守らよりも、まず打倒しなければならぬ最大の強敵は、中野碩翁であるかもしれなかった。

――そうか、柳生武芸党をやとって、公儀隠密にしたのは、中野碩翁であったか！

中野碩翁の建てた養女お美代の方の花見屋敷こそ、柳生武芸党の江戸拠点にふさわしい、と狂四郎は、そう推測したのであった。

宝瓶宮黒人が、敵のいる場所は、その刀が示している方角だ、と云ったのは、見事に的中していたのである。

したがって――。

裏千家・千好室と称する男の、案内する処が、その屋敷であることを、狂四郎は、はっきりとさとっていた。

裏千家・千好室が、狂四郎の尋問に応えて指さしたのは、乾の方角であったからであ

る。

外桜田の水野忠邦邸内の武部仙十郎宅で、無想正宗の切先が差した方角（艮）と、千好室が示した方角（乾）と、この異なったふたつの地点からまっすぐにのばした線の、合するところに、千住のお美代の方の花見屋敷があったのである。

進んで行く乗物の中で、狂四郎は、明確に、その道筋を、胸中で、云いあてていた。

——中村町から小塚原町を通って、千住大橋を渡り、掃部宿から左折して、野道を辿って、三軒茶屋わきを過ぎる。そして、昨夜、おれがつきとめた花見屋敷に、行き着く。

四

宝瓶宮の予知によれば、この眠狂四郎が自ら進んで死地に踏み込むのは、今日であった。

そこで、狂四郎は、敵が網を張って待ち伏せていそうな場所を見当つけ、

——吉原の近くあたりであろうか？

と、やって来てみたのであった。

編笠茶屋から呼びとめられ、自分は裏千家・千好室と名のられると、即座に、

——こいつ、うまく化けている。

と、看破した。もし、宝瓶宮に予知されていなければ、あるいは、まことの裏千家の

あるじと、信じたかも知れなかった。

——嫡子を持たぬ大名の正室を据膳にする、とはいささか手のこんだ芝居を考えついたものだが、凝りすぎたあまり、筋書に作りものの不自然さが、感じられる。これは、敵が、かなりあせって来た証左か。それとも、別に何か意図するところがあるのか？

これまで、柳生武芸党が、不意に襲撃して来たその手段は、きわめてぬかりのないものであった。殊に、幼学の少年二人を挟撃させたのは、こちらの弱点を衝いた見事な策略であった。

それにひきかえて、こんどの誘いの手段は、妙に見えすいたところがある。

対手がたは、この眠狂四郎がどういう男か、充分に考究しているはずであった。

——大名の正室を抱いて、種馬になるおれかどうか、こちらの気象を知っていれば、判断がつきそうなものだが、敢えて、見えすいた誘いをかけて、死地におびき寄せるとは、どういうことか？

もとより、対手がたは、連れて行く処を、こちらが、あらかじめちゃんと推測した、とは、そこまでは、知っては居るまい。

——柳生武芸党ともあろう秀れた隠密が、思いつくにしては、尻尾をのぞかせた下策なのだが……？

それが、狂四郎にとって、不審であった。

いずれにしても――。

策略に乗って来た、と思わせて、狂四郎は、用意された駕籠の人になったのである。

推測通り、駕籠をかついだ陸尺が、千住大橋の橋板を踏んで行く跫音が、耳にひびいた。

――花見屋敷でくりひろげられる光景は、おれの予想外のものかも知れぬ。

狂四郎は、おのれに呟いた。

ただ、ひとつ。

死地に入るとはいえ、珍しくもこちらがすすんで踏み込むのであった。

十二三歳の少年を、こちらに斬らせた敵を、断乎として許すわけにはいかなかった。

――たとい、こちらが生命をすてようとも、すてる前に、少年を生贄にしたそいつの死を、しかと看とどけてくれる！

二挺の駕籠は、しずしずと屋敷に入った。

そして、そのまま、玄関さきに狂四郎を降り立たせることなく、御殿内へ、駕籠をかつぎ込んだ。

狂四郎の野性のけものの本能に似た神経には、殺気をひそめた気配は、全く感じられなかった。

まさしく、空屋敷であった。白昼にもかかわらず、しんとして、寂寞の空気は深かっ

た。

駕籠をかつぎ込んで行く陸尺の跫音だけが、長廊下を、ぴたぴたとひびいた。

因果試合

一

眠狂四郎を乗せたままで、その駕籠は、邸内のはるか奥まで、運ばれ、とある部屋にかつぎ込まれて、畳へじかに据えられた。

陸尺がひきさがって行くのと、入れちがいに入って来て、駕籠の引戸を開けたのは、裏千家・千好室に化けた男であった。

「眠様、では、なにぶんにも、よろしくお願い申しまする」

鄭重に、頭を下げておいて、出て行った。

狂四郎は、駕籠から出た。

――どういうのだ？

ひとつの疑問が、脳裡にあった。

大名屋敷を訪問する作法として、玄関を上ったならば、訪客は、まず、その控え部屋に、差料を預けて、脇差だけにならなければならなかった。

柳生武芸党が、これだけ手の込んだ策略を用いているからには、まず、この眠狂四郎から、無想正宗を取りあげるべきであった。
敵は、それをしなかった。
――おれに、無想正宗を持たせておいても、必ず討ち取る手段を講じているというのか？
しばらく佇立したなりで、狂四郎は、冴えた神経を、四方に配った。
そこは、次の間であり、上段の間とは、見事な花鳥を描いた襖で仕切られ、襖は閉められていた。
全く無人としか受けとれぬ静寂が、屋敷を占めていた。
つと、狂四郎は、襖へ近づき、その一枚を開いた。
高麗縁の三十畳敷きの座敷がひろがり、さらにそのむこうに、一段と高い八畳敷きの間が設けられてあって、そこに、褥が延べられ、その上に、一人の女性が、白羽二重の寝召姿で、こちらに背を向けて、坐っていた。
ここは、あきらかに、中野碩翁の養女・将軍家斉の寵妾お美代の方のためにつくられた寝所に相違なかった。
狂四郎は、ゆっくりと三十畳敷きの座敷を踏んで、歩み寄った。
敵が、この女人を、松平姓を与えられた某西国大名の正室にみせかけているからには、

こちらも、ここらあたりまでは、欺かれたふりをしてみせることだった。

狂四郎は、云った。

「種馬に、顔を見せるのは、うとましかろう。そのまま、俯伏せになり、腰をあげて頂こう」

「……………」

女は、無言で、求められるままに、上半身を倒し、ゆるゆると、腰を起した。

狂四郎は、段を上って、その真うしろで、褥に片膝をつくと、猿臂をのばして、まず、寝召の裾をつかみ、ぐいと捲りあげた。

前を合わせ、両膝で敷具に押していた寝召が、無理矢理に捲られたため、どこかが、びりりっと裂ける音がした。

次いで――。

狂四郎は、いささかの容赦もなく、白綸子の二布も、剝ぎあげた。

搗きたての飾餅を双つならべたような、白くまろやかな、豊かに熟れた臀部が、白昼のあかるさの中に、曝された。

狂四郎の左手が、陰翳を落したその肉の狭間の秘処へふれるのに、いくばくのためらいもなかった。

拇指・人差指・中指は、その男がこれまで無数の女体を弄んだことを示す巧みな技

を使いはじめた。
しかも——。
その女を生贄にした敵の罠、と知っている狂四郎の心身は、あくまで冷たく醒めて居り、四方へ配られた神経の鋭い冴えは、三指を蠢かせつつ、みじんのゆるみもなく継続されていた。
「……あ、……ああ——」
ものの数分も過ぎぬうちに、女は、巧みに使われる三指の技に、反応を起して、官能の疼きを、ひくいうめきにしてもらすと、伏せた上半身を微かにもだえさせて、頭をあげた。
とたん——。
狂四郎の双眸が、女の耳へ、ぴたりと当てられた。
その耳のかたちは、思わず、狂四郎に、胸裡で——むっ！　と呻きをたてさせる衝撃を与えた。

二

その耳が、奇異なかたちをしていた次第ではなかった。ただ、特長のある兎耳ではあった。

——そっくり、そのままだ！

狂四郎の脳裏に、一昨日、湯島聖堂門前で斬った小さな刺客の、地面へ斃れた姿が、ありありとよみがえっていたのである。記憶にのこした少年の耳は、この女のそれと、全く同じかたちをしていた。

あのこどもの実母に、まぎれもない！

名状しがたい惑乱が、狂四郎の心中で渦まいた。

この世に、わが子を殺した敵を、憎まぬ母親など、一人として例外はない。

にもかかわらず……。

その敵に、身を弄ばせて、官能の悦楽に淫れようとしている。それが証拠に、陰所の柔襞は猥らにひらいて、こちらの指をしとどに濡らしているのであった。

——あり得ることか？

これが、討ち取る策略のひとつであるとしても、許せぬことであった。

敵を騙すために、うその泪を流すことは、あり得ても、女体の色情は、まず気分の正直な働きをともなわぬ限り決して催さぬものである。

わが子を殺した仇敵に対する激しい憎悪を抱き乍ら、どうして、淫靡に乱れるのか？

狂四郎は、女の秘処から、すっと、左手を引いた。

次の瞬間——。
抜く手もみせず鞘（さや）走らせた無想正宗を、局部へ、ふかぶかと、刺し通していた。
女の絶鳴が呼んだように、後方に人の気配が生れるのを察知した狂四郎は、白刃を女体奥の子宮内から抜き出しざま、対手（あいて）にむかい立った。
四十年配の、眉目（びもく）端整な、六尺ゆたかの長身の人物が、次の間から、三十畳敷きの座敷へ、滑るような独特の足どりで、踏み入って来た。
「お主が、柳生武芸党の江戸首領か？」
「左様でござる。柳生源十郎と申す」
「柳生武芸党ともあろう隠密団が、思いつくにしては、尻尾ののぞいた下策を用いて、わたしをこの屋敷におびき寄せておいて、わたしが斬ったこどもの実母を、生贄にしたのは、どうしたわけだ？　きこうではないか」
さすがの狂四郎が、面上に憤（いきどお）りの色を刷（は）いていた。
その質問に対する対手の返答は、まことに意外なものであった。
「その女子（おなご）、身共（みども）の妻でござる」
「………?!」
「申される通り、貴殿を、当屋敷に案内した誑（たぶら）かしかたは、見えすいたものであった、とみとめ申す。しかし、貴殿が、これは、柳生武芸党がおびき寄せる謀計だ、と看破さ

れるであろうとは、当方も事前に予想して居り申した。貴殿は、謀計と看破しても、誘いを拒否される御仁ではないし、また、当屋敷内には、貴殿に対する必殺の妙策など、用意しては居らぬ、と知られたい」

「わが子を斬られ、妻を弄ばせておいて、しかもなお、この眠狂四郎を殺す網を張っておかなかったとは、どういうのだ？……先日、下谷の寺通りで、わたしを襲撃して失敗した際、その指揮格の男が、柳生武芸党は、血盟の党則により、党員を殺されると、その敵を不倶戴天の仇として、断乎として追い討つ、と明言したではないか。まして、党首たる者、わが子を斬ったこの眠狂四郎を、おびき寄せておいて、ただ、妻を犯させただけで、去らせるはずがあるまい。お主の言葉がまことならば、自ら党規を破るばかりか、父親として良人として、人間の資格を喪失して居る」

「いかにもその通りでござる」

柳生武芸党の江戸首領・柳生源十郎は、平然として、狂四郎の難詰をみとめた。

狂四郎としては、このような奇怪な問答は、はじめてであった。

「では、人間失格者に、まず、訊こう。何故に、まだ元服もせぬ息子を、刺客として放って来たのか？」

「われらが、貴殿の人柄を考究し、その盲点を狙い、死角を衝いた策であることは、貴殿の方ですでに、判断されて居り申そう」

「わたしに、息子を斬られる場合もあり得る、と懸念しなかったとは云わせぬ」
「左様、たしかに懸念いたした。しかし、身共の倅である以上、将来、柳生武芸党の頭領の一人になる身であれば、敢えて、わが党が当面して居る最大の敵たる貴殿を、襲撃させて、初陣の功を樹てさせてやりたかったのでござる。貴殿に討たれたのは、倅がそれだけの寿命しか与えられていなかったものと、あきらめ申した」
「次に訊こう。お主の妻女は、わたしに弄ばれると、たちまち、女として淫靡な快感をおぼえて、身もだえた。わが子を殺した憎い男に、身をまかせても、官能のよろこびをおぼえるように、柳生武芸党は、仕込んでいる、というのか？」
「それは、いささか、ちがい申す。……千好室と名のらせた党員が、貴公に願ったことは、いつわりではござらぬ」
「……………？」
「身共は、貴公の精子を貰い受けて、懐妊するように、と妻に命じたのでござる。……眠狂四郎を、わが子の仇敵と思うな、良人に代って、強い子を産ませてくれる男子と思うて、はばかりなく、淫婦になって濡れよ、と命じたのでござる。……一人息子を喪った身共は、柳生武芸党の頭領たる子を、つくりたかったのでござる。それには、たとい敵であれ、貴殿以外に、妻を抱く男子はいない、と考え申した。……ところが、貴殿は、種を宿させる代りに、妻を殺した！」

「父親として、一人息子を喪えば、またもう一人、つくるべく、房事をはげめばよかろう」

　すると、対手は、一瞬、苦痛の色を、顔面ににじませた。

「打明け申そう。実は、身共は、十年前、ある任務をはたした際、背中に深傷を負い、爾来、男子として不能者と相成ったのでござる」

「非情冷酷を主旨とする隠密団の党首としては、理に叶ったつもりの企図であったかも知れぬが、こちらから観れば、狂気の沙汰だ」

　狂四郎は、冷笑した。

　対手は、しかし、それにこたえるかわりに、

「貴殿に、妻が抱かれる代りに殺されたいまとなっては、身共が為すことは、ただひとつ——」

「………」

「眠狂四郎殿、貴殿と一騎討ちの勝負をすることでござる。隠密としてではなく、征木坂道場の柳生流兵法者として、貴殿に、試合を挑み申す」

三

　それから、およそ一刻半（三時間）ののち——。

心字池の畔で、柳生武芸党江戸党首・柳生源十郎は、白砂を真紅に染めて、殪れ伏していた。

斬った狂四郎は、深い疲労をともなった虚脱状態に、無想正宗を腰に納めるのも忘れた残心の姿勢を、保っていた。

梅雨空の下で、双方、真空の中に入ったごとく、無言不動の対峙を、一刻半つづけたのであった。

その間に、動いたものといえば、池泉で、音たててはねあがった緋鯉だけであった。

勝負は、一閃の太刀ゆきで、きまった。

一刻半の対峙ののち、柳生源十郎が、すっと一歩滑り寄るのを、狂四郎は、待っていて、地摺り下段から、円月殺法を起した。

陽光のない宙を、無想正宗が、完全な円を描ききった——刹那、柳生源十郎は、総身ことごとくの機能を、闘志の奔騰の一撃に聚めて、柳生流秘剣『浦波』を放って来た。

もし、目撃者がいたとしても、双方の一閃の太刀ゆきの迅さを、目に映すことは不可能であったろう。

源十郎は、真っ向上段から斬りおろし、狂四郎は、元の地摺り下段にもどった無想正宗を、刃を上にして、撥ねあげたのであった。

そして——。

それなり、両者は、残心の構えを固着させて、数秒間、睨み合っていたのである。
その時点では、いずれが勝った、とも看えなかった。
源十郎が、微かな痙攣を唇に生んで、何やら云おうとするごとく、口をひらいた。しかし、言葉の代りに、血汐をあふれさせると、ふっと目蓋を閉じたのであった。
最後の一念に依って三界に生を引く、という仏語がある。人は、死神を迎えて、無常をおぼえる。源十郎が、目蓋を閉じたのは、それを示していたのであったろうか。
……狂四郎は、われにかえって、無想正宗を、鞘に落した。
人の跫音が、近づいたからである。
しずかに近づいて来たのは、七十に近い老爺であった。無腰で、袖なしにたっつけをはいた下僕であった。
狂四郎に対して、鄭重な黙礼をすると、屍体を、かかえ起し、かつごうとした。
痩せこけた古稀の下僕の力にあまる重さであった。
「手伝おうか」
狂四郎が、申し入れると、老僕は、かぶりを振り、
「われらがご主人は、お生れなされた時から、わたくしめが、お育て申しましたゆえ、葬送も、この爺い一人でいたしとう存じます」
と、こたえた。

屍体を背負うて、よろぼうて行く老僕のあとに、狂四郎は、なんとなく従った。

四

その座敷には、褥（しとね）が二つ、北向きに敷き延べられてあった。

ひとつの褥には、すでに、狂四郎に無慙（むざん）な殺されかたをした柳生源十郎の妻が、安置されていた。

老僕は、もうひとつの褥に、源十郎を仰臥（ぎょうが）させ、胸で手を組ませた。

狂四郎は、遠くはなれて正座し、老僕の長い合掌を見まもっていた。

ようやく、祈禱（きとう）をすませた老僕は、自身に云いきかせるように、

「ご主人様も、奥方様も、これで、お楽になりなされました」

と、云った。

「………？」

狂四郎は、黙然として、老僕の次の言葉を、待った。

「……この十三年のあいだ、ご夫婦とも、生地獄の中でおすごしなされました。まことに、お気の毒でございました」

「…………」

「一昨日、お手前様がお斬りなされた坊っちゃま——源吾様は、実は、この源十郎様の

お子ではありませなんだ」

「………」

「十五年前、源十郎様は、ご公儀の密命をお受けなさり、西国へ——たぶん、薩摩あたりであったろうと存じますが、おもむかれました。三年間、消息不明におなりなされて、突然、小柳生庄へ、お帰りになりました。その時、奥方様は、臨月のお身でございました。……ご先代——つまり、源十郎様のお父上の源左衛門様が、嫁であるこのお久様を、懐妊させられたのでございました」

「………」

「いえ、それは、世間によくある、舅が息子の嫁に横恋慕して、手ごめにした、というのとは、全く事情を異にしていたことは、わたくしめにも、合点できて居りました。ご先代様は、源十郎様が、隠密として薩摩国で、横死なされたもの、とご判断になり、柳生一族の中でも、随一の兵法血筋を引くお家の血統を絶やさぬために、お久様を身ごもらせ、猛きお子をおつくりになろうとなされたのでございます」

「………」

「源十郎様が、三年ぶりに、突然、ご帰還なされた時、ご先代様は、それより三月ばかり前に、卒中でお亡くなりでございました。……源十郎様は、臨月の腹をなされたお久様を、ごらんになっても、一言も、何も申されませんでした」

「…………」
「けれども、お久様が、ごぶじに、身二つにおなりなさると、源十郎様は、その日のうちに、嬰児(やや)様を、このわたくしめに、お預けになり、育てるように、お命じになりました。……源十郎様の場合は、お母上が、源十郎様をお産みになると、すぐお亡くなりになりましたので、わたくしめが、お育てしたのでございますが……、源吾様の場合は、お久様という母者人(ははじゃひと)がおありなさり乍(なが)ら、ひきはなされて、わたくしめが、お育てすることになったのでございます」
「…………」
「源十郎様が、わが子ではない源吾様を、お憎しみになったかどうか――それは、ついに、そのお口から、おききしたことはございませぬ。……ただ、源吾様が、物心つかれた頃から、道場で、または、山中で、源十郎様が、柳生流をお仕込みなさるさまは、悪鬼さながらの苛酷(かこく)さでございました」
そこまで語って、老僕は、その当時をまざまざと思い出したらしく、深い溜息(ためいき)をもらした。
狂四郎が、はじめて、口をひらいた。
「柳生源十郎は、妻が出産した後、夫婦のまじわりを断った、とお前は、考えるか？」
「おそらく、そうであったと存じます」

老僕は、肯いてみせた。
――柳生源十郎が、最大の敵であるこのおれに、伜を斬らせ、妻を犯させたのは、十三年間、抑えに抑えていた実父源左衛門に対する憎悪を爆発させた、復讐であったのか？
そうとしか想像のしようがなかった。
「失礼しよう」
狂四郎は、立ち上った。
老僕は、表玄関まで、送って出て来た。
式台を降りて、膝まずくと、
「眠狂四郎様――わたくしめに、ひとつだけ、はっきりと判っていることがございます」
と、云った。
狂四郎は、老僕を、かえり視た。
「わがご主人は、死に秋を、考えて居られたのだと存じます。その対手として、貴方様を、おえらびなされたのでございます」
「……………」
「だからこそ、このお屋敷には、柳生武芸党のご面々を、一人もお入れにならず、貴方

様と、正々堂々の試合をなされたのでございます」

「…………」

狂四郎は、裏門から、西荒井薬師道へ出た。

その折――。

梅雨空から、また、ぽつりぽつりと落ちて来た。

濡れるにまかせて往く狂四郎のゆっくりとした足どりは、かわることはなかった。

その心底は、この男本来の虚無にかえっていた。

深夜客

一

眠狂四郎が、武部仙十郎からの使者を受けて、外桜田の老中邸表長屋の側用人宅を訪れたのは、それから十日ばかり後の黄昏どきであった。

老人は、すでに、書院で、身を二つ折りにして、待ちかまえていた。

「お主、柳生武芸党の江戸頭目を、片づけた模様だの」

狂四郎が、座に就くと、古稀の側用人は、両手に、二つずつ持った胡桃の実を、しきりにころころとこすり合せてまわし乍ら、云った。

この家にかくまっている宝瓶宮黒人から、きかされたに相違なかった。尤も、狂四郎は、柳生源十郎を斬ったことを、まだ、黒い異邦人に報告してはいなかったが……。

――星占いは、おれの勝ち、と出たのか。

腕を組んだ狂四郎の脳裡には、北枕に並んだ柳生源十郎とその妻の死顔が、よみがえっていた。

「……柳生武芸党はの、頭目の下知によってのみ働く。江戸には、まだ、残党が、五人や十人、残って居ろうが、頭目を喪っては、使い手のない文楽人形のように、おのが意志では全く動かぬ。小柳生庄の征木坂道場から、次の江戸頭目がえらばれて、出府して来るまでには、二十日以上は、かかるであろうて。……それまでに、佐竹家の抜荷船を、悠々と出航させることができるというわけじゃな」

「さあ、それは、どうであろうか。……江戸党首の柳生源十郎は、おのれの死に秋をえらんだようだ。とすれば、わたしに斬られる前に、配下たちに、指令をのこしておいたかも知れぬ」

狂四郎は、云った。

仙十郎は、上目遣いに、狂四郎の冷たい無表情の貌を、視やった。

「ほう――、それも考えられるの」

ひそかに新造された長さ十五間・幅四間、三檣バーク、千五百石積みの船は、すでに、佃島の漁師町の風避場に、到着させてあった。

外形は日本式、帆装だけがオランダ式の津軽海峡廻りの北国船とみせかけているが、実は西洋型構造を研究して、特別に造らせた関船（軍船）であり、イギリスその他各国の武装した貿易船、あるいは清国の海賊船と戦っても、ひけをとらぬように、充分の装備を施していることは、仙十郎からその船長に任命された唐津唐兵衛が、みとめていた。

佐竹家私鋳(しちゅう)の清国一両銀一千五百七十余貫と、秋田名産物は、車善七によって、ひそかに、積み込みも終了していた。

その秘密の船積み方法は、巧妙であった。

〝乞人溜(きつじんだめ)〟の連中が、小伝馬(こてんま)町牢屋敷(ろうやしき)の土壇場(どたんば)で、処刑された首のない罪人の遺骸(いがい)を、菰(こも)に包んではこぶとみせかけたのである。

十年あまり前までは、それらは、無縁仏として、本所回向院(えこういん)に葬(ほうむ)られていたが、その墓地から亡霊となって現われ、「首を返して欲しい」と訴え乍らさまようという噂(うわさ)が立って以来、無宿人・博徒などを駆り集めて、労役に従事させている石川島の人足寄場へ運ばれて、そこの囚人塚に葬られるようになっていたのである。（ちなみに、獄門首の方は、鈴ケ森、小塚原の刑場に晒(さら)されて、三日後に棄(す)てられていた）

獄門首を晒したり、首のない遺骸(いがい)を、牢屋敷から運び出して、葬るのは、すべて、〝乞人溜〟の乞食(こじき)たちの仕事であった。車善七は、それを利用したのである。

それだけ用意周到に、策略を練って、事をはこんだからには、よもや、幕閣内の敵がたに、探知されては居るまい、と自信を持っていた仙十郎であった。

しかし、狂四郎から、そう云われて、仙十郎は、ふっと、不安をおぼえた。

「万が一、ということもあるの。……唐津唐兵衛という男が、手下の水主(かこ)三十数人とともに、守っているからには、船中に、武芸党の隠密どもが、忍び込む余地はあるまいが

……、佐竹家の船ゆえ、まわりをうろついて、かぎまわって居らぬとも限らぬて。念の為、お主に、様子を見て来てもらおうかな。お主にとっては、文字通り、乗りかかった船だからの」

狂四郎は、老人を書院にのこして、縁側へ出た。

奥座敷から玄関へ通じる廊下へ、まがりかけた狂四郎の行手をはばむ者が、そこに正座していた。志津乃であった。

必死の想いを、容姿にあふらせて、じっと狂四郎を仰ぎ視た。

「………」

狂四郎は、眉宇も動かさずに、その眸子を受けとめた。

「わたくしは……お待ちできませぬ！」

幾日間か想いつめて、ついに決意した――その願望が、声音にこめられていた。

「お側用人様から、貴方様が、抜荷船にて、清国へお渡りになると、うかがいました。……武部様は、貴方様が、素姓が素姓ゆえ、再び日本へ還らぬかも知れぬ、と仰せられました。……わたくしには、堪えられぬことでございます。恋というものを知って、主家と父を裏切ったこの志津乃に、今宵、ただ一度だけ、おなさけをおかけ下さいませ」

「………」

平伏する志津乃に対して、狂四郎は、沈黙を守った。

「お願いでございます！……おなさけを頂けましたなら、その思い出を生きる心のささえとして、わたくしは、落飾して、どこかの尼寺ですごす覚悟でございます」

「………」

狂四郎は、ものの三分間ばかり、その場に佇立していたが、ついに、志津乃に対して一語の返辞も与えずに、脇をすっと歩み過ぎた。

「眠様！」

からだ中の血汐をしぼり出すような叫び声が、その後姿を追って来た。

狂四郎は、玄関の式台を降りた時、

「しずのさん、眠さんは、きっと帰って来ます。待っていて下さい」

そう呟いきかせている宝瓶宮黒人の言葉を、耳に入れた。

二

子刻（午前零時）――。

狂四郎は、金八に艪をにぎらせて、猪牙を大川へ漕ぎ出していた。

どうやら梅雨はあがったとみえて、晴れわたった空には、いちめんに、星が煌めいていた。

「旦那――、まさか、今夜、何か起ると、宝さんにそそのかされなすったのじゃござん

すまいね？」
狂四郎は、それにこたえる代りに、空を仰いだ。金八も、つられて、見上げた。
偶然、その時、ひとつの星が、流れた。
「あの流れ星が、おれの星であったなら、今夜が、年貢の納めどきだが……」
「ぶるぶるうっ！　七里けっぱい！　冗談にも、そんな縁起でもねえことを、口にしねえでおくんなさい」
やがて、すぐ前方に、佃島の黒い影が、星明りの下に浮きあがった折であった。
「金八！」
昏い海面を、鋭くすかし視ていた狂四郎が、
「あの流れ星は、どうやら、おれのではないらしい」
「なんですって？」
狂四郎は、真正面から、寄って来る小舟の漕ぎ手の様子を、看わけていたのである。
尋常の漕ぎかたではなかった。
大きく前後へ、五体を傾けているのは、勿論、けんめいに、舟足の速度を出そうとしているものであったが、そればかりではなかった。あきらかに、深傷を負い乍らも、死にもの狂いの力をふりしぼっている様子が、闇に目の利く狂四郎には、判ったのである。
「金八、急げ！」

「合点(がってん)！」
金八のあやつる艪は、ぐいぐいと浪(なみ)を切った。
たちまち、距離が縮まり、舳先(へさき)が舳先へ衝突しようとした。
「あぶねえっ！」
金八が、間一髪で、舳先をかわした。
狂四郎は、その小舟へ、跳び移った。
「吉郎次！」
その名を呼ばれるや、漕ぎ手は、気力も体力も尽きて、艫(とも)へ崩れ込んだ。
かかえ起してみて、狂四郎は、星明りにも、その顔があきらかに死相を呈しているのを、看てとった。
「吉郎次！　敵は、何をたくらんでいる？　船を乗っ取ろうとしているのか？」
「お、お……」
吉郎次は、告げようとしたが、手負うた箇処がわるく、言葉の代りに、血汐を吐いた。
「お前も、夜働きあがりの密偵なら、この世の置土産に、調べたことを、わたしに知らせろ！」
吉郎次は、微(かす)かにうなずいてみせ、
「お、お……、つ、つ……」

と、わななく右手の人差指で、宙に直線を描いてみせ、
「た、た……い、……」
と、云いかけたが、ついに、それ以上は、言葉にならなかった。
吉郎次の最後の仕草は、激しく痙攣する右手の五指を、一杯にひらくことであった。
固唾をのんで見まもっていた金八が、
「先生、この仏は、いってえ、旦那に何を報せようとしたんでしょうかね？」
「うむ⁈」
しばらくのあいだ、黙思していた狂四郎が、
「金八、ひきかえすのだ」
と、命じた。
「へい」
こういう場合、そこがいかなるおそるべき死地であろうと、なんの逡巡もなく、単身で敵中に進み入るのが、金八がこれまで知っている眠狂四郎であった。
今夜だけは、狂四郎は、敵に背を向けて、退散しようとする。
——宝さんに、星占いをしてもらおうとしたとすりゃ、眠狂四郎は金輪際不死身だ、というおいらの信念が、ちっとばかり、ぐらつくぜ。
金八は、舳先をまわし乍ら、胸の裡で、すこしばかり不満の呟きをもらしたことだっ

た。

三

「どうにも、判らぬ！」
秋田藩江戸家老・佐竹勘解由は、沈痛な面持で、もらした。
勘解由の前には、出府して来た横目の七草喜久左衛門が、かしこまっていた。
時刻は、丑刻（午前二時）をまわっていた。
勘解由が、老横目を自分の居室へ呼ぶのは、いつも深更であった。
勘解由は、昨日、武部仙十郎から第二の密書を受けとっていた。
それには、重ねて、佐竹家の家中は、抜荷取引の宰領者とその護衛方三人以外は、一人も船に乗るのは罷りならぬ、と念を押してあった。
船を航海させるのは、唐津唐兵衛という海賊頭目とその手下どもであること。水先案内人として、三年前、日本へ漂着して、鹿島灘の浜辺にかくれ住んでいた広州港イギリス夷館員を乗り組ませること。それから、たぶん、眠狂四郎が便乗するであろうこと。
この顔ぶれをみた限りでは、かりに公儀隠密の通報によって、大目付が、船に乗り込んで来て、とり調べても、本丸老中水野越前守忠邦が、佐竹右京大夫と組んで、国禁を犯して密貿易をやろうとしている証拠は、つかめないのである。佐竹右京大夫のみが、

罪を問われることになる。

車善七は、佐竹家私鋳の清国一両銀と秋田名産物を、船に積み込んだだけで、武部仙十郎からは、何ひとつ密輸出の品を渡されてはいなかった。

佐竹家としては、目的は米を輸入することであり、そのための手段として、秋田名産物を、清朝に貢物(みつぎもの)として、安く売ろうとしているのであった。したがって、秋田名産物で儲(もう)けようという野心は、勘解由には、きわめて薄かった。

武部仙十郎は、輸入した米を寄越せ、とは云わず、秋田名産物を売った利益を折半、と申し入れているのであった。

勘解由の目算では、持ち帰れるのは、せいぜい銀が三百数十貫であった。金貨に換算すれば、一万二三千両に過ぎぬ。それを折半すれば、本丸老中にとっては、全くのはした金でしかないではないか。

このたびの佐竹勘解由の企図は、まず、千石船を一艘(そう)、密航させて、清朝政府にわたりをつけ、毎年、米を輸入する契約をむすぶことであった。千石船一艘でただ一度だけの密貿易をしたところで、その米の量は、焼石に水でしかなかった。毎年、米を輸入できるようにしてこそ、このたびの国禁を破る意味があった。

ところが――。

武部仙十郎が、敢(あ)えて、鎖国令を冒す秋田藩に荷担するのは、主君を老中主座に就け

るために、焦眉の急の多額の金が必要だからに相違なかった。おそらく、数十万両を必要とするであろう。

「あの狸爺さんの肚の裡が、わしには、どうにも、読みとれぬ。……五千両や一万両を、当家からまきあげるためだけに、斯様な危険な協力をするとは、とうてい考えられぬ」

佐竹家の家中が、一人も乗り組むのを許されぬとすれば、おそらく、総指揮権をにぎるのは、唐津唐兵衛という海賊の船長であろう、ということまでしか、推測できぬのであった。

七草喜久左衛門は、苦渋そのものの江戸家老を、見まもっていたが、

「ご家老様、もしかすれば、水野越州様は、ご老中上座に就かれたならば、鎖国令を解いて、開国する、という異常の決意をされて、こころみに、わが藩に抜荷をやらせて、その成果をみようとされているのでは、ございますまいかな？」

そう云ってから、片掌を口にあてて、喘息の咳を抑えた。

「それは、ちがう。越州はそのような大器ではない。目下のところ、越州は、老中の主導権をつかむための軍資金づくりに躍起になっているだけだ。その金をつくらぬ限り、老中主座には就けぬ。……かりに、わしらの知らぬ間に、すでに、軍資金をつくって居り、幕閣を自由に左右する執政の可能性が九分通りとしても、越州の肚裡にある政道改

革とは、内憂外患の逼り来った今日、この趨勢に対するためには、将軍家の権威をとりもどす——そのことに相違あるまい。されば、越州の改革は、凄まじい苛酷な倹約令の実行にすぎまい」

勘解由が、見事な測断をした時であった。

不意に——。

次の間から、襖越しに、

「密談中をさまたげて、恐縮乍ら、眠狂四郎が、ひとつの依頼をいたしたく、参上いたした」

その言葉が、ひびいた。

四

勘解由と喜久左衛門は、はっとなって、顔を見合せた。

眠狂四郎が、夜半をえらんで、この家に忍び入って来たのは、これで二度目であった。最初の潜入の理由は、こちらがさし向けた刺客・郡参平に、失敗を咎めて自決させるようなことをしないでもらいたい、と忠告に来たのであった。

勘解由は、眠狂四郎と顔を合わせてみて、噂にたがわず、端倪すべからざる曲者と認識し、七草喜久左衛門が徒士隊を組んで襲撃する代りに、おのが娘を生贄として同道さ

せる奇手をえらんだのも、この男に対しては、やむを得なかった仕儀と、納得したものであった。

——場合によっては、こちらの味方になってくれるかも知れぬ。

そんな気持も、心の片隅に起っていた矢先であった。

「失礼する」

狂四郎は、襖を開けて、すっと瘦身（そうしん）を現わした。

座に就くと、まず、喜久左衛門へ、一別以来の挨拶（あいさつ）を、かるい黙礼に示しておいて、勘解由を正視した。

「用件だけを、申し上げる。……ご当家が、佃島の漁師町の風避場に、投錨（とうびょう）された抜荷船を、公儀隠密が、嗅（か）ぎあてた、と知られたい」

「まことか?!」

さすがの佐竹勘解由も、顔色を変えた。

「水野家の密偵が、殺されたゆえ、まちがいはない。……成り行き上、この眠狂四郎が、それらの隠密どもの出航阻止のたくらみを砕くつとめを、はたすことになる。ついては、一人、助手をお借り受けいたしたい」

「郡参平を貸せ、と申すのだな？」

「左様——」

「勿論、お主の申し入れには、よろこんで応ずるが……、もし、すでに、公儀大目付の指揮の下に、出航を阻止しようとしているのであれば、たといお主と参平に、阿修羅の働きをしてもろうても、手おくれではあるまいか？」

「そのご懸念は、無用と存ずる。……ご当家が、清国の一両銀を私鋳したこと、それを船に積み込んだことまでは、いまだ、公儀隠密は、つきとめては居らぬ。……あるいは、この船で抜荷をやるのではあるまいか、と疑いをかけている段階と推測される。大目付が出役して来て、船へ乗り込んで来る前に、こちらは、隠密の布いている襲撃陣を破ることにしたい」

「いかなる攻撃策をとろうとして居るのであろう？」

狂四郎は、それにこたえる代りに、郡参平を、ここへ呼んでもらいたい、と云った。

勘解由は、几上に置いた鉦を鳴らした。

打てばひびくように、参平が、廊下から応えた。

狂四郎は、入って来た参平に、奇妙な要求をした。

直径七寸、長さ一尺の丸太を五本、それぞれに拳大の鉛を詰めて、用意すること。

ただ、それだけであった。

「何に使われるのかな？」

喜久左衛門が、怪訝な面持で、訊ねた。

「こちらに、まかせて頂くからには、黙って、細工の仕上げを待っていて頂こう」
冷やかな語気で、その手段を打明けるのを拒否した狂四郎は、次に、勘解由に向って、
「出航は、至急にされたい。明後日、暮六つ。お願いいたそう」
と、申し入れた。
「わずか二日だけで、公儀隠密がたの攻撃策をつぶすのが、可能なのか？」
「敵を破滅させるのは、出航と同時、とお思い下さってよい」
狂四郎は、勘解由や喜久左衛門を唖然とさせる言葉を口にしてみせた。
勘解由は、この異相の浪人者を信頼するよりほかはなかった。
「では――」
狂四郎は、郡参平に順いて来るように促して、座を立った。
「あいや……」
勘解由が、あわてて、片手を挙げて、
「お主に、うかがうが、武部仙十郎殿は、水野家の交易品を、何ひとつ積み込んで居らぬが、何故であろうか――お主は存じて居るのではあるまいか？」
「それは、ご家老ご自身が、あの老人に逢って、じかに尋ねられるがよい」
狂四郎は、廊下へ出ようとして、ふと、思い出したように、振りかえって、眼眸を、いまは知己ともいえる老横目へ、あてた。

「ついでに、おつたえしておこう。お主の娘御は、水野邸で、いまだ生娘のまま、しずかにすごしている。……裏切りを許してやって頂けるならば、と存ずる」
「………………」
喜久左衛門は、何かこたえようとしたが、言葉が出なかった。
狂四郎が、郡参平を借りて、立去ってから、江戸家老と老横目のあいだには、しばらく、重い沈黙があった。
やがて、勘解由が、のど奥から押し出すように、呟いた。
「あの男が、こちらの味方になってくれれば、……いまは、それのみを、願うばかりだ」

志願筆

一

……ふっ、と。

吉原から逃げ出して来たくるわ芸妓・胡蝶は、目をさました。

蛇骨長屋の金八の家の、つぎはぎだらけの蚊帳の中であった。

四更（午前二時）か五更（午前四時）か——時刻は、さだかでなかったが、夜が明けるまでには、まだ、かなり間があるようであった。

墨を流したようなしんいんの暗闇であったが、胡蝶は、同じ蚊帳に、人が寝ている気配を感じると同時に、

——主さんが、おもどりになっている！

と、直感した。

金八ならば、帰って来れば、呼び起したであろうし、また、その気象として、眠狂四郎から預かった女の寝ている蚊帳に入って来るはずがなかった。

こちらの睡りをさまたげぬように、音もなく、かたわらに横たわったのは、眠狂四郎以外に考えられなかった。

長屋には、夜明け前に起き出て行く職を持った者も、すくなくなかった。どこからも、物音ひとつきこえて来ぬのは、たぶん、七つ前であろう。

——牀も敷かずに、畳へじかに寝ていなさる。

胡蝶は、そっと、自分の掛具を、狂四郎にかけた。

胡蝶は、芸は売ってもからだは売らぬ、心の芯の硬い吉原芸妓の典型であった。二年前、吉原へ連れて来られた十七歳の秋に、蔵前の札差に、千金で水揚げされる苦痛に堪えたのは、一揆を起した故郷の村民百数十人を救うために、いたしかたのない犠牲であった。

しかし、爾来一度も、どんな金持のくどきにもなびいてはいなかった。心を惹かれる客にも、まだ出会ってはいなかった。それがゆえに、衣裳代その他の借金がかさんで、百五十両もの大金で身を縛られていたのである。

胡蝶にとって、眠狂四郎もまた、岡惚れするには、あまりにも薄気味わるい浪人者であった。茶屋にたのまれて、身の世話かたをひき受けて、幾日か、その流連の座敷にかよったが、夜の牀を倶にするには程遠い客だったのである。

ところが……。

公儀隠密の果し状が、金八の手で届けられ、それに応じて、狂四郎は、出て行きがけに、身をすくめている胡蝶に、訊ねたものだった。

「お前は、父御が磔刑に遭った最期のさまを、目撃したのか？」

胡蝶が、うなずくと、狂四郎は、次の言葉を云いのこしたのであった。

「金八――、生木の燃え立ったのと、百姓の怒り狂ったのほど、手のつけられぬものはない、というが、公儀隠密とわたしの斬り合いなど、この女の父親が自ら求めた修羅とは、雲泥の差がある。この女の父親の死は、後世までの語り草になろうが、閣老の走狗の死など、明日は忘れすてられる」

その言葉が、胡蝶の胸に、じいいんとしみわたり、

――生きて還って欲しい！

という祈りが、しだいにたかまったのであった。

そして、祈りが叶ったように、ふらりと戻って来た狂四郎の姿を見た瞬間、胡蝶の狂四郎に対する気持は、一変したのである。

その夜、われから求めて、お座敷着を脱いで、狂四郎の牀に入った胡蝶であった。

吉原から逃げ出して、狂四郎に救いをもとめたのは、神にも仏にも誓って、慕心ひとすじであった、と胡蝶は、明言できる。

片刻も忘れ得ぬ人となったその男が、いつの間にか自分の許へ現われて、ひとつ蚊帳

の中に寝ている！
胡蝶は、女として、生れてはじめて、胸がふるえるよろこびをおぼえた。
抱きついて、そのまま、身も心も溶けてしまいたい衝動にかられた。
しかし、狂四郎の睡り（ねむ）は、深いようであった。
胡蝶は、たとえ様（よう）のないよろこびに胸をふるわせ乍ら（なが）、待った。狂四郎は、期待を裏切って、ついに、目をさまさなかった。
狂四郎が、起き上ったのは、胡蝶が、朝餉（あさげ）の膳部（ぜんぶ）をととのえた時であった。
吉原の茶屋で世話をしているあいだに、胡蝶は、狂四郎が、米を一粒も口にせぬことを知ったので、御飯の代りに、銚子（ちょうし）二本、燗（かん）をつけていた。
狂四郎は、その一本を空にした時、胡蝶を冷たく正視した。
「お前は、どうやら、わたしに惚れた模様だな」
「はい」
胡蝶は、はじらわずに、うなずいた。
「お前が、わたしに惚れたらしい、と察したから、昨夜、戻って来ても、お前を抱かなかった」
「……………？」
「昨夜、わたしは、佃島（つくだじま）で、一瞬の油断もできぬあるひと仕事をやってのけて、疲れ

てもいた。しかし、お前を抱かなかったのは、別の理由があったからだ」

「………」

「わたしは、この春、秋田で、なかば気まぐれ、なかば利用する仔細があって、一人の女郎を身請した。その女郎は、わたしに惚れた。……そのために、あわれな非業の最期をとげた。……そのことがあったゆえ、わたしは、身請したお前を、抱くのを止めた」

「旦那様！」

「これまでに、わたしに惚れた女は、ことごとく、若い生命を散らした。これからも、そうであろう。……心根の優しい女に限って、この無頼の疫病神に、惚れては、次つぎと、この世から姿を消して行く……」

二

狂四郎は、次の銚子を、胡蝶に酌をさせずに、御飯茶碗になみなみとついで、ひと息に飲んでから、

「吉原から逃げ出したお前を、救ったのを、いまは、いささか悔いている。百五十両が惜しいのではない。……あのまま、お前が、廓で芸妓をつとめていれば、お前を大切にしてくれる金持が、借金を払って女房にしてくれて、お前は、幸せな生涯を送れたかも知れぬ」

「旦那様、女の幸せは、しんそこ、男に惚れることでございます。あたしは、生れてはじめて、旦那様に惚れました。だから、明日、死んでも、なんの悔いもございませぬ！」

「気の毒だが、わたしは、お前に惚れては居らぬ。……惚れて、惚れられてこそ、明日死んでも、悔いがないのではないのか」

「いいえ！」

胡蝶が、はげしくかぶりを振って、云いかえそうとした折であった。

おもてから、金八の大声がつつぬけにひびいて来た。

「ご老中様のお側用人とてもあろうおかたが、わざわざ、こんなうすぎたねえ裏店に、足をおはこびなさるまでもねえ、と思いやすがねえ」

武部仙十郎を、案内して来たのである。

昨夕、金八は、狂四郎と郡参平を、夜釣とみせかけた屋根船で佃島へ送り、二人が何事かをやってのけるのを待って、夜半に漕ぎかえったのである。したがって、金八は、狂四郎が、蛇骨長屋のわが家に泊ったことを知っていた。

仙十郎は、金八に破れ戸を開けさせると、のこのこと入って、匍うような恰好で上って来た。

胡蝶が、三つ指ついて挨拶しておいて、勝手口へしりぞく姿へは、一瞥さえもくれず、

「やはり、柳生武芸党の残党どもは、嗅ぎつけ居ったそうだの」

と、云った。
狂四郎は、一昨夜、金八をはしらせて、吉郎次が横死した旨を、仙十郎に報告させておいたのである。
「昨日の朝、佐竹勘解由から使いが参った。お主、出帆を明日にしてもらいたい、と佐竹勘解由にとりきめさせたそうなが……、お主のことゆえ、牙をといだ餓狼どもを片づける意外の手段を講じるのに、ぬかりはあるまいが――、いや、もう、昨夜うちに片づけたか？」
「いや、まだです。片づける仕掛けだけをやって参った。その仕掛けに、対手がたは、気づいては居らぬ」
狂四郎は、吉郎次が死に際に何を教えようとしたか――その意味を解いたのであった。
柳生源十郎の遺命による武芸党の抜荷船襲撃策は、尋常一様のものではなかった。
そこで、狂四郎は、昨夜、郡参平を助手として、その襲撃策を破摧する仕掛けをほどこして来たのであった。
「お主、もし、その仕掛けを失敗したら、どうなる？」
仙十郎は、膝へ肱をついて、立てた双手に頤をのせ乍ら、訊ねた。
「人間のやることに、完璧は期し難い。……わたしの仕掛けが失敗すれば、対手がたは、船を挫折させ、出航不能にしておいて、大目付が、乗り込んで来て、船内を調べること

になろうが、ご老人、貴方のあるじを失脚させる品物は、目下のところ、積まれては居らぬ。とすれば、国禁を犯す罪は、佐竹右京大夫一人に背負わせて、高見の見物をして居ればよかろう」

「そうは参らぬて。至急の金子をつくるためには、なんとしてでも、あの船を、清国へおもむかせなければならぬ」

「阿片の密貿易で、一挙に、巨利をむさぼりたいのであれば、唐津唐兵衛とやらいう男に、海賊取引をやらせればよかろう」

「清朝政府が、すでに四十年前に、阿片輸入を禁じたことは、宝瓶宮も申して居った。にもかかわらず、イギリスはじめ各国が、堂々と、阿片を密売して居れるのは、広州に商館をかまえて、正式に他の品物を交易しているからじゃて。……日本の海賊が、各国の交易船に割り込んで、阿片だけを密売しようとしても、まず、不可能じゃな。唐人は、そのむかしの倭寇というものに対する恐怖を、いまだ、忘れては居るまい。……佐竹勘解由は、毎年、米を輸入できるように、清朝とかけあう肚であろうが、こちらも、阿片を、毎年つづけて清国へ売りつけ、本丸老中主座として必要な備金を、手許から絶やさぬようにする意嚮じゃわい」

「すると、船を広州へ乗りつけた時には、幕府が正式に許可した朱印船だと清朝役人に思わせるのか？」

「左様――、さればこそ、阿片を運ぶのに、佐竹家の北国船を必要とするのじゃて」

朱印船は、寛永年間に、渡航禁止されていた。すなわち、オランダ船と唐人船が、長崎へやって来るだけで、日本からは、幕府許可の貿易船は一艘も、外国へ渡航してはいなかった。（尤も、薩摩の島津家は、琉球を拠点として、密貿易をやっていたし、加賀の前田家は、銭屋五兵衛に密命を下して、遠くアメリカまで、航海させていたが、これらは、あくまで、公儀の監視の目をかすめた国禁破りの行為であった）

武部仙十郎は、佐竹家を利用して、幕府が開国の意図を持って清国と貿易するかのごとく、清朝政府に受けとらせようとしているのであった。

悪辣といえば、これほど悪辣なしわざはなかった。

三

「ご老人――、ひとつ、うかがっておくが、公儀は――閣老たちは、佐竹家が抜荷を企てていることを、どうして、探知したのか？」

「佐竹勘解由は、稀にみる智慧者じゃが、上手の手からも水が漏れるわさ。密使を送って、長崎の唐人屋敷をたずねさせた。唐商にたのんで、広州港の役人にわたりをつけたのじゃて。これは、成功した。だが、佐竹勘解由は、長崎奉行に気づかれまいと、その方にばかり神経を配ったあまり、うっかり、打つ手をひとつだけまちがえた」

長崎へやって来る唐船は、二種類あった。官商船と額商船であった。前者はその名の通り清朝政府直属の官営船であり、後者は官許の民間商船であった。

佐竹勘解由は、官商に金品を賄賂（まいない）したが、額商をも同時に抱きこむことを忘れたのである。

額商の一人から、長崎奉行に、秋田藩佐竹家が、幕府に無断で、清国との交易を企てているらしい、と密告があったのである。

長崎奉行から勘定奉行へ書状がとどき、閣老方は、評定所で議題のひとつにしたが、「らしい」だけで、証拠がないのでは話にならぬ、と賢相・大久保忠真（ただざね）が、不問に付した。

すでに、密貿易は、薩摩藩島津家はじめ、西国各藩で、大なり小なり、行なって居り、公儀隠密（おんみつ）が放たれて、探索していた。しかし、その証拠をつかむことは、非常にむつかしく、取締るすべがないありさまであった。

先年、勘定奉行・土方（ひじかた）勝正は、御勝手掛（おかってがかり）の老中・大久保忠真に、薩摩藩の密貿易についての言上書（ごんじょうしょ）を提出したが、

『御手入れの儀などは、容易ならざる筋』

と、ほとんどあきらめたかたちであった。

国禁を犯す、といえば、いかにも大罪にきこえるが、貿易によって、幕府、各大名、

商人の台所がうるおっている事実を思えば、見て見ぬふりをするのも、政治の権をとる者の態度であろう、と大久保忠真は、柔軟な考えかたをしている模様であった。
「狂四郎、お主が、佃島で、どのような仕掛けをしたか知らぬが、これには、わがあるじが、老中主座に就けるか否か、その運不運の岐れる辻に立たれたと申せる。……たのむ！」
　武部仙十郎が、珍しくも、ぺこりと頭を下げたことだった。
　狂四郎は、黙って、老側用人が立去るのを見送った。
「先生！」
　金八が、あらたまって、狂四郎の前に、膝をそろえた。
「あっしも、お供できるんでござんすね？」
「お前には、この江戸で、飢饉と物価暴騰を利用してあくどい儲けをしている商人のふところを、かすめ盗るつとめがあろう」
「あっしは、これをいいしおに、きっぱりと、巾着切の足をあらいてえんでさあ。先生！　旦那！　おねげえしやす。どうか、連れてっておくんなさい！」
「水主が船を降りれば、岡に上った河童だが、巾着切が船に乗れば、さしずめ、鼠を取らぬ猫であろう」
「先生っ！　そいじゃ、この猫の目の前に、あの鰹節をほうり出しておいて、行っち

まおうと仰言(おっしゃ)るんですかい？」
金八は、胡蝶を指さしておいて、きっとなった。
「かじり甲斐(がい)のある鰹節であろう」
「けっ！　冗談もやすみやすみに云(い)っておくんなさい。いくら人の物を頂戴(ちょうだい)するのを、あきないにしているこの野郎でも、旦那にあずけられた女狐(めぎつね)に、ちょっかい出して、商売道具の手を噛(か)まれるほど、頓馬(とんま)じゃありませんや。……先生！　おねげえしやす！　連れてってておくんなさい。かねてから、眠狂四郎のためなら、水火も辞せず、と云っている金八じゃございませんか。その水も水、千里の大海原へ、あっしゃ、とび込みてえんだ。どうか、おねげえしやす！」
金八は、畳へ両手をついて、平伏した。
狂四郎は、無想正宗を把(と)って立ち上った。
「先生っ！　旦那っ！」
金八が、形相変えて、叫んだ。
「わたしが、お前にたのむのは、ひとつしかない」
「なんでござんす？」
「この鰹節を、他の泥棒猫に奪(と)られぬようにしてくれることだ」

四

眠狂四郎が、江戸に於ける最後の夜をえらんだ場所は、やはり吉原であった。

胡蝶を身の世話役にとり持ってくれた馴染の茶屋にあがると、

「敵娼は、踏んでも蹴っても、けろりとしている、勝気でしぶといのがいい」

と、遣手に所望した。

「これは、まあ……、眠の旦那としたことが、いつの間に、好みを変えなすったのでございます？」

「今宵だけだ」

「せっかく大金を払って情婦になすった胡蝶姐さんを、おっぽらかして、好みを変えなすったなんて、なんだか、狐につままれたみたいでござんすねえ。……さてと、踏んでも蹴ってもけろりとしているような花魁というと、誰かしらねえ」

遣手は、小首をかしげ乍ら、出て行った。

ものの半刻も待たされて、廊下を近づいて来たのは、女郎が長襦袢の裾をひいた音ではなく、こちらの神経に鋭くひびく男の跫音であった。

すっと、襖を開けて入って来たのは、唖で隻腕の、この吉原の用心棒・時雨左馬之助であった。

「お主との勝負は、すでに、先日で、済んでいるが……、再度の試合を挑まれても、こちらは、ことわる」

狂四郎が、云うと、左馬之助は、かぶりを振った。

そして、懐紙をとり出し、脇床の硯と筆を持って来た。

（お主が乗って清国へ行く船に、拙者も乗せて頂きたい）

そう書いて、示した。

「どうして、そのことを知っている？」

狂四郎は、眉宇をひそめた。

（拙者は、車善七の実弟）

「成程、それなら、知っているはずだ」

（是非、おたのみ申す）

「佐竹家の用心棒としてなら、わたしにたのむのは、筋ちがいだろう」

（否。拙者は、貴公に負け申した。貴公の配下として、お役に立ちたい）

そう書かれて、狂四郎は、ちょっと思慮の時間を置いた。

「ことわっておく。わたしは、必ずしも、水野越州の走狗として、抜荷船に乗るのではない。場合によっては、側用人の武部仙十郎を裏切って、おのが意志のままに振舞うかも知れぬ。もとより、佐竹家の窮状に同情して、助ける気持もない。……いわば、孤独

な身を、清国へはこんでみる気まぐれ、と云うのが正しいようだ。したがって、お主を配下として使う必要は、わたしにはない」

そう云われると、左馬之助は、隻手を畳につかえて平伏した。必死の誠意が、その姿にこめられていた。

「但(ただ)し、お主が、勝手に、わたしにくっついて来て、船に乗り込むのを、拒絶はせぬ」

左馬之助は、顔をあげると、喜色をおもてにあふらせた。

狂四郎とは異種だが、金八や仙太に、生きている亡霊と見られた風貌(ふうぼう)が、意外に、若い生気を、率直に表情にしてみせた。

左馬之助が、いくども頭を下げて、出て行くと、狂四郎は、むなしい眼眸(まなざし)を宙に送って、

——おれに、宝瓶宮に、時雨左馬之助か。

と、こちら側から乗り組む顔ぶれに、苦笑した。

それから、佐竹側から乗り組む顔ぶれを、想像した。

——佐竹勘解由なら、交易責任者として、七草喜久左衛門をえらぶだろう。その添役として、郡参平をつけるか？

膳部から、盃(さかずき)を把(と)って、口にはこびつつ、

——これらの中で、誰と誰が、生き残って、日本へ帰って来られるか、だ。

――宝瓶宮は、おれが屹度生きて帰って来る、と志津乃をなぐさめていたが……、あるいは、あの男がつくってくれたおれの天宮図とやらには、はっきりと死の星が現われているのかも知れぬ。

大和丸

一

この日――五月二十八日は、両国の川開きであった。
鍵屋・玉屋が、まず、青竜・流星の仕掛花火を打ち揚げるのは、暮六つからであったが、これを見物するべく、両国橋めざして漕ぎ寄せられる納涼船は七つ（午後四時）には、もう大川を埋めつくして、三味線や笛や太鼓の音を鳴らしていた。
こちらの岸から、船より船へ移って向う岸へ渡れる、といってもあながち、誇張ではなかった。
もとより、両国橋の上をはじめ、東西の河岸道は、押すな押すなの蝟集ぶりをみせていた。さらに、花火を眺められるかぎりの処には――物干台・屋根の上・火見櫓などに、一刻も前のこの時刻、おのおの座を占めて、すでにもう、花見ならぬ花火酒に、酔っている客もすくなくなかった。
西岸のならび茶屋は、いずれも、檐に絵燈籠をつるしていたし、垢離場の見世物興行

も、さまざまの露店の夜業は、この日をかわきりとして、盛んになるのであった。
鍵屋・玉屋が打ち揚げる花火は、十二提灯という仕掛花火で、終るのであったが、それは、五更（午前四時）であった。
つまり、当時の両国の川開きは、現代の時間で、十二時間ぶっ通しに、賑わうわけであった。
花火が終り、陸の人影が散り、遊び船がひきあげる時には、もう明けがらすの声が空にあった。
ところで――。
両国橋めざして上って来るおびただしい納涼船を、かきわけるようにして、反対に、大川を下って行く屋根船が一艘いた。八つ半（午後三時）頃であった。
尤も、川開きをきらって、その賑わいを避ける者がいても、べつだん、不審の目では見られなかった。
両国の川開きには、柳橋から辰巳芸妓がすべて売りきれるのが、いつの間にかならわしになっていた。粋で鉄火を誇る辰巳芸妓は、川開きにうかれ、打ち揚げ花火に、口をあんぐり開ける納涼客を、軽蔑したのであった。
この日、午すぎには、辰巳芸妓連は、みな素人のような身装になって、あるいは根岸の鶯春亭、あるいは品川の海晏寺などへ、遊びに出かけて、涼風の静かな閑散を愛で

たのである。

　このならわしは、どうやら、粋客たちが、

「辰巳芸妓なら、野暮な花火見物などに、そっぽを向いて、その心意気をみせてやったらどうだ」

と、すすめて、つくらせたもののようである。

　当時、芸妓の江戸随一は吉原であり、柳橋の羽織と称される辰巳芸妓は、その次に置かれていた。その位づけが、辰巳芸妓たちに、吉原のくるわ芸妓に対して、つよい対抗意識を燃やさせていた。

　弥生（やよい）の廓（くるわ）に於（お）ける桜狩りには、吉原芸妓が一人残らず、茶屋の二階で、客にはべって、仲の町の花魁（おいらん）道中を見物するのであった。これに対して、辰巳芸妓は、当然、吉原の桜狩りにまさる賑わいの両国の川開きには、料亭や船宿で、客と一緒に、花火見物をするべきであったろうが、逆に、その賑わいから姿を消すことによって、

「あたしたちは、くるわ芸妓のような野暮天じゃないんだ」

と、その行為を、粋な心意気とみせたのである。

　したがって――。

　両国橋に背を向けて、屋根船が大川を下って行っても、辰巳芸妓連が、品川の海晏寺あたりに行くのだろう、と見られた。

その屋根船には、辰巳芸妓など乗ってはいなかった。
眠狂四郎と宝瓶宮黒人と、そして、時雨左馬之助が、屋形の中にかくれていた。
目ざすは、いうまでもなく、佃島であった。
すなわち。
狂四郎は、抜荷船出帆を、この両国の川開きの日にえらんだのであった。
その理由は、やがて、鍵屋・玉屋が花火を打ち揚げはじめる暮六つに、明白となるはずであった。
狂四郎は、その暮六つを、出帆の時刻ときめていたのである。

二

さて、一方――。
秋田藩佐竹家の交易宰領者として、抜荷船に乗り込むように、江戸家老佐竹勘解由から命じられた横目・七草喜久左衛門とその添役となった郡参平は、すでに、この日の夜明け、佃島に渡って、漁師町に、身をひそめていた。
郡参平は、忍びの術を修得しただけあって、変装術に巧みであった。七草喜久左衛門を、老いぼれ漁師に身をやつさせ、自分は、その伜になりすまして、大川を渡って来たのである。

身をひそめる場所は、車善七が用意してくれていた。そこは、疫病にかかった者を隔離する小屋で、当然、町からはなれて、住吉神社の裏手にあった。

「……どうも、解せぬの」

喜久左衛門は、相変らず喘息の持病になやまされる苦しげな咳を、洩らし乍ら、独語するように云った。

「お主が、昨夜、眠狂四郎とともに、この佃島へ忍び込んだ時、この住吉神社を根城にしている柳生武芸党の残党は、二十数名をかぞえたそうなが……、これらを一人でも生き残らせれば、すぐさま、大目付に急報されるおそれがある」

「………」

郡参平は、黙して、こたえぬ。

「眠狂四郎は、出帆と同時に、かれらを殲滅せしめる奇策を仕掛けた、というが、はたして可能かのう？」

「………」

郡参平は、いったん、口をひらいたが、すぐに閉じた。

その秘密の仕掛けに就いては、たとい上司の佐竹勘解由にも、打明けてはならぬ、と狂四郎から、かたく口止めされていたのである。

狂四郎が、参平に用意させたのは、直径七寸、長さ一尺の鉛詰めの丸太五本だけであ

った。
勘解由にも喜久左衛門にも、それを何に使うのか、見当もつかなかったのである。
昨夜、狂四郎は、参平をともなって、その丸太五本を小舟に乗せると、この佃島へ忍び入り、何かの仕掛けを施したのであった。
喜久左衛門は、参平が狂四郎から口止めされているときくと、敢えて口を割らせようとはしなかった。
ただ——。
喜久左衛門に判断できるのは、柳生武芸党の残党が、抜荷船が帆をあげて出航しようとするのを待ちかまえて、襲撃して来るに相違ない、と眠狂四郎が考え、その瞬間に於て、逆に、かれらを殲滅する奇策を思案した、ということであった。
ということは……。
柳生武芸党の残党の方では、眠狂四郎が、必ず、抜荷船に乗るに相違ない、と確信しているのであったろう。
かれらの目的は、江戸首領であった柳生源十郎を斬った眠狂四郎に、復讐することにあるのだ。
そうでなければ、かれらは、すでに、碇泊中の千五百石船が、佐竹家の抜荷船かも知れぬ、という疑惑を抱いているはずであり、当然もう、公儀大目付に通報して、内部を

調べていたはずであった。
それをせずに、出帆を待ちかまえているのは、眠狂四郎が乗り込むであろう、という確信を持っているからなのだ。
柳生武芸党という隠密団が、他の公儀隠密たちと異なる徒党である証拠であった。
かれらは、抜荷船の出帆を狙って、如何なる襲撃方法を、とって来るのか？
そしてまた、その襲撃を、眠狂四郎が、どのようにして阻止し、破砕するのか？
七草喜久左衛門は、むしろ、郡参平に、さきに打明けさせてあらかじめ知っておくよりも、その光景を、その瞬間に、見とどける方が面白く、興味があった。
「横目殿、この儀、運を天にまかせるよりほかはござらぬ」
参平が、長い沈黙の末、ぼそりと云った。
「いいや、眠狂四郎は、運を天にまかせるような男ではなかろうて。お主に手伝わせて、やってのけた仕掛けには、充分の自信を持って居ろう」
そうありたい、という念願を、老人は、口にした。
その折、戸口の外から、
「小父上！……七草の小父上は、ここでござるか？」
しのびやかに訊ねる声がひびいた。
喜久左衛門は、眉宇をひそめて、返辞代りの咳をした。

板戸を開けて、入って来たのは、一人のむさ苦しい乞食であった。
「小父上、拙者を清国へお供させて頂きとう存じます」
土間へ坐ると、頭を下げた。
「順之助！」
喜久左衛門が、珍しく、怒気を面貌にも声音にもあきらかに示した。
「よもや、ご家老の許しを受けて、参った、とは云わせぬぞ」
「車善七の代理と、お受けとり下され」
「たわけ！　おのれが船に乗り組む目的は、眠狂四郎の生命を狙うことであろうが、おろかな私怨をはらす場合かどうか——恋は盲目と下世話に申すが、まさに、お前は、それじゃな。めくらの上に、その未熟な腕前で、眠狂四郎を、どうして討つことができようぞ」
「小父上！　お供が叶わぬ上は、この場にて、切腹つかまつる！」
「お前に、切れるかな、腹が——？」
「切ります！」
喜久左衛門は、参平を視やると、云った。
「介錯をしてやってくれるかな？」
参平は、ちょっとためらったが、黙って、差料を把って、土間へ降りた。

順之助は、くやしさをこめた視線で、喜久左衛門を仰いでいたが、懐中にしのばせていた匕首をとり出して、前に置き、ぼろ着の前を押しひらいた。

参平は、差料を抜くと、その背後に立った。

順之助は、顔を包んでいた手拭いを、匕首に巻きつけた。

「小父上！　この順之助、怨霊となって、船に乗り組み、眠狂四郎を呪殺つかまつる！」

そして、切先を、おのが腹部へ擬し、参平が介錯刀を振りかぶった瞬間、

「もうよい、お前の執念、相判った」

喜久左衛門は、とどめた。

三

眠狂四郎ら三名を乗せた屋根船が、佃島の風避場へ入ろうとした折、恰度、両国の川開きをあてこんで、投げ銭かせぎの住吉踊りの連中が、小舟を漕ぎ出そうとしていた。

佃島の住吉神社の祭礼から起ったそれは、いわゆるかっぽれであった。

九尺の竿の先へ御幣万燈をとりつけ、その下に、美しい染模様のある幕をまわした大小の傘をひらいたのを、舳先に立て、同勢六七人が、白衣をまとい、坊主あたまに、白手拭いで向う鉢巻をして、四竹を打ち囃し、三味線を相方にして、

〽沖の暗いのに白帆が見ゆる
　あれは紀伊国蜜柑船

と、わめきたてていた。

狂四郎は、屋根船の障子を開けて、舳先に立って、威勢のいいその連中へ、視線を投げた。

かたわらに、時雨左馬之助がならぶと、狂四郎は、

「お主の手裏剣の業前を、早速に、役立ててもらうことになった」

と、云った。

左馬之助は、狂四郎の横顔を、じっと見まもった。

「あのかっぽれ坊主六人のうち、五人を片づけてもらおう」

屋根船とかっぽれ舟との距離は、およそ三間あった。

狂四郎が、そのかっぽれ坊主たちを、佃島の漁師どもではない、と看破したカンは、鋭かった。

左馬之助が、もう数年も着たきりすずめのよごれた木綿小袖の襟裏に刺している手裏剣の一本を、隻腕に抜き持つのと、住吉踊り連中が、一斉に、御幣万燈下の大小の傘の蔭にかくしていた短弓と矢を、さっと取って、こちらへ狙いつけるのが、同時であった。

まず――。

左馬之助の手裏剣と、一矢が、飛電の迅さで、三間の宙を、翔び交った。
次の刹那、矢を放った者は手裏剣で、咽喉を貫かれてのけぞり、飛来した矢は、狂四郎の無想正宗で、両断された。
そして——。
数秒の後、左馬之助の手練ぶりと狂四郎の迅業が、敵五人を斃し、五矢を真二つにして足もとに落した。
最後に生き残った一人は、矢を放つ代りに、河岸へ跳躍して、一目散に逃げた。
固唾をのんで、この闘いを目撃していた宝瓶宮黒人が、けげんな面持で訊ねた。
「眠さん、どうして、一人だけを、逃げさせたのですか？」
「わたしが、抜荷船に乗るであろうと、予測して待ちかまえていた敵がたの、期待にこたえたまでだ」
この眠狂四郎が、現われたのを、わざと、柳生武芸党の面々に知らせるということは、かれらを一挙に殲滅させる計画に、確信を抱いている証左であった。
柳生武芸党が、秋田領内から、これまで、こちらを亡き者にしようと企て、実行して来たのは、いずれも、意表を衝く奇策であった。
当然、この佃島に於ても、必殺の手段を講じているに相違なかった。
その算謀に対して、狂四郎は、一体、どのような破砕の方法を以て、応えようとして

いるのか？
知っているのは、狂四郎以外に、郡参平だけなのであった。
屋根船を降りた狂四郎は、左馬之助にも黒人にも、べつに油断をせぬようにと注意を与えるでもなく、ふところ手で、ゆっくりと、抜荷船へ向って、進んで行った。

四

大和丸と名づけられた長さ十五間・幅四間・三檣バークの千五百石船は、住吉神社に近い船着場に、どっしりと巨体を据えていた。
いわゆるどんぐり船と称されている船幅が中央より舳先にかけて狭くなって、やや尖っている船にみせかけて、巨きな船首を突き出し、外国船にはみられない遮浪装置を艫に設えた外形は、誰にも疑いの目で見られない、津軽海峡を廻って来た北国船であった。
艫の遮浪装置は、和船の大きな特徴であったが、これは、オランダ商館の船長から、後面から荒浪を受ければ必ず砕ける、と批判された構造であった。波浪をさえぎるために工夫された装置が、皮肉にも、かえって、邪魔なものなのであった。
大和丸が、それと判り乍ら、遮浪装置をとりつけたのは、遠洋航海用の関船（軍船）であることをかくす偽装であった。
当時――。

幕府は、各大名に対して、五百石以上の軍船をつくることは禁止していたが、商業の目ざましい発展にともない、内海航路が交通文化の花形となったので、商船に関する限り、その石数を制限していなかった。

似関船（にたりぶね）という、軍船によく似た商船は、無数に、沿岸航路を往来していた。二千石以上の商船も珍しくはなかった。薩摩（さつま）の島津家や加賀の前田家などが、密貿易をやっていられるのは、この大型商船を所有しているおかげであった。

ついでに、述べておけば——。

和船は、二千石の大型であっても、十三世紀頃から、ほとんど変っていなかった。進歩したといえば、追風しか利用できなかった帆を、横風帆走ができるように改良したことと、檣（ほばしら）が、一檣から二檣・三檣にされたぐらいであった。

しかし——。

大和丸は、ただの北前船（どんぐりぶね）ではなかった。その板船構造は、竜骨、縦通材、肋骨（ろっこつ）によって骨組を造って、その上に外板を張った西洋型航洋船であった。

偽装として、遮浪構造にし、そこに取りはずし式の舵（かじ）をつけていたが、実は、艫に四翅（はね）のスクリュウ様の器具を三個つけて、ろくろ仕掛けで廻転させる推進器を具備していた。

これは、唐津唐兵衛が、瀬戸内海の海賊村上家に伝わる『海賊流車輪船図』を参考と

して、発明した螺旋(らせん)式推進器であった。
すなわち。
この偽装北国船は、佐竹勘解由が仕立てたのではなく、武部仙十郎が、唐津唐兵衛に命じて、長崎の唐人屋敷に来た造船技術の秀(すぐ)れた清国人をやとい、五島列島の福江島西端の唐船浦で、隠密裡(おんみつり)に造らせた船であった。

眠狂四郎・時雨左馬之助・宝瓶宮黒人が、大和丸に乗り込んで来た時には、すでに、七草喜久左衛門・郡参平そして等々呂木(とどろぎ)順之助は、船艙(せんそう)内に身をひそめている、と船長(ふなおさ)の唐津唐兵衛から、報(しら)された。
「それにしても……」
唐兵衛は、垣立(かきたつ)から岸の石垣に架けられた乗降板を渡って来た狂四郎たちを、迎えて、眉宇をひそめた。
「こんなあかるいうちに、襲うてくれ、と云わぬばかりに、物蔭(ものかげ)から見張って居る公儀隠密の目へ、姿をさらし乍ら、堂々と乗り組んで来るとは、どういう料簡(りょうけん)でござるかい？」
「暮六つ恰度に、出航の帆をあげれば、わかることだ」
狂四郎の返辞は、それだった。

「絶対の成算あり、というその落着きぶりを、信頼いたそうわい」
武部仙十郎家の書院で、唐兵衛は、狂四郎にひき合わされた時、一瞥（いちべつ）しただけで、
――この浪人者は、なにやら、海神をも遠慮させるような魔気を持って居る。
と、直感したことであった。
やがて、大川の彼方（かなた）の空に、華やかな青竜と流星の仕掛花火が、美しく描かれた。
大和丸は、水主（かこ）たちの掛声で、帆をあげた。
――どういうことが起る？
狂四郎と郡参平を除いた全員は、心身をひきしめて、表情をこわばらせた。
船体が、ゆっくりと、岸からはなれた。
その時――。
漁師町内から、轟然（ごうぜん）たる凄（すさ）まじい炸裂（さくれつ）音が、とどろいた。
両国の花火とは比べもならぬ火柱が、中天めがけて、噴きあがった。五箇処からであった。
「やったのう！」
流石（さすが）は、唐津唐兵衛は、海賊であった。
五つの火柱を眺めて、即座に合点（がてん）した。
「おんし、この船を狙うた大砲を、破壊し居ったとは、お見事！」

その讃辞（さんじ）に対して、狂四郎の表情は、応えず、むしろ、暗かった。
公儀隠密に斬（き）られた吉郎次の最期（さいご）のさまが、思い泛（うか）んでいたからである。
吉郎次が、狂四郎に伝えた、きれぎれの言葉と仕草は、漁師町に、如意台（にょいだい）つきの大口径の大砲が五門備えつけられてある、という意味だったのである。

順風問答

一

二更（午後十時）――。

夜風は、大和丸の冒険を扶(たす)けるように、巽(たつみ)（東南）に向って吹いて、三檣の帆をふくらませ、船足をはやめていた。

眠狂四郎は、舳先の錨綱(いかりづな)に身を寄せて、惘然(もうぜん)と、後頭で腕を組んでいた。

すこしはなれた場所では、宝瓶宮(アクエ・アリアス)黒人(くろひと)が、望遠鏡で、ひと翳(かげり)もなく晴れて、満天にちらばっている星を、仰ぎ視(み)ていた。その望遠鏡は、かれが、九十九里浜に漂着した際、天文暦(エフエメリス)とともに、生命(いのち)がけで守った貴重な品のひとつであった。

どうやら、本邦の望遠鏡などとは、比較にならぬ精巧な天体観測用のようであった。

黒人のむかいには、郡参平が、その天体観測に興味を抱いたらしく、じっと、うずくまっていた。

やがて――。

黒人は、望遠鏡を目からはなして、

「どうぞ――」

と、郡参平に渡しておいて、

「眠さん、わたくしの星の話、退屈でしょうが、きいてくれますか?」

と、云いかけた。

「こちらは、時間をもてあましていることだ」

「では、きいて下さい。……太陽をはじめ、わたくしたちが眺める惑星(プラネット)には、それぞれ、さまざまな神や女神の名がつけられていること、鹿島灘(なだ)の小屋で、お教えしました。火星は、ローマの軍神の名をとって、マースと名づけられています。金星は、愛の女神にちなんでヴィーナス。水星は、神より遣わされた知性と能力を持った使者マーキュリイ。土星は、農耕の神――サターン。月は、人間に想像力と詩をもたらすために、白い女神――ムーンと称(よ)ばれています。想像力があまりにゆたかな詩人は、時として、気が狂うことがありますから、月は、精神の不安をもたらすこともあります。太陽は、地球の万物をつくる創造力がありますから、サンです。……しかし、古代人は、これらの惑星に、勝手に、神話の神や女神の名をつけたのではありません。千年以上の歳月をついやして、人間に影響をおよぼすことを、ちゃんと、観察したのです。例えば、火星は、攻撃、侵略、熱情、強い精力、無慈悲、暴力、破壊――そういう影響を、人間におよぼす

から、ローマの軍神の名をとって、マースと名づけました」
「……………」
「貴方(あなた)は、内心、ばかばかしい、と思っておいでかも知れません。……けれども、これは、事実なのです。太陽が、地球の動物を生かし、植物を育ててくれるように、月は人間の精神に強い影響を与え、金星は、愛情に就いて影響力をふるうのです」
「……………」
「いまから三百年前——十六世紀を、錬金術の世紀といいます。その時代には、ぞくぞくと偉大な予言者があらわれました。アグリッパとかゴーリックとかパラケルススとかルーサットとかノストラダムスなどです。このなかでは、ユダヤ人のミシェル・ノストラダムスが、いちばん有名なオカルティスト——神秘現象の予知能力者でした。ノストラダムスの父方の祖父も母方の祖父も、医師であり、占星学者でした。だから、二人の祖父から医術と占星術を学びました。ノストラダムスは、学者としても天才を発揮しました。……かれが、ふしぎな予知能力を示しはじめたのは、妻と二人の子供をペストで亡くして、八年間、放浪の旅をしてからでした。……こんな例があります。フランスのロランヴィーユの王公の邸宅に、身を寄せていた時のことです。王公は、農場の庭で遊んでいる白と黒の二匹の仔豚(こぶた)を、指して、自分は、夕食に、白い仔豚を喰べるつもりだが、お主(ぬし)は、はたして、私が白い仔豚を喰べると思うか、と問いました。ノストラダム

スは、かぶりを振り、白い方は犬に食われ、貴方様は、黒い方を召し上るでしょう、と予言しました。……王公は、もちろん、料理番に、白い仔豚を殺して、食卓にのせよ、と命じました。ところが、焼かれた白い仔豚が、台所に置かれて、料理番がちょっと外へ出ている隙に、王公が飼っている猟犬がとび込んで来て、その白い仔豚を、どこかへ、くわえて行ってしまったのです。そこで、料理番は、しかたなく、黒い仔豚を殺し、焼いて、主人の食卓へさし出しました。王公は、それとは知らず、ノストラダムスに、お主の予言は破れたぞ、と得意気に命じました。ノストラダムスは、微笑して、料理番を呼び、正直にこたえるように命じました。料理番は、恐縮して、食卓上の豚は、黒い方であることを白状して、詫びました。……こんな話、つまらないですか、眠さん？」

「いや、すこしも……」

狂四郎は、かぶりを振った。

二

宝瓶宮黒人は、つづいて、ノストラダムスと同時代——十六世紀の秀れた三人の占星術師の話を、狂四郎に、きかせた。

フランスの王妃カトリーヌ・ド・メディシスに絶大な信頼を得ていたゴーリックという人物がいた。ゴーリックは、王妃に、

「皇帝陛下（カトリーヌの良人・アンリ二世）は、決闘によってお亡くなりになりましょう」

と、予言して、見事に当てたのであった。

ゴーリックがつくる、すべての人物の天宮図は、百パーセント的中した。

ジョヴァンニ・ド・メディシスは法王になる、と予言し、ジョヴァンニは、その通り、レオ十世となった。

スコットランドに渡ったゴーリックは、聖アンドリュースの大司教に、

「貴方のホロスコープには、むごたらしい死刑にあう、という大凶が出て居ります」

と、予言したが、まさしく、その大司教は、敵のプロテスタントたちの手で、ギロチンにかけられたのであった。

さらに、ゴーリックは、法王パウロ三世が、一五四九年十一月二十日に逝去する、とぴたりと云いあててみせたのであった。

次の一人――メーストル・ターレルという占星術師は、二百年後の十八世紀末一七八九年は、宗教と法律をめぐる大変動の年であり、その争乱は二十五年間にわたってつづき、一八一五年に一応、終結するであろう、と予言した。

一七八九年には、フランス全土に暴動が起り、第三階級議員が、貴族・僧侶と分れて国民議会をつくり、人権宣言をした。そしてそれから二十六年後の一八一五年に、ナポ

レオン・ボナパルトが、その帝王の座から追われて、セント・ヘレナ島へ流された。もう一人の占星術師リチャード・ルーサットの予言もまた、正確無比であった。

ルーサットは、一五五〇年に、次のように予言した。

自分がこの書を著わした年から二百四十三年後——一七九二年に、大革命が起るであろう、と記したのである。

まさに、予言は的中した。

フランス革命は、一七九二年に確立され、王制は廃され、共和国となったのである。

黙って、きき了(お)えた狂四郎は、

「占星学の天宮図は、人間だけではなく、一国の未来も予言することが可能だ、というのか?」

「そうです。できるのです。ノストラダムスは、その『百年間(センチユリーズ)』という四行詩で、記しています。

　アンゴルモワの大王のごとく
　一九九九年の第七の月に
　恐怖の大王が天降(あまくだ)るであろう
　そのとき、軍神マルスは良き大義名分のために統合するであろう
　　　　　　　　　　　（中村保男訳）

アンゴルモワの大王、というのは、蒙古のジンギス汗のことです。ジンギス汗が、ヨーロッパ大陸をあらしまわったように、四百五十四年後には、何とも知れぬ grand Roy déffrayeur がこの地球を、潰滅させ、それから、別の良き世界に生れかわるだろう、とノストラダムスは予言しています」

「黒人さん、あんたには、日本が、百年後どう変るか、予言する天宮図が、つくれるか？」

狂四郎は、冷やかな語気で、訊ねた。

「わたくしは、駄目です。そんな能力はありません。せいぜい、自分の未来と、自分に似た異端者の貴方の未来ぐらいしか、あてられません」

「あんたは、すでに、わたしが、いつ、くたばるか、天宮図で割り出して居るのではないのか？」

「いいえ。わたくしはまだ、貴方の星を、見つけてはいないのですから……」

「冥府星とでも名づける星がありそうだ、と云ったではないか」

「もし、見つけられるとすれば、そういう星かも知れない、と仮定したにすぎません」

その時、

「横あいから、口をはさみ申し、恐縮に存じますが――」

と、郡参平が、云った。

「なんですか？」

宝瓶宮が、視かえした。

「それがしは、十七歳の時より、甲斐の笛吹川上流の山中にて、小幡幻夢斎なる、仙人同様の忍びの名人に弟子入りして、修業つかまつりましたが……、幻夢斎先生は、およそ四十年後には、徳川幕府は倒れ、新しい国に生れかわるであろう、と予言なさいました」

参平は、云った。

「おお！　その予言は、きっと、当ります」

宝瓶宮は、即座に、応えた。

「日本は、大名もさむらいも農民も、みんなくらしに困っています。それなのに、幕府は、オランダ以外の国と、貿易をしようとしません。この制度、まちがっています。やがて、革命が起らないはずありません。そうでしょう、眠さん？」

しかし、狂四郎の返辞は、なかった。

三

郡参平が去り、つづいて、宝瓶宮黒人も、船内へ降りて行ったが、狂四郎は、一人だけ、依然として、舳先の錨綱に凭りかかって、いつまでも、夜空を仰いでいた。

宝瓶宮が、かたわらに、天体望遠鏡をのこしておいてくれたが、それを一度も、目にあてて、星を観(み)ようとしてはいなかった。

黒い異邦の占星学者が、語ってくれた三百年前の秘学者(オカルテイスト)たちの話は、この虚無の男に、べつだん、深い興味も感動も与えてはいなかった。さりとて、ばかげた作り話だ、と否定もしていなかった。

こうして、無数の星が煌(きら)めいている夜空を、じっと仰ぎ視(み)て、微動もせずにいるこの男の脳裡(のうり)にあるのは、言葉にすれば、宇宙の中に生きている人間の微小さに対する、虚(むな)しい自嘲(じちょう)であった。

――あの宇宙の中の星のひとつが、生きていることに何の意義も見出(みいだ)せないこんな人殺しの無頼者を、あやつっている、ということか。

と――。

気のせいか、ひとつの星が、急に、せわしい煌(かがや)きを増したようであった。

微動もせずにいる狂四郎の視線は、意識せずして、その星だけを、もう一刻(とき)（二時間）以上も、瞶(みつ)めていたのである。

星は、狂四郎の凝視に応えるかのように、ゆっくりと、左方へ移動しはじめた。そして、急に、その速度を増した。

「……？」

一瞬、星は、ぴたりと停止した。
次の刹那、狂四郎は、星が、一直線に翔けあがって、宇宙の彼方に消え去るのを、みとめた。
――おれを支配する星が、あれならば、死神は、もうすぐ間近に、迎えに来ていることになる。
やがて、暁の明星も消え失せ、視界はのこりなくはれわたった。
朝陽が、水平線から昇って来る前の、しらじらとした夜明けの海原は、重い暗い色をたたえているために、そのひろがりを無気味なものにみせていた。
夜のうちに、伊豆半島をまわって居り、右方に黒く突き出ているのは、御前崎のようであった。
舳先に向って、ひとつの大きな人影が、大股に、ゆっくりと近づいて来た。
一毛ものこさず剃り上げた坊主頭の下に、髭もぐじゃらの魁偉な面貌があり、はだけた胸にも、漆黒の毛が茂っていて、短い筒袖と裾から、ぬっと突き出された巨樹の太枝のような四肢の逞しさとともに、いかにも、この千五百石の抜荷船大和丸の長にふさわしい風格があった。
「眠さん、あんたに、ひとつ、ことわっておくことがある」
「…………」

「あんたは、武部仙十郎翁にたのまれて、この船の用心棒として、乗り組んで来られた御仁だ。ところが、武部老は、妙な依頼を、このわしになされた。……あの男は――つまり、あんたのことじゃが――、時と場合によっては、水野家を裏切って、佐竹家に味方するやも知れぬ。そういう危険人物ゆえ、事態次第では、この唐津唐兵衛の判断にまかせる、と申された。わしの立場は、云わずとも知って居られよう。……わしは、こういう依頼は、肚の裡におさめておくのが、きらいな性分ゆえ、あらかじめ、あんたに、はっきりとことわっておく。あんたの態度を看て、わしも態度をきめる。よろしいかな？」

念を押された狂四郎は、無表情でこたえた。

「わたしのお主に対する返辞は、自分は水野家の走狗ではない、ということだ」

「よし、判った」

うなずいた唐兵衛は、何気なさそうに、顔を仰がせた。

それから、やおら、懐中から一挺の短銃をとり出した。

狂四郎は、唐兵衛がその短銃を狙いつける空へ視線を送った。

順風を帆にはらんだ前檣の突端に、一羽の白い海鳥が、翼をやすめているのが、みとめられた。

凪いでいるとはいえ、この沖合では、うねりの高い波浪を切って進む船は、大きく前

後にゆれていた。
唐兵衛は、さほどの狙いの時間を置かずに、短銃の引金を引いた。
白い海鳥は、狂四郎の足もとへ落ちた。
「眠さん――」
唐兵衛は、短銃を懐中に納め乍ら、云った。
「わしは、下士崩れの海賊だ。こちらに不利をもたらす者は、平気で、背後からでも撃ち殺す。あんたの腰にある無想正宗とやらと、まともに勝負する料簡など、さらさら持ち合せては居らん。おぼえておいて下され」

四

大和丸の船内は、長崎の唐人屋敷に来た清国の造船技師が指揮して、五島列島の福江島の唐船浦で造られていた。たしかに、外見は、これまでの和船の構造そのままであった。
すなわち、船底（敷）の上に、根棚、中棚、上棚が、釘付けされていた。
従来の和船は、これらの棚を、舳先では船首材（水押）に、艫では平らな戸立に結合して、縦張力を保持し、横張力用として棚の左右に船梁を渡していたのである。外板を主要力材とした完全な板船構造であるゆえ、千五百石積みという大船であっても、遠洋

航海用には、非常に無理なものであった。

したがって、イギリス船に乗って、清国へ渡って来た宝瓶宮黒人は、はじめて、船内へ降りて眺めた時には、

——なんという原始的な造りであろう。これでは、大暴風雨に遭えば、まず、乗りきる可能性は、三分しかない。

と、首を振ったことだった。

二千トンの堅牢なイギリス船でさえ、大暴風雨をくらって、インドへ帰るべきところを、日本へ流されて、難破し、宝瓶宮黒人ただ一人が、生きのこることができたのである。

宝瓶宮が、そのことを、唐津唐兵衛に云うと、

「なに、北前船に見せかけたのは、もし、公儀のお目付が、とり調べに乗り込んで来た時、怪しまれないための偽装ゆえ、安心なされ。構造は、最新式の西洋型ですばい」

と、笑ってみせたものであった。

「宝瓶宮殿と申されたな」

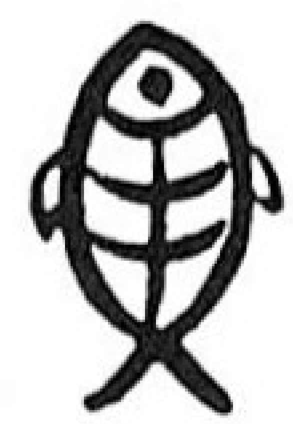
上棚にいた黒い異邦人のそばへ、七草喜久左衛門が、近づいて来た。

相変らず、息苦しげな咳をもらし乍ら、

「ひとつ、おうかがいいつかまつるが……」

「なんですか？」

「お手前は、この日本に漂着された時は、日本の言葉など、一語もご存じなかったのでござろう」
「そうです」
「ところが、わずか三年の間に、そこいらの庶民も知らぬほど、多くの語彙（ごい）を修得なされて、自由自在に、話される。まことに、恐れ入った仕儀でござる。天才としか、申し様（よう）ござらぬの」
宝瓶宮は、その感嘆の言葉をきくと、にこにこして、矢立（やたて）と懐紙をとり出して、さらさらと描いてみせた。



「これは、何か、貴方（あなた）お判りにならないはずありません」
「魚でござるが……?」
宝瓶宮は、つづいて、その下に、次のように、描いてみせた。



「ふむ！」
喜久左衛門は、唸(うな)った。
「漢字は、すこしも、むつかしくありません。魚という文字、ちゃんと、そのカタチからつくられています」
「それにしても、お手前の語学の力には、ほとほと感服つかまつる」
「わたくしは、文字を学ぶのが好きなのです。中国語、一生懸命勉強しました。面白いです」
そう云ってから、宝瓶宮は、ちょっと、この老人をからかう表情になると、新しい一文字を書いてみせた。
「貴方、これ、なんという字か、判りますか？」
のぞいた喜久左衛門は、首をひねった。



「ふうむ？　なんという字でござろうかな？」
しきりに考え込んでいる喜久左衛門を、すこしはなれた場所から、眺めていた等々呂木順之助が、寄って来た。

「順之助、お主は、武の方はたよりないが、文の方では、いささか勉学の自信がある、と申して居ったの。……この字が、判るか？」

「判りませぬ」

順之助は、幾分かの敵意のある視線を、黒い異邦人に向けた。

宝瓶宮は、その文字の下に、記した。

死

それだった。

「ほう！　これは、死という字の母体でござるか！……いや、汗顔のきわみ！　われらは、まさに無学文盲でござるわい」

そう云い乍らも、喜久左衛門は、内心では、別のことを考えていた。

――眠狂四郎を味方につけ、この夷人（えびす）に通詞（つうじ）として役立ってもらえば、この抜荷、必ず成功する！

――ただ、あの船長（ふなおさ）の唐津唐兵衛を、抱き込むのは、不可能であることは明白ゆえ、わが身をすてて、唐兵衛を討ち果し、手下の水主（かこ）どもを片づけて、清朝の役人にたのみ込み、彼（か）の国の船長と水主をやとうことができれば、この密交易、必ず成功しようが……。

密航女

一

清国広州をめざす千五百石積みの抜荷船・大和丸は、ただの一度も時化に遭わず、したがって、どこの湊に寄泊して日和を見合せて、日数を無駄に費やすこともなく、紀伊半島をまわり、鳴門海峡を通って、瀬戸内海をまっすぐに、西へ帆走していた。

尤も、ここまでの順風満帆の航海中、何事もなかったわけではなかった。

鳴門海峡を通過する際、水主の一人――万吉という若者が、帆足にはねられ、櫓より落ちて、渦潮へのみ込まれた。

もとより、本邦随一の危険な瀬戸なので、大和丸は、順潮と逆潮が凄まじい勢いで奔過する潮流の更迭の前の半刻（一時間）をえらんで、横断したのであった。太平洋から瀬戸内海へ流れ込む満潮に乗っていたし、天気もよかったが、波浪は高かった。

水主たちは、大あわてで、伝馬をおろそうとした。

船から人が落ちた場合は、帆をおろし、碇を入れ、苫を投げ込み、縄つきの水竿を流

して、救いあげるのであった。
しかし、万吉の落ちたのは、ただの海ではなかった。鳴門海峡の渦潮のまっただ中であった。平常大潮になると、潮流の早さは、半刻七海里であった。
苫や水竿を投げ込んでやったところで、助かる見込みはなかった。
しかし、仲間が落ちた以上、見すてるわけにいかなかった。
水主たちは、神仏に向って大声で祈り乍ら、伝馬をおろそうとした。
とたん、
「無駄なことをするなっ！」
船長の唐津唐兵衛の呶号が、とんで来た。
「お頭！　万吉は、お前様の甥で、いずれはお前様のあとを継いで船長になる度胸を持った奴ですぜ！」
水主の一人が、血相変えて、食ってかかった。
「阿呆め！　てめえら、伝馬をおろして、万吉がとりつき、親船に漕ぎつくまで、待っているつもりか。憩潮が終るのは、あと四半刻（三十分）しかないのだぞ！　そのあいだに、突っ切らなけりゃ、この大和丸が、海底の藻屑になることを、てめえら、知らねえとは云わせねえぞ！」
海の男の間髪を入れぬ決断力を、艫で目撃していたのは、七草喜久左衛門と郡参平で

あった。
「参平――」
「はあ……」
「あの海賊をして、水野家を裏切らせ、味方につけるのは、とうていのぞみはないのう」
「左様に存じます」
「この企て、ご家老は、中止されるべきであったかも知れぬ」
「七草殿！　お手前様ともあろう御仁が、今更、気弱におなりなさるとは、心外でござる！」
その言葉は、老横目にきかせるより、参平自身、おのれに云いきかせるために、口にしたのであったろう。
もとより、参平は、高恩を蒙った江戸家老・佐竹勘解由を裏切る存念は、毛頭みじんもなかった。
ただ、敵側の立場にある眠狂四郎という人物に、参平は、魅了されている自分を、否定することができなくなっていた。
眠狂四郎が、清国に至って、いかなる行動を為すか、予想はつかぬが、おそらく、自分は、狂四郎の手足となるに相違ない、という意識が、はっきりと、脳裡に生れていた。

……参平は、喜久左衛門が、別の目色で、自分を瞶めているのに気づいて、視線をかえした。

「参平、お主、いま、わしと同じ考えをいたして居るようじゃな！」

「…………」

「わが佐竹家にとって、たのむべき人物は、ご老中の側用人殿がえらんで乗り組ませた眠狂四郎。……あの男が、もし味方になってくれれば——お主、習いおぼえた秘術を、縦横無尽に駆使して、この企てを成功させることができるのだが、と思っているのではないかな？」

「…………」

参平は、こたえる代りに、顔を伏せた。

「よいわさ。……ご家老を非難するわけではないが、藩の興廃を賭けたこの企図、ご老中の側用人殿に証拠をにぎられた時から、狂いが生じてしもうた。明日はどういうことに相成るか、わしにもお主にも、見当もつかぬ。成行きまかせといたそう」

二

眠狂四郎と宝瓶宮黒人と時雨左馬之助が、与えられたのは、佐竹家の私鋳清国一両銀を詰めた箱ならびに名産物を積んだ船艙のすぐ上にある一室であった。

十畳あまりの畳敷きになって居り、片隅に夜具が積んであるだけで、何ひとつ調度品は置かれていなかった。

狂四郎は、無想正宗を抱いて、夜具に凭りかかり、目蓋を閉じていた。

宝瓶宮は、その傍で、例の手摺れた革張りの天文暦をひろげて、星占いの研究に余念がなかった。

時雨左馬之助は、はなれた場所に端座して、十数本の手裏剣を、前にならべて、せっせと手入れをしていた。

船腹を打つ浪音が高く、鳴門海峡を乗り切ろうとしているために、揺れもひどかった。

永い沈黙があってから、珍しく、狂四郎が、宝瓶宮に、話しかけた。

「あんたに、ひとつだけ、訊ねたいことがある」

「なんですか？」

「あんたは、自分をイギリス人と思っているのか？　それとも、インド人と思っているのか？」

「それ、むつかしい質問です。わたくしは、イギリスの都ロンドンで生れて、育ちました。父は、貴族でした。イギリスでは、貴族が、インドの奴隷女を妻にすることは、そうです、将軍が足軽の娘を御台所にするよりも、もっともっと大変なことです。父は、インドの奴隷女を妻にしたために、貴族の地位もすてなければなりませんでした。もち

ろん、貴族の社交界からしめ出されてしまいました。父は、この上もなく母を愛したのです。……わたくしは、その父を、尊敬しています。だから、わたくしは、立派なイギリス人を父に持ったイギリス人です」

「…………」

「しかし、貧乏した父が死ぬと、母は、絶望して、自殺してしまい、わたくしは、七歳の時から、まわりのイギリス人から、軽蔑されて、奴隷のようなあつかいをされ乍ら、たった一人で働かなければなりませんでした。誰一人、わたくしを、イギリス人の子供として、見てはくれませんでした。いやしいインドの小僧として、こき使いました。だから、わたくしは、インドの奴隷女を母に持ったインド人です」

「…………」

「眠さん、貴方は、刀を持っていますが、自分をさむらいと思っていますか？」

こんどは、宝瓶宮が、訊ねた。

「武士道の吟味、などというものとは、縁のない料簡で生きていることはまちがいない」

「しかし、貴方は、金をもうける商人やその日ぐらしをしている職人や百姓が持っていないさむらいの誇りをすててはいません」

「…………」

「わたくしもそうです。貴族の父から受け継いだイギリス人の誇りを持っています。しかし、イギリス人はきらいです。イギリス人に征服されたインドをなさけないと思っています。……物心ついた頃、母が、乞食（こじき）のようにあつかわれ乍ら、それをあたりまえのこととして、わたくしがイギリスの子供たちからいじめられるのをかばいもしなかったのを、おぼえています。悲しい思い出です」

「………」

「わたくしは、ロンドンで軽蔑されるのがいやで、いやしい仕事に就いて働き乍ら、インド語と中国語を勉強して、そのおかげで、東インド会社の最も下級の社員にしてもらい、アマースト号に乗って、インドのカルカッタへやって来ました」

「………」

「しかし、カルカッタ政庁につとめてみると、イギリスは、東インド会社として、インド人と交易しているのではなく、十五万の軍隊を後楯（うしろだて）にして、インドを征服してしまっていました。イギリスの軍人は、インドを自由な独立国にしようとする者たちを――マイソール王国はじめ、各民族を、片っぱしから討ち亡（ほろ）ぼしていました。インドの各民族の太守たちが、イギリスの軍人や東インド会社の社員に出会うと、まるで捕虜のように、ぺこぺこと頭を下げているのを、わたくしは、見せられて、自分がインド人であることを思い知らされました。……カルカッタ、マドラス、ボンベイなどの都市は、イギ

リス人が支配しています。インドのベンガル地方の貧しい民衆は、イギリスに対して、血のにじむような税金をおさめているのです」

「…………」

「つまり……、大坂や江戸に大金持の商人がいて、まだ文明が未発達の広い国へ、交易しに行き、そのあとから、自分たちを守ってもらうため、という名目で、軍隊を呼び、占領した、というわけです」

「…………」

「わたくしは、貴族であったイギリス人の父から受け継いだ誇りを持ち乍ら、母の国へやって来て、自分がインド人であることを知りました。……だから、インドにいるのがいやになって、清国へ行ったのです」

「…………」

「わたくしは、いまでは、イギリス人でもなければ、インド人でもない、自分の国を持たない孤独な異端者（コスモポリタン）です。……眠さん、貴方も、わたくしと同じ異端者です。孤独で、自由に生きています」

「…………」

「貴方は、武部仙十郎という老人にたのまれて、この密輸船に乗りました。しかし、貴方は、老中の水野越前守（えちぜんのかみ）に味方して働かなければならないという責任感も義務感も持

っていないでしょう。もしかすると、秋田藩に味方するかも知れません。貴方は、孤独で、自由な人なのだから……」

「………」

「貴方は、だから、船長の唐津唐兵衛という人物を、裏切るかも知れない。唐津唐兵衛と闘うことになる危険があります。……そして、もしかしたら――」

「わたしが、清国で生命（いのち）を落す運命にある、というのか？」

「眠さん！」

宝瓶宮黒人は、真剣な面持（おももち）で、云った。

「わたくしは、貴方の天宮図（ホロスコープ）、破ってすてました。もう、貴方の天宮図はつくりません。明日の貴方の運命は、わたくしには、予知できません。予知したくないのです」

三

四更（午前二時）をまわった頃合であったろうか。

狂四郎の睡（ねむ）りを破る気配が、そっと傍に来た。

薄目をひらいてみると、時雨左馬之助が、蠟燭（ろうそく）を持って、じっと、こちらの寝顔を凝視していた。

船が切る波浪の音のほかには、宝瓶宮の安らかな寝息だけが、その部屋にあった。

左馬之助は、燭台を脇に置くと、鄭重に頭を下げた。
その表情の真剣さに、狂四郎は、身を起さざるを得なかった。
左馬之助は、懐紙と矢立を把り出すと、
（この船内に、胡蝶を、乗せて居り申す）
と、記した。
「……？!」
狂四郎は、黙って、左馬之助を瞶めかえした。
（金八に、依頼され申した）
「…………」
（金八は、胡蝶を、当船に乗り込ませるために、浅草や両国で、富有な商人どもの懐中から、財布をすり取り、百両をつくり申した。その百両にて、当船の賄方の源次と申す男をくどき落し、その上にて、拙者に、胡蝶をひそかに守ってくれるように、歎願いたした）
――金八の奴、供をさしてくれとたのんだのを、ことわったので、その仕返しをしたか。
狂四郎は、苦笑した。
金八が、胡蝶をかたわらに置き乍ら、供をさせて欲しい、と願った時の光景を思い泛

べた。
「あっしは、これをいいしおに、きっぱりと、巾着切の足をあらいてえんでさあ。先生！　旦那！　おねげえしやす。どうか、連れてっておくんなさい！」
そう願った金八の様子は、狂四郎がこれまで接したことのないほど必死な、真剣なものであった。
その歎願に対するこちらの態度は、きわめて冷淡なものであった。
「水主が船を降りれば、陸に上った河童だが、巾着切が船に乗れば、さしずめ、鼠を取らぬ猫であろう」
こちらがそうこたえると、金八は、憤然となって、胡蝶を指さして食ってかかったことだった。
「先生っ！　そいじゃ、この猫の目の前に、あの鰹節をほうり出しておいて、行っちまおうと仰言るんですかい？」
「かじり甲斐のある鰹節であろう」
狂四郎は、何気なく、気軽に、云ったつもりであったが、江戸っ子の義理人情を信条とし、自分の生涯の唯一の主人と仰ぐ金八にとっては、その言葉は、かれの血汐を逆流させたに相違なかった。
狂四郎は、その金八の心情を汲んでやらず、必死の歎願を、すげなくしりぞけて、云

いのこしたことだった。

「わたしが、お前にたのむのは、ひとつしかない。……この鰹節を、他の泥棒猫に奪られぬようにしてくれることだ」

そう云いのこして、蛇骨長屋を立去ったあとで、金八が、どんなに怒り狂ったか――

いまにして、狂四郎には、手にとるように判った。

――こん畜生！　旦那が身請してやった吉原芸妓を、この金八が抱けるか抱けねえか、おれという人間を、旦那は、そこいらの下種なやくざと同じぐれえにしか看てくれちゃいねえんだ。ようし！　こうなりゃ、この金八が、どんな人間か、旦那に思い知らせてくれるぜ！　この鰹節を食うのは、この世に旦那しかいねえことを、合点させてくれてやる。

金八が、わずか数日間で、浅草・両国を経巡って、百両という大金をすり取ることは、文字通り生命がけであったに相違ない。そして、大和丸の賄方を説得買収することも、容易ではなかったろう。胡蝶を、どうやって、ひそかに、船中に、忍び込ませ、その身を匿まうか、源次という賄方としては、船長の唐兵衛の許可を得ずしてやるはなれ業であるから、百両に目がくらんで、かんたんに承知した筈はない。おそらく、金八の心意気にほだされたに相違ない。

――それにしても、この隻腕の手裏剣撃ちを、味方にひき入れて、胡蝶の守護方を承

諾させたとは、金八も、やってのけたことだ。

四

時雨左馬之助は、つづけて、書いた。

(胡蝶は、佐竹家の名産物のひとつ秋田黄八丈の入れてある葛籠(つづら)の中に、身をひそませて居り申す)

「源次という賄方が、今日まで、食事その他の世話をしてくれた、というのか？」

(左様――。源次と申す男、江戸っ子にて、いったんひき受けた約束は、確実に、実行いたしして居り申す)

「金八の奴、おのれの勝手なあさはかな意地で、騒動の原因をつくったことだ」

狂四郎は、呟(つぶや)きすてた。

左馬之助は、狂四郎へ、まばたきもせず、双眸(そうぼう)をあてている。

その双眸は、醜怪な風貌(ふうぼう)に似合わしからぬ、純粋な光をたたえていた。

「女を船内にひそませて、露見しない筈はない」

(胡蝶は、貴殿を心から慕(しと)うて居り申す。このこと、しかと、看(み)とどけて居り申す)

「わたしにとっては、この上の迷惑な話はないことだ」

（何卒、胡蝶に、ひと目だけでも逢ってやって下され。拙者からも、お願い申す）

「金八が、勝手に忍び込ませた女だ。逢う気は起らぬ」

（ただ、ひと目だけで結構でござる。貴殿に逢えれば、いつ殺されてもいい、と申して居るいじらしさを、お汲みとり下され）

そのたのみに対する狂四郎の返辞は、冷笑をともなったものだった。

「吉原の用心棒にしては、お主、柄にもなく人情深いな」

（拙者は、生れてはじめて、一途に男を恋う女をみたのでござる）

そう書いて、左馬之助は、一種哀しげな歪んだ表情をつくった。

狂四郎の方は、いつの間にか、宝瓶宮の寝息が止っているのに気がついていた。

深い重い沈黙が、来た。

宝瓶宮が、むっくりと起き上った。

「眠さん、金八さんが、貴方を恋している女を、この船に忍び込ませているようですね」

「この亡霊のような男が、柄にもなく、男を慕う女に、ひどく同情したようだ。……黒人さん、あんたの占星術では、どういうことになるか、ひとつ、占ってもらおうか」

「日本の船は、婦人をこんな船に乗せるのは、いけないことなのですか？」

「あんたの国の貿易船とは、しきたりがちがうのだ。海賊船には、女を乗せてはならぬ

掟（おきて）がある。女を乗せれば、竜神のたたりが起る迷信がある。船長の唐兵衛は、見つければ、ただちに、海へ投げ込むかも知れぬ」
「つまらぬ迷信ですね」
「倭寇（わこう）以後の迷信ゆえ、船長に諒解（りょうかい）を求めるのは、無駄であろう。女を乗せれば、やがて、大時化（おおしけ）が襲って来て、竜神の怒りにふれる、ということだ」
「つまり、眠さん、貴方と船長との争いになる、というわけですね？」
「唐兵衛は、そうでなくてさえ、わたしという男が、裏切るかも知れぬ、と疑って居る。……あの男の短銃の達人ぶりは、とくと見せられた。わたしの円月殺法では、勝目はなかろう。わたしが、女を忍び込ませている、と判明すれば、それを好機として、わたしを、殺しにかかるに相違ない」
「いいえ、貴方は、絶対に死にません。この大和丸の中では、貴方が生命を落すこと、わたくしの天宮図には、今日まで現われていません」
　宝瓶宮は、きっぱりと断言した。
「それならば、わたしは、女を清国まで連れて行くことになろう」
「それがいいです。……しかし、わたくしの予知では、その婦人のために、誰かが生命を落すでしょう。そんな気がします」
「あんたの占星術を疑うわけではないが、生命を落すのが、この眠狂四郎であっても、

一向にさしつかえはない」

宝瓶宮は、しかし、その言葉が耳に入らぬもののように、時雨左馬之助へ、気の毒そうに視線をあてていた。

身代り勝負

一

眠狂四郎と宝瓶宮（ほうへいきゅう）が問答しているうちに、時雨（しぐれ）左馬之助は、しきりに、生あくび、をしはじめていた。

これは、あきらかに、麻薬が切れて来た徴候であった。

ものの四半刻（はんとき）（三十分）も経（た）たぬうちに、左馬之助の双眸（そうぼう）が、どろんと潤（うる）んで来た。

それから、手拭（てぬぐ）いで、しきりに、流れ出て来る洟水（はなみず）を、拭（ふ）きとりはじめた。

宝瓶宮は、左馬之助の症状を、見まもり乍（なが）ら、いたましげに、かぶりを振り、肩をすくめた。

狂四郎の眼眸（まなざし）は、別の方角の宙へ、惘然（もうぜん）と投げられていた。

左馬之助は、片隅に積んだ夜具へ、匍（は）い寄り、その後側をさぐっていたが、愕然（がくぜん）となって、

「う、うっ！」

と、呻いた。
ひそかに、そこにかくしていた阿片壺が、いつの間にか、誰人かに持ち去られてしまっていたのである。
――くそ！　何奴が……、あれを、奪ったか！
左馬之助の形相は、無言の喚きをあげた。
「唐兵衛の仕業であろう。お主が、わたしの側についているのは、わたしが、水野家を裏切った際、都合がわるい。唐兵衛としては、いざという場合、お主をおのれの味方につけるためには、阿片は恰好の餌になる」
「……あ、あ、……うっ、うううっ！」
阿片がなくなったと知るや、左馬之助は、にわかに、激しい禁断症状をむき出した。
五体がふるえ、瞳孔が収縮し、畳をかきむしるように、十指を痙攣させはじめた。
あと一刻も経てば、地獄の苦痛にさいなまれる凄まじい錯乱状態に襲われるであろう。
狂四郎と宝瓶宮は、手のほどこし様もなく、すてておくほかはなかった。
救い主が、忍び入って来たのは、左馬之助が、顔面に汗を噴かせ、恐怖と欲求で、けもののような唸り声をたてて、正視するに堪えぬ喘ぎをつづけ、さながら臨終の虫の息の徴候を示した折であった。
入って来たのは、賄方の源次という男であった。三十がらみの、いきのいい面だまし

いをそなえていた。

すでに、時刻は五更（午前四時）になって居り、源次は、この部屋の三人が、睡(ねむ)っているものと思い、船艙(せんそう)にかくまった胡蝶に、こっそり食事をはこんで来たのであった。

「おっ！　こ、これァ……、この御仁(おひと)は、阿片の中毒にかかっていなさる！」

源次は、驚愕(きょうがく)の声をあげた。

「海賊船の賄方なら、この錯乱の苦痛を助けてやれるだろう」

狂四郎が、冷たい語気で、たのんだ。

「待っておくんなさい」

源次は、胡蝶に渡す弁当箱を、そこに置くと、とび出して行った。

ほどなく、源次は、左馬之助を、地獄ののたうちから救う道具を、持って来た。

小さな革袋と煙管(きせる)と煙燈(ランプ)と。

源次は、まず銅製の蓋(ふた)のある玻璃(はり)煙燈の、油に浸した木綿糸の芯(しん)に火をつけた。次いで、革袋の口紐(くちひも)を解いて、蓮(はす)の葉でくるんだ球状の生(なま)阿片を取り出した。生阿片は、植物の葉で包んでおかぬと、その表面に、茶褐色のゴム状の物質が付着して、含有されているモルヒネの効能が低下するのであった。（ちなみに、生阿片から精製するモルヒネは、原料の十分の一であった）

源次は、象牙(ぞうげ)のへらで、生阿片を練(ね)り乍ら、煙燈の小さな焔(ほのお)で焙(あぶ)り、じいじいと焼い

た。

左馬之助は、焦点を失った、異常に潤んだ双眼を、うろうろさせていたが、蟻が甘いものに向って匍い寄るように、練りあげられた阿片をつめた尺八状の煙管の吸口へ対し、わななく口をひらいた。

ものの十秒も経たぬうちに、左馬之助の五体は、硬直し、そして、すぐ弛緩した。

その面上に泛んだ恍惚の表情は、まさに忘我の世界に入ったものであった。

数分の後、左馬之助は、すっと、身を起して、正座すると、源次に向って、謝意の一礼をし、それから、狂四郎と宝瓶宮にも、おのれの醜態を詫びる様子を示した。

常人ならば、これほどの中毒患者になると、吸飲の後は、総身が真綿に包まれて、宙をふわふわ浮遊しているような、夢遊状態になるものだが、左馬之助は、兵法で鍛えあげているだけあって、忽ちにして、平常の姿に恢復したのであった。

二

「眠の旦那――」

源次が、態度をあらためて、両のこぶしを畳につくと、狂四郎に、云いかけた。

「こっちの旦那（と左馬之助を目で示して）から、もうおきき及びと存じやすが、あっしは、金八兄哥にたのまれやして、旦那が吉原から身請なすった胡蝶姐さんを、この船に、

乗せて居りやす」
と、云った。
「…………」
「実は、あっしは、吉原の仲の町の引手茶屋『若葉屋』の倅（せがれ）でござんして、十四の時に、深川の二軒茶屋へ、板前見習いに出されやしたが、生れついて血の気が多いのと、これが（と骰子（さいころ）を壺皿へ投げ込んで伏せるまねをしてみせて）三度の飯より好きなもので、十八の頃はもう、勘当されたのをいいことに、壺振りになって、鉄火場をわたりあるいて居りやした」
「曲賽振り（くせさいふ）になり下ったというのか」
「へい。角賽（つのざい）、粉曳（こなびき）、鳴針入（とどろき）、途呂付（とろつき）、曳綱（ひきづな）……あらゆるいかさま賽を使いこなして、自慢じゃござんせんが、一時は、三点物の腕前が買われて、引く手あまたでござんした」
三点物というのは、博徒が、堅気（かたぎ）の客からまきあげる精巧ないかさま賽であった。二四六の丁目か、五三一の半目か、いずれの方かを、つづいて七度以上も出せる仕掛けがしてあった。
「で――、あっしの曲賽を、はじめて看破ったのが、金八兄哥でござんした。場所がいけやせんでした。蔵前の札差（ふださし）、室町の問屋など、江戸で指折りの大旦那衆が、三代目坂

東三津五郎の根岸の寮に集まって遊んでいる座敷へ呼ばれて、壺を振っているところを、金八兄哥に押えられちまったんでさあ。指をつめるのはかんべんしてやるから、江戸から出て行って二度と帰（けえ）って来るな、ときめつけられ、しかたなく上方（かみがた）へ流れて行き、もう一度、性根（しょうね）を入れかえて板前になろうとしやしたが、藁（わら）を千本たばねても柱にゃならねえ道理で、所詮（しょせん）は立派な料亭をささえる板前頭に生れついちゃいねえ、とあきらめて、……どうせ、やくざな浮草稼業（かぎょう）で生きるのなら、いっそ、海に浮んでいる船に――それも、廻送問屋の船にやとわれるのなんざ、柄じゃねえ、海賊船に乗ってこまそ、と……、ごらんの通り、この抜荷船の賭方になった次第なんで、へい」

「………」

――金八は、この男と、吉原あたりで、偶然、めぐり逢ったのであろう。この男が、唐津唐兵衛の手下になっているときいて、金八は、急に、胡蝶を乗せてやろう、と思いついたに相違ない。

まさしく、世間は、広いようで狭く、人間の因果関係は、蜘蛛（くも）の巣に似ているのを、狂四郎は、みとめざるを得なかった。

「旦那、金八兄哥は、いのちがけで百両をつくって、あっしにたのんだのでござんす。あっしは、金八兄哥のその心意気に感じて、胡蝶姐さんを、こっそり、連れ込みやした。おことわりしておきやすが、あっしゃ、百両に目がくらんで、引受けたのじゃございま

せん。百両は、ちゃんと、胡蝶姐さんが、肌身につけていまさあ。……どうか、金八兄哥の心意気と胡蝶姐さんの必死な恋心を汲んで、姐さんを守ってやっておくんなさい。あっしは、今日まで、水主どもに、決して露見ねえように、用心の上にも用心を重ねて居りやす。……胡蝶姐さんは、もう一度だけ、旦那に抱いてもらったら、海へ投げ込まれようが、首をくくられようが、悔いはない、と云って居りやす。そこまで想い詰めている女心のいじらしさを、もし、旦那が、知らんふりをしなさるのなら、このケチな賄方にも、それなりの覚悟ができて居りやす。……どうか、おねげえいたしやす！」

源次は、平伏した。

狂四郎は、宝瓶宮と左馬之助の視線を、強く感じ乍ら、

「源次――」

「へい」

「江戸っ子の心意気という一人合点なしろものが、どのような騒動をまき起すか、どうやら、夜が明けた頃、お前は目撃させられることになろう」

「どういう意味のことを仰言っているのか知りやせんが、あっし一匹の生命をすてることで、片がつくのなら、よろこんでさしあげやす」

「お前一人の生命で、片がつくことではない」

狂四郎が、こたえた時、左馬之助が、すっと立って行き、引戸を開けた。

薄暗いそこに、いつの間にか、船長（ふなおさ）の唐兵衛が佇立（ちょりつ）していた。

狂四郎と左馬之助は、源次がしゃべっている間に、引戸のむこうに、人の気配があることを察知していた。そして、狂四郎は、それが多分船長の唐兵衛であろう、と推測したのである。

しかし、胡蝶をかくまっていることは、いずれ露見せずにはいない、と予想した狂四郎は、源次がしゃべるにまかせていたのであった。

「お、おかしら！」

愕然となって、あとずさりする源次に対して、唐兵衛は、やおら、懐中から、オランダ製の短銃を把（と）り出した。

轟然（ごうぜん）たる銃声とともに、源次の首が、がくっと反りかえって、板壁へ叩（たた）きつけられた。

真額（まびたい）を、撃ち抜かれたのである。

「さてと——」

唐兵衛は、一毛もない頭を、片の掌（てのひら）で撫（な）でてから、云（い）った。

「このわしは、女子を乗せれば、竜神の怒りを買う、などというご幣かつぎなんぞ、嗤（わら）っている男だが、なにしろ五十七人の水主の親玉なんでね。それに、あいにくなことに、鳴門の渦潮に落ちたわしの甥（おい）を、水主どもが助けようとしたのを、わしは止めた。水主どもは、女子を乗せていると知ったら、万吉が落ちたのを、そのせいにすることは、云

わずと知れて居る。……胡蝶とやらというあんたの情婦を、海へほうり込まなけりゃ、水主どもは、承知すまいが、眠さん、あんたは、そうはさせぬ、と云いなさるだろう。となると、水主どもに、女子をこのまま乗せておくのを納得させるには、あんたとわしの生命を賭ける手段以外にはなかろうばい」

三

夜が明けた。

大和丸は、順風を帆にはらませて、瀬戸内海を、進んでいた。小豆島わきを通過しようとしていた。西方にうっすらとかすんで備前の陸地が望見できた。

常ならば、楫取までが、舵を固定しておいて、一同、のんびりと、朝餉の車座をつくっている時刻であった。

今朝は、全員が、船上に集結して、異常な緊張裡に、固唾をのんでいた。

眠狂四郎は、舳の牙檣を背にしてうっそりと佇立して居り、十歩をへだてて、唐兵衛が向い立っていた。

これは、尋常の勝負とは云えなかった。

唐兵衛の右手には、短銃が握られていたが、狂四郎は、素手であった。

いわば、銃殺刑に似ていた。

唐兵衛が、生命のやりとりを所望した時、時雨左馬之助は、即座に巻紙に、
（眠殿に代って、拙者が、手裏剣で、対手をいたす）
と、記したものであった。
すると、狂四郎が、
「わたしは、これまで、真剣の勝負に身代りを立てたことはない」
と、拒絶したのであった。
いま——。
狂四郎は、何故か、右手をふところに入れ、左手だけを、だらりと下げていた。
唐兵衛の射撃の達人ぶりを、すでに見せられている狂四郎であり乍ら、無想正宗で防ぐべき右手を、わざと懐中にかくしてみせたのである。
無想正宗を抜いて防ぐことはおろか、手裏剣さえも使おうとせぬ狂四郎と対峙して、流石の唐兵衛も、一瞬、当惑気味に眉宇をひそめた。
「眠さん、あんた、まさか、死に秋をえらんだのじゃあるまいな？」
「惚れても居らぬ女を救うために、生命をすてるような殊勝な人情や俠気など爪のかけらほども持って居らぬし、またお主の狙い撃ちを鼎俎に免れぬ絶体絶命などとは、さらさら思っては居らぬ」
「うそぶいたものぞい！」

唐兵衛は、おもむろに、短銃を挙げ、狂四郎の顔面に向って、ぴたりと狙いつけた。

見まもる七草喜久左衛門も郡参平も時雨左馬之助も等々呂木順之助も、そして、五十七人の水主も、あまりに不敵な狂四郎の立姿に、息が詰まり、口腔内が乾いた。

一人、宝瓶宮黒人だけが、船内から出て来ていなかった。

「…………」

「…………」

凝視し合う数秒間があった。

銃声が海空にとどろくのと、狂四郎が、目にもとまらぬ迅さで左手で脇差を鞘毎抜いて、一直線に投げるのが、同時だった。

脇差は、狂四郎と唐兵衛との中間に、落ちた。弾丸は、脇差の柄さきに食い込んでいた。

唐兵衛が、大きく双眸を剝いて、「うむ！」と三嘆の呻きをもらした時、いつの間にか、狂四郎の右手には、無想正宗から抜きとった小柄があった。

「船長、この小柄が、お主の生命を貰うか、それとも、女をこのまま乗せてゆくか——いずれかを、きめることになる」

双方の立場は、一瞬にして、替ったのである。

「参った！」

唐兵衛は、率直に、頭を下げた。
とたんに、六尺ゆたかの、髯だらけの四十なかばの男が、唐兵衛をかばって、仁王立った。
「おかしら、まだ勝負がついたわけじゃありませんぜ。わっしが小柄の的になっているあいだに、弾丸を込めなさるがいい」
船長代理の伊佐兵衛という男は、狂四郎を睨みつけ乍ら、大声で云ったことだった。

四

「伊佐兵衛、出しゃばった真似をさらすな！　勝負は、ついたんだぞ。わしの負けよ」
唐兵衛の正直な言葉に対して、船長代理は、大きく横にかぶりを振った。
「いいや、おかしらは、負けちゃいねえ。あの小柄が、おかしらの胸に突き刺さってでもいるなら、話は別だが、眠の旦那が小柄を投げる時、あっしが、ひとっ跳びにおかしらをかばって、身代りに刺され、そのあいだに、おかしらは、弾丸を込めて、眠の旦那を撃ち殺すことはできるんですぜ」
「おめえに犠牲になってもらって、対手を殺したところで、勝ちにはならねえ」
「忘れてもらっちゃ困るぜ、おかしら――。おめえ様は、わっしら五十七人の水主の上にいなさる大将だ。その大将が、便乗させた素浪人に、負けたとなりゃ、わっしらは、

おめえ様をかしらと仰ぐことはできねえんだ。物事には、ちゃんと、けじめというものをつけてもらいてえ。……かりに、おかしらが負けて、殺されたら、あっしらは、全員で、眠の旦那に襲いかかって、たとえ最後の一人になろうとも、海へ飛び込んで逃げたりなんぞする奴（やつ）はいやしねえ。海賊の頭目と手下は、博奕（ばくち）打ちの親分・乾分（こぶん）のつながりとは、比べもならねえ信義と掟（おきて）でむすばれていることを、忘れてもらっちゃ困りますぜ。おかしらが殺されたから、船長代理のあっしがかしらになるというわけには、いかねえことは、先刻承知のはずだ、……こういう絶対に破れねえ上下の掟があるからこそ、大海原を乗りまわして、対手が、清（しん）国の水師提督の率いる兵船だろうと、イギリスやスペインの大砲を十門も積んだ武装船だろうと、あっしら、平気で、とびかかって行けるんだ。……眠の旦那が、陸の上ではどんなに強（つえ）え剣術使いか知らねえが、ここは、海の上だ。船長の唐津唐兵衛が、負けることは許されねえんだ」

　どうやら、この伊佐兵衛は、生れついての海の男のようであった。おそらく、唐兵衛が海賊になる以前に、すでに、清国はじめ南方諸国をあらしまわっていたに相違ない。

　唐兵衛が、やれやれ、といった気色を示した時、七草喜久左衛門が、のこのこと近づいて来て、

「この勝負、引き分けということにはできぬのかな」

　と、云った。

「海賊の勝負に、引き分けはねえ！」

伊佐兵衛は、呶鳴った。

すると、その時――。

時雨左馬之助が、ゆっくりと歩み出て、伊佐兵衛に、唐兵衛が携げている短銃を受け取れ、と手真似で申し入れ、自分は、手裏剣を懐中から、把り出してみせた。

「へえ、双方が、身代りになって、結着をつけようというわけですかい？」

左馬之助は、微笑して、うなずいた。

「ようがす」

伊佐兵衛は、承知した。

短銃の腕前にかけては、唐兵衛以上の自信があるに相違なかった。

「伊佐兵衛、飛んでいる海鳥を、どちらが撃ち落せるか――そういう技を競うことにしたらどうかい？」

唐兵衛が、提案したが、伊佐兵衛は、

「冗談じゃねえ。海で生きる野郎の勝負は、生命のやりとりにきまっているんだ」

と、うそぶいた。

左馬之助は狂四郎の佇立していた牙檣前に、伊佐兵衛は唐兵衛のいた場所をゆずらせて、対峙した。

左馬之助は、右手にした手裏剣の切尖で、おのが心臓を示した。ここを狙い撃て、という意味であった。

「承知したぜ。ところで、おめえさんは、あっしのどこを狙いなさるんだ？」

その問いに対して、左馬之助は、ただ、にやりとしてみせただけであった。

見まもる者たちのうち、時雨左馬之助の業がどれだけ秀れたものか、知っているのは狂四郎ただ一人であった。

伊佐兵衛の腕前の程は、唐兵衛以下水主たちは、すべて見とどけているとみえて、それが各自の表情にあらわれていた。

「やるぜ！」

伊佐兵衛は、短銃をつかんだ右手を、水平にまっすぐにさしのべ、それに左手を添えた。

左馬之助は、大きく左右に両脚を開き、手裏剣を頭上に直立させた。

睨み合う時間は、狂四郎と唐兵衛が勝負するまでの秒刻よりも、数倍も費やされた。

汐合が、きわまった。

伊佐兵衛が、曳金を引くのより、ほんの一瞬、左馬之助の、手裏剣を撃つのが、おくれるのを、狂四郎は、見とどけた。

左馬之助が、一瞬おくれたのは、左足を右足へ、さっと引き寄せて、右へ一尺身を移

したからであった。

勝負は、きまった。

左馬之助の見事な作戦というべきであった。伊佐兵衛の発射した弾丸は、左馬之助の左肩からだらりと垂れた袖(そで)を貫いていた。

そして、伊佐兵衛は、異様な悲鳴をほとばしらせて、仰(あお)のけに棒倒しになっていた。手裏剣は、伊佐兵衛の股間(こかん)を——男の一物(いちもつ)を刺していたのであった。

籤（くじ）

一

船長代理伊佐兵衛が、海賊にあるまじき惨（みじ）めな悲鳴をあげて、軀幹（くかん）を海老（えび）のように折り曲げると、唐津唐兵衛は、いそいで傍へ寄って、その男根に突き刺さった手裏剣を抜きとってやった。時雨左馬之助は、はじめから、そこを狙い、そして、的をはずさなかったのである。唐兵衛が手裏剣を抜き取った時はもう、伊佐兵衛は、気絶して、死体のごとくビクリとも動かなくなっていた。

重苦しい沈黙が、船上を占めた。

唐兵衛は、その沈黙の中に、殺気がはらんでいるのを察知して、五十六人の手下を、ゆっくりと見まわして、

「勝負はついたぞ！　女子を海へ抛（ほう）り込むことはできねえ」

と、呟（い）いきかせた。

しかし、どの水主（かこ）の汐焼（しおや）けした顔面にも、承知した表情はあらわれていなかった。

四人の水主が、伊佐兵衛を、持ちあげて、船内に消えただけで、あとの者たちは、殺気をこめた視線を、狂四郎へ投げつけて、じりとも動こうとしなかった。

――どうやら、この船上が、血みどろの修羅場（しゅらば）になりそうだ。

狂四郎は、おのれに呟（つぶや）いた。

まさしく、海の男たちの性根（しょうね）は、陸（おか）で縄張り争いをやるやくざどものそれとは全く異質のものであった。

やくざの場合、争い対手（あいて）との喧嘩（でいり）に敗北すれば、乾分（こぶん）一同は親分の行動に従う。見限って、盃（さかずき）をかえし、別の親分につく者は出る。しかし、親分が、敗北をみとめても、乾分一同が、承服せず、勝った対手に、なぐり込みをかけた例は、ひとつもない。

海賊の水主たちにとって、船長（ふなおさ）の負けは、自分たちの負けではなかった。もし船長が殺されれば、その死屍（しかばね）を踏み越えて、最後の一人まで闘うのが、海の上で生きる者の性根と心得ていた。

いま――。

敗北を口にした唐兵衛に対して、順（したが）おうとする気色を示した水主は、一人もいなかった。かれらにとって、勝負はついていないのだ。

狂四郎と時雨左馬之助を殺すか、それとも、自分たちが全滅するか――いずれかによって、はじめて勝負は決着するのである。これを唐兵衛が阻止しようとすれば、もはや

唐兵衛は船長ではなく、自分たちを裏切った敵であった。唐兵衛をも殺すことを、ためらうものではなかった。
伊佐兵衛が云った通り、この大和丸の船長は、唐津唐兵衛以外に、代るべき者はなく、その唐兵衛を、自分たちの手で殺せば、大和丸をも焼きはらって、水主たちは、去ることになるのであった。それだけのきびしい掟を守ってこそ、万里の波濤を乗りきって、異邦船と闘う冒険心が生れる、といえる。
遠いむかし――室町初期から、「倭寇」の名で知られた標悍無比の八幡船の伝統が、いまも、この水主たちの五体に血となって脈搏っていた。
狂四郎は、すでに、そのことを知っていた。（作者註。前作『眠狂四郎無情控』を読まれた読者にとっては、重複することになるが、敢えて、八幡船がいかに勇猛果敢であったか、左の騒動を紹介する。英国海運史に記録された事実である）
西暦一六二五年（寛永二年）、イギリスの高名な航海家ジョン・ダビスは、数隻の艦隊を率いて、印度洋を渡り、呂宋におもむくべく、航海していた。
たまたま、ボルネオ付近を帆走している際、見馴れぬ一艘の船を発見した。
ジョン・ダビスは、望遠鏡で、その船の舳に、「八幡大菩薩」と大書した旗がひるがえっているのをみとめて、これが南洋諸国を侵して、猛威をふるっている倭寇と知った。
当時は、他国の船を見れば、これを敵とみなして、撃沈することは、平常のならわし

であった。
ダビスは、母艦を進めて、日本船に向い、近くの港へ寄るように、命令した。日本船は、意外におとなしく、その命令に服した。それは、せいぜい七十噸（トン）ぐらいの船で、水主は七八十人乗り組んでいた。
ダビス自ら、日本船に乗り移ってみると、大砲も小銃も持たず、水主たちは、ただ、身に大小の剣を佩（お）びているだけであった。船内には、暹羅（シャム）や柬埔寨（カンボジヤ）や安南から仕入れたとおぼしい絹もの、象牙（ぞうげ）、黒砂糖、更紗（さらさ）、鮫皮（さめかわ）、珊瑚珠（さんごじゅ）などを積んでいた。
——どうやら、海賊ではなく、交易船らしい。
ダビスは、思った。
その夕刻——。
日本船の船長は、ダビスに対して、英国軍艦を見物させて頂きたい、と申し入れた。
かねて、倭寇の勇武を怖（おそ）れていた水兵の中の経験豊富な者が、日本人は必ず禍心をひそめているに相違ない故、充分に警戒しなければなりません、と忠告したが、ダビスは、笑って、その忠告をしりぞけて、日本人たちに、軍艦見物を許可した。
母艦へやって来たのは、二十数人であった。
甲板に上るやいなや、かれらは、一斉に、背負うた刀を抜きはなち、数百に及ぶイギリス水兵へ襲いかかり、阿修羅の働きを発揮した。そして、あっという間に、ジョン・

ダビスを斬り殺し、一時、母艦を占拠した。
イギリス側は、他の三隻の軍艦から、銃撃を雨とあびせて、ようやく、二十数人をのこらず仕留めた。
次いで、イギリス艦隊は、日本船に向って、砲撃を加えたが、一人として降伏する者はなく、また海中へ遁走する者もなく、ことごとく壮烈な討死をとげた。
数十門の大砲を備え、銃を持った千数百人のイギリス艦隊に対して、わずか七八十人で、一擲乾坤を賭したなぐり込みを、敢えてやってのけたのも、日本海賊の面目がいかに不敵であり、そして、船長を絶対の決断力を所有する一騎当千の勇者と仰ぎ、水主一同が一死一生の断金の交わりをむすんでいたかの証左であった。
その伝統を継いだ面だましいを、五十六人の水主たちが、いま、示しているのであった。

二

狂四郎と唐兵衛の決闘の時とは全く異なった重苦しい沈黙が、船上を占めた。
水主たちの放つ殺気を、おのが身に集めた狂四郎は、ふところ手のまま、沈黙を守りつづけている。
七草喜久左衛門が、息苦しさに堪えがたくなって、のど奥から咳をしぼり出してから、

「眠殿、やむを得ぬ仕儀と相成った。女人を、竜神に捧げるのを、怺えなされい」
と、すすめた。
狂四郎が、返辞をする前に、伊佐兵衛を、船内へかつぎ込んだ四人の水主が、別の人間をかついで、出現した。
どさりと投げ出されたのは、この騒動の原因をつくった女であった。
と——。
一瞬にして、船上から殺気が消え失せた。
元吉原芸妓の際立って美しい容貌と、なよやかで嫩な肢体と、その肢体をさらになまめかしく紊れさせた緋の長襦袢が、水主たちの欲情をあふり、そそったのである。
かれらは、ただの抜荷行ではないために、唐兵衛に引具されて、隠密裡に西国からやって来て、佃島へ到着し、大和丸に乗り組んでから今日まで、一月もそれ以上、女郎も夜鷹も抱いていなかった。
唐兵衛から、
「清国へ往き着くまでは、色買いは我慢せい」
と、禁じられていたのである。
大和丸が置かれた佃島には、幕府から、将軍家献上の白魚を四手網で獲る特権を与えられた摂津国佃村を先祖の故郷とする漁夫だけが、所得顔に住みついていた。したがっ

て、他国者が入り込む余地はなく、住吉神社前の風避場（かざよけば）に、御用船や問屋船が、ほんの二日か三日か、碇泊（ていはく）するだけだったので、女郎屋ができるわけがなく、また、船頭あいての私窩子（いんばい）も出没してはいなかった。

水主たちは、大和丸に乗り組んで、出帆を待つあいだ、彼方（かなた）に江戸の灯を眺（なが）め乍ら、ありあまる精気をもてあましたことだった。そして、そのまま、出帆して来たのである。

いわば——。

好物がすぐ目の前にあり乍ら、おあずけくらったまま、曳（ひ）き去られた飢えた犬に似ていた。

その連中の面前に、いきなり、江戸の住民たちでも、滅多に見かけぬみがきあげられた美貌の吉原芸妓が、緋の長襦袢姿で、投げ出されたのである。

生唾（なまつば）をのみ込まぬ者がいたとすれば、その者の方が、正常ではなかったと、いえる。

唐兵衛は、水主たちの様子を看渡（みわた）しておいて、

「眠さん、このあんばいでは、水主どもは船長の負けをみとめて居らぬ。あんたが、この女子を、海へほうりすてるのを、どうしてもこばむ、というのなら、船を血の海にすることになるが、それをさける方法が、ひとつだけある」

と、云った。

狂四郎は、無言で、唐兵衛を視（み）かえした。

「それは、あんたとわしを除いた全員に、鐇をひかせるのだ。当った者が、この女を抱く」

「…………」

「どうじゃろかな、この妥協案は——?」

「女が、承知するか、どうかだ。もし、いやだ、とかぶりを振れば、やむを得ぬ。女を海へ投げ込む代りに、わたしが刀を抜くことになる」

狂四郎は、こたえた。

三

狂四郎の返辞をきいた胡蝶(こちょう)が、にわかにきりっとした面持(おももち)になって、狂四郎を仰ぎ視た。

「旦那(だんな)様、あたしを、海へすてて下さいまし!」

とたん——。

時雨(しぐれ)左馬之助が、胡蝶に寄ると、激しく横へかぶりを振ってみせておいて、水主一同に向って、闘いの意志を、その態度にみなぎらせた。

「時雨さん、止めないで下さいな。あたしが、軽はずみに、船にひそんだばかりに、こんな騒動が起ってしまったのです。あたしさえ、いなくなれば——」

胡蝶は、いきなり、はね起(た)つと、舷(ふなばた)めがけて、奔(はし)った。

海へ身をおどらせるのを阻止したのは、七草喜久左衛門の目くばせを受けた郡(こおり)参平であった。

喜久左衛門が、ゆっくりと歩み寄って、胡蝶の肩へ手を置いた。

「そなたに、籤引きで、わが身をもてあそばれることを、納得してもらわねばならぬの」

「いえ！　あたしは、そんな……」

「まあ、ききなされい。わしも、そなたが、ここへ曳き出されるまでは、そなたに犠牲になって海の底に沈んでもらうのが、事をおさめるただひとつの手段(てだて)だと思うて、眠殿に納得してもらおうとして居(お)った。……そなたが、そのなまめかしい姿を、一同の目にさらしたために、事情は変った。たとい、そなたが、海へ身を投げても、水主衆が眠殿を憎む気持は、水に流せぬ。水主衆は、そなたを眺めさせられて、抑えていた色情を、一挙に燃やしてしもうた。この火を消すことは、まず、ほとんど不可能じゃな。……さきほど、船長代理も申して居ったが、船長の顔も立て、眠殿に対する水主衆の敵意をしずめるためには、そなたは、海へ飛び込む代りに、籤に当った者に肌身を許すよりほかはあるまい」

呟(い)いきかされて、胡蝶は、泪(なみだ)をにじませた眸子(ひとみ)を、狂四郎に向けた。

狂四郎の冷たい無表情は、渝らなかった。
胡蝶は、その場に崩折れると、両手で顔を掩うて、慟哭した。
「さてと——、話はきまった。おめえら、納得だな？」
唐兵衛が、水主たちを見渡した。
「籤に当るのは、たった一人だけですかい？」
「あたりめえだ。一人だけ一回こっきりだ。不服か？」
「そのあとは、どうなるんですかい？　清国まで連れて行くんですかい？　眠の旦那の情婦として扱うんですかい？」
「それは、眠さんの意志にまかせる。日本のどこかへおろそうと、清国へ連れて行こうと、わしらの知ったことじゃねえ。但し、連れて行くにしても、船艙へかくして、二度と、おめえらの目にはふれさせねえから、女子なんぞ乗っていねえものと思え」
ようやく、唐兵衛の貫禄が、水主一同を威圧した。
籤引きは、海の男らしい方法で為されることになった。
船内には、金比羅大権現の小さな祠が設けられてあった。それに祀った御祓の紙を切って、唐兵衛と狂四郎と重傷の伊佐兵衛、そして宝瓶宮黒人を除いた全員の数だけの紙鬮をつくり、その一枚に、○を書いて、小さく丸めて、米八合入りの一升ますの中に入れ、車座をつくった一同に、ひとつずつ、取らせるのであった。

全員が、掌に、その丸めた紙をのせ終えたところで、唐兵衛は、
「開けろ」
と命じた。
水主たちは、期待に目を光らせ乍ら、開いた。
ところが、大声を発して、当りを告げた者がいなかった。
「誰でえ、当ったのは？」
唐兵衛は、不審げに、視線をめぐらした。
ちょっと、沈黙を置いて、七草喜久左衛門のとなりに坐っていた等々呂木順之助が、
「ご老人が、当り申した」
と、告げた。
水主たちのあいだに、どよめきが起った。
「選ぶにことかいて、爺様に当るたァなんてえこった」
とか、
「金比羅さんは、先行き短え年寄りに、最後の愉しみをあじわわせてやろう、と粋なはからいをしなさらあ」
とか、
「おれらにゃ、清国へ行き着くまで、我慢しろとの公平なご託宣だぜ」

とか、むしろ、仲間の誰かに当らなかったことに、ほっとした気持と、はずれた癪が、五分五分のぶつくさを、云い合った。

喜久左衛門は、

「わしは、女人と睦むこととは無縁になって久しい爺いゆえ、辞退したいところじゃが、金比羅大権現のおすすめとあれば、これは、有難くお受けいたすのが、ご利益でござろうわい。では、片刻、若い柔肌を頂戴いたして参ることに、いたそうかな」

殊更に、喘息の苦しげな咳をのこして、胴の間を、のそのそと出て行った。

見送った狂四郎は、

——胡蝶に、生い立ちなどを訊ね、父親がはりつけになったと知って、あわれみ乍ら、無駄話でもして、戻って来るのだろう。

と、推測して、胡蝶が荒くれ男にもてあそばれることからまぬがれた幸運に、微かな安堵をおぼえていた。

四

水主たちが、朝餉を摂りに去ったあと、狂四郎と左馬之助と唐兵衛がのこった。

「眠さん、呉越同舟も、このぶんでは、広州に到着した時には、仲間になっているかも知れんばい」

唐兵衛は、笑い乍ら、云った。しかし、その目は、笑ってはいなかった。
「お主は、わたしが、七草の老人に、恩をきると思っているのか？」
「これは、わしのカンだが、あの爺さんとあんたは、どこやら、ウマが合うようにみえる。また、爺さんの添役の一人の方――郡参平、というたか――あの若者は、相当腕が立つらしいが、やはり、あんたに、なにやら、敬服しているらしじゅう、感じられる」
「………………」
「この際、もう一度、はっきりと云っておく。わしは、ちがう。あんたが、もし佐竹家へ味方するようなことがあれば、こんどは決闘などという面倒な手つづきをはぶいて背中からでも、容赦なく撃ち殺す。このことは、肚に入れておいてもらおう」
そう云いのこして、唐兵衛は、出て行った。
ほどなく、宝瓶宮黒人が、朝餉の膳部を運んできた。
にこにこし乍ら、
「わたくしが、今日から、賄方の役割をつとめることにしました。わたくし、料理上手です」
と、云った。
――この占星学者は、胡蝶の身を守るために、わざわざ、賄方を志願したらしい。
狂四郎は、直感した。

朝餉を摂りはじめた時、左馬之助が、箸(はし)で、膳部に、
（胡蝶の処置は、如何(いかが)される？）
と、訊(たず)ねた。
「清国(しん)へともなうことになろう」
狂四郎は、こともなげにこたえた。
（それでは、また、騒動が起るような気がいたす）
「この宝瓶宮流に申せば、あの女の天宮図には、遠い異邦に流れ渡る星の下に生れついているのかも知れぬ。どうせ、西国のどこかの湊(みなと)におろしてやっても、幸せは得られぬ女であろう」
（それがしは、胡蝶を乗せているために、お手前が、水主どもと敵対することを懸(け)念(ねん)いたす）
「明日のために今日を生きて居らぬ男ゆえ、海の果てで相果てるのも、あるいは、わたしにふさわしい死にざまかも知れぬ」
そう云われると、時雨左馬之助も、かえす言葉がなかった。
ほどなく——小半刻(こはんとき)も経(た)って、佐竹藩の老横目が、姿をみせた。
「眠殿、あの女人は、しんそこ、お手前に惚(ほ)れてござるの」
「…………」

「惚れてくれぬ男を、生命を捧げるまでに、恋い慕うとは、女人として、これ以上の悲劇はござらぬわい」
「……………」
「どうであろうな。あの恋慕に、お手前、こたえてやっては――？」
「老人、この船中で、わたしだけが、色情を満たすことができるかどうか、これは常識で判断できることではないか」
狂四郎は、冷たく微笑した。
「それは、そうじゃが……あの女子は、ただ一度、お主の情けを受ければ、端舟(はぶね)で流されても悔いはない、と申して居った。この年寄りが、柄にもなく、胸がじいんと疼(うず)き申したわい」
「眠さん――」
宝瓶宮が、口をはさんだ。
「清国までの途中、必ず、大時化(おおしけ)が襲いかかって来るにちがいありません。その時が、問題です」
「………」
「日本の船乗りたちは、迷信ぶかいのでしょう。きっと、竜神の怒りを、婦人を乗せたことにむすびつけて、考えます。貴方(あなた)の立場は、とても、苦しくなります」

「宝瓶宮さん、お手前は、わたしの天宮図をみることを止（や）めたのではなかったのか？」

「止めました。止めましたが……」

狂四郎は、眼眸（まなざし）を遠く宙に置いて、

「わたしは、曾（かつ）て、二十歳の頃、不幸な娘と抱き合って、船から身を投げたことがある。あの折、死んでいればよかった、と今も時折、思うことがある」

と、云った。

激怒老人

一

ここで、『閑話』を挿入させて頂く。

中国側が怖れた「倭寇」——すなわち、八幡大菩薩の旗をかかげた八幡船が、女人を絶対に乗せなかったのは、ただ単なる迷信、または、乗り組んだ荒くれ男どもの情欲を抑えて、争いごとを起させないためだけではなかった。

遠いむかしからの伝統を受け継いでいたのである。

日本古代史を識る上に於ける最も重要な文献は、中国の『魏志』であろう。

その書には、倭伝がくわしく述べられている。倭伝には、日本から中国に渡航して来た、倭人の勇気がたたえられている。

その渡海船には、必ず『持衰』という人物が乗り組んでいた。

持衰は、頭髪を梳らず、沐浴せず、着のみ着のままで、肉食を摂らず、蚤虱にたかられても絶対にこれを殺さず、そして、禁欲を厳守した。

持衰が、船長であったかどうか、さだかではない。ともあれ、持衰は、それらの禁忌を守ることによって、航海を安全ならしめる目的とした。

どうやら、持衰は、それよりも古い時代の御贖の思想から生れたもののようである。御贖は、すなわち祓の一種であって、おのれの罪なり科なりを、他の者に負わせて祓い浄める方法である。

その御贖から生れた持衰は、航海の場合に於てのみ、定められ、存在した。

ついでに云えば、古代の日本の使節が、海を乗り越えて、魏におもむくのは、外交使節ではなく、また、単純な儀礼的修交の為でもなかった。自国にある過剰な物資を、先方へ運び、彼国からわが方に不足欠乏している物資を持ち帰る——完全な貿易であった。

そう考えると、倭人の持衰は、航海指揮者であったと想像するに難くない。

持衰が、船長であったとすれば、はるか時代が下って、「倭寇」となった時も、自らが禁忌を厳守する以上、配下どもにも、それを強いたに相違ない。

八幡船に、絶対に女を乗せない掟が、つくられたのは、当然である。

伝統的慣習に背けば、天罰覿面、必ず航海に失敗する、と信じるようになり、いま——徳川も末期に近くなっても、水主たちには、その考えが、五体にしみわたっているのであった。

まさしく、胡蝶を乗せて、清国へ向うのは、現代人が想像もつかぬ禁忌犯しなのであ

った。
もし、大和丸の水主たちが、生粋の海辺育ちの船頭であったならば、たとい、胡蝶の長襦袢いちまいの仇姿を見せられても、籤引きなどで、乗せて行くことを承諾はしなかったに相違ない。
実は――。
かれらの八割がたは、八丈島の流罪人だったのである。
唐津唐兵衛が、巧妙な手段で、かれらを島抜けさせて、海賊にしたのであった。慶長年間以来、島抜けを企てて、成功した流人は、一人もいない、と記録にのこされているが、唐兵衛は、陣屋の地役人に、多額の賄賂をして、島抜けを企てた流人を、ことごとく死刑にしたことにさせたのであった。
小舟で逃げ出そうとした者は、鉄砲で撃ち殺したことにし、脱走計画が露見した者は、谷落にしたことにしたのである。さいわいに、八丈島には、斬首という処刑法はなかった。八丈島では、たんごという織物がつくられ、これは将軍家のお召物として年貢に納められた。これをつくる島で、斬首して血を流すのは、お召物をけがすことになる、というわけで、処刑は、高い山の崖から、海へ突き落したのである。
八丈島の流人には、刑期がなかった。したがって、いつ赦免になるか判らなかった。
さらに、かれらのほとんどは、極悪人ではなかった。強盗殺人罪など犯した者は、す

べて、江戸で獄門になっているし、性根が歪んで無宿、無職になったたぐいは、捕えられて、佐渡金山の生地獄へ送られていた。

八丈島の流人は、現代流にいえば反社会性を持った者（幕府を諷刺した絵や文章を書いたなど）とか、意趣怨恨ではなく、あやまって同役仲間を殺した者などが多かった。

その他、武士ならば服務規律違反とか、僧侶ならば女犯とか、山伏ならば怪しい祈禱をしたとか、商人ならば密輸入の唐物を売買したとか、神官ならば熊野権現の偽札を配ったとか、役者ならば生活に贅沢をしたとか、農民ならば減税訴えをしたとか――いずれにしても、当人自身には、吟味に対して大いに弁明の余地がある者が、そろっていた。

これらの流人を、死刑にしたことにして、島抜けさせ、水主にしたのは、唐津唐兵衛の秀れた智能ぶりを示していた。

いったん殺されて、生きかえった者こそ、海の上で生きるのに、最もふさわしい男たちであった。かれらには、帰るべき故郷はなく、親や妻子にとっては、すでに亡き者であった。

二

大和丸は、瀬戸内海をまっすぐに通り抜けると、はじめて、肥前唐津湾内へ寄航した。

遠く清国広州までの航海のための食糧と、必要とする諸道具は、すでに、この唐津の

おねがいつかまつる」

と、たのんだのは、この事があったからである。

若年寄・小笠原相模守長貴（越前勝山二万二千石）は、豊前小倉十五万石・小笠原家の支藩であり、また、水野忠邦のあとを受けて唐津六万石に封じられたのも、同じく小倉城主を主家とする小笠原家だったのである。

武部仙十郎は、主・支両小笠原家の機嫌をとりむすんでおき、若年寄相模守長貴にだけは、それとなく抜荷をにおわせて、

「大和丸なる千五百石積み船が、唐津港へ立寄り申したならば、何卒よしなにおとりはからい下さるよう、願い上げまする」

と、たのんでおいたのである。

二日後には、大和丸は、寅刻（午前四時）に唐津湾を出帆した。

眠狂四郎は、其処で、胡蝶を陸へすてることをしなかった。船長の唐兵衛も、また水主たちも、その要求をしようとはしなかった。

あの騒動があって以来、胡蝶は、船艙内にとじこめられたままで、その姿を視、言葉

を交わしたのは、唯一人（ただ）、賄方（かしぎ）となってその世話をしている黒い異邦人宝瓶宮（ほうへいきゅう）だけであった。

股間（こかん）の傷が癒（い）えかけて、立居がほぼ自由になった船長代理の伊佐兵衛が、唐兵衛から説得されて、敗北をみとめたので、水主たちも、胡蝶の処分は、狂四郎の意志にまかせたのであった。

そして——。

狂四郎は、胡蝶が唐津で下船するか、それとも、清国までついて行くか、彼女自身の心次第にしたのである。

胡蝶は、降りようとはしなかった。

船が、壱岐（いき）水道へ出て、朝餉（あさげ）の膳部（ぜんぶ）に就いた時、七草喜久左衛門が、

「さて、いよいよ、一路、清国をめざすわけでござるのう」

感慨ぶかげに、云（い）った。

すると、冷酒を口にはこんでいた狂四郎が、

「老人、お主ほどの智慧者（ちえしゃ）が、いささか、考えが甘くはないか」

と、云った。

「と、申すと？」

「武部仙十郎という古狸（ふるだぬき）が、佐竹家の私鋳（しちゅう）清国銀子（ぎんす）と、秋田産物だけを積ませて、そ

のまま、海を渡らせるはずはない、と疑っては居らぬのか？」
「すると、ご老中方も、何かを積む手筈になっている、と申されるのかな？」
「そういうことだ」
「如何なる品か、ご存じじゃな、お手前？」
「わたしのような用心棒を必要とする品だ、と云っておく」
その返辞をきいた老人は、しばらく、じっと、狂四郎を瞶めていたが、
「成程、左様でござったか！」
と、呻くように云った。
積む品が何であるか、見当がついたのである。
郡参平も等々呂木順之助も、息をつめて、老人のひきしまった顔を、見まもっていた。
「この爺いは、ご存じの通り、奥羽で一藩の横目として生涯をすごした小身者ゆえ、清朝との交易宰領者を命じられようなどとは、夢想だにして居り申さなかった。方今の清国の実情については盲目でござるが、にわか仕込みの知識を以てしても、ご老中のお側用人殿が為されようとしていることは、石を抱いて淵に入る危険きわまりない仕業ではござるまいかな。清朝では、阿片と申すものの害毒を憂えて、すでに百年も以前から、禁令を百出させている、とき及び申した。にもかかわらず、エゲレス国は、毎年おびただしい量の阿片を密輸いたして居る由。……ご老中のお側用人殿は、勿論、そのこと

を百も承知の上で、敢(あ)えて、竜の鬚(ひげ)をなで虎(とら)の尾を踏む冒険を行わんとされて居るのでござろうが——、申さば、これは、阿片密輸入を阻止しようと厳しく監視の目を光らせている清国水軍と、阿片密輸で暴利をむさぼって居るエゲレス国の武装船と——腹背に敵をまわして、抜荷をやってのけようとするのではござらぬか。とうてい、成功は、おぼつかぬ、と存ずる！」

老人の面貌(めんぼう)は、曾(かつ)てないほどの必死な気持を、むき出していた。

当然のことであった。

江戸家老佐竹勘解由(かげゆ)から喜久左衛門が受けた命令は、次のごときものであった。

まず、福建省厦門(アモイ)に至り、そこに駐在する水師提督に面接して、秋田名産物を貢物(みつぎもの)として贈り、清朝の都北京(ペキン)へ、使節としておもむくことを許可してもらう。日本がたくわえた清国一両銀一千五百七十余貫で、米を購(あがな)いたく——交易の旨(むね)を願えば、必ず、北京へ行けるであろう。

あるいは、紫禁城の乾清宮にて、道光帝に拝謁(はいえつ)できるかも知れなかった。

目下、清国は、漏銀(ろうぎん)——銀が湯水のごとく、外国へ流出して、国政は大きく傾いている、という。

その際に、日本から、銀を持参すれば、清朝は、大いによろこんでくれるに相違なかった。

すでに、佐竹勘解由は、福建海域を統率する水師提督陳化成に、長崎から広州へ帰った清朝政府直属の唐船の官商から、この旨を、依願してもらっているはずであった。

しかし――。

大和丸が、阿片を積み込み、これを密輸しようとすれば、この計画は、水の泡となるのだ。

――よもや、水野家側用人が、わが藩の抜荷を利用して、阿片密輸をしようとは！

あの才知鋭利な佐竹勘解由も、想像できなかったのを思いやって、七草喜久左衛門のはらわたは、煮えくりかえった。

三

狂四郎は、冷たく薄ら笑った。

「蜂は、手を出さねば刺さぬが、手を出さねば蜂蜜は採れまい。……阿片密輸の方法は、唐兵衛の胸三寸にあるようだ。こちらは、傍観者でしかない」

喜久左衛門は、憤怒のあまり、いまにも悶絶するほど激しく咽喉奥をぜいぜいと鳴らして、肩を上下させた。

順之助が、膝行して、その背中を撫でさすろうとしたが、老横目は、その手を振りはらい、

「眠殿、お手前、あ、あの船長を、信頼、されて、居るのか？……這うままに、這わせておいて、いざとなったら、……その無想正宗に、物云わせる存念かも、知れぬが——、そうは、たやすく、問屋が、おろすまい。……腹背の敵は、清国とエゲレス国の軍勢で、ござるぞ！」

と、云った。

「神というものがあるならば、この眠狂四郎という男に、恰好の死に秋を与えてくれたのかも知れぬ」

狂四郎の返辞は、それだった。

「お、お手前は、それで、満足かも知れ申さぬが……、この抜荷には、わが秋田藩の領民の、生死が、かかって居る！　また再び、飢饉に、襲われたならば、……さらに、数万の餓死者が、出ることは、お手前にも、お判りであろうがな」

「…………」

「こ、この抜荷は、なんとしてでも、成功させなければ、相成らぬものを……ご老中一個人の、権勢欲のために——閣老主座に就くための、資金づくりの冒険に、わが佐竹家の、必死の企てが、まんまと、はめられたとは！……莫迦な！　このような莫迦げた、狡猾きわまる詐謀が、またと、あろうか！」

喜久左衛門は、おのが生涯で最も凄まじい憤怒のあまり、喘息の激しい発作を押えき

れず、音たてて、板壁へ倒れかかると、正視に堪えぬ苦しみぶりを示した。
見まもる人々は、ただ押し黙っているばかりであった。
誰にも、どうにもならぬことであった。
船長唐津唐兵衛に、阿片を積むことを止(や)めさせるべく、秋田藩の窮状が、どのように悲惨なものか、説いたところで、徒労なのだ。唐兵衛が、武部仙十郎を裏切ることは、絶対にあり得ないのである。
大和丸は、阿片密輸の目的をもって、清国へおもむく船であった。
「眠殿！」
郡参平が、呼んだ。
「……？」
「それがしは、お手前様を、信頼つかまつる！」
一言だけ、万斛(ばんこく)の真情をこめて、云った。
狂四郎は、その視線を、受けとめて、しばらく、無言でいたが、やがて、抑揚のない声音(こわね)で、
「お主の信頼に応(こた)えられるかどうかは、わたしが、生きのびて、帰国した時のことになろう」
と、云った。

狂四郎の肚裡には、ひとつの計画が湧いたようであった。

郡参平も等々呂木順之助も時雨左馬之助も、狂四郎が何か思案したらしい、とみたが、それがどのような手段か、想像がつかなかった。

四

大和丸は、壱岐水道を過ぎると、進路を東へ向けた。

あきらかに、どこかへ寄航するためであったが、水主たちも、それがどこの湊か、知らされていなかった。

知っているのは、船長のほかは、眠狂四郎だけであった。

今日もきびしい暑気を送って来るであろう夜明けの潮風を受けて、狂四郎が、舳先に佇立していると、音もなく、時雨左馬之助が寄って来た。

北松浦の生月島と平戸島の間の辰ノ瀬戸を通り抜けようとしていた。

狂四郎は、ようやく碧落を一直線に截って浮きあがった水平線へ、眼眸を送り乍ら、

「お主に、一度、訊ねようと思っていたことだが……」

と、云った。

左馬之助は、その彫の深い横顔を瞶めた。

狂四郎のふところ手の袂と左馬之助の左腕のない袂が、はたはたと鳴った。

「お主は、阿片中毒にかかって居るが、どこで、阿片を喫むようになったか、ということだ。……お主が、わたしにくっついて、この船に乗ったのとは、無関係ではあるまい」

狂四郎は、そう云って、左馬之助へ、視線を移した。

左馬之助は、まず、懐中から、懐紙数枚をとり出すと、牙檣へ、手裏剣で、刺し止めておき、腰の矢立を抜きとって、口にくわえ、筆を把った。

（拙者は、江戸で乞食として生涯を送りたくはなかったのでござる。十三歳の夏、出奔いたし、長崎へ参り申した）

左馬之助は、車善七の実弟であった。当然、府内で乞食として一生をすごす運命にあった。

「…………」

（唐人屋敷に、下男として住み込み、十五歳の正月、清国の額商船に、無断にて忍び込み、密航いたした）

「…………」

（二日目に発見され申し、罰として、瘖薬を嚥まされて唖にされ、左腕を斬り落されて、琉球列島南端の石垣島へ、棄てられ申した）

「…………」

（さいわいに、機会あって、清国の海賊にひろわれ、厦門へ渡り申した）
「………」
（福建省を流浪するること、七年余に及び申した）
「そうか、お主の手裏剣は、清国で、習得したのであったか。道理で、お主の身がまえ、撃ちかたは、根岸流などとは、全く異なっていた」
（帰国いたしたのは、三年前でござる。すでに、阿片の中毒にかかって居り申した）
「お主は、どうやら、宝瓶宮や唐兵衛よりも、清国の実際の事情にくわしい、と思われる。この大和丸が、はたして、阿片を密輸して、老中水野越州に、巨利をもたらすことが、可能かどうか、お主は、どう予想する？」
左馬之助は、ちょっと考えていたが、
（成功の率は二分と存ずる）
と、記した。
「ふむ」
狂四郎は、苦笑した。
（その二分も、信頼すべき大窯口——阿片卸商——と取引いたさなければ、可能性はござらぬ）

「それは、唐兵衛のやる仕事であろうが……」

（厦門や広州や澳門の大窯口は、すべて、イギリスその他の呷板船と契約を交わして居り申す。……割り込んで取引するのは、至難でござる）

「………」

狂四郎は、真紅の太陽が、水平線上にすがたを現わす美しい景色を眺めやった。

しかし、その素晴らしい日の出を愛でる気持は、狂四郎にはなかった。

――太陽は、毎日、昇っては、沈んで行く。

『盛年重ねて来らず。……歳月は人を待たず』

陶淵明の雑詩十二首の第一にある句が、なんとなく、脳裡をかすめた。

（眠殿）

左馬之助が、狂四郎の袖を引いた。

（眠殿が、生きて還られる方法は、拙者におまかせ下され）

狂四郎は、左馬之助を視かえして、

「わたしよりも、あの誠実な老人に、米を持って帰らせてやることに、お主、協力することだ」

と、云った。

罌粟(けし)戦法

一

大和丸が、翌朝、前帆と後帆をおろして、ゆっくりと近づいて行ったのは、五島列島の主島・福江島であった。

島の北側にある黒崎鼻を左に見、八朔鼻を右に望んで、岐宿(きしゅく)という小さな湊(みなと)に至った。

しかし、大和丸は、その湊に寄航しようとはせず、湖水のように静かな、深い入江に、入った。

目ざしたのは、黒崎鼻の反対側にある、外界をさえぎって、天狗(てんぐ)の鼻のようにのびた処(ところ)——唐船浦であった。

その名称があるのは、そのむかし、唐船が、しばしば寄航したからに相違なかった。

大和丸が、唐船浦内の小さな入江の前で、主帆をおろした折であった。

岐宿湊の方角から、鯨つりと見える八挺立(はっちょうだて)の船が三艘(そう)、非常な勢いで、大和丸めざして、進んで来た。

艫（とも）に立った唐津唐兵衛は、遠目鏡を片目にあてたが、
「まずいぞ！」
と、呻（うめ）くように云（い）った。
かたわらにいた伊佐兵衛が、まだ股間（こかん）の傷の癒（い）えぬしかめ面（つら）で、
「なんですかい？　五島家の藩士どもじゃねえんですかい？」
「ちがう！　公儀の役人にまちがいない！」
「公儀の役人?!」
「あのいでたちは、たぶん、長崎奉行所の連中じゃわい。江戸から駆けつけた腕の立つ隠密（おんみつ）を、ひき連れて居るらしい」
三艘には、それぞれ、七八人が乗っていた。
「やっつけますかい？　たった三艘だ。片づけるのに造作はねえ」
大和丸は、勿論（もちろん）、武装し、大砲六門を、積んでいた。
敵からは、その武装が判（わか）らぬように、船腹の左右に、三つずつ、玻璃（はり）の篷窓（あかりまど）を設けていたが、いざとなると、そこから、砲身を突き出して、撃ちかける仕掛けになっていた。
それらの大砲は、三年前、海南島沖で、澳門へ行こうとしていたポルトガル武装船を、夜霧にまぎれて、襲撃して、水夫二十数人を斬り殺し、船長を捕虜にして、エンピール

ド銃五十数丁とともに奪取し、人質にした船長を、澳門と目と鼻の近くにある伶仃島に置きざりにした戦利品であった。

伊佐兵衛は、大砲を使わずとも、三艘に乗っている二十数人なら、銃撃の修練を積んだ水主たちに命じれば、エンピールド銃で、一人のこらず、あの世へ送る自信があった。

しかし——。

「あいつらをみな殺しにするのは、無駄骨を折ることになるだけだ」

唐兵衛は、横へかぶりを振った。

「どうしてですかい？」

唐兵衛は、こたえる代りに、遠目鏡で、東南の権現岳を望んだ。

「居るわい」

「見張りが……？」

「うむ。あの三艘をやっつけたなら、あの見張りが、狼煙をあげて、久賀島にいる見張りに合図を送るに相違あるまい」

狼煙は、久賀島から椛島へ——次から次へ、送り継がれて、たちまちのうちに、長崎奉行所へ報告されるであろう。

「伊佐兵衛、おんしは、壱岐水道を通る時は、寝て居って知らなかったが、北松浦の宇久島沖で、わしらは、長崎行きのオランダ軍艦二隻と、すれちごうた。……長崎奉行は、

あのオランダ軍艦にたのんで、この大和丸を、追いかけて来ようわい」
そう云ってから、唐兵衛は、いつの間にか、影のごとく現われて後方に佇立した眠狂四郎を振りかえった。
「眠さん、あんたが、佃島でやってのけた諸葛亮孔明そこのけの戦法は、大成功じゃった。しかし、隠密どものうち、どうやら一人か二人、生き残らせた模様じゃばい。……別の隠密の群れが、江戸から長崎まで、早馬で突っ走って来たらしい」
「…………」
狂四郎は、黙って、ふところ手のまま、近づいて来る三艘の八挺立船へ、冷たい眼眸を送っていた。

二

「おかしら、奴らに乗り込まれりゃ、抜荷船ってえのが、露見しちまうんだ。どうせ、清国へ行きゃ、エゲレス船や清朝水軍と勝負しなけりゃならねえんだ。ここは一番、のるかそるか、奴らをぶっとばしてしまおうじゃありませんかい？」
伊佐兵衛が、云った。
「そうはいかねえ。やくざの喧嘩じゃねえんだぞ、伊佐兵衛。……わしらには、阿片を売って、ご老中の御用金にしなけりゃならねえ大きな目的が課せられているんだ。清国

へ到着して、どじを踏んだのなら、まだ、申しわけも立つ。こんなところで、騒動を起して、元も子もなくしてしまったら、この唐津唐兵衛、なんのために、十七年間もの間、海賊修業をしたのか――犬、骨折って鷹の餌食だ」

「じゃ、どうしようというんで？」

「地獄の沙汰も金次第、銀は阿弥陀ほど光る、と云うぜ」

「あの役人どもに、袖の下を使うというわけですかい」

「奴らは、この大和丸が、佐竹家の抜荷船だとばかり思い込んでいやがるだろう。まして、ここで、阿片を積み込むなどとは、夢にも知っちゃいめえ」

その折、狂四郎が、はじめて、口をはさんだ。

「長崎奉行所の小役人は買収できても、隠密たちが賄賂でひき下がる道理があるまい」

「そのことだ。公儀庭番衆は、この唐船浦から、生きて出てもらうわけにはいかねえ。……眠さん、これはあんたの役目じゃねえのかね？」

「そうらしいな」

――佃島で、五門の大砲を爆破した際、傷つき乍ら生き残った一人が、小柳生庄へ趨ったのであろう。

つまり、長崎代官所役人につき添うて来た面々は、江戸桜田の御用屋敷のお庭番ではなく、大和国小柳生庄征木坂の柳生道場の武芸党党員と、受けとってよいであろう。と

すれば、かれらの狙(ねら)うところは、この眠狂四郎の生命である。
——おれが逃げてみて、追いかけて来れば、武芸党にまちがいはない。
狂四郎は、自分に呟(つぶや)いた。
漕(こ)ぎ寄せて来た三艘のうちの、中央の船の舳先(へさき)に立った陣笠(じんがさ)の武士が、
「拙者は、長崎代官所与力・安岡潤造である。当船に、不審の儀があり、船内を取調べるゆえ、神妙に受けい」
と、叫んだ。
「へーい」
伊佐兵衛が、わざと間のびした返辞をした。
狂四郎は、唐兵衛に、
「橋舟をおろしてもらいたい」
と、たのんだ。
「どうしようというんで——?」
「わたしが逃げるのだ」
「逃げる?」
「これは、賭(かけ)だ。おそらく、隠密たちは、全員、わたしを追ってくるだろう、と思う」
唐兵衛も伊佐兵衛も、狂四郎の言葉を納得しかねる表情になった。

「急ぐ！」

狂四郎としては、珍しく、危急の事態を、表情に示した。

「判った！」

唐兵衛は、水主に命じた。

「橋舟は、反対側からこっそりおろし、浜に漕ぎつくまで、あの八挺立が、追いつけぬようにしろい」

「合点！」

長崎代官所与力・安岡潤造が、甲板にのぼって来るのと、狂四郎を乗せた橋舟が海面に着くのが、ほとんど同時であった。

狂四郎がたのみもせぬのに、橋舟の艪（ろ）を把（と）ったのは、時雨（しぐれ）左馬之助であった。

少年の頃、石垣島ですごしただけあって、舟を漕ぐのは、片腕だけでも、よほど自信があるに相違なかった。

橋舟は、矢の早さで、大和丸をはなれた。

安岡潤造につき添うて乗って来た隠密団が、その橋舟を発見したのは、唐船浦の対（む）かいの、深く曲り込んだ入江にとどこうとした時であった。

はたして——。

二十人あまりの隠密団は、大和丸に、安岡潤造とその配下三人を置き去りにしておい

て、一斉に、八挺立船へ、跳躍した。
狂四郎は、躍起になって追跡してくる三艘を、冷たく眺めやり乍ら、左馬之助に、
「お主、この福江島に就いての知識があるか？」
と、訊ねた。
左馬之助は、うなずいてみせた。
「この福江島で、居付きまたは外道と称されている百姓たちの住んでいる里を、修羅場にえらぶことにする」
狂四郎は、云った。

三

『居付き』または『外道』と称されているのは、本土（天草や大村）から移住して来た隠れ切支丹信徒のことであった。原住の地下人から、極端に毛嫌いされたのである。
そのむかし、五島には、熱烈な切支丹信徒が、あふれていた。長崎で処刑された殉教の二十六聖人の一人、聖五島ジュアンも出している。
その後、寛永年間の苛酷をきわめた弾圧迫害によって、五島の信徒は、根絶した。
ところが……。
寛政九年に、藩主五島盛運は、列島の領民のあまりのすくなさに、大村藩主に、移民

方を懇請したのであった。

「五島は、地が広く、人口が少なく、また山林の未だ開けざる処が多いゆえ、何卒、希望する民があれば、お移し下されたく――」

この懇請に応じて、大村藩主は、募って、次つぎと五島へ移住させたのであった。

実は――。

大村藩内には、寛政年代に入っても、いまだ、隠れ切支丹がいて、厳しく吟味し、踏絵も毎年実行していたのであるが、どうしても、あとを断たなかったのである。

大村藩では、五島盛運の懇請を渡りに舟とばかり、隠れ切支丹とおぼしい農民を、五島へ厄介払いにしたのであった。

大村から、およそ三千余人もが五島列島へ移住した、といわれている。

そして、それらの半数以上は、隠れ切支丹だったのである。藩主は、かれらの信仰を見て見ぬふりをして、およそ開拓できそうな山地という山地に入植させ、田畑をつくらせたのであった。

もとより、公儀をはばかって、『宗門御改めの節、一統へ申聞け候五人組へ御法度書』という布令を出したが、きわめて形式的なもので、大村藩のように踏絵などは一度もさせなかった。

隠れ切支丹は、宗門寺法にしたがって、表向きは、真宗の檀徒になっていたが、なに

しろ、地下人と外道のあいだには、一切、交際がなかったので、外道村落に、神棚や仏壇が設けられているかどうか、判らなかった。

いわば、隠れ切支丹信徒は、全く孤絶したくらしをして居り、藩庁の役人さえも、見廻りには行っていなかった。

（かれらが、開拓した痩地から穫った乏しい米や麦や芋を、課せられた通り、正直に、納めた故でもあった）

左馬之助が、浜へ橋舟をすてると、狂四郎を案内して、急勾配のけもの径を駆け上ったのは、観音平という、かなりひろびろとした高地であった。

左馬之助は、断崖ぶちから、砂地へ乗りつけた八挺立船を、見下ろすと、つづけさまに、手裏剣を三本、飛ばして、確実に、三人を斃しておいて、狂四郎へ目で合図すると東へ向って、奔り出した。

——黒蔵（大浜村）へ、おびき寄せるつもりだな。

狂四郎は、思った。

武部仙十郎から、

「福江島で隠れ切支丹の半数が居付いて居るのは、黒蔵という里だ。そこの庄屋をかしらとして、外道らを指揮させ、罌粟を栽培させて居る」

と、きかされていたのである。
黒蔵は、福江城下から北方二里あまりの山麓にある由であった。
左馬之助と狂四郎は、その黒蔵へ向って、まっしぐらに一上一下する山野の中の一筋道を疾駆した。
追手は、流石は、小柳生庄の山中で忍びの術まできたえた柳生流の手練者であった。
左馬之助が、ひとつの小丘陵の頂上に達して、あれが黒蔵である、と指した時には、すでに、数町の近距離まで、追い迫っていた。
狂四郎は、丘陵の斜面に、いちめんに、人の身丈の二倍はあろう高さに成長した罌粟の群落をみとめた。
「修羅場をくりひろげるのは、この罌粟の花畑が、ふさわしいようだ。殊に、お主にとっては――」
狂四郎は、薄ら笑って、云った。
すると、左馬之助は、微笑をかえして、人差指で宙に、
　火
と、書いてみせた。
風は、かなりの強さで、追手方の方角へ向って、吹いていた。
罌粟の群落を焼いて、その煙を、追手方にあびせる。これは、いかにも、阿片中毒者

である時雨左馬之助らしい戦法であった。

四

狂四郎も、すでに、阿片についての知識を仕入れていた。
いま、ちょうど、阿片栽培の最盛期であった。
罌粟は、すでに花を散らして、未熟で青い実をつけていた。インドあたりでは、〝緑の林檎（りんご）〟と称（よ）ばれている花房である。
その莢膜（きょうまく）の表面四分の三ばかりに、傷をつけると、傷口から、白い濃厚な汁液が滲（にじ）み出る。
この汁液は、南方の灼（や）きつくような激しい陽光の直射をあびて、たちまち、茶褐色に変じて、ねばねばとした糖蜜（とうみつ）のような餅（もち）状と化す。
これが、ほんのすこしでも、人体の毛穴に入っただけで、たちまち、中毒になるのであった。
現代流にいえば、阿片からは、凄（すさ）まじい猛毒のアルカロイドが十五種類ほど抽出されるのである。すなわち、モルヒネ、テバイン、コデイン、パパヴェリン、ナルセイン、ナルコチンなどである。
当然――。

その猛毒の汁液をたっぷりと含んだ未熟な青い実をつけたばかりの罌粟を、燃やして、その煙をあびせかければ、追手の柳生武芸党の面々は、いかに修練を積んで居ろうとも、その知覚麻痺作用からまぬがれることはできぬ。

左馬之助は、すでに、船でこの作戦を思案していたとみえて、かなり大きな革袋を、背負っていたが、それは、油であった。

左馬之助は、狂四郎に、ずうっと下方の風上に、身を避けるように、せかしておいて、革袋をつかんで罌粟の群落の中へ、とび込み、油を撒きちらしはじめた。

狂四郎は、丘陵の麓へ向って、駆け降りた。

麓には、数軒の小屋が、並んでいた。

——これらが、阿片工場だな。

狂四郎が、そこに達した時、丘陵の斜面にひろがった罌粟の群落の各処から、濛っと煙が噴いた。

追手十数人が、その群落をかきわけて、馳せ降りようとしているのが、見わけられた。

——どうやら、この無想正宗を衄らせずにすみそうだな。

小屋から、罌粟畑の焼ける音をききつけて、粗末な布子姿の『居付き』(隠れ切支丹)たち、男女数十人が、とび出して来た。

驚愕の叫びと悲鳴をあげた。

差配らしい初老の男が、怖(おそ)れと疑惑の視線を、狂四郎に向けて、

「お、お前様が、なされたことか？　地下人にやとわれての仕業か？」

と、なじった。

「お主らに、迷惑を及ぼさぬことだ」

「なにを云われるぞ！　わしらは、この罌粟栽培で、くらしをたてて居るのじゃ。藩主様のご命令によって、つ、つくって居るものを、焼きはらうなんぞ、わしらのいのち取りになるのじゃ！」

「お主らは、神の恩寵(おんちょう)とやらを信じる切支丹宗門に帰依(きえ)し乍ら、人間を悲惨な廃物にする阿片(あへん)をつくる罪を犯しているが、べつに矛盾をおぼえては居らぬのか？」

「……………」

『居付き』たちの顔が、その言葉で、表情を一変させた。

見知らぬ他国の浪人者が、自分たちの絶対秘密の信仰を知っているとは?!

狂四郎は、無表情で、言葉を継いだ。

「わたしは、お主らをとがめているのではない。地下の者にやとわれて、お主がたを困らせに来た者でもなければ、公儀から遣わされた間者でもない。……お主らがつくった阿片を積んで、清国へ行こうとしている老中水野越前守(えちぜんのかみ)忠邦の抜荷船の便乗者にすぎぬ、と思ってもらおう」

「ならば、なんで、わしらのくらしの糧を、焼きはらいなさる？」
「なりゆきでやむを得ぬ」
「なりゆきとは？」
その問いに対して、狂四郎が返辞をする必要はなかった。
燃える罌粟畑のあちらこちらで、左馬之助の手裏剣を受けた追手方の絶叫が、つぎつぎとひびいて来て、『居付き』たちの視線を、そちらへ向けさせた。
黒蔵村から、庄屋が、村民をひきつれ、駆けつけて来た時には、闘いは終了していた。
焼けのこった罌粟の中から、姿を現わした左馬之助は、充分に毒煙を吸った陶酔感を、その面貌にただよわせていた。
黒蔵村の庄屋は、差配から、狂四郎の言葉をとり次がれると、
「左様でしたか。わしらが、阿片をつくらされていたのは、ご老中ご自身の抜荷のためでござったか」
それで、謎が解けた、と幾度も、ふかくうなずいてみせた。
黒蔵村では、ほんのひとにぎりほどの田のほかは、この丘陵の斜面を、芋畑としていたのであったが、五年前に、藩主から、罌粟を栽培し、阿片をつくるように命じられたのであった。その代り、納米を免じられていた。
狂四郎は、庄屋にかるく一揖しておいて、左馬之助とともに、そこをはなれた。

――生きるためには、切支丹信徒といえども、阿片をつくらねばならぬのか。
しめった感慨が、狂四郎の胸中にわいていた。

犬死

一

大和丸が、福江島の唐船浦をはなれて、外海へ出たのは、その日のうち——黄昏どきであった。

食糧（米、麦、芋）と梨子などの果実と飲料水、そして薪は、たっぷりと仕入れたが、阿片を積むことはできなかった。

唐船浦で待ち受けていた五島家の次席家老が、

「ご公儀の隠密らしい男が、しばしば現われ申したので、用心のため、阿片百七十箱（一箱は百斤）は、琉球の八重山諸島のひとつ石垣島へ、ひそかに運んでおき申したゆえ、そこで、積んで頂きたい」

と、云って、石垣島のかくし場所の絵図面と割符を渡してくれたのであった。

五島藩士たちが、継櫓の小形船六艘で、石垣島まで運び、川平という湾に面した小島で、大和丸の到着を待っている、ということであった。

「石垣島へ運んで、かくしたとは、考えたものよ」

長崎奉行所の役人を買収することに成功した唐津唐兵衛は、五島藩庁のとった手段を、良しとしたことだった。

琉球列島は、天正年間までは、薩摩藩島津家の苛酷な治政下に置かれていた。

慶長になってから、島津家が、琉球を、事実上の属領にする肚をきめたのであった。

その頃、琉球王は尚寧王といい、閩人（福建省の出身者）の末裔である謝名親方を股肱としていた。

慶長十一年――。

島津家では、重臣山口直友を、駿府へ遣わして、大御所徳川家康に、

「琉球国は、わが九代陸奥守忠国の代に、普広院殿（足利義教）から拝領いたしたる領土にて、永享年間より当家に従わせて参りましたが、近年、入貢も怠りがちに相成り、また、権現様へおん礼（珍宝献上）を申し上げるようすすめても、これを肯き入れぬ有様にて、この上は、当家にて征伐の儀、お許したまわりますよう願い上げまする」

と、巧妙な口実で、許可をもとめ、承諾を得たのであった。

島津義久は、まず、琉球王に対して、島津家に従属するよう通牒を送った。

これに対して、三司官（幕府でいえば老中）の主座に在った謝名親方は、

「当国は唐に属し、日本と別である」
と、その強要を一蹴した。
謝名親方は、六尺ゆたかの巨漢で、その気象もまた剛毅一徹な硬骨漢であった。十七歳の時、明に渡って、南京の国子監（大学）に留学して居り、学識もゆたかであった。
島津家の通牒をはねつけた時は、五十八歳であった。
それから、三年後——慶長十四年二月二十六日、島津家久（忠恒）は、樺山権左衛門を総大将、平田太郎左衛門を副将として、軍勢三千余人を百余艘の軍船に分乗させて、琉球へ向って送り出した。
薩摩軍は、三月四日、山川港を出港し、途中、奄美大島、徳之島、沖永良部島を、攻略しておいて、二十五日、沖縄本島北部の運天港へ侵入した。
尚寧王は、三司官の名護親方良豊、江州親方栄真、そして僧喜安を使者として遣わし、薩摩軍に、和議を申し入れさせたが、一蹴された。
薩摩軍は、四月五日、首里王城を占拠した。まさに、疾風の勢いで襲った戦勝であった。
尚寧王は、王子、長老、親方、その他百余人とともに、薩摩へ連行された。
謝名親方だけは、高手小手に縛られて、別の船で、送られた。かれは、島津家久の面前にひき据えられると、泰然として胸を張り、島津家の侵略をなじり、島津家の当主を

主君と仰いで忠誠をつくす、という誓約書への署名捺印を拒否した。そのために、討ち
首となった。
しかし——。
島津家は、琉球列島すべてを、自領とはしなかった。奄美大島、喜界島、徳之島、沖
永良部島、与論島までを版図とし、そこから以南の琉球列島（沖縄本島はじめ、周辺の各
島、宮古島、八重山諸島）は、従来通り、琉球国としての形態をとらせた。事実上は、完
全な属領として、島津家の封建統治下で、苛酷な人頭税を課し、島民を苦しめた。
これは、島津家の狡猾な抜け道づくりであった。幕府の鎖国政策によって、外国との
交易を禁じられたため、島津家自身としては、それがやれないので、琉球列島を独立国
として、自由に、明国はじめ諸外国と交易させておいて、その利潤を吸い上げたのであ
った。
天保のいまに至るも、なお、島津家の苛酷なこの政策は行われていた。
ただ、幕府の権威の薄れるにつれて、琉球列島に於ける諸外国との交易は、薩摩の独
占ではなくなり、西国各藩が、列島の各湊で、なかば公然とやるようになっていた。
石垣島に於ても——。
石垣湊にある、八重山諸島の頭職・宮良当演が、宮良殿内（役宅）で、島津家の課す
人頭税をとりしきり、密貿易の利潤をあげて、納めていたが、同時に、西国各藩の抜荷

船が入って来て、諸外国船と取引きする便利も計ってやっていた。いやむしろ、それら抜荷船から、幾割かの礼金をもらうことによって、島民たちに息をつかせているあんばいであった。

五島藩庁が、製(つく)った阿片を、石垣島へ、こっそり、運んだのは、そこが、島津家の支配下にあり乍(なが)ら、独立国の一島だったからである。

川平湾は、石垣湊とちょうど反対側にあった。

二

深更――。

船路(ふなじ)おだやかに、大和丸は、三檣(しょう)の帆をふくらませて、半月を配した星空の下の東支(シ)那(ナ)海をまっすぐに、南下していた。

起きているのは、交替の梶取(かじと)り二人だけであった。

船内には、船体の軋(きし)る音と、水主(かこ)の大いびきがあるだけであった。

と――。

一人、厠(かわや)にでも行こうとするように、身を起した者がいた。

等々呂木(とどろぎ)順之助であった。

厠に行くために起き上ったのではないことは、左右に寝ている七草喜久左衛門と郡(こおり)参

平、そして、板壁をへだてた隣りの敷《しき》（船底）にいる眠狂四郎と時雨《しぐれ》左馬之助に対して、鋭く神経を配って、しばらく、じっとしていたので、明らかであった。

もし、順之助が、狡智《こうち》に長《た》けていたならば、わざと音たてて、厠へ行くふりをしたに相違ない。

順之助は、自分がこれからやってのけようとする内密の行為を、同乗の人びとに気《け》どられてはならぬと、恐怖をともなった極度の緊張の中に身を置いていた。そのため、敷《しき》内《うち》の様子をうかがう時間をとり、音を消したのであった。

そっと、歩み出て、ひと息ついた。緊張のあまり、胸の動悸《どうき》は乱打される早鐘のようになっていたし、下肢はふるえていた。

俵物《たわらもの》（俵で包装した商品――煎海鼠《いりこ》、干鮑《あわび》、鱶鰭《ふかひれ》のたぐい）が積まれた通路を抜けて、賄室《まかないしつ》の前へ至って、ようやく、下肢のふるえは止っていたが、別の興奮が全身を包み、口腔《こうこう》内は、からからにかわいていた。

突き当りは、板戸になり、錠前がかけてあった。

順之助は、すでに、それをはずす鍵《かぎ》を持っていた。鍵は、賄室の板壁に、かけてあり、賄方《かしき》となった宝瓶宮黒人《ほうへいきゅうくろひと》の目をぬすんで、それをとるのは、造作もなかった。

板戸を開けて、踏み込んだ順之助は、早鳴る動悸をしずめようと、ふうっ、と長い息を吐いた。

——女は、おれが、犯してやる！

順之助が、とっさに肚をきめたのは、胡蝶を抱く籤引きが行われ、それが、七草喜久左衛門に当った時であった。

喜久左衛門が、自分が籤に当ったのは、金比羅大権現のおすすめと受けとって、辞退せずに、若い柔肌を抱く、と云いのこしておいて、胴の間を出て行くのを、見送り乍ら、順之助は、絶対にそんなことをする老人ではないことを、知っていた。

胡蝶は、幸運にも、犯科者の水主の玩弄物にされることから、まぬがれたのであった。

順之助は、女の幸運を、逆に、奇貨おくべしとして、自分が犯す決意をしたのであった。

すなわち——。

許嫁の志津乃を奪われた復讐であった。

眠狂四郎は、

「志津乃のからだは、まだ、けがされては居らぬ」

と、明言していたが、順之助は、信じてはいなかった。

羽前最上郡の治所、新庄の旅籠に於て、眼前で、志津乃が、狂四郎とひとつ寝牀に臥す、という堪えがたい光景に遭わされた順之助であった。

いつの日にか、必ず、この屈辱を濯いでくれるぞ、とおのれに云いきかせて来たので

ある。

その機会が、いま、到来したのだ。

順之助は、蓬窓（あかりまど）から月光がさし込む居間を、闇（やみ）に馴（な）れた目で、睨（にら）みまわした。

十数箇の葛籠（つづら）が、ならべてあった。清朝献上の秋田黄八丈が、容（い）れてある。

これらのうちのひとつに、胡蝶は、忍んでいるに相違なかった。

順之助は、懐中から、蠟燭（ろうそく）をとり出して、火をつけると、梁（はり）に立てた。

それから、押し殺した声で、

「女！」

と、呼んだ。

「目をさませ。用事がある」

三

蓬窓のそばの葛籠の蓋（ふた）が、そっと、内部から、押しあげられた。

順之助は、ごくりと生唾（なまつば）をのみ下した。

肩のあたりまで姿をあらわした胡蝶を、一瞥（いちべつ）した瞬間、順之助は、軀内（くない）にみなぎらせた熱い血汐（ちしお）が、油と化して、欲望の火をつけられ、一挙に燃えたつのをおぼえた。

あの日以来、ただの一度も、陽光を受けぬ、かくれ伏す日々のやつれが重なり、その

美貌は、蠟燭の仄明りの中で、夢幻の中のもののように、儚くあえかなものとなって、順之助の目に映った。
「なんぞ、御用でございましょうか？」
胡蝶は、こんな時刻に、不意に、押し入って来た若いさむらいに対して、不審の視線を投げた。
「せ、拙者は、秋田藩佐竹家家臣——等々呂木順之助」
ふるえ声で名乗っただけで、それなり、その場に釘づけになったように動かなかった。
ふれてはならぬ美しい毒花、という意識が、脳裡を、ちらとかすめていた。
「で……、ご用は、なんでございましょう？」
「拙者は、許嫁の娘を、眠狂四郎に奪われたものだ！」
思わず、きかせるべくあらかじめ用意していたのではない言葉を、順之助は、口走った。
「…………」
胡蝶は、微かに眉宇をひそめて、順之助の狂おしい眼光を受けとめた。
「拙者は、その復讐のために、そなたを、犯す！」
「…………」
「おとなしく、拙者に、身を、まかせろ！　悲鳴をあげたり、抵抗いたせば、殺す

ぞ！」
「………」
順之助は、ずかずかと、葛籠へ近づくと、胡蝶の肩をつかんだ。
胡蝶は、おちついた様子を崩さず、
「あたしを手ごめになすっても、眠狂四郎様に復讐したことには、ならないのじゃござんせぬか」
と、云った。
「なるのだ！」
順之助は、足で葛籠を傾けると、胡蝶を板敷きに、ひき出した。
胡蝶は、乱れた裾（すそ）を合わせて、端座すると、
「血迷うて居なさんす」
と、云った。
「血迷うてなど、居るものか！」
矢庭に、順之助は、胡蝶を、押し倒そうとした。
胡蝶は、欲情の焔（ほのお）を燃やす順之助の双眼を、冷やかに仰ぎ乍ら、
「いつでも、死ぬ覚悟が、できている女でござんすよ、あたしは――」
「なにっ！」

「舌を嚙んでごらんに入れましょうか」
「くそっ！」
順之助は、いったん、はなれかけた。
ひきさがる、と見せかけておいて、胡蝶が、ほっとした——その刹那、順之助は、腰にはさんでいた手拭いを、つかみ取りざま、渾身の力をこめて、女の口へ押し込み、猿ぐつわをかけた。
はじめて、胡蝶の死にもの狂いの抵抗が、はじまった。
その抵抗が、かえって、順之助に、余裕を生じさせ、残忍な欲情をあおった。
明石の着物と緋縮緬の長襦袢を、ひき裂くように押しひろげさせて、膝頭で踏みつけた。次いで、水色の湯文字を剝いで、左手で太腿の内をつかみ、右手を拳にすると、鳩尾へひと突き呉れた。
胡蝶は、気を喪って、ぐったりとなった。
全身、汗だらけになった順之助は、烈しく喘ぎつつ、視線を、女の秘部へあてた。
またたく蠟燭の灯がつくる陰翳が、下肢のなめらかなふくらみや線を色めくものにして、さらに、順之助の痴情をそそる効果を為した。
ふくらみと線の中点に、黒い蝶がとまったように、恥毛が浮きあがっていた。……胡蝶は、気絶しつつも、肌身を守ろうとする本能で、股を合わせ、足を組んで居り、順之

助が、開かせようとしても、合わせた力は強かった。

ぼたぼたと汗をしたたらせ乍ら、両足くびをつかんで、引き開かせようとした――その折。

四

「それは、なんのざまじゃ、順之助！」

突然、戸口から、老横目の声が、かかった。

その叱咤に対して、順之助が応えたのは、反射的な、狂暴な行動であった。

脇に置きすてててあった差料を、ひっつかむやいなや、抜きつけに、喜久左衛門めがけて、斬りかかった。

喜久左衛門は、すっと横へ身を移して、腰を落した――とみた一瞬、抜いたと見せず、斬りそこなって、前のめりに上半身をのびきらせた順之助を、脳天から、唐竹割りに、両断した。

絶鳴ものこさず、順之助は、仆れた。

喜久左衛門は、白刃を腰に納めると、しずかな足どりで、胡蝶に近づき、あられもない乱れ姿を、つくろってやり、抱きあげて、葛籠の中へ入れてやった。

次いで――。

びて佇立する黒影を、見出した。
それが狂四郎であることを、見分けておいて、喜久左衛門は、
「南無！」
と、となえると、順之助の屍体を、海へ投げ落した。
それから、老人は、ゆっくりと、狂四郎の前へ、歩み寄った。
「眠殿――、貴殿は、順之助が、女子を犯しに行こうとしたのを、気配で察しられたに相違ない。にもかかわらず、それを阻止しようとはされなかった。……この年寄りに、成敗がたをまかせておいて、ここで待って居ったとはのう――」
喜久左衛門の語気は、幾分かの憤りを含んでいた。
「老人――」
狂四郎は、ふところ手のままで、云った。
「貴方は、あの若者を成敗すべきではなかった」
「なんと申されるぞ?!」
「女を犯すがままに、すてておけばよかった」
「貴殿の口から、そのような寛大な言葉をきこうとは、心外じゃわい」

「許嫁である貴殿の娘を、わたしに奪われた恨みを、はらす好機であったのだ。……あの女は、わたしの情婦でもなく、わたしが惚れて連れ込んだのでもない。犯されたところで、やむを得ぬ立場に置かれていたのだ」

そう云いすてる狂四郎を、喜久左衛門は、

「そう云う貴殿は、人間の血など流れて居らぬ冷酷非情な男に受けとれるが、一方では、当方が提供した志津乃に、一指もふれては居らぬ。……田舎爺いなどには、なんともはや、見当もつかぬ御仁じゃ」

と、吐き出した。

「わたしは、おのれ自身の気分次第で、その日その日を生きている。いわば、自我本意の無頼の徒だ。貴方の娘を犯さなかったのは、そのけなげな覚悟に感動したからでもなければ、憐憫をおぼえたからでもない。……あるいは、あの等々呂木順之助が、江戸へ出る途中に、出現して、躍起になって邪魔しなければ、道中の間に、抱いたかも知れぬ。……この無頼の男が、ひとつ牀に寝乍ら、長い道中をつづけて、いつまで欲情を抑えることができるか——試したまでのことだ」

「そうきかされても、この爺いには、納得いたしかねる。……眠殿、胡蝶と申すあの女、あれほど必死に、貴殿を恋い慕うて居るのに、何故、見すてておくのじゃな？　この前、わしが、それを問うと、貴殿は、自分一人だけ色情を満たすことはできぬ、との返答を

されたが、自我本意の無頼の徒を以て任じて居る御仁の生きかたとは、いささか食いちがって居るのではござるまいかな」
狂四郎は、しかし、その詰問にはこたえず、夜空を仰いだ。
「老人――」
「なんでござろう?」
「同乗した宝瓶宮というあの異邦人は、星を占うことに於て、比類のない男だ。……この大和丸が、はたして、抜荷に成功して、秋田藩が、清国米を仕入れることができるかどうか――占ってもらってはいかがだ?」
そうすすめた。
「いや、それよりも……」
喜久左衛門は、かぶりを振り、
「貴殿が、わが方の味方になってくれるかどうか――成否は、ひとえに、そのことにかかって居る、とわれらは、考え居り申すて」
と、云った。
「………」
「しいては、お願い申さぬ。ただ、これは、わしの予感じゃが、貴殿は、ご老中の権勢欲のためにつくす御仁ではない、と思われる。……この爺いが、いま、頭を下げても、

即座の応諾は得られぬことは、存じて居る。心中で、祈るばかりでござるわい」

「…………」

狂四郎の眼眸(まなざし)は、無数にちらばった星へ向けられているばかりであった。

待ち伏せ島

一

八重山諸島の主島・石垣島は、全島の長汀曲浦（ちょうていきょくほ）が、ほとんど、珊瑚礁（さんごしょう）にかこまれて、千石船が入る湊（みなと）は、ひとつもなかった。

大和丸が目ざした川平（かびら）港は、島民の人頭税をつかさどる宮良殿内（みやらどんち）と、ちょうど反対側にあった。

無事に、琉球（りゅうきゅう）列島わきを航海した大和丸は、もとより珊瑚礁にさえぎられて、川平湾内に入ることは、叶（かな）わなかった。

湾内を望見するのをさえぎって、どっしりと湾口に居すわった茸形（きのこがた）に裾（すそ）をえぐられた海蝕崖（かいしょくがい）の島のてまえで、錨（いかり）をおろした。

左右にひろがる陸地からは、熾（さか）んな、野火に似た煙があがっていた。砂糖黍（さとうきび）を刈りとったあとにむらがる野鼠（のねずみ）を焼きはらっているのであった。

大和丸からは、五艘（そう）の橋舟がおろされ、先頭の舟に、船長（ふなおさ）の唐津唐兵衛が舳（みよし）に乗り、

艫には狂四郎が腰を下ろして、ゆっくりと、湾の中へ漕ぎ進んだ。
狂四郎が乗っているのは、唐兵衛の要請であり、用心棒の役割をつとめる身としては、当然であった。
凪いだ海面は、翡翠を溶かしたような美しい色をたたえていた。
近づく浜辺は、後方に熱帯樹の原生群落を配して、目にしみるような、貝が砂になった純白の渚がひろがっていた。
人影はなく、はじめて見かけるかたちの大きな海鳥が、わがもの顔に、ひくい宙を舞っていた。
透明な水中を泳ぐ、色彩の鮮やかな魚も、舟をおそれぬのびやかな動きをみせていた。
この明媚な景色を傷つけるどら声が、水主の中から、あがった。
「おかしら、この石垣島では、どこの家でも、お入りなされ、と歓迎してくれるときいたが、小半刻、ちょいとばかり、遊ばせてもらえませんかい？」
つまり、八重山諸島では、島娘は、海の男たちを、絶対に拒否しない、という噂であった。
「おかしらには、一等の美人を選んで抱かせるから、ひとつ、たのみますぜ」
「せんずりかくのも、いい加減あきたわい」
唐兵衛は、水主たちから云いたてられて、苦笑した。

「荷を、無事に船へ積み了えたら、半日の暇を呉れてやろうばい」
それをきいて、水主たちは、わっと歓声をあげた。
舟を漕いでいる庄吉という、まだ二十歳ばかりの水主が、
「旦那――、旦那は、わしらに遠慮して、まだ、あの別品を抱いちゃいねえんでしょう。わしらが、島娘のいる家へ入り込んだら、旦那も、大っぴらに、あの別品を抱きなせえ」
と、すすめた。
狂四郎は、表情のない顔で、白砂の浜を区切った石灰岩の海蝕崖の上の一点へ、冷たい眼眸を送っていたが、
「娘を抱く前に、生命を落さぬことだ」
ひくい声音で、云った。
「なんじゃと？」
「この綺麗な景色を、血で染めるべく、待ち伏せている者たちが、あの浜辺に、いる模様だ」
狂四郎は、すでに、この遠い距離から、風化した裾礁の蔭や、海蝕崖の上の熱帯樹林の中に、ちらっちらっと、動く人影を、見分けていたのである。
それは、ただの動きではなく、あきらかに、こちらが着くのを待って、一斉に、襲う

殺気を示していた。

「おかしら！　眼の旦那が、待ち伏せている野郎どもがいる、と云ってますぜ」

庄吉が、告げた。

「公儀の庭番衆という奴は、ひどう執拗いものだのう」

「こんどは、公儀の放って来た隠密ではあるまい」

「すると——？」

唐兵衛は、狂四郎を振りかえった。

「薩摩の生命知らず共ですかい？」

「おそらく、そうであろう」

「そいつは、公儀の庭番衆よりも、始末におえねえ面々だぜ。……五年前に、薩摩の抜荷船と、ひと戦やらかしたことがあるが、まるで、鉄砲の的にしてくれといわんばかりに、何人撃ち殺しても、次から次に、襲って来やがって、とうとう、お手あげになり、荷物を全部呈上したひでえ目に遭っている」

「………」

狂四郎自身も、三年前、薩摩藩が、百年の長きに亙って、組織を完備した隼人隠密党という暗殺団と、東海道五十三次の間、血みどろの闘いをくりひろげた経験があった。

いま、思い泛べても、よくぞ生き残れたものだ、と微かな戦慄が、背筋を奔う。

薩摩隼人隠密党は、ただの刺客集団ではなかった。

並木のごとく一列の隊伍をみじんも崩さず、寛永のはじめ瀬戸口備前守（後年の東郷藤兵衛尉肥前守入道重位）が編んだ自源流をさらにみがきあげた示現流の構えをとって、一騎討ちを厳法とし、一人が斃れたならば、次の者がその屍を乗り越えて来た。

多剣をもって、一刃を襲うのは、薩摩隼人の面目にかけて、これを択らぬところであった。それだけに、天稟をそなえた異数者がえらばれ、その修業も尋常一様ではなく、修業中途で半数が斃れ、生き残った者が、党士に組み入れられ、さらに、幾段階かに分れた序列を、凄まじい競争によって、昇って行く仕組みになっていた。

唐兵衛が云う通り、公儀の隠密たちが到底及ぶべくもない異常な手練者ぞろいであった。

二

狂四郎は、三年前、鈴鹿峠の麓で、隼人隠密党二十七名を敵として、文字通り死闘し、十五人まで斬った光景を、脳裡によみがえらせていた。

その十五人の中に、あきらかに琉球人の血が混っていると判る骨格風貌の士がいた。

「鹿児島三番隊頭取・久保民部」と名のった。

いまでも、ありありと、久保民部の構えが、記憶にのこっている。

右の一手のみで、太刀を頭上にかざし、左手は、五指をのばして、いわゆる貫き手にして、胸前に構えたのは、琉球拳法を、自源流に合わせたものであった。他の党士とちがい、素跣であった。

狂四郎の剣を、左手で払いざま、地を蹴って、蹴上げを放ち、瞬間に、まっ向から、自源流の一太刀をあびせかけて来る戦法、と受けとれた。

貫き手は防禦の死手であるが、狂四郎の用いる技によって、これに応ずる意外の変化を生み、どのような凄まじい活手攻撃を放って来るか、予測しがたかった。

白刃と手と足と——この三つが、一如の働きを為す異常の業前に対して、狂四郎が、無心のままに臨んだのは、いつものこの男の不敵さであった。

久保民部に対して、狂四郎は、やはり、円月殺法を用いた。

鍔が、双眸と一線にならんだ——その刹那、久保民部は、拳法独特の凄まじい一喝とともに、死手を活手に一変させて、飛鳥の迅さで襲って来た。

一瞬裡に、双者は、飛び交い、あとの地上に、一本の手が、肱から両断されて、落ちていた。

あの時の……。

隻腕となって静止した民部の、苦悶の表情の代りに、おのれ自身、信じ難く、茫然自失して、おのが右手に握りしめているはばきから三寸あまりのところで両断された剣へ、

視線を落とした姿が、狂四郎の目蓋(まぶた)の裏に、焼きついている。
——あの隼人隠密党の一派が、この石垣島にもいるとしたならば……？
狂四郎は、五艘の橋舟に乗っている水主二十余人のうち、九割は斬られるであろう、と予測した。
薩摩示現流は、柳生新陰流などとは、全く異質の剣法であった。
端的に云えば、ただの一太刀で、対手(あいて)を斬るか、おのれが斬られるか、攻撃一本、防禦を全くかえりみない、攻撃こそ最上の防禦とする玉砕主義を、特色としているのであった。
唐津唐兵衛が、この示現流の手練者(てだれ)を乗せた抜荷船と、一戦交えて、惨敗(ざんぱい)したのは、当然のことであった。
生か死か——一太刀で、これを決する剣法は、この時代、示現流以外になかったのである。
「眠さん、対手が薩摩隼人どもなら、あんたの剣とわしの鉄砲だけでは、多分、勝目はなかろうばい」
「大海原のまっただ中で、暴風雨(あらし)に襲われれば、一命を投げ出して突ききるのが、船頭というものではないのか」
「それはそうだ。やらざあなるめえ。……奴らが、この石垣島の川平湾で、待ち伏せて

いた、ということは、五島家が、ここへ、荷を運んだのをかぎつけた、という証拠だ。もしかすると、もう、横あいから奪い取っていやがるのかも知れねえ」

——悪党と悪党が描き出す地獄図絵か。

狂四郎は、胸の裡で、自嘲の独語をもらした。

三

五艘の橋舟が、渚に着くや、待ち伏せていた者たちが、一斉に、熱帯樹林の中から坂を駆け降りて来、裾礁の岩蔭から躍り出て来た。

狂四郎は、一瞥して、

——やはり、薩摩藩の者たちだったか。

と、知った。

頭数は、こちらの倍をかぞえた。

ただ、その三分の二は、得物を所持していなかった。琉球人独特の面貌をして居り、小柄乍らその骨格の逞しさ、眼光の鋭さ、そして、瘤のできた双拳を視て、かれらが唐手の修練者と判った。

水主たちは、琉球拳法——唐手術のおそろしさを知っているとみえて、息をのんだ。

水主たちは、よもや、この川平湾内に、待ち伏せがあろうとは思わず、せいぜい、懐

中に匕首をはさんでいる程度だったのである。
匕首ぐらいで、琉球が誇る唐手術に対抗できる道理がなかった。
しかし、唐兵衛が、砂地へ降り立つや、水主たちも、覚悟をきめて、つづこうとした。
すると、やおら腰を上げた狂四郎が、
「お主らが、降りるのは、無駄であろう。船長とわたしが、ここで相果てたならば、死体をひろって、船へ戻る役目だけのようだ」
と、とどめた。
唐兵衛と狂四郎が、指揮者らしい年配の武士へ向って、数歩進むや、まず、琉球人たちが、さっと円形に散って、二人を包囲し、唐手の構えをとった。
右足を後方へ退き、左肩を前にして、五指を伸ばしたままの双手を、左胸前で交叉させた。
狂四郎は、それが、少林流と看て取った。
唐手術は、昭霊流と少林流の二派があった。前者は、巨軀で、肥満の体質の者が学び、後者は、小柄で、むしろ痩せほそった者に適していた。
唐手術を使うには、少林流の方が、四肢が目にもとまらぬ機敏さで働く長所があり、槍とか刀に対しては、利を得ていた。
唐手は、唐崇拝時代に、大陸から拳法を輸入し、琉球元来の技にこれを加味した術で

あり、薩摩の事実上の属領となって、武器を取りあげられて、さらに発達したものである。

曾て、寛永年間、島津家は、『何品によらず武具の類、琉球へ被売渡間敷き事』を、条令の一項目にしておき乍ら、いまでは、そのおかげで発達した徒手空拳の技を、逆に利用しているのであった。

「それがしは、薩摩藩島廻り方目付・大久保靭負である。当藩船奉行よりの通報により、お主らが、宮古群島ならびに八重山群島を荒す海賊なることが明白である上からは、上陸を禁ずる」

この通達をきいて、唐兵衛は、にやりとした。

「そいつはただの名目で、本音は、わしらに、どんなことをねだる料簡か、はっきりときかせておくんなせえ」

「島津家が、海賊ずれに、ねだると！」

大久保靭負は、唐兵衛を、睨みつけた。

「じゃ、取引、と云いかえてもようござんすばい。そちらさんの肚の裡が読めているんでね、ああの、こうのと、かけひきの問答は、時間の無駄だと思いやすよ」

「かけひきなどいたす存念はない。早々に退去せい、と命じて居るのだ」

「それが、すなわち、かけひき」

「なにっ！」

「わしらが、黙って、おとなしく、退散したら、せっかく、こうして待ち伏せていなさった甲斐(かい)がねえのじゃありませんかい？」

「黙れっ！　おとなしゅう退去するうぬらか！」

「語るに落ちるだ。仰言(おつしや)る通り、すごすごと消えるわけにはいかねえ事情が、こっちにはある。その事情を、そちらさんはかぎつけなさった。しかし、品物は、まだ、横取りはしてはいねえ。そこで、かけひきをやらかそうと、まあ、こういうわけでござんしょう？」

先手、先手と打たれた大久保靭負は、そこで、けわしい表情をゆるめた。

「一命を落したくなければ、この湾内の何処(いずこ)に、荷がかくされてあるか、ありていに申すことだ」

「さあ、そこで、かけひきということになるんでさあ。かくし場所を教えたなら、生命だけはたすけてやる、と仰言られても、そいつを、へいそうですかい、と真に受けるほど、間抜けちゃいませんぜ。まして、半分ずつ、分け合ってくれる、なんぞともったいめかした条件を出されても、聞く耳を持っちゃいねえ。……かくし場所を、きいておいて、みな殺しにする――そのこんたんは、ちゃんと、看(み)えて居りますぜ」

四

島津家島廻り方目付・大久保靭負は、はっきりと、云った。

「うぬらは、清(しん)国に、阿片(あへん)をこっそり売りつけようと企てて居る模様だ。もし、それをされたならば、わが薩摩藩の唐物交易は、清朝から拒絶されるおそれがある。わが薩摩藩は、いまだ一度も、阿片などというおそろしい毒物を、清国へ運んだことはないのだ」

「そちらさんが、どんな抜荷をやっていなさるのか、こっちの知ったことじゃありませんや。……ともかく、ここは、実際にはどうあれ、島津家の領土じゃねえ。れっきとした独立した国ですぜ。わしらが、何を船積みしようと、勝手だァな」

「阿片の密貿易は、断じて許さぬ！」

「実は、そういうそちらさんも、のどから手が出るほど、阿片が欲しいのじゃありませんかい。そういう顔つきをしていなさる」

「ほざくな、下郎！」

「大層むきになって鍾馗(しょうき)面(づら)になりなすったところをみると、どうやら、阿片交易の利は、ばの大きさを、勘定なさったらしい。……しかたがねえ、勝目のねえ争いは避けて、嘘(うそ)のねえところを、取引いたそうじゃありませんかい？」

「申せ」

「こっちは、金輪際(こんりんざい)、品物のかくし場所を教えるわけにはいかねえ。しかし、三分の一は、そちらへさし上げやしょうばい。……つまり、こっちの目のとどかねえ遠い処(ところ)に、ひき退(さが)っていて頂きてえ。そのあいだに、こっちは、品物の三分の二を、船積みする。この取引は、どうですかい？」

「信用できぬ」

「なァに、大和丸の船長の、この唐津唐兵衛が、そちらさんの人質になるんでさあ。三分の一の品物が、そちらさんの手に入ったら、釈放して頂く、という段どりでさ。……そちらさんを、島津家六十万石の大大名を代表した薩摩隼人の面目を誇る御仁と看て、こっちは、せっかくの高価な品物を、おすそわけしようというんだ。……ここで、談合決裂して、生命のやりとりをすりゃ、双方が損するだけよ。品物は、何処(どこ)かで、永久に、ねむったままになることになるんだ。……そちらさんは、三分の一の品物を、濡(ぬ)れ手で粟(あわ)だ。こんなうめえ取引は、滅多にありゃしねえ」

しばらく、沈黙を置いてから、大久保靭負は、

「よかろう。承知した」

と、うなずいた。

唐兵衛は、狂四郎を視(み)やって、

「眠さん、品物を船積みする宰領は、あんたに、まかせやすよ」

と云って、一枚の絵図面を、手渡した。

「お主の取引、いささか、対手を甘くみくびっては居らぬのか？」

狂四郎は、ふっと湧いた不吉な予感を、口にした。

「こうするより、ほかに、手段がありますかい？」

唐兵衛は、不敵な微笑を返した。

狂四郎は、唐兵衛が、大久保勒負とその配下、少林流の琉球人たちとともに、坂を登って、樹林のむこうに消えるのを見送ってから、なおしばらく、その場で、神経をあたりに配った。

こちらを尾けて来るべく、物蔭にひそんでいる者の有無を、用心したのである。

——この取引が血を流さずに、すむかどうか？

狂四郎は、水主たちを促して、渚沿いに、歩き出した。

ものの五町も、辿ったろうか。

一艘の釣舟が、せわしげに、浜辺へ漕ぎかえって来ると、跳び降りた漕ぎ手は、こちらへ、片手を挙げた。

漁師の身なりをしているが、その眼光は、武士のものであった。

「五島藩士篠崎三五郎でござる。ご案内いたす」

案内された急勾配の熱帯樹林の中は、うだるような暑さであり、八重山でガザンと称ぶ大きな蚊が、無数に襲いかかって来た。

阿片百七十箱は、樹林と樹林が、巨大な巌で区切られた場所に、鉄櫃に詰めて、埋められ、その上に蘇鉄が植えてあった。

渚は、眼下にあり、すでに、そこへ、五艘の橋舟が、漕ぎ寄せられていた。

「眠の旦那、二十箱も残しておきやすかい？」

水主の一人に、訊かれて、狂四郎は、無表情で、

「一箱も残す必要は、あるまい」

と、こたえた。

「冗談じゃねえ。おかしらが、人質になっているんですぜ」

「お前らは、あの薩摩の目付が、三分の一を受けとっただけで、われわれが、立ち去るのを、黙って見送る、と思っているのか」

「そういう約束をしたじゃありませんかい」

「対手は、はじめから、われわれをみな殺しにする肚をきめて居る。ついでに、大和丸を奪う計画も樹てて居ろう」

「そいつは、旦那一人のかんぐりじゃねえんですかい？」

「おそらく、唐兵衛も、半ばは、そう疑い乍ら、人質になって居ろう」
唐兵衛は、人質になるにあたって、その短銃を、大久保靭負に、取りあげられていた。
したがって、大久保靭負を、撃ち殺すことは叶わぬのであった。
「それじゃ、いってえ、どうなる、というんですかい？」
「なるようにしかならぬ、ということだ」
狂四郎の返辞は、他人事のように、冷やかなものであった。

示現流と唐手術と

一

阿片百七十箱（一箱百斤詰め）を、熱帯樹の原生群落をかきわけかきわけ、急勾配の斜面を、白浜までかつぎおろした大和丸の水主二十四人が、汗をぬぐい、八重山蚊に刺された痕をぼりぼりかき乍ら、ひと息入れたのも、束の間であった。

向いの小島の蔭から、非常な速力で、数十艘の走舸が、こちらへ向って、進んで来た。

「薩摩っぽうめ、全部、ぶん奪りやがる肚だぜ！」

「野郎っ！　箱の中身を、海の中へばらまいても、あん畜生らにゃ、渡さねえぞ！」

水主たちは、双眼を血走らせると、すばやく、荷を五艘の橋舟へ積み込んで、いざとなると、舟をひっくりかえすべく、手筈をととのえた。

「眠の旦那、お前様が宰領者だ。おかしらはじめ、わしら全員が、ここで斬り死しても、荷は、彼奴らには渡さねえ。それでようがすね？」

一人が、念を押した。

「それは、最後の手段であろう」
「じゃ、その前に、まだ打つ手がある、と仰言(おっしゃ)るんですかい？」
「あるやも知れぬ」
狂四郎のおちついた声音(こわね)が、一同の憤怒(ふんぬ)を、ややしずめる効果があった。
突き進んで来た薩摩藩の走舸団の中央、先頭の一艘の舳(みよし)に、前で両手を縛られた唐兵衛が坐(すわ)り、その背後に、島廻り方目付・大久保靭負(ゆきえ)が、仁王立っていた。
三十艘以上とかぞえられる走舸は、半円の陣形をとって、渚(なぎさ)ぎわにいる大和丸の橋舟五艘を、包囲した。
「眠の旦那――」
唐兵衛が、大声で呼んだ。
「あんたが、先刻云(い)った通り、この取引は、対手(あいて)を、ちっとばかり甘くみくびって居(お)り申したばい」
「……」
狂四郎の返辞は、なかった。
大久保靭負が、薄ら笑い乍(なが)ら、
「お前らの生命まで、奪おうとは申さぬ。荷を、陸へ戻せ！」
と、命じた。

当然、死を覚悟した水主たちが、舟をひっくりかえして、阿片を海水に溶かしてしまうもの、と大久保靭負は、看て取っていた。
「ふん、薩摩隼人も、金もうけのためには、二枚舌を使いやがる」
水主たちは、絶望の視線を、交わし合った。
「早くせぬか！」
大久保靭負は、せき立てた。
「しかたがねえ。生命あっての物種だ。品物を、砂地へ揚げろい」
唐兵衛が、命じた。
水主たちは、黙々として、苦労して掘り出し担ぎおろした百七十箱を、再び、貝が砂となった純白の浜へ、運び戻した。
すると、唐手術を修練した琉球人三十余人が、一斉に、渚へ跳ぶと、小波を蹴たてて、その荷のそばへ奔った。
大久保靭負と、その配下の薩摩藩士たちは、依然として、包囲の走舸に残った。
「さあ、生命だけは助けて下さるのでござんしょう。大和丸へ去なせて頂きましょうばい」
唐兵衛が、もとめると、大久保靭負は、声をたてて、笑った。
「やはり、その浪人者の申す通り、永年海賊稼業をした貴様にあるまじき、考えの甘さ

が、あわれだな」
「なんだと！」
「大和丸が、ただの秋田藩の抜荷船ならば、外様藩の誼として、立去るのを、黙って見送るであろう。……当方の間者の探策により、大和丸は、実は、水野越州殿が、老中主座を得んとするための軍資金づくりの抜荷船と、判明して居る。されば、大和丸は、大洋で大時化をくらって、難破沈没し、一人も生還しなかったことに相成る。老中と島津家の争いの原因など、わざわざ、つくる必要はない」
冷然として、そう云いはなつ大久保靭負に対して、唐兵衛は、なぜか、憤激の態度をみせる代りに、
「やっぱり、そうですかい。運のつき、とあきらめることにしようばい」
と、云って、狂四郎へ、視線を送って来て、にやっとしてみせた。
一瞬裡に、呼吸が合った――それであった。
狂四郎の右手から、小柄が、大久保靭負めがけて、放たれるのと、唐兵衛が、身を沈めつつ、ぱっと向きかわるのが同時であった。
大久保靭負は、示現流の使い手だけあって、狂四郎の放った小柄を、抜く手も見せず、はじきとばしてみせた。
しかし、その隙を、唐兵衛がとらえるのを、防ぐいとまはなかった。

二

大久保靭負は、唐兵衛から取りあげた短銃を、帯へさしはさんでいた。

だっ、と体当りをくれた刹那、もう、その短銃は、唐兵衛の縛られた手に移っていた。

のけぞる靭負の顔面めがけて、唐兵衛は、短銃の引金を引いた。

つづいて、唐兵衛は、あちらの走舸、こちらの走舸へ向って、狙いもさだめず、三発撃ち、三人を倒した。

水をへだてていては、いかに示現流の手練者も、いたずらに、唐兵衛の的になるだけであった。

唐兵衛が、縛られた不自由な両手で、短銃に、弾丸込めする余裕を与えるだけ、水上の距離があった。

とはいえ、かれらは選ばれた薩摩隼人であり、加之、陸には、唐手術の琉球三十余人の味方がいた。

指揮の目付を殺されても、あとへ退く面々ではなかった。

唐兵衛から、さらに二人重傷を負わせられつつも、まっしぐらに、走舸を突進させて来た。

唐兵衛は、海中へ飛び込んで、橋舟の下へもぐった。

その時、狂四郎が、敵がたに云った。

「お主らの対手は、わたしがいたそう。浜へ上って頂こうか」

狂四郎と対峙（たいじ）したのは、十三人であった。

かれらは、隼人隠密（おんみつ）党に属さぬ隠密であったが、やはり、薩摩隼人の面目にかけて、一騎討ちの作法を守った。

示現流の手練者としての自信と、すでにこの浪人者が、隼人隠密党を多勢斬った眠狂四郎という異様な妖剣（ようけん）の使い手であることを知らされている模様であった。

——おれが仆（たお）してくれる！

いずれも、二十代半ばの隼人たちは、狂四郎の看（み）たところ、城下の士ではなく、郷士のようであった。

薩摩藩の藩士階層制度は、きわめて複雑であった。

大ざっぱに述べれば、まず、城下士と在郷士に分けられていたが、これは土佐藩などと同様であったものの、その仕組みが根本的にちがっていた。

薩摩独特の外城制度（郷士制度）は、他藩にないものであった。

天守閣を有（も）たぬ鶴丸（つるまる）城を中心として、武家屋敷七分、町家三分の比率で、異常に武士人口が多かったのも、いちじるしい特色であったが、これよりも、『人をもって城とす

る』という方針に則り、領内諸郷すみずみまで、藩士を居住させたのである。

薩摩五十一郷、大隅四十二郷、日向その他二十郷――合計百十三郷（一郷は数カ村から成る）の、末端行政まで、居郷藩士が、掌握していた。

農民、町人と武士との比は二対一であり、これほど藩士が多くては、城下に居住するのが不可能であったのは、当然であろう。

城下士は諸士と称ばれ、郷士は衆中と称ばれた。半農半士の衆中は、城下の諸士から、『一日兵児』と軽蔑された。

のみならず、同じ郷士でも、麓（組頭）郷士は、在家（庄屋）郷士を、〝唐草〟と蔑称して、農民同様にあつかっていた。

そして、また――。

麓郷士はもとより、在家郷士は、絶対に、隣りの郷士とは、交際せず、むしろ、強烈な対抗意識を抱いていた。隣郷の士との果し合い沙汰は、べつに珍しいことではなかった。

いま――。

狂四郎が対手としている十三人は、各郷からえらばれた青年たちのようであった。

――他郷の奴に、功名を取られてなろうか！

その競争心が、心中にみなぎっているに相違なかった。

十三人は、横列一線に並ぶや、一斉に抜刀して、示現流の構えをとった。
刀身をまっすぐにさしのべた置蜻蛉（おきとんぼ）の構え、顔面右へ双手（もろて）を添えて、切先をやや後方へ傾けて立てた蜻蛉の構え、その反対に、顔面左へ柄をつけて、切先で天を指した逆蜻蛉の構え……。
おそらく、かれらは、物心ついた頃から、立木撃ちの修業を、毎日つづけて来たに相違ない。
立木撃ちとは――。
椎（しい）または栗（くり）の木などの堅い樹木を、長さ九尺程度に切って、三尺ばかり地中に埋めて立木にし、これを、柞（ゆす）の棒を持って、十数歩の距離から、奔（はし）り寄り、凄（すさ）まじい懸声（かけごえ）もろとも、あるいは右から、あるいは左から撃ちまくる修業であった。
退くとか躱（かわ）すとかを知らぬ、攻撃一方の剣術であった。
狂四郎は、この示現流蜻蛉の構えに対し、円月殺法の起刀の常法にしたがって、切先を地摺（じず）りにおとした。

三

若い薩摩隼人たちは、右端から一人ずつ、白砂を蹴散らして、無想正宗を宙にまわす狂四郎めがけて、疾駆して来て、満身からの懸声もろとも、燕飛（えんび）の剣をあびせて来たが……。

いずれも、血飛沫(ちしぶき)の中で、生命を棄(す)てた。
一人が、砂上に横たわった時には、もう次の者が、奔馳(ほんち)して来た。
狂四郎の一閃(せん)の迅業(はやわざ)は、そのたびに別であった。
面ていを真二つに断ち割られた者、胴を薙(な)ぎ払われた者、胸を貫かれた者、袈裟(けさ)がけに斬られた者……。
「おんしら、いい加減で、生命を粗末にするのを止(や)めんかい！」
渚に、ずぶ濡(ぬ)れで立っていた唐兵衛が、すでに八人が、一太刀ずつであの世へ送られた時、やりきれなくなって、喚(わめ)いた。
しかし、それは、かれらの耳に入るべくもなかった。
ついに――。
十三個の屍(むくろ)が、白砂を真紅に染め、それを、打ち寄せる波が洗った。
無想正宗を腰に納めた狂四郎は、阿片百七十箱をとりまいた琉球人たちへ、視線を移した。
「お主ら、どうする？」
狂四郎は、闘いの間に、すでに、琉球人たちが、いささかの闘志も、自分へそそいでいないことを感じ取っていた。
狂四郎の問いに対して、返答は、かえって来なかった。

その深い沈黙が、こちらにはっきりと判らせたのは、かれらが、薩摩の隠密たちにつづいて、襲撃して来る意志をすてていることであった。

それは、とりもなおさず、琉球人が、薩摩藩の走狗にされ、清国や東南アジア諸国と貿易をして、その利潤のほとんどを召し上げられている苦痛と怨恨を抱いている証左であった。

島廻り目付・大久保靭負はじめ隠密全員が、死滅したいま、かれらは、内心、

――ざまをみろ！

と、快哉を叫んでいるのかも知れなかった。

自分たちに代って、この浪人者と海賊の頭目が、薩摩藩士を片づけてくれた、というよろこびが、その無表情な顔の裏に、湧いているようであった。

そのむかし――島津家が攻め入って来るまでは、琉球は、進貢（対明貿易）によって、大きな利益を得て、くらしはゆたかだったのである。

また、「われらは琉球王の家臣であって、島津家を主人と仰がず」と忠誠の誓約書に、署名捺印をすることを拒否して、首を刎ねられた謝名親方を、いつか、ひそかに、神として信仰しているかれらであった。

薩摩の目付の命令に従わなければ、如何なる苛酷な課役を押しつけられるか測りがたいがゆえに、加勢したのであったが、自分たちだけ生き残ると、もはや、無駄な闘争を

する必要はない。

暗黙裡に、その気持が通じ合ったのである。

「船長、この者たちに、われわれが立去るのを黙って見送ってもらうための礼が、必要なようだ」

狂四郎が、云った。

「判って居るばい」

唐兵衛は、琉球人の一人に、近づくと、胴巻から、切餅四つ（百両）をとり出して、手渡した。

「隠密は、無縁仏になると相場がきまっているぜ。そこいらの、林の中に葬ってやって、蘇鉄のこやしにでもしてやるこったな」

唐兵衛は、こともなげに云いすてたことだった。

阿片百七十箱は、再び、無事に、橋舟へ積み込まれた。

「おかしら――」

水主の一人が、訊ねた。

「血なまぐせえこの一件のために、わしらが、島娘を抱くのは、棚上げですかい？」

「薩摩の隠密衆が、あれで全員だとは限らねえだろう」

「それァまァ、そうかも知れねえがよう……」

「清国まで、せんずりで我慢しろい」

四

こんどこそ、大和丸は、一路、清国めざして、三檣（しょう）の帆をふくらませた。

船底の片隅に、肱枕（ひじまくら）して横になっている狂四郎の傍（そば）へ、宝瓶宮黒人（ほうへいきゅうくろひと）が、寄って来た。

「眠さん、貴方（あなた）また、多勢の敵を斬（き）ったそうですね？」

「あんたは、もう一度、わたしの天宮図をつくるつもりか？」

「いいえ、つくりません。つくりませんが、わたくしの頭の中に、貴方の天宮図が、自然にうかんで来たのです。……貴方が、上陸している時、わたくしの頭の中に、突然、貴方の天宮図が描かれて、竜の頭（ドラゴンズ・ヘッド）が、天王星と、烈（はげ）しく矩（スクエア）しました。あっ、何か突発異変が起って、貴方が、刀を抜かなければならなくなった、と感じました」

「………」

「わたくし、確信が起りました。天蝎宮（スコオピオウ）の支配星（ルーラー）——冥府（めいふ）星は、絶対に、まちがいなく、天に存在している、と」

宝瓶宮は、つづけて、狂四郎に、熱意をこめた語気で、説明した。

こん後、狂四郎には、必ず、次のような運命が待っているに相違ない。

天王星と木星が合（コンジャンクション）する。その時、突然の異変が起って、狂四郎

の心理状況が一転するであろう。
次いで、天王星と土星が衝（オパジション）する。とたんに、狂四郎の生きるのをはばむ最大の障碍が、前に立ちふさがるであろう。
「そうして、その折、わたしの無頼の生涯が、終了する」
狂四郎は、横臥したなり、微動もせずに、ぼそりと応じた。
「貴方は、死にません。わたくしは、冥府星が、天に存在する、と確信した瞬間、同時に、貴方が、いかに不死身な人か、霊感をおぼえました」
「…………」
「これだけ、話したら、わたくしは、気がすみました。おやすみなさい」
宝瓶宮は、そう云いおいて、立去りかけたが、ふと思い出したように、
「胡蝶さんは、ほんとに不幸な女のひとです」
その一言をのこした。

同じ時刻――。
七草喜久左衛門は、艫にある船長の間で、唐兵衛と対座していた。
喜久左衛門は、江戸家老佐竹勘解由から受けた命令を、包まずに、唐兵衛に打明けていた。

「いま頃は、福建省厦門に在る水師提督に、わが秋田藩が、清朝へ貢物するゆえ、都の北京の使節として、この爺いのおもむくことを、伝達されて居るはずでござる。当藩が私鋳いたした清国一両銀で、米を購う儀、なんとしてでも、実現いたさねば相成らぬ。……お主は、この挙に、援助せぬ、とは、よも申されまいな？」

「この大和丸が、清国へやって来たのは、それが目的――と表向きの名目になっているんだから、勿論、手助けはしようばい」

「すると、阿片密売の儀は、お主の裁量で、われらと無関係に、極秘裡に、やってもらえるのじゃな？」

「そうはいかねえ。こっちは、エゲレスなんぞとは比較にならねえ安値で、良質の阿片を買ってもらわなけりゃならねえんだ。こいつは、危険な大仕事だ。……いいかね、横目の旦那、清国の異国交易は、戸部という、幕府で云えば勘定奉行所の免許を得ている〝行商〟十家が独占しているんだ。佐竹家の米買いは、この行商にたのまなけりゃならねえ。エゲレスやその他の国をさし置いて、この交易をやるには、袖の下が要る。つまり、阿片の密売よ。……北京の朝廷への貢物貢銀とは、関係ねえ取引だ。……となると、どうしても、この大和丸が、阿片を積んで来たことが、あちらさんには、判っちまうんだ。米買いと阿片密売とを、きりはなして、対手に知られねえようにすることは、まず不可能だぜ」

「それでは、厦門の水師提督が、われらを使節として、北京へおもむかせてはくれまい」

「べつに、使節として、北京へ行くことはあるめえ。米さえ買えりゃいいのじゃねえのか」

「わが藩は、これより毎年、清国から米を購う計画でござるぞ」

喜久左衛門は、唐兵衛を睨んだ。

「やれやれ――」

唐兵衛は、かぶりを振った。

「横目の旦那、この大和丸が、海賊船であることを忘れちゃ困りますぜ。こっちもまた、これから、毎年、阿片を、清国へ送り込もうという算段でいるんだ。……莫迦正直な交易なんざあ、夢想にすぎねえ。……米買い取引もまた、清朝政府の知らねえところでやる。そいつは、しかと念を押しておきますぜ」

唐兵衛は、きっぱりと云ってのけた。

喜久左衛門は、かえす言葉もなく、深い溜息をもらした。

暴風雨

一

ところで――。

一路、清国めざして、南支那海を渡って行く大和丸には、乗組員の頭数が、三十七人増えていた。

薩摩藩の島廻り目付・大久保靫負の配下として、大和丸に積む阿片を、奪取するために働かされようとしていた琉球人たちであった。

いずれも、十六七歳から二十三四歳までの若者たちであった。

大久保靫負以下、薩摩の隠密衆が一人残らず、斃れると、かれらは、逆に、船長唐兵衛に、

「味方として働かせて下され」

と、大和丸へ乗り組むことを乞うたのであった。

唐兵衛は、唐手術の手練者を三十七人も配下に加えるのは、大いに歓迎するところで

あったが、どの顔を看(み)ても、いま自分が従えている水主(かこ)たちが、疾(とう)のむかしに喪(うしな)った素朴で純粋な性根(しょうね)を現わしているのに、ひとつの感動をおぼえて、

「生きて再び還(かえ)れる望みは、まず、三分しかねえと思ってもらおう。それでも、乗るか？」

と、念を押したことだった。

三十七人は、即座に、黙って、うなずいたのである。

心ならずも服従し、その走狗(そうく)にされていた薩藩目付を、唐兵衛が殺してくれたことに、溜飲(りゅういん)を下げたこともあったろうし、また、自分たちだけが生き残ったことは、いずれ、薩摩にきこえるであろう、という懸念(けねん)もあったに相違ない。

いずれにせよ、かれらは、琉球に於(お)ける貧しい惨(みじ)めなくらしより、修練した唐手術を、同じ使うなら、異国の土地で、異邦人を敵とした方が、ましだったのである。

かれらは、寡黙(かもく)であり、水主たちと親しくなる融通性には欠けていたが、命令にはきわめて従順であり、仕事にいささかも骨身を惜しまなかった。

「おめえがたに、唐手をふるってもらう時は、こちとらが、大砲・鉄砲を撃ちつくしたあとということになるんだぜ。つまり、この大和丸が、海の底に沈んじまう時だァな。そいつを覚悟していてもらおう」

水主頭(がしら)——生首(なまくび)の甚十郎という刺青者(いれずみもの)から、そう云(い)われたが、いずれも、無表情で、

眉毛一本動かさなかった。

かれらは、唐兵衛から金比羅大権現の祠のある広間を与えられたが、降りようとせず、主檣のまわりに、ごろ寝をした。

雨が降った夜も、そこを動こうとせず、ずぶ濡れたまま、睡った。

かれらが、はじめて、表情を動かしたのは、朝陽がさしそめた頃合、宝瓶宮が、しのびやかに、胡蝶をともなって、現われた際であった。宝瓶宮は、胡蝶の健康保持のために、三日に一度は、小半刻、朝陽をあびさせていたのである。

琉球人たちは、船に若い女が乗っていることに、おどろいて、胡蝶を眺めたが、すぐに、視線をそらした。

「血気のあなたがたに、若い女子の姿を見せて、申しわけありませんが、許して下さい。この女は、船に乗っていないものと、忘れて下さい」

宝瓶宮から、頭を下げられて、三十七人は、胡蝶を見たことを詫びるように、深くお辞儀をかえした。

宝瓶宮は、かれらのつつましい態度を、唐兵衛に告げて、

「どうか、あの若い人たちを死なせないで下さい」

と、たのんだ。

「勝手に乗り込んで来たあいつらの運勢が、吉か凶か、そいつは、あんたが星占いして

やったらいいだろう」
唐兵衛の返辞は、そっけなかったが、若い逞しい琉球人たちを見る目は、たのもしいものとみとめていた。

二

石垣島を去って、三日目の深更——。
眠狂四郎は、宝瓶宮から、そっと呼び起された。
「眠さん、明後日、大変なこと起ります」
「あんたの天宮図に、そう出たのか？」
船体のきしむ単調なひびきがあるばかりの、敷（船底）の片隅で、起き上った狂四郎は、板壁に凭りかかって、宝瓶宮の必死な顔つきへ、物倦げな視線をかえした。
「ちがいます。わたくしは、石垣島から乗った琉球人の中から、いちばん若い——十七歳の、気品のある顔をした若者から、生れた年月日と場所をきいて、その天宮図をつくってみたのです」
若者は、仲間たちから、親雲上と称ばれていた。
この先祖は、琉球王・尚円王統第十三代の尚敬王ということであった。尚敬王が側妾に生ませた子が、親雲上になり、若者は、その孫にあたっていた。

琉球の階級制度は、まことにきびしいものがあった。

国王・王子（国王の兄弟、叔父など、老年になっても王子と称された）及び按司（あんじ）（王子の子孫）は、すなわち、貴族であった。

士族は、八階級に分れていた。

親方（うえかた）、親雲上（ぺーちん）、里之子親雲上（さとぬしぺーちん）、築登之親雲上（ちくどんぺーちん）、里之子（さとぬし）、築登之（ちくどん）、子（しい）、仁屋（にやあ）。

この階級は、たとい一階級でもちがっていると、その差は、徳川家に於（お）ける旗本の、千石取りの御目見（おめみえ）と三十俵二人扶持（ぶち）の御家人ぐらいの差があった。

大和丸に乗り組んだ三十七人のうち、その若者・親雲上が、とび抜けて名門であり、他に、士族出身は最下級の仁屋（にやあ）が四人だけで、あとは、すべて、百姓であった。（ちなみに、その百姓すら、琉球では、なばあ、とか、ちらあ、とか、ぐじゃあ、とか、まちゃあ、と階級区別があった）

宝瓶宮が、琉球人たちに、誰か一人だけでよいから、その運勢を占わせて欲しい、と申し入れると、一同は、即座に、最年少の親雲上を、えらんだのであった。

「親雲上と称ばれている若者は、明後日、死ぬかも知れません」

宝瓶宮は、明言した。

「…………」

「オランダの軍艦が、長崎から追い着くか、清国の海賊と出会うか、それとも、大時化（おおしけ）

の圏内に入るか——どちらにしても、大騒動が起るでしょう」
「………」
狂四郎は、腕組みして、目蓋を閉じたなり、身じろぎもせずにいる。
「眠さん、わたくしは、もう一度、貴方の天宮図をつくりたくなりました。……みるのを止める、と約束したので、貴方に、もう一度、つくらせて下さい、とお願いします」
「ことわる!」
狂四郎の返辞は、きっぱりしたものであった。
「どうしても駄目ですか?」
「わたしが、明日のために今日を生きては居らぬ男であることは、黒人さん、お手前も、先刻ご承知だ。……明後日、何事が起ろうと、わたしの知ったことではない」
「眠さん、わたくしは、その時、貴方の立場が、とても苦しくなるような気がしてなりません。……だから、いまから、予知しておけば、貴方なりの、思慮のめぐらしかたができると思うのです」
「わたしは、これまで、おのれの生命を守るために、事前に手を打ったことは、ただの一度もない」
「貴方がそういう人であることは、よく判っています。判ってはいますが……。実は、貴方の働きで、もしや、あの親雲上という若者が、死なずにすむことができれば、と考

えたのです」

宝瓶宮黒人は、親雲上のすずしく冴えて、その純粋で素朴な心を、そのまま現わした眸子の光を、思い泛べ乍ら、云った。

「奇妙ではないか、宝瓶宮さん。あんたがつくる天宮図でみた人間の運勢は、たとえ予知できたとしても、凶からのがれたり、吉に変えることはできぬのではないのか？」

「そうです。しかし、あの親雲上は、生れた年月日は、判っていますが、その時刻だけは不明なのです。……だから、親雲上の身の上に、明後日、大凶が襲うのは、まちがいないことは、はっきりしていますが——そして、それは、死にむすびつく大凶なのですが——もしかすれば、死からまぬがれて、一命をとりとめることができるかも知れません。もちろん、本人も、死なぬように努力しなければなりませんが、第三者の強い助けが必要なのです」

宝瓶宮の真剣な言葉も、狂四郎の気分を転じさせることは叶わなかった。

「自らすすんで、この船に乗り組んで来たのが、死へ急ぐ道筋であるのなら、やむを得まい」

三

宝瓶宮黒人が、眠狂四郎に、そっと打明けた大凶の占いは、はやくも、次の日の宵、

一人の男によって、予想された。

皮肉にも、その予想を、最初に口にしたのは、親雲上(ぺーちん)と称ばれている十七歳の若者であった。

夕食を摂(と)り了(お)えた琉球人三十七人は、主檣(しゅしょう)のまわりに、黙然と屯(たむろ)していたが、そのうち、親雲上が、夜空を仰いで、

「明日の天候(おうちイき)は、ひどう変りそうら」

ぼそりと呟(つぶや)いた。

夜空は、一片の雲影もなく、無数の星屑(ほしくず)が、四方の水平線上から、頭上一杯にちらばって居り、風も丑寅(うしとら)の順風であった。

ただ、その風が、いささか強いといえば、強かった。

つられて、南の水平線へ、視線をこらした、海にくわしい一人が、

「そうじゃァら。時化になる。それも、ただの時化ではなさそうら」

と、云った。

すると、つづいて、一人が、

「明日は、八日日(ようかび)ゆえ、もの凄(すご)いやつが来るかも知れ申さァら」

と、云った。

八日日は、妖火日(ようかび)とも書く。旧暦八月八日のことであった。八月八日から十一日まで

は、琉球では、妖怪変化、魑魅魍魎が跳梁する四日間とされていて、各戸で小豆の入った強飯を、神仏や火の神に供え、魔除けの柴を、門にさすならわしであった。

「船長に、知らせよう」

一番年長の、支配格の仁屋が、船内に降りた。

唐津唐兵衛は、篷の一室で、伊佐兵衛と、酒を汲み交わしていた。

「なんだと?! 大時化が来るかも知れんと——?」

唐兵衛と伊佐兵衛は、いそいで、船上へ出た。

満天にきらめく星を見まわし、風の様子を測った唐兵衛は、ばかばかしげに、

「どこに、大時化の来る気配があるんだ?」

と、琉球人たちを、睨みまわした。

寡黙なかれらは、その予想を説明する言葉を持たなかった。いわば、南支那海という、一年のうち幾度も大時化の襲って来る大海原を、薩摩藩の抜荷船で乗りまわした者の、一種の霊感ともいえた。

「おのれら、急に、琉球へ戻りとうなって、わしらをたぶらかそうというのか?」

伊佐兵衛は、呶鳴った。

その折——。

「船長に訊ねるが、お主、この南支那海で、一度でも、大時化をくらったことがあるの

か？」

暗い場所から、その問いがなされた。

いつの間にか現われていた狂四郎の痩軀長身が、影となって、佇立していた。

「あいにく、時化の季節は、避けたでのう。しかし、時化をくらったことは、二度や三度ではない。……時化が来る時は、必ずその前ぶれが、雲行きに示されて居るわい」

「それは、お主の経験した時化が、瀬戸内海だからであろう」

そう云われて、唐兵衛は、ぐっと、返答につまった。

狂四郎の指摘した通りであった。

実は――。

唐津唐兵衛――本名米倉新八郎は、瀬戸内海の塩飽諸島二十八島を支配した海賊の末裔であった。

塩飽諸島は、千年の歴史を有つ海賊の根拠地であった。

米倉新八郎の先祖は、織田信長から朱印状を貰って船方となり、代々、公儀も黙許する海賊稼業をつづけて来たのである。

水野家が唐津城主になるにあたって、塩飽諸島の船方、米倉新左衛門が、乞われて、唐津藩の船奉行の手代になった。新八郎は、その三代目であった。

だからこそ、十八年前、移封反対の一揆が起った際、主謀者たる米倉新八郎は、磔刑

になる代りに、武部仙十郎から、
「海賊になれ」
と、命じられたのであった。
海賊の末裔が、海賊になっただけのことであった。
狂四郎は、伊佐兵衛に向って、
「お主は、どうだ？」
と、訊ねた。
「おれも、塩飽の人名（にんみょう）の出だからのう、瀬戸内の時化なら、くさるほどくらって居るが……」
伊佐兵衛の返辞も、いささかたよりなかった。
「ならば……この琉球の若者たちの予告を信じた方がよさそうだ。大時化が襲って来たならば、これを乗りきるためには、唐兵衛殿、お主は、一時、船長の地位を、この者たちの一人にゆずるがいい」

四

親雲上が予想した南支那海の天候（おうちイき）は、確実に、翌朝から、変った。
風の強さが増すとともに、荒海となった。

千五百石積みの大和丸が、うねりあげて来る巨(おお)きな波浪に、翻弄(ほんろう)されはじめた。

「帆を下げろい！」

唐兵衛の下知(げち)で、水主(かこ)たちは、三つの檣(ほばしら)へ奔(はし)って、綱をひっぱった。

前帆と後帆は、するすると下ろされたが、どうした加減か、肝心の主檣の帆だけが、下りなかった。

主檣の帆は、真っ向から吹きつけて来る逆風をはらんで、船首の向きを変えさせた。

波浪がさらに巨大なものとなって、船の胴体へ襲いかかって来れば、転覆の危険にさらされる。

唐兵衛はじめ、水主たちが、喚(わめ)きたて、念仏を唱えつつ、死にもの狂いになって、帆を下ろそうとしたが、叶(かな)わなかった。

烈風は、雨をまじえて、吹きつのる。

「この様子じゃ、風速は、倍になるぞっ！」

唐兵衛が、呶鳴り、

「なんとかしてくれえっ、お伊勢様ようっ！」

と、伊佐兵衛が、絶望の声をあげた。

その折——。

主檣に、ぱっととりついて、登りはじめた者があった。

親雲上であった。

琉球団の支配格の最年長の仁屋が、馳せ寄って、

「親雲上っ！　わしが代る！　降りて下さなァらっ！」

と、絶叫した時には、もう、親雲上は、手のとどかぬ高処にいた。

船上に在る全員が、その持場で、固唾をのんで、親雲上の決死の作業を、見まもった。

親雲上が、その頂まで登りつめた時、船は、凄まじく吹きつのって来た風雨に対して、胴体をさらして傾き、その胴体へ巨浪をもろにかぶる最悪の状況になった。

大和丸は、すでに、艫にとりつけた偽装の遮浪装置と取りはずし式の舵を棄てさっていたが、これは後面からの波浪に対する身軽さになっているだけのことを意味していた。

横風帆走は、海面がおだやかな場合だけであり、このような颱風をくらっては、帆が障碍となるのは、云わずと知れていた。

主檣の帆を下ろして、はじめて、四翅の螺旋式推進器で、巨浪を乗りきることができるのであった。

親雲上が、主檣の頂に登りつめるのを仰いで、水主たちは、焦躁裡に、綱を引けという合図を待った。

しかし――。

親雲上の合図は、綱を引け、というのではなく、帆を下ろすことは不可能だ、という

横へ大きく手を振る絶望のそれであった。

「そうか！　畜生め！　旗を立てる鎖が、帆に巻きつきやがったんだ！」

伊佐兵衛が、はじめて、それに気づいて、狂気したように、喚（わめ）きたてた。

清国へ至ったならば、主檣（しゅしょう）の頂に、日の丸の旗をひるがえすように、仕掛けてあった。その仕掛けの鎖が、帆綱にひっかかり、これを解くのは、おそらく長い時間を費やさなければならぬであろう。

「駄目だっ！　船は、ひっくりかえるぞっ！」

誰かが、悲鳴をほとばしらせ、その悲鳴が、一同を戦慄（せんりつ）させた。

煙浪（えんろう）を舞わす烈風は昏（くら）い無気味さで、小山のような駭浪（おおなみ）の音は高く、千五百石船をみじんに砕く悪魔といえた。

「来たぞっ！」

一同の視線が、彼方（かなた）にうねりをあげた、城の天守閣のような巨大な怒濤（どとう）へ、向けられた。

すでに、船は、大きく傾いているのであった。

——あいつをくらえば、ひとたまりもない！

唐兵衛が、観念して、目蓋を閉ざした——その時であった。

「おれが、やる！」

不意に、鋭く冴えた音声が、傍で発せられた。
唐兵衛は、主檣へ向って立ち、無想正宗を抜きはなった眠狂四郎の姿を、視た。
次の刹那――。
狂四郎は、無想正宗を振りかぶるやいなや、主檣へ、ななめに斬りつけた。
直径一尺の主檣は、高さ四尺ばかりのところを、両断されて、生きものの悲鳴のような音を、風雨の空へひびかせ乍ら倒れた。
そして、頂に親雲上をとりつかせたまま、荒れ狂う海へ落ちて行った。
一瞬の後、天守閣のような巨大な怒濤が、襲いかかって来たが、大和丸は、その高浪の上へ乗って、転覆をまぬがれることができた。
狂四郎は、烈風に打たれ、ずぶ濡れ乍ら、くらい眼眸を、荒浪の上に浮いてみるみる遠ざかる主檣へ、送っていた。
――おれは、宝瓶宮のたのみを裏切って、あの若者を、助けるのではなく、殺す役割をはたした！
親雲上の首は、しばらく、おぼろげに、幽く、浮き沈んでいるのが、みとめられたが、やがて、怒濤の中へ呑み込まれた。

清国

一

夜が明けた。
雨もやみ、風速もおとろえていたが、巨大なうねりにもてあそばれる大和丸は、方角を見失っていた。
四翅の螺旋式推進器が、毀れたのである。夜明け前、烈風が、突如として戌亥（北西）に変って、船が、非常な勢いで、あとへあとへと吹きもどされるのに、楫取りが抵抗したのが、仇となったのである。
いま——夜が明けて、強い風は、丑寅（北東）に変っていたが、主檣を喪った大和丸は、大海原を木の葉のようにもまれるにまかせなければならなかった。
蓬々として吹きまくる強風の彼方に、縹渺たる水平線が、天と合しているばかりで、島影はひとつもみとめられなかった。
空はなお、灰色の雲に厚く掩われて居り、陽の昇る時刻を教えるのを拒否していた。

こうした場合、普通の廻米船などは、紙闔をもって、伊勢大神宮に、はたして、船が難破するか、無事に遁れられるかどうか、神勅を伺うのを、ならわしとした。

紙闔をとるのは、一寸四方に切った紙に、全員がそれぞれ祈ることを書きつけて丸め、一升ますの上に置き、伊勢大神宮を念じて、一万度の御祓を、その上にかざす。すると、まるめた紙のひとつが、とびあがって、御祓へくっつく、といわれていた。

しかし——。

この大和丸に於ける限り、そんな迷信行事を、云い出す者は一人もいなかった。

伊勢大神宮の祠は、金比羅大権現のそれとともに、船内に設けられていたが、そして、その前に坐って、祈る者は数人いたが、紙闔取りなどを、念頭に置いてはいなかった。

一人の女を欲して、金比羅大権現の前で、籤を引いた水主たちは、天佑を念じても、神命にしたがう行事をするような迷信家ではなかった。かれらは、倭寇の伝統を継いだ海賊であった。死をおそれぬ強靭な神経の持主ぞろいであった。

「荒れてえのなら、荒れてえだけ荒れやがれ！」

烈風強雨が最高潮のさなか、水主頭、生首の甚十郎が、怒濤へ向って絶叫した——その度胸が、大半の水主の肚にすわっていたのである。

七草喜久左衛門も郡参平も、眠狂四郎も時雨左馬之助も、この遭難に対して、平然たる無言を守ったし、大時化を予言した宝瓶宮黒人は、船酔いして半死のていになった

胡蝶(こちょう)の看護に、専念していた。

そして、琉球人(りゅうきゅう)三十六名もまた、遭うべき天災に遭(お)うた、と予(あらかじ)め覚悟していたごとく、無表情で、水主頭の指示にしたがって、黙々と働いた。

やがて――。

正午になって、強風は去った。暗雲も消えて、抜けるような碧落(あおぞら)となった。

ただ、浪(なみ)だけが、高く、白い波頭が、牙(きば)のように、襲いかかって来た。

その波濤も、黄昏(たそがれ)近くになって、ゆるやかなうねりに代った。

その頃合、艫(とも)から、奇蹟(きせき)を視(み)た狂喜の叫びがあがった。

「主檣だあっ！　主檣が、ついて来たぞっ！」

その叫びをきいて、水主も琉球人も、すべての者が、艫(とも)へ奔(はし)った。

海流に順(したが)ったままであろうが、それでも、うねりの山ひとつの後方に、眠狂四郎が両断した主檣が、ただようているのを見出(みいだ)すと、母船を慕(しと)うて泳ぎついて来た生きもののように、思われた。

「親雲上(ぺーちん)っ！」

琉球人たちは、一斉に、呼んだ。

しかし、主檣に、人間はとりついてはいなかった。

その場に坐って、合掌した琉球人たちの顔が、はじめて激しい感情をあふれさせて、

頬に泪をつたわせた。

「主檣を、曳き上げろい！　元のところに、おっ立ててくれようぞ！」

船長唐兵衛の高声が、ひびきわたった。

おおっ！

打てば響くように、総員が応えた。

二

その夜のうちに、主檣は、船上へ曳きあげられた。

曳きあげるために、二十数人の琉球人が五艘の橋舟に乗って、うねりの山に闘いを挑んだ。そのうち、二艘が転覆し、五人が行方不明となった。

杭となって残っている方と、曳きあげられた方の切断面に、穴があけられ、これに鉄棒をさし込んで立てる、という方法がとられた。

前檣と後檣に、水主が数人ずつ、よじのぼって、懸声を交わして、綱をひっぱり、主檣を立てて、鉄棒を芯としてはめ込み、切断面が、ぴたりと合わせられ、さらに、その部分へ、厚板を釘打ちして、固定させた時には、夜は明けはなたれ、水平線上に、真紅の太陽が、顔をのぞけていた。

「やったぞ！」

戻って来た主檣が、帆に順風をはらむや、仰ぐ者たちの双眼が、潤んだ。
「親雲上の霊魂が、我らを救うたなァら」
琉球人の一人が、ひくく呟くように云い、仲間たちは、うなずいた。
唐兵衛は、とって置きのうまい酒を、六人が欠けた琉球人たちに、ふるまい、その労をねぎらった。
おそらく、若い琉球人たちの必死の働きがなければ、主檣を船へ曳きあげるのを、あきらめなければならなかったに相違ない。
水主たちも、そのことを、みとめた。
朝食のために、船上に人影がなくなった時、狂四郎が、出て来て、船首に立った。
海原は、なごりなく凪いでいた。
狂四郎は、主檣の頂に、白鳥が一羽、飛んで来て、とまるのをみとめた。
賄方の宝瓶宮が、時雨左馬之助から、狂四郎が船上へ出ていったことをきいて、追って来た。
「眠さん、気分がさわやかでしょう」
「…………」
「貴方の働きで、船は、転覆するのをまぬがれました。両断したその主檣が、こうして、再び立っています」

「琉球の若者どものおかげだ」
「その琉球の若者たちを、この船に乗り込ませるきっかけを、貴方、つくりました。薩摩藩のさむらいたちを、貴方が、一人残らず、斬ったからです」
「…………」
狂四郎の双眸は、主檣の頂にとまった白鳥にあてられて、まばたきもせぬ。
「貴方が、乗り組んでいる限り、大和丸は、艱難を突破するでしょう」
「わたしが乗り組んだために、大時化が襲って来た、と逆の考えもできる」
「貴方は、そうして、いつも、孤独な心で、自分をいじめていますね」
「生れついてのひねくれた根性だ、と思って頂こう」
そう云い乍ら、狂四郎は、主檣の頂から、ぱっと飛び立つ白鳥の行方を、見送った。
狂四郎の心中は、ただうつろであり、飛び去る白鳥に対して、べつに、なんの感慨もわいてはいなかった。

三

船内に於ては――。
七草喜久左衛門と郡参平が、熱心に、宝瓶宮黒人から、清国のことをきいていた。
黒人は、隣邦の人間であり乍ら、喜久左衛門も参平も、清国について、全く知識を持

たぬのに、あきれて、まず、清朝の歴史から、くわしく、語ってきかせていた。
清の皇帝は、漢民族ではなく、満洲の愛親覚羅氏であった。現在の皇帝は、八代目で道光帝（宣宗）、たしか今年で五十歳になっていた。
太祖を弩爾哈赤といい、長白山下から起って、満洲諸部を伐ちしたがえて、国号を後金と称え、やがて、明軍を撃破して、都を瀋陽（奉天）にさだめた。
嗣いで二代皇帝となった太宗は、遠攻近伐、大いに領域をひろめ、国号を清とあらため、将軍李自成に、明の首都北京を陥落させ、明朝十七代毅宗（崇禎帝）を自殺せしめた。順治元年（一六四四年）のことである。
「日本でいえば、寛永二十年――いや、ちがいました。その次の年、正保元年です。三代将軍の時代です」
黒い異邦人から、そう云われて、喜久左衛門は、おのが無知識にいかにも面目なさそうに、「はあ、左様でござるか」と、うなずいた。
「清朝は、代々立派な皇帝が、あと継ぎしました。特に、四代目の聖祖（康熙帝）、五代目の世宗（雍正帝）、六代目の高宗（乾隆帝）、みんな知能が秀れていました。なかでも、六代目の乾隆帝は、在位六十年、清朝を最もさかんにしました。蒙古も高砂（台湾）も征服し、天山南路を平定して、国威を遠くヨーロッパまで鳴りひびかせました。暹羅も安南も、貢物しました」

乾隆帝は、それだけではなく、四庫全書八万巻を出版させた文人でもあった。

このように、清朝が、代々立派な皇帝を出したのは、長男相続というならわしが、満洲族にはなかったからである。

四代康熙帝は、若くして世を去った世祖（順治帝）の三男であったし、その康熙帝のあとを襲った世宗（雍正帝）は、その四男であった。そしてまた、雍正帝のあとを継いだ宝親王は、同じく四男で、乾隆帝となり、清朝をして、最もさかえさせたのである。

皇帝は、在位中は、皇太子を置かなかった。たくさんの皇子のうちから、これぞと見込んだ俊才を、ひそかに後継ぎにきめても、これを公表せず、密かにしたためた遺言書を、正大光明殿の玉座の背後にかけられた『正大光明』の扁額のうしろに、かくしておいたのである。

皇帝が逝くと、その遺言書が披かれ、はじめて、皇子のうち誰が継承するか明白となるのであった。

したがって、代々の皇帝は、見事な政事を為した。

六代乾隆帝が即位した頃は、内廷の金蔵は、数千万両もの金銀、特に白銀が、満ちていた。

尤も、満洲族が皇帝である以上、漢民族との間に、目に見えぬ相剋があったに相違ない。しかし、それは、史書から、抹殺されている。

三代の世祖（順治帝）は、七歳の幼さで皇位に即き、二十四歳で崩じたが、満漢の官民の和親を欲して、両族の通婚をゆるし、漢民族の娘で妃嬪たらんとする娘は、一応満洲旗族の養女となる婚姻制度をさだめた。

清朝は、どうしたことか、幼くして皇帝となる者が多かった。四代の康熙帝も、九歳で即位した。但し、康熙帝は、在位六十年であった。次の五代の雍正帝は、そのために帝位に即いた時には、すでに四十六歳であった。雍正帝は、在位十三年で逝った。

そして、清朝の最盛期をもたらした六代乾隆帝も、七歳で皇帝となったが、治世は康熙帝と同じく六十年の長期に及んだ。

七代仁宗（嘉慶帝）は、乾隆帝の十五番目の子であった。この仁宗は、凡庸な男であった。乾隆帝が嗣子として、遺詔に親書した俊才次男の永璉も、次にえらんだ七男の永琮も、若死してしまったからである。

しかし、七代嘉慶帝までは、父の偉業のおかげで、なんとか、平和を保つことができた。

「ところが、現在の八代道光帝になってから、いけなくなりました。役人は堕落して、賄賂ばかり取り、貧乏人の人口は増え、国境では、反乱が起り、天災が毎年つづきました。……そして、阿片を喫う悪癖が、上層階級から下層階級にいたるまで、まんえんしてしまいました」

宝瓶宮は、いたましげに、云った。

いつの間にか、眠狂四郎が、降りて来て、片隅で、無想正宗をかかえて、板壁に凭(よ)りかかり、黙って、きいていた。

「北京の宮城内の金蔵に、乾隆帝が満たした数千万両の白銀が、どんどん、阿片のために流れ出てしまっています。道光帝ご自身も、阿片を吸っているそうです。……物価ははねあがり、人民たちは、このさき、いったいどうなるのだろう、とおびえています。たぶん、道光帝は、阿片におかされて、政治をみる力を失ったのでしょう。そこをつけ込んで、イギリスは、毎年、阿片密輸入の額を増やしているのです。十年前は、五千箱ぐらいだったのが、一万箱になり、いまは、三万箱にもなっているでしょう。……清国は、三十年前までは、茶その他の大輸出国でした。いまは、超輸入国に転落して、漏銀――たくわえた銀が、めちゃめちゃに、国外へ流れ出てしまっているのです。……阿片が、清国を滅ぼします」

「…………」

喜久左衛門も参平も、固唾(かたず)をのんで、宝瓶宮を、見まもっている。

「康熙帝、雍正帝、乾隆帝――三代の英主が、つくりあげた清国は、いま、阿片という毒薬のために、滅びようとしています」

宝瓶宮の声音(こわね)は、熱気を帯びた。

その折――。

「よその国が、衰えようと滅びようと、わしらの知ったことじゃねえ」

船長唐兵衛の呶声が、板壁を通してひびいた。

「黒ン坊さんよ、その連中を、やたらに、たきつけねえでもらいてえね。この大和丸は、本丸老中様のお側用人さんからたのまれて、阿片でひともうけしに行く海賊船なんだぜ。おめえさんがたの正義というやつは、通用しねえことを、知っていてもらいてえやな」

その言葉をきいて、郡参平が、ちらと、喜久左衛門を、視やった。

――斬りましょうか？

喜久左衛門は、狂四郎をかえり視た。

狂四郎は、薄ら笑うと、ひくい声音で、

「唐兵衛を斬れば、水主全員と闘うことになる。たとい琉球人たちを味方につけても、清国まで辿りつくことはおぼつかぬ。……また、唐兵衛にたのまなければ、米を買い入れることは、たぶん、不可能だろう」

と、云った。

四

ぬっと入って来た唐兵衛は、郡参平の殺気をあび乍らも、平然として、

「さて――、清国の皇帝の歴史は、よく判った。黒ン坊さんよ、問題は、阿片を、どうやって、売りつけて、この大和丸が、しこたま、もうけるか、だ。そこんところを、お前さんの判断で、いちばん、成功率の高え方法は何か――きかせてもらいてえ」

と、もとめた。

「そのことです。秋田藩がつくった清国の銀で、米を買い、水野家のお側用人殿がつくった阿片を売りつける、最もいい方法を考えるには、清国の歴史を知っていなければならないのです。……おきかせしたように、清朝は、満洲族です。漢民族をしたがわせるのには、大変な苦労をしました。三代順治帝、四代康熙帝は、ともに英邁であったのに、漢民族を統治することは、大変困難でした。そうです、清朝は、漢民族に対して、弁髪と胡服を強制しました。あたまを弁髪にし、胡服を着なければ、死刑にする、とおどして、そうしました。それでも、康熙帝は、晩年にいたって、『五十年の治政を為したが、ついに、漢人を心服させることはできなかった』となげいています。六代の乾隆帝は、満洲族を〝天の選民〟である、と云って、漢民族が、なんでもかでも、外国を夷狄だと見下した法度を撤廃しましたが、どうしても、漢民族の華夷思想を消すことはできませんでした」

「つまり、いままでも、清国の野郎どもは、わしら日本人を、夷狄だと見下している、というわけだな？」

「そうです。イギリスその他の外国に、広州に貿易館をつくらせていますが、清朝では、貿易とは思っていないのです、進貢と云っています」
「云いかたがちがうだけじゃねえか」
「そうです、実際には、貿易です。しかし、こういう点に、満洲族である清朝が、二百年も統治し乍ら、漢民族の華夷思想を消すことができない証拠が示されています。いまでも、漢人は、かげでは、満洲族を、韃虜と呼んでいます。軽蔑と憎しみをこめた言葉です。だから、事実は、漢民族の考えかたで、すべてのこと——政治も生活も行われているのです。清国は、乾隆帝の云ったように、〝天朝〟で、自分と同じように肩をならべる国は、ほかにいないのです。イギリスもロシヤもフランスもアメリカもオランダも日本も、まわりの国は、東夷、南蛮、西戎、北狄なのです。対等に外交したりはしないのです。……そういう〝天朝〟と、米の取引をするのは、むつかしいです」
「だから、闇取引をするしかねえのさ」
「その闇取引も、満洲族と漢民族とのあいだの、目に見えない憎しみあいを、看きわめてやらなければ、絶対に成功しません」
そう述べられて、唐兵衛は、七草老人を、じろりと視やった。
「佐竹の横目殿、おめえさんが、江戸家老から下知を受けた、清国と取引する方法は、先日、きかされたが、ここで、あらためてご一同の前で、ちゃんと説明して頂きやしょ

うばい」
「この船が、阿片を積んで居る上からは、当家江戸家老の計画は、おそらく、水の泡になり申そう」
喜久左衛門は、投げ出すように云った。
「つまり、長崎の唐人屋敷の官商を仲立ちにして、厦門の偉え役人にわたりをつけるのは、のぞみがねえ、というわけですかい」
「阿片の密売をやる目的を第一とするからには、福建省の水師提督が、われらに、北京へ使節として、往くことを許してくれるはずがござるまい」
「世界中、どこへ行っても、地獄の沙汰も金次第というぜ」
「身共がきくところでは、厦門の水師提督——陳化成殿は、清廉高潔の将軍ときき及んで居り申すぞ」
喜久左衛門は、唐兵衛を睨みかえした。
清国の水師提督陳化成は、海壇、金門、南澳、台湾四鎮を掌握し、福建省の海域に於て、軍船三百余艘、兵二万余人を率いている、ということであった。
陳化成は、もう五十半ばすぎているが、二十八歳で『把総』（尉官）になって以来、四百余の海賊船を、撃ち沈めた、ときく。
「水師提督が、清廉高潔かどうか知らねえが、実際に商いをやるのは、行商という奴ら

よ。行商は〝公行(コンホン)〟という組合をつくっていて、十軒ある。その一軒ぐれえ、賄賂でおとすのは、さまでの苦労はいらねえと思うぜ。公行が、首を横に振りやがったら、他にいくらでも豪商がいまさあ。なにしろ、おめえさんは、贋(にせ)とはいえ、本物よりも純度の高え清国一両銀を、ごまんと持っている強味があるんだ。闇取引成功の確率は、高えという話よ」

「いや、それがしの予感では、阿片を海へ棄(す)てぬ限り、当大和丸は、帰国は絶対に叶(かな)わぬ、と存ずる」

喜久左衛門は、きっぱりと云いきった。

快鞋船(クワイシエ)

一

清(しん)の道光十四年（天保五年・西暦一八三四年）九月はじめ――。

主檣(しゅしょう)の頂に、日の丸の旗をひるがえした大和丸は、清国・福建省の沖あいを、南下していた。

宝瓶宮黒人(ほうへいきゅうくろひと)が、舷側(げんそく)に佇立(ちょりつ)して、沿岸の風景を、じっと眺めやっていた。

福建の沿岸には、樹木は一本もなかった。黒褐色の岩肌をむき出した島嶼(とうしょ)が、無数に断続しているばかりであった。

島嶼を噛(か)む浪(なみ)がしらの白さだけが、鮮やかで、大陸のあいだは、油を流したように、ねっとりと重くよどんでいた。

七草喜久左衛門が、傍へ寄って来て、日本には見られぬ亜熱帯のむさい景色へ向って、眉間(みけん)に皺(しわ)を寄せ目蓋(まぶた)をほそめ乍(なが)ら、

「もう、そろそろ、厦門(アモイ)に到着する頃ではござるまいか？」

と、訊ねた。

宝瓶宮は、ちょっとためらっていたが、

「厦門は、昨日、通りすぎました」

と、こたえた。

「なんと申される？」

喜久左衛門は、表情を変えて、宝瓶宮の横顔を、視やった。

「昨日の午後、……そうです、日本の公卿がかぶる折り烏帽子のようなかたちの島の沖を通りました。金門島という島で、厦門の港の入口です。わたくしは、金門島を眺めて、船長は、厦門を通りすぎることを知りました」

「では、いったい、どこへ参るのでござろうか？」

「さあ？」

「見当ぐらいは、お手前には、つくのでござろうがな」

「まっすぐに、澳門から広州へ行こうとすれば、清国の海賊に襲われる危険があります。……船長は、もしかすれば、南澳に船を着けるつもりかも知れません」

宝瓶宮からそう云われて、喜久左衛門は、いそいで、懐中から、地図をとり出して、ひろげてみた。江戸家老佐竹勘解由が、長崎の唐人屋敷の官商からもらった地図なので、かなりくわしく地名が記されていた。

「南澳は、ここです。厦門と澳門のちょうど中間にあたります。……阿片(あへん)の大半は、澳門の伶仃島(リンテイシ)でされますが、時には、危険を冒して、南澳で、行われます。南澳の役人は、阿片船から、賄賂をたくさん取るのをあたりまえにしているのです。ただ、澳門から北上すると、南澳までの沿岸一帯は、海賊がわがもの顔で横行していて、とても危険なのです」

宝瓶宮は、地図を指さして、南澳から澳門までの沿岸にある海門湾、甲子湾、碣石(けっせき)湾、紅海湾、大亜湾、大鵬(たいほう)湾を教え、これらの湾には、清国の海軍鎮守府でさえ、手のつけられぬ兇暴(きょうぼう)な海賊が、巣くっていて、

「清国の兵船よりも、おそろしい連中なのです。……だから、船長は、澳門へは行かず、南澳で、阿片を売る肚(はら)でいるのではないでしょうか」

北上するイギリス商船にとっては、非常に危険だが、それだけに、澳門の伶仃島渡しよりも、南澳渡しの方が、はるかに阿片が高く売れる。しかし、南下する大和丸にとっては、反対に、広州へ行くよりも、南澳で取引する方が、危険がすくない、ということになる。

但(ただ)し――。

危険を冒して、北上して来たイギリスの阿片船が、南澳にいれば、日本からやって来た海賊船に、黙って取引させるはずはなく、海戦となるのは、目に見えている。

「もし、イギリスの阿片船がいなくても、南澳を警備している軍人たちは、当然、日本から来た阿片船ならば、足もとにつけ込んで、大変多額の賄賂を要求するでしょうから、船長は、あるいは、まっすぐに、澳門へくだって、広州に入り、公行（コンホン）の商人と取引する決心をしているとも考えられます」

しかし、この場合、沿岸各湾の海賊の襲撃を受けることなく、無事に、澳門へ至り、そこから、清国唯一（ゆいいつ）の対外貿易場所である広州へ入ることができたとしても、大和丸が、ぶっつかる難関があった。

阿片の取引は、広州の十三行街の外国夷館でされるのだが、その荷渡しは、澳門の伶仃島に恒久的に据えられた巨大な奇型の船（清国人は、これを、『躉船（とんせん）』と称（しょ）びならわしている）で行われるのであった。

日本は、もとより、広州に、夷館をかまえてはいない。したがって、取引するには、どうすればよいのか？　その方法を、船長の唐兵衛は、ちゃんと思案しているのかどうか？

「もしかすれば、水野家の武部仙十郎というご老人は、オランダ館を借りて、取引するように、手筈（てはず）をととのえているのかも知れません。そうです。長崎出島のオランダ商館の館長に話をつけて、そうするのでしょう」

宝瓶宮は、自分に合点してみせた。

二

秋田藩の老横目は、皮膚が灼(や)けて剝(は)がれそうな炎暑に堪え乍(なが)ら、宝瓶宮に問うた。
「阿片と申すものは、どれほど、大きな利益があるのでござろうか？」
「イギリスが、清国へ売るインド阿片は、三種類あります。ベンガル産の公班土(コンパントウ)。これが最上等です。次がボンベイ産の白皮土(パイピイ)。それからマドラスからはこばれる紅皮土(ファンピイ)。
……最上等の公班土が、スペイン・ドルで、百斤一箱八百ドル、白皮土が六百ドル、紅皮土が四百ドル、というところです」
「ドルと申されても、換算の知識がござらぬ」
「一ドルは、銀で、重量およそ八銭と思って下さい。清国一両は、十銭です。一両は、銀一千文という相場です。貧しい人たちは、一日五十文ぐらいでくらしていますから、銀一両は大金です。日本と同じです。……いいですか、一両が十銭、一ドルが八銭、といえば、阿片(あへん)一箱がどれくらい高く売れるか、おわかりでしょう。この大和丸に積んであるのは、公班土よりすこし劣りますが、白皮土より良質です。だから、正式に取引すれば、一箱七百ドルで売れます。けれども、それでは、清国商人は、ずるくて、買ってくれないだろうから、武部仙十郎殿は、思いきって三百ドル程度に値下げして売ることにしているようです」

宝瓶宮の説明をききつつ、喜久左衛門は、百七十箱の阿片の売りあげ高を、みつもった。

——かりに一ドルを一両として、一箱三百両、百七十箱で銀五万一千両！

——わが秋田藩が、五年間、必死になって、公儀に内密にして鋳造した一両銀が一千五百七十余貫。（註。一貫は千文）つまり、阿片百七十箱の三十分の一にも満たぬのだ。

喜久左衛門は、深い溜息をついた。

大和丸は、南澳で阿片を売ることをしなかった。南澎列島の沖あいを、まっすぐに南下した。

宝瓶宮の予想は、あたった。

唐津唐兵衛は、大亜湾や大鵬湾の兇暴な海賊の襲撃を、覚悟の上で、澳門をめざしたのである。すなわち、武部仙十郎が樹てた、長崎出島のオランダ商館を介し、広州のオランダ館を借りて、堂々と阿片取引をする計画を、実行しようとしたのである。

「さァて、これから、いよいよ、大和丸の肝っ玉のみせどころになりますよ、眠の旦那——」

艫で、楫を握っていた庄吉が、すぐ前の舷に凭りかかっている狂四郎に云った。

狂四郎は、すでに、宝瓶宮から、南澳—澳門の間には、無数の海賊が待ち伏せている

ことをきいていたので、庄吉の云う意味が判った。
で——そのことにはふれず、
「お前は、まだ二十歳ときいたが、楫取りになっているところをみると、少年の頃から、海賊稼業に入っているとみえるな」
と、云った。
「わしは、日本で生れたのじゃねえんです。安南で生れて、育ちました。母親は安南人ですが、親爺の先祖は、大坂城で侍大将をつとめたさむらいで、安南で代々くらし乍ら、士道の吟味というやつを忘れぬように、仕込まれて、わしまで受け継ぎました。先祖は、後藤田弥兵衛と申しました。わしも、弥兵衛という名を継いで居りますが、海賊船の水主じゃ、後藤田弥兵衛という名がけがれるので、庄吉と名のって居るんでさあ」
「…………」
「安南で日本人町をつくった浪士たちは、立派だったときいて居ります。わしの先祖でも、二代目の弥兵衛は、殊のほか、度胸がすわっていた男じゃったそうです」
庄吉は、問わず語りに、おのが先祖のことを、狂四郎にきかせた。
明末の儒者であり志士であった朱之瑜（舜水）は、追われていったんは、日本の長崎へのがれて来たが、長崎では、明朝再興の地の利を得ないので、安南に渡り、フェホの日本人町に入り、後藤田弥兵衛の食客となった。

安南国王は、碩学朱之瑜の高名をきき知っていたので、一日、宮殿へ招いた。
朱舜水は、弥兵衛を護衛者として、参内した。
階下の白砂上に直立して、国王出御を迎えたが、朱舜水は、頭を下げようとしなかった。
招いておき乍ら、賓客の礼を執らず、殿上にのぼらせようとしない冷遇に対して、朱舜水は、つむじを曲げたのである。
もともと、安南王国は、明の属領にひとしい立場にあったし、その時は、安南国王の態度は、清に屈服する様子であったので、朱舜水が、昂然として頭をあげていたのは、当然であった。
宮臣が、なんと言葉をかけても、朱舜水は、木像のごとく突っ立ったなり、一言も応えようとしなかった。
たまりかねた宮臣の一人が、白砂上に、
『礼』
と、一文字を記した。
すると、朱舜水は、沓さきで、『礼』の上へ『不』と書いておいて、くるりと踵をまわし、さっさと退出して行った。
宮臣たちは、激怒したが、朱舜水の護衛役をつとめているのが、日本人町随一の豪の

者ときこえた後藤田弥兵衛であるため、逮捕できなかった。

日本人町の面々を怒らせたならば、安南国王の宮殿は、一日で蹂躙（ふみにじ）られるのは明白であった。三千余の日本の浪士群は、それほど、威力を有（も）ち、おそれられていたのである。

安南国王は、あらためて、正式に使者をたてて、朱舜水に、仕えるようにすすめて来た。

朱舜水は、はねつけた。

安南宮廷の高官の一人が、一計を案じた。

弥兵衛の隣りの家——安南人の家の二階の廊下へ、罪人を曳（ひ）きあげると、

「国王の命令に背く者は、斯（か）くの通りだ。見よ、朱之瑜！」

と叫びたてて、首斬（き）り役人に、首を刎（は）ねさせた。そして、それを、毎日つづけた。

流石（さすが）の朱舜水も、当惑して、日本人町に迷惑をかけてはならぬ、と考え、再び日本へ遁（のが）れることにした。

後藤田弥兵衛以下日本人たちは、朱舜水を日本へ落してやる手筈（てはず）をととのえた。

安南官吏が、それを探知し、日本へ向けて出帆しようとする便船へ、朱舜水が、こっそり乗り込もうとしたところを、数百の兵が襲ってきた。

「ござんなれ！」

波止場では、後藤田弥兵衛が指揮をとって、百余の日本浪士が、一斉に、太刀を抜き

はなって、身構えた。

流血の惨事は、しかし、起らなかった。安南兵たちが、怯(おび)えて、そのまま、退散したからである。

万治二年（一六五九年）朱舜水は、日本に帰化し、それから、三年後、明は滅亡したのであった。

三

「安南には、もはや、日本人町はないのか？」

狂四郎が、訊ねた。

「いや、まだ残って居(お)りますが、頭数はせいぜい百二三十人で、その大半は、もう日本のさむらいの気概なんぞ持っちゃいねえんでさあ。町のうしろの岩山にならんでいる墓の下で、ご先祖がたは、腑甲斐(ふがい)ねえ子孫を、どんなにくやしがっていることやら」

庄吉が吐き出した——その折。

狂四郎の視線が、艫(とも)へ向って、漕(こ)ぎすすめられて来る一艘(そう)の船を、みとめた。

——ただの船ではないな。

狂四郎の視線を、追って、頭をめぐらした庄吉が、

「あれは、ただの戎克(ジャンク)じゃねえ。快鞋船(クワイシエ)らしいぞ」

と、叫んだ。
快鞋船というのは、快い鞋をはいた船という意味であり、左右に二十五挺ずつの櫓をそなえ、百人以上が乗り組むことができる快速船であった。
阿片の密売船であり、清国の兵船の追跡をふりきって逃げきるべく、造られていた。
阿片の密輸商人が所有している船であったが、
「あの大きな冲風旗と定風旗をひるがえしているところをみると、南澳鎮が、阿片商人から取りあげた兵船かも知れねえ」
と、庄吉は、首をかしげた。
快鞋船は、みるみるうちに、大和丸に迫った。
庄吉に大声で呼ばれて、唐兵衛と伊左兵衛が、艫へ奔って来た。
快鞋船の舳先には、満洲八旗の軍衣をつけた把総（尉官）が、仁王立っていた。把総は、日本でいえば、足軽頭ぐらいの地位の武官である。
「どこの船だ？」
「日本だ」
「どこへ行く？」
「広州だ。日本の名産を売りに行くんだ」
庄吉が、歯切れのいい中国語で、こたえた。

「阿片を積んでいるのではないか？」
「日本では、阿片など、つくらねえ」
「船内をあらためるぞ」
武官は、叫んだ。
その時、宝瓶宮が、狂四郎の背後に来て、そっと、
「清国海軍は、決して、かりに、快い鞋を、拿捕しても、面子にかけて、兵船には絶対に使いません。焼きすてます。かれらは、海賊です」
と、ささやいた。
狂四郎は、いつの間にか脇に来た、時雨左馬之助を視た。
左馬之助は、うなずいて、隻手の人差指で、「むしろ」と宙に書いてみせた。
うなずいた狂四郎は、庄吉に、
「実は、阿片を積んでいる、と云え」
と、命じた。
唐兵衛が、あっとなって、
「冗談じゃねえ！　眠さん、あんた気でも狂ったのか？」
「お主は、わたしの兵法を信頼しているはずだ。あの海賊どもを片づけるには、策はひとつしかない」

快鞋船は、艫の真うしろに、ぴったりとくっついていた。右舷か左舷にやって来たのであれば、篷窓から、砲撃して、沈めることができるが、それが不可能であった。海賊どもを、上船させて、片づけなければならなかった。

庄吉が、狂四郎に命じられた通り、本当は阿片も積んでいる、と武官に伝えた。

「いくら積んでいる？」

「五百箱だ」

武官に化けた海賊の首領は、手下どもに、合図した。

六十人あまりの手下どもは、それぞれ、筵をかかえ、小銃を右手に携げて首領につづいて、乗船して来た。

その筵は、官憲の目をごまかすために、阿片を、木箱から包みかえるためのものであった。

「阿片を、ここへ運び上げろ」

海賊の首領は、唐兵衛に命じた。

その命令のおわらぬうちに、物蔭から、三十一人の琉球人が、文字通り飛鳥の迅さで、海賊の手下どもに、躍りかかった。

海賊の手下どもが、小銃を構えていたならば、むざと琉球拳法のえじきにはならなかったであろう。かれらは、左手に、阿片を包みかえる筵をかかえ、右手に小銃をつかん

でいた。
唐手術の速攻に対して、小銃を構えて射撃するいとまはなかった。
眠狂四郎自身は、海賊の首領へ向って、一直線に奔馳(ほんち)して、抜きつけの一閃(せん)を、脳天からあびせ、肋(あばら)まで斬り下げた。
その瞬時の攻撃に合わせて、時雨左馬之助は、琉球人たちに加勢して、手裏剣をはなったし、郡(こおり)参平は、快鞋船へ、跳躍して、そこに居残っていた七八人を、またたく間に、討ちはたした。

四

快鞋船を、船底へ穴を開けて沈めてから、唐兵衛は、狂四郎たちに向って、頭を下げた。
「あんたがたに働かせて、水主どもには、ただ見物させたのは、かしらとして面目ねえ。この次は、あんたがたに、見物人の側にまわってもらいますばい」
すると、宝瓶宮が、
「福建各湾の海賊は、あらゆる手段で、襲いかかって来ます。ただ一艘だけで、兵船に偽装して、襲って来るのは、まだ小ずるい方で、数十艘の戎克で、突進して来て包囲する海賊もいれば、この船よりも倍もある——イギリスやオランダから奪った商船をさら

に攻撃力を増す武装をして、大砲をあびせかけて来る凄い奴らもいます」
と、云った。
「いちかばちか、虎穴に入らずんば虎児を獲ずですばい」
「わたくしは、南澳へひきかえして、役人にどんなにたくさん賄賂を取られても、阿片を売った方がいいと思います。それから、厦門に行って、米を買うことにしては……」
「宝瓶宮さんよ、わしの計画を変えさせるのは、わしが討死してからにしてもらいやすぜ」
唐兵衛は、汗の噴いた坊主頭を、布で拭き乍ら、にやりとしてみせた。
そのむかし、檣上に、南無八幡大菩薩と大書した白旗をひるがえした八幡船――倭寇の勇猛ぶりを、唐兵衛は、この天保年間に、再び、中国人に示すことによって、清朝の皇帝の耳にまで入れてくれよう、という肚であった。
倭寇がいかにおそるべき存在か、イギリスにもオランダにもポルトガルにもアメリカにも、思い知らせれば、阿片の密輸を、毎年やってのけるのが、容易になるに相違ない。
つまり――。
唐兵衛は、広州に、日本館をつくってみせる、と武部仙十郎に高言して来たのであった。
日本館をつくるには、まず、倭寇の威力を発揮するのが、捷径である。

いかにも、倭寇の後裔をもって任ずる、盲人が瞎馬を疾駆させるに似たこの男の乗るかそるかの大博奕であった。

狂四郎は、その魁偉な面貌を見まもり乍ら、

――さすがの武部老人も、清国の兇暴な海賊の襲撃ぶりまでは、調べがゆきとどかなかった、とみえる。

と、胸裡で呟いた。

――おそらく、われわれが、生きて日本へ還ることのできる可能性は、千分の一の割合であろう。

忘れ草

一

海賊船大和丸が、清国（しん）へむかって密航して行って、またたく間に、一年余が過ぎた。

江戸に在って、その消息を、鶴首（かくしゅ）している人物が、二人いた。

老中水野忠邦の側用人（そばようにん）武部仙十郎と秋田藩佐竹家江戸家老佐竹勘解由（かげゆ）であった。

しかし——。

両者の耳には、大和丸が、はたして清国に於（おい）て、所期の目的をはたしたか、それとも失敗して、海の藻屑（もくず）と消えたか——全く、その消息は、入って来てはいなかった。

武部仙十郎は、長崎出島のオランダ商館へ、佐竹勘解由は、同じ長崎の唐人屋敷へ、幾度も、密使を遣わしていたが、徒労であった。

澳門（マカオ）からやって来たオランダ商船も、広州からやって来た官商も、大和丸に就いては、噂（うわさ）さえもきいていなかった。

ただ、武部仙十郎にも佐竹勘解由にも判（わか）ったことは、清国政府が、阿片（あへん）の密輸入のた

めに銀が、外国へ流出してしまう——すなわち、漏銀を防ぐために、イギリスの東インド会社の対清貿易独占権を取消し、広州官憲は、『封艙（フォンチャン）』を実行した、ということであった。

『封艙』とは、一切の輸出入を厳禁する、ということであった。

そのために——。

イギリス軍艦と清国砲台が、砲火をあびせあい、ついに、戦闘状態に入った、という。

——大和丸が帰って来る可能性は、文字通り万に一であろうが……？

武部仙十郎と佐竹勘解由は、ともに、ほんの一縷（いちる）の希望をつないで、待っていたのである。

日本では、前年にひきつづいて、飢饉（ききん）の悲惨がさらにひどくなっていた。

眠狂四郎が、去年、飄然（ひょうぜん）と現われた出羽・陸奥（むつ）は、その年も、ひきつづいて、大凶作に見舞われていた。南部盛岡では、十俵を納入しなければならぬ者が、わずか半俵しか収穫がなかった。一家がこぞって、逃散（ちょうさん）する家が、一日に百人を下らなかった。

六七月に入っても、雨は降らず、いたずらに冷気がつづき、人々はみな冬着をまとった。

老人、病人は、川や海へ身を投じて、自殺した。飢え死した十歳のわが子を食った父

親も出た。路傍に斃(たお)れた者は、犬に骨までしゃぶられた。
甲州・上州一円では、百姓一揆(いっき)が起った。甲州では、城内から鉄砲で撃ち殺された者が二百余に及んだ。
さすがに、江戸では、一揆は起らなかったが、当然、高騰(こうとう)した米価に苦しめられ、日傭人(ひようにん)や職人で、一家心中する者が、続出した。
幕府は、四方から流れ込んで来る餓民のために、筋違(すじかい)橋外や和泉(いずみ)橋外に、お救い小屋を設け、払い米一万石を、粥(かゆ)として与えたが、それでも足らず、町奉行所が、八万両を出して、廻米問屋から、むりやり市価よりひくく買い入れて、払い出した。にもかかわらず、大晦日(おおみそか)の夜は、柳原通りから筋違見附、浅草見附の土手には、数十人の餓死者が横たわっていた。

二

こうして、日本中は飢え苦しみ乍(なが)ら、天保七年の節季を迎えていた。
「うっ！　寒いや！」
品川の大木戸をくぐった男が、ぶるっと胴ぶるいした。
安南で勇名を馳(は)せた後藤田弥兵衛の末裔であり、大和丸の楫取(かじと)りをやっていた庄吉であった。

いつの間に、どこで、日本に辿り着いたものか、たった一人であった。水主姿に変りはなかった。素肌に素足の南方生れでは、寒気が、肌を刺した。

奇妙なもので、いかに飢えていても、江戸の町内では、煤払いを終えたこの頃は、あちらこちらから餅搗きの音をひびかせ、各町内では、辻に小屋を建てて、〆飾りを商い、正月を迎える準備で忙殺されていた。

「へえ、これが、江戸の年の瀬かい。ひどうあわただしいぜ。どだい、人間が多すぎて、どいつもこいつも、せかせかしすぎていらあ」

庄吉が、尋ね尋ねて、訪れたのは、浅草の蛇骨長屋であった。

「うかがいますが、金八さんの住居は、ここですかい?」

破れ格子戸の外から、庄吉は、案内を乞うた。

「誰でえ?」

昼酒をくらってごろごろしている物倦げな巾着切の声が、応じた。

「大和丸の楫取りをやっていた庄吉という者なんで……」

「なにをっ⁈」

はね起きた金八は、土間へ跳び降りて、格子戸をひき開けた。

汐焼けした若い顔を、金八は、睨みつけて、いきなり、

「おいっ! おれの親分――眠狂四郎は、どうしたい?」

と、嚙(か)みつくように、訊(たず)ねた。

庄吉は、微笑して、

「成程(なるほど)、江戸っ子というのは、気が短けえものだ」

「堪忍(かんにん)家督・短気は損気・辛抱は金ってえのは、商人(あきんど)のことよ。早糞(はやぐそ)、早飯、早指が、こちとらの特技だァな。……さあ、きかせろい、眠の旦那(だんな)は、どうなっちまったんだ？　この一年、寝ても醒(さ)めても、安否を気づかっていたんだぞ、こん畜生っ！」

「旦那は、生きておいでですよ」

「あたりきだあ。眠狂四郎が、この世からおさらばしてたまるけえ。……ちゃんと、日本へ帰って来たんだろうな？　え、おい、もうちゃんと、江戸へ帰って来ているんだろう？」

「いや、日本には、まだ帰って来てはいなさらねえ」

「なにをっ！」

金八は、いきなり、庄吉の胸ぐらをつかんだ。

「べらぼうめ！　楫取りのてめえが、のこのこ帰って来やがって、旦那が、戻って来ねえたァ、どういうわけだ。ふざけやがって——このくそったれ！」

「まあ、おちついてもらいてえな」

「これがおちついていられるけえ。旦那は、どこにいるんだ？　きかせろい！」

「わしにも、旦那が、いま頃、どこにいるんだか、わからねえんだ」
「てめえ、旦那が、どこにいるかわからねえことを、おれに報せに来やがったのか！」
「わしは、旦那と別れる際、ことづかりものをして来たんだ。……江戸の浅草の蛇骨長屋にいる金八という巾着切をたずねて行って、ご老中水野越州様の側用人さんの許へ、案内してもらえ、と命じられてね」
「…………」
金八は、顔をしかめた。
「おねげえします。案内してもらえませんかい？」
「旦那の命令とあれば、案内しねえわけには、いかねえが、ききてえことは、山ほどあるぜ」
「わしも、ご禁制を犯している海賊のはしくれなんでね。きかれても、返辞のできねえことがある」
「もったいぶるねえ。……おい、おれが、賄方の源次にたのんで、こっそり、大和丸へ乗せた胡蝶という女がいたろう。あの女は、どうしたい？」
「可哀そうに、清国へ着いた時、仏になりましたよ」
「なんだと？」
「どうやら、もともとからだが弱かったとみえて、大時化をくらって、半死半生になっ

たのを境にして、とうとう起き上ることができなかったのでさ」
「眠の旦那が、抱いて、息をひきとらせてやったんだろうな？」
「…………」
「おい、ありていにぬかせ、眠の旦那が、抱いて、見送ってやったのじゃねえのか？」
「それが……、真夜中に、賄室からぬすみ出した庖丁で、のどを突いて――」
「げっ！　なんてえこったい！」
金八は、暗然となって、上り框へ、どさっと腰を落した。
「あんたもよくご存じの宝瓶宮黒人さんが、発見した時には、もう事切れていてね」
「…………」
金八は、うつろな眼眸を、宙へ送った。胡蝶を、大和丸へ忍び込ませたのは、この自分であった。自分が殺したと同様ではないか。
――すまねえ！
金八は、胸の裡で、胡蝶の霊に詫びた。
しばらく、重い沈黙を置いてから、金八は、腰を上げた。
「武部の爺様のところへ、案内すらあ」
蛇骨長屋を出て、外桜田の大名小路へ向って、道を辿りながら、金八は、ふと思い出して、

「眠の旦那にくっついて、顔に刀痕(かたなきず)のある、片腕の、墓穴から出てきた亡霊みてえな浪人者が、乗り組んだろう。あの時雨(しぐれ)左馬之助は、どうしたい？」

と、訊ねた。

「あの人も、たぶん、まだ、生きていると思いますぜ」

庄吉は、こたえた。

「眠の旦那と一緒か？」

「いや——」

庄吉は、かぶりを振り、

「いま頃は、あの家で——澳門(マカオ)のあの家で、三昧火(さんまいび)の槍(やり)をくわえた烟客(えんきやく)になっているでしょう」

「三昧火の槍？　なんでえそれァ？」

「阿片煙管(ぎせる)のことでさ。……あの人は、阿片の中毒患者だった。……大和丸が、澳門に着いた時には、あの人が吸う阿片は、切れていたんです。だから、わしは、しかたなく、あの人を、あの家に案内してやった」

庄吉は、遠い眼眸(まなざし)になって、云った。

灼(や)け蒸した、堪えがたい暑熱の澳門の裏町の、とある一軒の家を、思いうかべていた。

澳門の町に、百軒以上もある貧民たちの阿片窟(くつ)のひとつであった。

その陰惨な光景は、眺めた者でなければ、とうてい筆紙に尽しがたく、語っても想像できないであろう。

百坪あまりのその部屋には、正常なものは、何ひとつなかった。

妖(あや)しげな暗緑色の提灯(ちょうちん)の仄明(ほのあか)りに照らされた、呪術(じゅじゅつ)が満ちたような別世界に、庄吉は、一歩入った瞬間、名状しがたい臭気と呻(うめ)きと阿片の焼ける音に、嘔吐(おうと)を催したものだった。

崩れた漆喰壁(しっくいかべ)に沿うて並べられた茣蓙(ござ)敷きの寝台に寝そべって、煙燈(ランプ)で阿片を焙(あぶ)り乍ら、竹筒の煙管（『槍』と称(よ)ぶ）をくわえた中毒患者は、まさしく、腐臭を発している生霊(いきりょう)であった。

視点を喪(うしな)って、ふらふらと歩きまわっている者は、骨と皮だけの幽霊そのものであった。

もう煙管をくわえる体力もうせて、何やら、ぶつぶつと譫言(うわごと)を呟いている骸骨(がいこつ)のような者もいた。

洟水(はなみず)をたれ流している者、時折もの凄(すご)い唸(うな)り声を発する者、どんな幻覚の世界をさまよっているのか、奇妙なうれしげな笑い声をたてる者。

きつね火のようにゆらめく煙燈の明滅の中で、すべての人間が、孤独で、神秘な陶酔境に入っていた。

したがって、眺めた光景は、陰惨な生地獄であったが、烟客一人一人にとっては、虚栄も物欲も——現世の懊悩から解放された法悦の宇宙の中で、魂を肉体から抜け出させていた。

庄吉は、禁断症状を起した時雨左馬之助を、狂四郎の命令で、背負うて、その阿片窟にかつぎ込んだのであったが、外へ出て、石と煉瓦で造られた建物のならぶ表通りを歩きはじめた時、ふっと、もらした狂四郎の独語を、思い出した。

「あの男が最後にすごすに、ふさわしい桃源郷が、あの場所か」

三

外桜田の本丸老中邸表長屋の側用人役宅の書院に、金八と庄吉が、かしこまると、武部仙十郎は、珍しく、せかせかした足どりで入って来た。

身を二つ折りにして、頬を皺掌ではさむ例のポーズをすてて、しゃんと頭を立てると、

「狂四郎の言種、きこう」

と、庄吉を、睨みすえた。

庄吉は、かためた拳を畳について、

「申しあげにくいことでございますが、お側用人の貴方様に対しては、眠の旦那は、こう伝えてくれ、とは一言も仰言らなかったのでございます」

「わしを裏切ったために、弁解の余地なく、書面の代りに、沈黙を、その方から、わしに知らせたか」
老人は、にがにがしく、吐き出した。
「わしには、旦那がどういうお気持であったか、心の奥は、まるっきりみせねえ御仁なんで、見当つけて、お伝えすることはできません」
庄吉は、頭を下げた。
仙十郎は、ちょっと沈黙を置いて、
「唐兵衛は、阿片（あへん）を売ることに、失敗いたしたのじゃな？」
と、訊ねた。
「いえ、その取引は、ちゃんと成功して、大金を手に入れた模様でございます」
「そうか。そうであったか！」
仙十郎は、喜色をおもてにあらわした。
庄吉は、しかし、老人の表情を、気の毒げに視（み）て、
「実は、そのあとが、いけなかったのでございます」
「と申すと？」
「エゲレスの東インド会社めが、このことをかぎつけて、大和丸めがけて、軍艦で攻めかかって参ったのでございます」

「海戦をやり居ったか」
「へい」
「大和丸は撃ち沈められた、と申すのか？」
庄吉は、しばらく俯向いて、こたえなかったが、やがて、
「船長以下、水主どもの闘いぶりは、ごらんになって頂きとう存じました」
と、告げた。
「唐兵衛はじめ、のこらず討死いたしたのか？」
「へ、へい。なにしろ、エゲレス軍艦は、三十二ポンド弾てえ、もの凄いしろものを、どかどか、撃ち込んで来やがったものでございますから……」
とたん──、金八が、目をひき剝いた。
「おいっ！　てめえの話は、合点がいかねえぞ！　てめえは、眠の旦那は、どこかに生きているし、時雨左馬之助は、澳門ってえところの阿片窟に寝ころがっている、と云やがったぞ。……大和丸全員を討死させておいて、あの二人が、おめおめと生き残っているものけえ！　てめえ、大嘘をほざいてやがるな！」
「ちがうんだ。大和丸は、広州で無事に取引を了えて──つまり、おかしらは阿片を売り、また、佐竹家のつくった一両銀で、米を仕入れることもできて、澳門へ出て来た時、眠の旦那の希望で、旦那と時雨さんと、それから宝瓶宮という天竺人を、そこにのこし

て、出帆したんでさ。ところが、大鵬湾の沖あいを走っているところを、エゲレスの軍艦に、追いつかれて、撃ちあいになった、というわけなんで……、わしは嘘など、金輪(こんりん)際(ざい)ついちゃ居りませんぜ。……ただ、わしだけは、おかしらの命令で、生きのこって、このことをお報せするために、海へとび込んで、還(かえ)って来たのでございます」

「話のつじつまを合わせたからといって、てめえが嘘をついていねえ、という証拠はねえぞ！」

「わしが、生命(いのち)が惜しゅうて、逃げた、と云いてえんですかい。わしが、卑怯者(ひきょうもの)じゃねえ証拠は、ちゃんと、ここに持って居りますぜ」

庄吉は、懐中から、油紙で包んだ品物をとり出すと、老人に向って、

「ご用人様、このお屋敷に、志津乃という娘御が、逗留(とうりゅう)しておいでございますね？」

「うむ。居るが……」

「わしは、眠の旦那から、これを、その娘御に渡してくれ、とたのまれました。生きて還った理由のひとつは、それなんで——。どうか、志津乃さんにお渡し頂きとう存じます」

庄吉は、その品物を、さし出した。

四

志津乃が、この一年余の日課のひとつにしている陰膳を据えて、銚子を把って、盃へついだ——その折、障子が開かれた。
「その陰膳を、あと幾年、据えなければならぬかのう」
武部仙十郎の言葉に、志津乃は、向きなおって、
「五年が、十年になりましょうとも、つづけまする」
と、こたえた。
仙十郎は、座に就くと、
「大和丸は、エゲレス軍艦に撃沈された由。そなたの父御も、その供をした郡参平とやらも、船とともに、海底に沈んだ凶報を、唯一の生存者が、もたらした。但し、眠狂四郎は、しぶとく生きのこって、清国のどこかをさまようて居るらしい」
そう告げて、庄吉が持参した品物を、さし出し、「これが、あの男の生きている証拠じゃそうな」と云った。
志津乃は、胸をはずませて、油紙をひろげた。
出て来たのは、一枚の楮夫子に包んだ一本の萱であった。
そして、その詩箋の方には、左の詩が記されてあった。

諼草児女花
不解狂夫憂

「どれ、見せてもらおうか」

仙十郎は、受けとって、

「諼草は児女の花、狂夫の憂いを解せず、か。ふむ。……この意味が、判るかな、そなた？」

「あいにく、無学にて……」

「こういう文句が、『詩経』にある。焉ぞ諼草を得て、言これを背に植えん。諼は萱——つまりかや。そうして、諼とは、忘の意じゃ。したがって、諼草——かや草は、忘れ草と知るがよい。『詩経』の文句の意味は、恋する男が遠方に行役におもむいて久しく帰還せぬゆえ、日夜の恋い慕う気持を忘れるために、家の背に、萱草を植えよう、ということじゃて。これに記された詩は、孟郊の作で、狂四郎は、壮士を狂夫と変えて居る。つまり、おれのことは、はやく忘れろ、とそなたに告げて居る次第だ」

「は、はい」

志津乃は、もどされたその詩箋の二行を、読みなおし、あらためて、はるばる南方から送られて来た萱を、手にした。

じっと、瞶める双眸が、潤み、そして、ほろりと、ひと滴を、頬につたわせた。

「やれやれ――、わしには、ただの一行も書いて、寄越さずに、そなたにだけ、かような心遣いをいたすとは、相変らず、小面(こづら)憎い男よ、あの眠狂四郎という奴(やつ)は――」

同じ日――。

秋田藩久保田城下より西北二里、雄物(おもの)川の河口右岸にある土崎湊(つちざきみなと)へ向って、ゆっくりと入って来る巨船があった。

三檣(しょう)の帆をふくらませた大和丸にまぎれもなかった。

満身創痍(まんしんそうい)――そう形容したくなる姿であった。舳(みよし)から艫(とも)まで、いたるところ、傷ついていた。

帆は、乞食(こじき)の布子(ぬのこ)のように、つぎはぎだらけであったし、檣(ほばしら)は幾箇所か砲弾でえぐられていた。舷(ふなばた)も、破れていた。

のみならず――。

冬の荒い波濤(はとう)を乗りきって来たのは、船長(ふなおさ)唐津唐兵衛とその手下の海賊たちではなかった。

十数人に頭数が減った若い琉球(りゅうきゅう)人だけであった。

船中には、清国米を、積み込めるだけ積み込んでいた。

何故(なにゆえ)に、かれらだけが生き残って、ここまで米を運んで来たか――事の次第を、おそ

らく、口が重いというだけの理由からではなく、かれらは、藩庁に一言も語りはしないであろう。

解説——柴田錬三郎の魅力

伊集院静

柴田錬三郎という作家の〝伝説〟と、彼の周辺で起きていたことが今もまことしやかに語り継がれている。

作家が没したのは一九七八年であるからすでに三十年以上前のことであり、この文章を読む人には、そんな昔のことをと思われるかもしれないが、それはあなたがまだ未熟で、人間の生の時間を一面としてしか捉えてないからである。私も歴史、時間の認識が理解できていない時代があった。

三十歳代の半端（なかば）に京都に三年暮らしていたことがあり、夜など時間をもてあますと祇園のお茶屋の片隅で酒を飲んでいた。こちらは若くギャンブルに狂っていたから金のかかるお茶屋遊びなどはとてもできず、お茶屋の若女将の話し相手になり暇な時間をやり過ごしていた。若女将と言ってもすでに八十歳は過ぎていた（ここらが古い廓（くるわ）街の怖さである）。二人で花札をしている時、若女将が急に「そう言えば祖父（おじい）はんが伏見、鳥羽（とば）に官軍が来るいうんで、そりゃお客はん（幕府側だったのだろう）の応援をせなあかん

言うて古道具屋から刀を買うて来て勇んで行かはったんどすわ」

――伏見、鳥羽？　何を急に言い出したんだ。もしかして〃鳥羽、伏見の戦い〃のことか？

話は予測したとおり、官軍が幕府軍と戦った鳥羽、伏見での合戦のことであった。

「ちょっと待ってくれ。若女将、そりゃ江戸時代の話だぜ」

「江戸？　はあ、そうなりますかね。うちは祖母はんに聞いた話どっさかい。それに祖父はんの腰の傷を見ましたわ」

それで逆算してみると、たしかに若女将が少女の時代にその祖父が生きていても何の不思議はない。その時初めて、江戸、明治はつい昨日のことなのだと認識した。

歴史、時間の観念のことで少し話は逸れたが、柴田錬三郎が没したのは、つい昨日のことなのである。

この作家を敬愛していた編集者、そして同業の作家が大勢いて、その人たちがこの作家の思い出を語る時に、或る種の恍惚を含めた感情、語り口になるのを私は何度も目にしている。それは編集者にとってはステータス、もしくは自慢であるふうにも聞こえ、作家にとっては同じ時間を共有したことの誇りのようにも聞こえた。

〃四国の大将〃と呼ばれ一代で大企業家になった男が、柴田一人のためにとてつもないゴルフコースを造ったとか、二晩カードをやり続けて一度もマイナスにならなかったと

か、取材で訪れた名刹（めいさつ）に掲げられた漢詩の書の間違いを指摘したとか、およそ今の現役作家では考えられないエピソードを、その人たちから聞いた。

ではいかなる作家か、と尋ねられても、私には応える術（すべ）がない。私は一度もこの作家と話したことはないし、逢ったことがないからだ。

ただいくつかの接点はあった。

一度も逢っていないと書いたが、あれがもしかして柴田錬三郎ではないか、という人物が一人で煙草をくゆらせ窓のむこうの雨の庭を見つめている姿を見かけたことがある。場所は、昔の材木町から有栖川（ありすがわ）公園に向かった旧公爵邸をホテルにした中にあるティーラウンジだった。当時、私はそのホテルの近くの霞（かすみ）町に不法カジノをはじめようとする男と関っていた。その男がこのホテルに滞在していた。私は青二才で、チンピラだった。何も持っていないから嗅覚だけで生きていた。あの頃、何もない若者にとって嗅覚だけが頼りだった。数人の与太に囲まれればどいつが格上かを一瞬で見分け、その力量も計らねばならない。相手が素人か、玄人かもわからねば生きて行けない。

或る雨の午後、そのティーラウンジにカジノで使う小物のことで印刷業者を連れてきてカジノの経営者と引き合わせた。私は継ぐだけが役割だったから二人の話も聞いてなかった。その時、ティーラウンジの一番奥、庭に面したテーブルに一人の男が煙草の煙りをくゆらせ雨に濡れる庭を眺めていた。その目を見た時、こいつは只者ではない、と

思った。ほんの一瞬のことであった。打ち合わせが済み、私は業者と去ろうとして、先刻、男の座っていたテーブルを見た。いつの間にか男は消えていた。業者の男とホテルを出ようとすると相手が建物を振り返って言った。

「さっきのティーラウンジの奥にいたのは高名な作家ですよ」

「サッカ？　何だ、それは？」

「小説家ですよ。剣豪小説を書く文豪です。さすがに評判どおりだ。いいものを見た」

相手は私をバカにしたような目で見て立ち去った。後年、友人の編集者のSにそのことを話したら、「それより納品の期日と予算をきちんとしろよ」

「私があそこに文豪をカンヅメにした。『うろつき夜太』の執筆の時代だ。年代から言って間違いなく柴田錬三郎だ」と言われた。

数十年して私は小説家の末席にいるようになり、どういうわけか嘗て柴田錬三郎の仕事に関った編集者が私の原稿取りの担当もしくは出版の担当になることが多かった。彼等は愛着を込めて〝シバレン〟と呼んだ。大酒飲みでしかも締切りを守らぬ作家を彼等は応援してくれた。先輩作家にもお世話になった。その先輩作家にも〝シバレン〟と口にする人が多かった。吉行淳之介、黒岩重吾、野坂昭如……。この作家たちが柴田錬三郎と今東光が中心になってこしらえた〝文壇野良犬会〟のメンバーであったのをのちに知った。私が小説家としてどうにか飯が食べられるようになったのは黒岩重吾さんの指

導があったからである。或る年、黒岩さんに挨拶をするために西宮の自宅を訪ねた日があった。その時、話の成り行きで黒岩さんの仕事場に入ることになった。「珍しいことですよ、黒岩が他人を仕事場に入れるのは」、と夫人に言われた。流行作家の仕事場は斯(か)くあるのかと感心したが、一枚の写真が目に入った。それをじっと見ていると黒岩さんが言った。「〝シバレン〟や珍しいやろう。笑っている写真はめったにないんや。この部屋に入って来るのは〝シバレン〟だけでええんや」

天下の黒岩重吾にしてこの〝シバレン〟への友情、敬愛である。以来、〝シバレン〟は私の中で特別なポジションに立つ人となった。いくつかの作品を読んだ。

――やはり文章が断然違う。

音韻があざやかでしかも華麗であった。その上地の文は簡潔である。この文章の特徴は日本の近代文学の作家の或る系譜に通底したものがある。

その代表者が夏目漱石である。正岡子規も同系である。近年では武田泰淳、中島敦、井上靖がそうである。気になって作家の略歴を調べると、やはりそうであった。

柴田錬三郎は学生の時から長く中国文学とともに歩んでいる。卒業論文は『魯迅論』である。これは武田泰淳（「中国文学研究会」を設立）にも共通している。

若い時から漢籍の素養がある。これが日本語で何事かを表現する時、自然に漢文系の持つ優美さが通底していることになる。漱石しかりである。子規もそうだ。つまり柴田

錬三郎の文学は日本の近代文学の正統系譜の中に毅然と立っているということだ。
小説のテーマ、物語の豊かさは、それは作家独自の対象への好奇心と生きる姿勢でむこうから近づいてくる。
文章は小説の核である。言い方をかえれば小説家そのものであり、人格とも言える。その肝心を若くしてすでに手に入れていた所に、昭和三十年前後にはじまった戦後の週刊誌創刊ラッシュの中で、編集長に呼ばれ、君、人が読んで血湧き肉躍る時代小説を書いてくれたまえ、と要望され、平然と連載をはじめたのである。今の作家ではそうはいかない。そうできる作家は皆無であろう。それが本作品の初めてのシリーズ『眠狂四郎無頼控』となり、二十年に渡って大人気のシリーズとなった。
本作品『眠狂四郎異端状』は海外の街に着流しで立つ主人公の姿まで登場するのだから、来るところまで来たか、狂四郎、という物語の終焉と、その裏返しの、ここまで主人公を戦わせたのなら何をしてもよかろうという自由闊達な面もうかがえる。
作品の内容は読者が読めばそれで済むことだから、私は狂四郎を含めて、柴田錬三郎作品に登場する人物がなぜ魅力的かを最後に書いておく。
それは作家が己の諸作品を〝情念を断ち切ること〟に徹しようとしたからではないかと想像する。情念とは人間の本性が起こすこころの揺らぎである。堕落も、甘えも、享楽もすべて、この揺らぎから生じる。小説家になる以前、そして以後も作家はそこへ足

を踏み入れそうな人も見て来たであろうし、己もそうなったことがあるかもしれない。それを敢えて作家は断ち切ることを潔しとしたのではないか。登場人物に同じことをさせよと言われてもこれがなかなか出来得るものではない。その易々とかなわぬものを孤高の筆は黙々と頂上を目指して書き続けた。人に出来ないものを築くのだから、そこに他にはない光が当たり、まぶしい光を放つのは自明である。

いつの時代も作家の魅力は、その人にしか築きえない峰にむかって黙々と歩みを進めるしかないのである。

この作品は一九八二年七月、新潮文庫として刊行されました。

〈読者の皆様へ〉

本作品には、「めくら」「びっこ」「きちがい」「乞食」などの身体障害者や知的障害者、精神障害者に対する差別語や、これに関連した差別表現があります。これらは差別を拡大、助長させる言葉で、現在では使用すべきではありません。しかし本作品が発表された時代（一九七四年）には社会全体として、人権や差別に関する認識が浅かったため、このような語句や表現が一般的に使われており、本作品もそうした時代の影響を免れておりませんが、それらの言葉の使用にあたって著者に差別助長の意図は認められません。著者が故人のため、作品を改変することは、著作権上の問題があることに加え作品の資料性の高さを考慮して、原文のまましました。（編集部）

集英社文庫

眠狂四郎異端状（ねむりきょうしろういたんじょう）

2013年6月30日　第1刷　　定価はカバーに表示してあります。

著　者　柴田錬三郎（しばたれんざぶろう）

発行者　加藤　潤

発行所　株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10　〒101-8050
電話　03-3230-6095（編集）
03-3230-6393（販売）
03-3230-6080（読者係）

印　刷　大日本印刷株式会社

製　本　大日本印刷株式会社

フォーマットデザイン　アリヤマデザインストア　　マークデザイン　居山浩二

ISBN978-4-08-745085-9 C0193